
Eternal-永遠の終焉-

ハーレクイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

E t e r n a l - 永遠の終焉 -

【Nコード】

N 5 5 3 6 J

【作者名】

ハーレクイン

【あらすじ】

「大切な者を護れるなら、俺は総てを敵に回してやるさ」
こんなハズじゃなかった。本来なら救えるハズだった。そう後悔する度、経験していくのは数多の別れ。そして、忘れられない出会い。繋がりが心を揺さぶる時、彼は使命よりも大切な物に気付いていく。

閃光

満月の光を薄める街の灯り、ネオンという鳥籠の中にある享樂を求めて彷徨う人々の群れ。

そこには、部活が終わり家へ向かう学生や、ゴールデンウィーク故にラフな恰好で歩く者。様々な奴等がたむろしている。

ただ、そんな姿を見ても、俺は何も関心を持たない。何故なら、明確な意志を胸に秘め、街中を進んでいるからだ。

普段からやつてる生徒会の仕事。それは、夜に蔓延る闇の住人・サイXを刈り取る事。

そして、この街の能力者じゅうにんと愛するこの神ヶ丘の平和を守るため、今日も街を搜索をしていた。

そう考えつつ歩を進めていると――

「いたっ！」

誰かと正面衝突してしまう。声から察するに子供――少年らしい。俺は声の方向へ向き屈んでみる。すると、季節外れな寒色系の服を着た少年が、アスファルトで尻餅を打っていた。

「大丈夫か？」

「う……うん」

俺が声を掛けると、少年は痛々しくだが、瞳に涙を浮かべる事もなく返事をする。

最近の子供にしては、しっかりしている。見た感じや態度では、退魔士としての素質が有りそうだ。純粹な心を持って、まだ能力の覚醒してない子供。子供は可能性の塊だ。イメージトレーニングや体験次第で、強い能力を手に入れやすい。だが、出来れば戦って欲しくないモノだ。

「とりあえず、すまなかった。ちょっと用事で考え事してたんだ。立てるか？」

俺が手を差し出すと、少年はありがとうと言いながら、俺とほぼ

同時に立ち上がる。

挨拶も忘れないとは、やはり俺の見立て通りに立派だ。更には素直で純粋。小さい頃の妹を思い出す。一番幸せだったあの頃を思い出しながらも、俺は少年を優しく撫でてやる。

すると少年は、高校生でも身長が高い——そのせいで、バスケットの部活でよく助っ人になる——部類に入る俺を見上げ、礼を言いつつ走り去っていく。

俺は少年に手を振り見送ると、路地裏の闇へと足を踏み入れていく。本来の目的であるX討伐に向けて——

太古より、人は闇夜を恐れてきた。

だが、ある日を境に人は、少しずつ恐怖を克服していく。火という存在を手に入れ、様々な道具として用いたのだ。

元々は自然現象だったのかもしれないが、人類は持ち前の知恵を駆使し、遂には自分達で火が生み出せるまでに進歩していく。

幸か不幸か。火を道具にする動物は地球上に居なかった。そのため人類は、火や持ち前の知恵を使い、生態系の頂点へと近付いていた。

それでも、火を手に入れた人類の進歩という欲は、留まることを知らない。世界の歯車は徐々に狂い、破滅へと加速していく。

火は争いへと発展し、数々の火が様々な命を焼き尽くしていく。

同種も例外では無い。無差別に蹂躪する業火。

同時に、世界は負の感情に包まれ、自分が正義だと考える傲慢さが当然。そんな世界へと変貌を遂げていく。

そして、火は核へと発展し、未来永劫消えない傷跡や恐怖を生み出していく事となる。教訓として、未来へと受け継がれながら。

争いにより、互いを滅ばし合う愚かな性質。それが、人類の本質と言っても良いだろう。

だが、人類の手に入れた光は火だけではない。電気による効率的な光の供給。電気を手に入れた人類は知恵を駆使し、光を始めとした恩恵を徐々に発展させていく。

そして、今日の技術が構築される。

これにより、人類は戦争以外で、新たな可能性を手に入れた。今もなお、技術は発展し続けていく。

ただ、人は可能性と同時に、ある副産物を手に入れてしまう。人が集まる場所や光の強い場所。そこに必ず生まれる綻びを。

人が集まれば争いや強い意思が生まれる様に、強い光で照らせば強い闇が生まれる物だ。切っても切り離せない関係だという事は、数々の歴史が証明している。

人の意思や思念が集まる場所であかつ、強い光がある場所の影に生まれ落ちる闇の住人。

かつて、西洋ではモンスター、東洋ではアヤカシや妖怪と呼ばれた異質な存在。更に、広義の意味では神仏や悪魔、空想上の存在も含まれる者。

時と共に闇の住人は、今の退魔士や一部の人から、侮蔑と恐怖を込めてこう呼ばれる様になっていく。

異端や未知を表す文字に準えて——異質な存在・^{サイ}Xと。

今日も、俺はXを倒すべく、^{ブレザー}学生服のまま街中を彷徨っている。

奴等が居そうな場所。朝からずっと、部活中に顧問や部員から聞き出してきた。

幸い、Xはパトロールに廻った街の住人がほとんど倒しているらしい。Xは基本的に警戒心が強いいため、ほとぼりが冷めるまで同族が倒された場所へ行く事は無い。だからこそ、出現する場所は限られてくる。結果的に、こちらとしては好都合だ。

ただ、それでも怪我人——奇跡的にも死者はいない——が多く、九条総合病院からはもう対処できないとまで言われてしまう。

非常識な治療をする九条院長をもつてしても、総合病院の広いフロアにいる患者を、短期間でゼロにする事が出来なかったのだ。

それはそつだ。

いくら名医でも、千や万を超えるこの街の退魔士を一人で治せるわけが無い。実際、治療が可能な退魔士を優先的に治し、協力してもらっているらしい。

そついった経緯から、これ以上犠牲者を出さない様にと、九条院長が学園理事長である親父へと釘を刺しにやって来る。更に親父から指名され、生徒会副会長の俺が派遣される事に。

全く、妹との触れ合いを削られて、こちらは迷惑している。部活中に、親父に呼ばれたから理事長室へ来てみれば、九条院長が苛めるから助けてくれと泣き付いてくる。ハッキリと言うが、迷惑極まらない。

お陰で、ゴールデンウィーク最終日の今日までこき使われるハメに。正直、周囲の部活帰りがまだマシに思える。

ゴールデンウィーク中、料理部やテニス部を掛け持ちしてるから、部活帰りにしかパトロールが出来ない。部活を趣味でやってるとはいえ、仕事と両立するとやはり疲れが倍増する。

まあ、九条院長は俺達神代家と家族ぐるみ——宗家が隣り合っているのも理由のひとつだが——の付き合いをしてる。ゆえに、九条院長は息子カオルと同様に俺を可愛がってる。だからこそ、俺に仕事が回るのも当然か。頼るならば、他人よりも知り合いという考えは利に叶っている。

ただ、親父か他の生徒会メンバーがやれば良い話だ。生徒会メンバーは、俺を除いてもあと八人いる。それに、九条院長と家族ぐるみで付き合っている。そういう条件を満たしたメンバーは、会長も含めれば三人いるハズだ。

いや、会長は皇の次期総帥だから、注目を浴びすぎて街中では歩けないか。残りは極道と巫女だからどのみち目立つ。それで俺を選んだのか。認めたくないが、親父の人選は間違っていない様だ。

ただ、妹との触れ合いを潰された件に関しては、納得する気など更々無いが。

まあ、人件費も兼ねて親父の口座から、俺や妹マナの小遣いや生活費を奪い取ってやろうと考えているが。

とりあえず、親父への個人的な恨みを思い浮かべながら、日中の情報をおさらいしてみよう。

部活中、部員から最近Xが討伐された場所を聞く事が出来た。おかげで、大体の場所は絞り込めただろう。

いくらこの神ヶ丘が広いとはいえ、場所さえ絞り込めば歩きながらでも探せる。特に俺の場合、大抵の道を知ってるから問題はない今のところ、ハズレばかり引いている。だが、そのうち見付かるハズだ。

そう考えしばらく歩いていると、一つの路地に辿り着く。ここは今までの情報を当てはめても、Xの討伐報告が無い。その上、輝帝学園の生徒や住人の大多数が、“何者”かと戦い返り討ちに遭ったという報告のある場所。

流石に、何度も戦えば同じ所には居ないと思うが、念のために調べておこうか。

路地裏へ入ると――

「どうやら、当りを引いてしまったみたいだ」

俺は目的の場所で一人呟く。

夜も輝く街。その裏側や建物と建物の間に位置する場所。光の当たりにくい路地裏や裏道は、Xにとって温床だ。強い光に生まれる強い影。そして、人の思念や感情が集まる場所。ここは正に条件を満たしている。

初心者の退魔士は、大抵探す時にこのセオリーを守るが、俺は情報や経験を基に行動する。そして、偶々セオリー通りの行動や結果となってしまう様だ。

何の捻りもないが、情報を手に入れるには、それなりの信頼が必要だ。商売敵同士の退魔士から手に入れるならば、尚更必要となる。正直、日中に得た情報がガセじゃなくてホッとしている。ただ、親友の敵を取ってくれと泣き付いてきたから、ガセの可能性は低かったが。

そう考える俺の目の前に、人間サイズにまで巨大化したネコが一匹いる。いや、かつてネコだったと言うべきか。

四足歩行という所は普通のネコと何ら変わり無い。ただ、普通の飼われてるネコとは違い、茶色の毛は汚れてボロボロになっている。更に、やや痩せているが筋肉質な体つき。例えるとすれば、正に飢えた野獣だ。

いや、野獣と違いかつて飼われていたという証がある。よく見ると、二つの鈴が付いた、赤いリボンが蝶結で首に巻いてある。鈴付きのリボンは泥や砂で汚れており、全体的にくすんでいる。

素体がXとして再構築されると、体の構造や衣装ごと再構築される。ただ、Xになった理由にまつわる物は、大抵原形を留めている。そこにトラウマや愛着は関係無い。

あのネコの場合、まつわる物がリボンだったという事だ。リボンを巨大化した自分に、ピッタリなサイズへと再構築してある。どうやら、思い出の品らしい。

ネコとして、毎日きちんと手入れをしてやれば細く優雅、更には愛嬌もあつただろうに。今ではすっかり見る影も無い。

対するネコは毛を逆立て、野獣の様な唸り声をあげて俺を威嚇する。

まるで、人間に恨みがあるかの如く。いや、観察するまでもなく、恨みがあるみたいだ。今すぐ俺を殺してやりたいという殺気が、肌にまで伝わってくる。

「可哀想に。飼い主に捨てられたのか」

俺は憐れみを込めて語り掛ける。対するネコは、お前に何が解る

と言わんばかりに一層唸りを強くする。

「どうやら、話しかけたら仲良くなれる……訳ではなさそうだ。

妹、マナのマネをして、無益な戦いを避けようと考えてはみたが、上手く行きそうにない。

やはり、俺のやり方でやるしかない様だ。

「解るさ。俺もかつて孤独だった。だから、お前の気持ちも理解は出来る」

これは同情から来た言葉ではない。俺自身に決意を再確認させる言葉だ。俺の……退魔士としての決意を。

そしてお前のお陰で、Xとは永遠に解り合えない……という答えも再確認した。お前は俺によく似ている。家族だった者への闇を持ち、普段から孤独な存在。

いつかは、いつかは家族を殺すかも知れない。仮にXとは解り合えないのなら、誰かに確認してみたかったんだ。

けど、これ以上の犠牲者を出す前に、俺が必ずお前を止めてやるさ。Xとしてではなく、かつてこの世界で生きていた者として。

飼い主に捨てられ、死んでもなおXとしてこの世に留まり続ける。普通に考えれば、被害者はネコの方だ。何も知らず、身勝手な飼い主に捨てられ死ぬ。それが奴の理不尽な一生か。

もし、他の未来があれば……例えば、優しい飼い主と出会えていれば、間違いなく未来は変わっていただろう。

ネコは人間の友人、或いはパートナーとして、幸せな日々を過ごせていたかも知れない。マナや俺の親友のカオル、心優しい奴に拾われていれば、もしかしたらXにならなくて済んだのかも知れない。

ただ、俺達退魔士はそんな悲劇から生まれた、彼等Xに同情をしてはいけない。同情すれば、同情してしまえば躊躇ってしまうから。いつか、取り返しが付かない事になると解っているからこそ、同情をしてはいけないんだ。

「今、楽にしてやる」

自身に言い聞かせるように呟き、俺は手を目の前にかざす。すると、俺の手が昼間に浮かぶ太陽の如く、激しく輝き始める。光は次第に増していき、細長く鋭利な形へと変化し、俺の右手へと収まっていく。

光に射抜かれた奴の虹彩が、糸のように細くなる。それでも、差し込む疑似的な太陽光の輝きに耐え切れなくなった奴の^{まぶた}瞼は、世界を閉ざすように固く結ばれた。

だが、しばらくすると目が慣れたのか、徐々に見開こうとする。そこから完全に瞼が開くと、平然と立っている俺を見つめる。そして、俺が見下していると思ったのか、激しく唸りつつ跳び掛かってくる。

敵の命に届いたなら、その欲望のままに存分に引き裂き、細切れにせんとする意志を孕んだ五爪^{ごそう}の鎌^{シユレッター}。それらが命を刈り取るべく、夜闇に僅かに残る光を跳ね返し俺の頭上へと弧を描く。

しかし、奴の凶刃が俺に触れる事は無かった。爪は目の前で止まり、俺の皮にすら届かない。

何故なら、俺の右手には一本の刀が握られていたからだ。爪は高速振動する刃に阻まれ、火花が跳ねる以外は微動だにしない。

光をそのまま刀状にしたような刀身。銘も無ければ刃紋すら無い。何者にも染めれない純白の武器。

俺は刀、白夜^{びゃくや}を片手で振るうと、ネコを剣圧のみで跳ばし壁に叩き付ける。叩き付けられたと同時に、右前足の裏から血飛沫をあげながら。

右足を庇いながら、ネコは痛々しそうにゆっくりと立つ。じつくりと俺を見据え、噴火を彷彿させる殺意を一声で轟かせる。

そして、再び俺に目掛け弾丸の如く飛び掛かってくる。

「一瞬で終わらせる」

対する俺は、刀を左の腰に収め両手で構える。そこから、軸となる右足の全てをバネにして、俺もネコへ目掛けてまっすぐ跳躍する。

空中で互いにすれ違う刹那、俺達は全力を込めた一撃を放つ。磨き上げた抜刀術と獲物を仕留めんとする野生の一撃。二つの技がすれ違い、目標へと加速していく。俺が振るう斬撃と、爪が肩を切り裂くのはほぼ同時だった。

攻撃後、俺達は地面に降り立つ。

着地した両足から伝わってきた衝撃が、奴の渾身の斬撃を受け止めた肩の傷を開かせる。五月雨が地面を叩くかの如く、夜の闇にも明らかな俺の血が大きな音を立て、背後の地面に撒き散らされる。

フッ……やはり、非情になりきれなかった様だ。正直、これ程までに深手を負うとは思わなかったが。

ただ、己の未熟さを素直に認めよう。少しでも同情した結果だ。

この傷を見れば、誰もがネコの勝ちだと思うだろう。事実、徐々に感覚を失っていく肩が原因で、刀を両手では振るえそうに無い。だが、決着は――

「惜しいな。お前の速さに技と理性が加われば、俺の首に届いただろうに」

――俺の勝ちだ。

俺は奴へ背を向けつつ、刀を光に戻し身体に取り込む。

同時に、何かが落ちる鈍い音。そして爆風と轟音、未練の断末魔が俺の背中を押した。

ネコを倒した俺は、しばらくの間黙祷をする事にした。

敵だったとはいえ、かつては奴もこの星に生きていた存在。お前の命は、俺が覚え受け継ごう。そういった思いを込めつつ、俺は両目をゆっくりと開ける。

すると、視界と共に聴覚が研ぎ澄まされる。人のざわめきが鮮明に、そして俺は状況を理解していく。

人が騒ぎに気付き、集まり出している。流石に、俺がいる時点で不味いか。俺がXを倒したと分かれば、弟子入りの奴が増えかねな

い。

そこで、俺は騒ぎが大きくなる前に能力を纏い、路地裏の建物を垂直で駆け上がったいく。

下に掛かる重力から徐々に解放される感覚は、やはり気持ちの良いものだ。そう考え頂上へと辿り着くと、俺は頂上から別の頂上へと何度も渡りつつ移動する。

上空から見る街の景色は格別で、数多の人や光が小さく見える。ネオンによる光のシャワーを浴びつつ、俺は改めてこの街の大きさを体感していた。

眼前には、この街のシンボルともいえる皇スパイラルタワー。過去のクレーター跡に聳え立つ、優美なる螺旋の建造物だ。古代ローマのコロッセオに立つ、一人の勇敢な剣闘士。そんな雰囲気すら感じさせる場所。

俺はタワーに向かい微笑むと、住宅地へと向かうべく右へと逸れていく。進む度に徐々にビルが減っていき、代わりに並木通りやマンションへと変わる。

そこから更に向かうと二階建ての住宅のみとなっていく。そんな住宅地が見えると、マンションの上からアスファルトへと降り立つ。

俺は人目に付かないよう、そんな裏道を通りながら家へ向かっていった。この街、神ヶ丘は俺の生まれ育った場所。俺の庭みたいなモノだ。誰にも見られず帰るなど造作もない。

裏道を出て暫く歩いていると、高級住宅街に辿り着いた。一般的な家に比べ、大きな家が並んでいる。

九割が退魔士の家が別荘。もっとも、俺もその一人なので、帰りは決まってここになる。

洋と和、中には両方に属さない建物もあるが、基本的に二種の建物が並ぶ中で、俺はまっすぐ歩いていった。

俺の……いや、俺達の家へ向かうために。

そして、ようやく目的地に辿り着く。

住宅街の中心部。能力によって神器という武器が具現化出来る、一流の退魔士が住む場所。そこに位置する洋館の前に俺は立っていた。

見た目は新品の洋館。柵状の門に赤い煉瓦と生け垣で出来た塀があるのが特徴だ。門と洋館の前には、噴水や複数の生け垣で出来たアーチが並んでいる。

屋根も含めた至る所にソーラーパネルが設置しており、煉瓦の塀には大きく神代かみしろと書かれた表札がある。

相変わらず、表札は洋館のイメージを壊してと思う。

だが、かつてこの住宅街へ依頼主が来た時、俺の家が解らず迷子になったという経験がある。

だからこそ、仕方無く付けている。

不恰好な主張を世間に喧伝する表札に愚痴りつつ、俺は見た目に重厚な鉄の扉を押す。すると、細部にまで手入れの行き届いた門扉は、それだけでもゆっくりと動き出し主を迎え入れる仕草を見せる。来訪とは違う、無事な帰還を出迎える様な、無機質が奏でる軽い金属音。それを耳にして、俺は安堵の溜息を微かに漏らす。招き入れに応じる俺の足は、その瞬間に警戒を解いた様に重くなっていく。門を境に広がる別の世界と杞憂を胸に秘め、俺は玄関までの暗闇をゆっくりと歩き始めた。

俺の家は門から玄関まで、直ぐに見通せる構造にはなっていない。万が一の侵入者対策として、つづら折りに設計された石畳を何度か折り返した先。そこに突然現れる邸宅の扉。

門扉に比べればやや小型ではあるが、年月の経過に晒され枯れた風合いを漂わせている。厳重に呪術封印の施された木製の扉を静かに押し開け、俺は中の暗闇へと還っていった。

静寂と暗闇が支配する玄関で、俺は記憶を頼りに壁面を弄って灯のスイッチを入れる。壁面に設えられた飾台型のランプに小さな明

かりが灯り、俺の現実を玄関の小さなスペースに浮かび上がらせていく。

「……ただいま」

光源が小さくとも、それを跳ね返す壁や床はまるで鏡の様に磨き上げられている。俺はぼんやりと遠くまで見通せる廊下の先に向って、待ち人の定かではない帰宅の言葉を呟いた。

反応がない事を確認して俺は、自分の思惑が正しい事を認識した。まだ午前様には程遠い時間とは言え、規則正しい生活を生業とする“彼女”が起きている筈が無い。

気付かれなかった安堵と、ほんの僅かな感傷を覚えた俺の体は、次の瞬間実に人間的な反応を見せる。

「腹が減ったな……とはいえ、今から何かを作るのは——」
出来そうに無い。せつかくの努力が台無しになる。

空腹を抱えて床に就こうと決心した俺は、音を立てない様に靴を脱ぎ、ゆっくりと足を廊下に下ろした。キシツとなる微かな木鳴りの音にも心臓を躍らせつつ、周囲の気配に神経を尖らせて自分の部屋へと向おうと。

意志を固めて階段の手すりに手を掛けた、その時だった。

「——兄さん？」

「何だ、マナ。……まだ起きてたのか？」

バクンツと言う心臓の高鳴りと同時に押し寄せる動揺。慌てて被る道化の仮面を声音に乗せて俺は、心配そうに何かを確認するマナに目を向けた。

艶めかしく上気した顔に風呂の熱が残り。しどけなく着た白のパジャマに散りばめられた様々な色の星が、まるで今の俺の心中を投影しているかの様に暗示的だ。

心の中に舞い散る星。その先端は鋭く尖った棘となって、マナから全てを隠そうとする俺の良心を苛み続ける。

全く、反吐が出る。

こうまでして、大事な者に嘘を吐き続けなければならない。そん

な自分自身に。

「兄さん？」

マナの突然の問い掛けは、俺の意識を中から外へと導いた。我に返る俺の瞳に映る、マナの心配そうな表情。

道化の仮面が罅割れている証拠だ。

俺の中の闇を照らして導く十六夜の月。僅かに円を失う光源が作り出す夜魄漂うあぜ道。あぜ道の光に霞む兎の姿を現世の物と見紛って、手を指し伸ばす俺の魂。それは、きっと奴等と同じ色をしている。

俺には、眩しすぎる。お前のその純粹さが。

だからこそ、稚児の気持で欲しがるのか。

例え求めても得られぬ物だと、心と体に咎人の烙印を押されても……どうかしましたか？」

隠し切れない闇の波動は仮面の輝から漏れ出して、マナの清楚な表情を曇らせたままだ。仄かな明かりが乱反射する回廊の端で動きを止めた俺は――

「いや、なんでもない」

嘘を吐いた。今までと同じ様に、何ら変わる事の無いリフレインを。

マナの視線が動いた事を俺は見逃さなかった。俺の表情から視線をずらしてあらぬ方を眺めていたマナが、警鐘の声音で尋ねてきた。「兄さん、その傷――」

指摘された瞬間に反応する俺の体。マナの目から遠ざけようとして肩を引いた俺の手を掴んで、彼女は学生服に刻まれた大きな裂け目を凝視して言う。

「酷い傷です……一体何が――」

マナの呟きを耳にしながら、俺は自分のガードの甘さに辟易していた。全く、幾らマナが起きていた事が予想外だったとはいえ、嘘の理由を隠す事を疎かにしていたとは退魔士にあるまじき所業だ。

「いや、これは……大丈夫だよマナ。ほんのかすり傷だ」

「これをかすり傷だと兄さんがおっしゃるのなら――」

マナの瞳が俺の顔を至近距離で睨み付ける。鳶色の虹彩が揺らめきながら主張をする感情。

純粹な怒りだ。

「辞書に怪我と言う言葉が無くなってしまいます。……すぐに済みますから、動かないで下さい」

マナの強い口調が俺の動きを封じた。言われるがままに佇んだ俺の肩口に、彼女の掌が押し当てられる。透き通るような肌の延長にある、彼女の柔らかな掌底が渴ききっていない俺の血で汚れてしまう事。それに一縷の躊躇いを感じる。

だが、マナは俺の気持ちを無視して、長い睫毛に覆われた可憐な臉を静かに閉じた。

湧き上がる輝き。マナの手から湧き上がる光が俺の視界を浸食する。鼓動の度に脈打つ痛みが少しずつ、そうほんの少しずつではあるが薄らいでいく。視界を閉ざす光は傷口から流れ込む彼女の波動と一体化して、俺に束の間の安らぎを齎している。

この力こそが、彼女――俺の妹、マナの真実。

まるで漏斗に吸い込まれる様に傷みが引いて行き、残った暖かさが俺の意識を安寧の揺り籠から呼び覚ました。治癒が終わった事を自覚した俺とマナは、どちらとも無く、しかしその感触を名残惜しむ様に互いの体を離れた。視線を向けた先にあった筈の大きな傷は、既に学生服の損傷ごと消え失せて、影も形も残っていない。

「ありがとう」

今の心境を表現するには、余りにも曖昧で陳腐な言葉を呟く事しか出来ない。そんな俺の顔を何かを言いたげな顔で、じっと見詰めていたマナが突然、表情を俺と同じ様に仮面の下へと隠して微かに笑った。

「兄さんは仕事に真面目すぎるんです。もう少しお仕事を減らしてみても如何ですか？」

見透かした様な顔で尋ねて来る。そんな彼女の声には、不安と言

う影が忍び込んでいる。察知した俺の思考は、彼女の心配を払拭する分岐へと足を向ける。

「少しは減らしてるさ。これ以上増やしたら、お前と一緒に過ごす時間が削られ兼ねないからな」

「えっ……」

俺の言葉は少なくとも、マナの心境に著しい変化を齎す事に成功した様だ。顔を合わせた時とは違う、別の上気が彼女の顔を赤らめているのが、仄かな明かりの元でもはっきりと解る。

暫くの沈黙の後、マナが俺におずおずと尋ねてきた。

「……本当ですか？」

「——嘘だ」

「もっつ！ からかわないで下さい兄さん！」

シニカルな笑いで答える俺に向かい、本気で怒り出すマナの仕草。俺を叩こうとしたその手を軽く躲すと、俺はこれ以上の彼女との関与を避けようと寝室への階段へと足を掛けた。

「とにかくありがとう、感謝してる。もう疲れたから今日は早めに寝る事にするよ。マナもあまり夜更かしする——」

マナの動きに目を向けていない事が俺の命取りだ。言い終わる前に俺の体は、背後から腹に回されたマナの両腕にがっちりと捕獲された。

「マナ。何をいきなり——」

「兄さん？」

再び尋ねて来るマナの声。だが、俺はそれに動揺した訳ではない。背中当たる柔らかな膨らみの感触。そして、髪から漂うシャンプーの残り香が、俺の中の煩悩をくすぐる。俺の眼から見てもほぼ完全無欠を絵で書いた、マナの容姿を思い浮かべた俺。そんな頭の中を無数の火花が音を立てて弾け飛ぶ。

兄妹と言う頸木を頼りに、自分の背徳を押さえ込む手掛かりにして、ただひたすら耐える。動きが止まった俺の体に張り付いた煩悩の原因は、小さな声で俺に尋ねた。

「……何も食べてないんじゃないですか？」

「いや、ちゃんと食べたさ。仕事の前に何も食べないで——」

「……嘘ですね」

俺と同じ台詞をお返しとばかりに呟くマナ。其の華奢な腕を震わせる様に、俺の腹がいい具合に唸り声を上げる。

ばつが悪そうに振り返る俺の顔を見詰めて、マナが勝ち誇って言った。

「ほら、やっぱり。食わずに寝るなんて明日の授業に差し障りますよ。私が何か作りますから兄さんは着替えて大人しく待っていてください」

「いや、マナ。もう遅いから——」

「だめですよ」

俺の意向を全く聞き入れようとしないマナが何処か嬉しそうな声を上げた。

「兄さんは知ってますか？ 食べるという字は人が良くなると書くんです。食べないと良くならないじゃないですか。それに昔から言いますよ？ 病は食からって」

「いやマナ、それはどこか間違ってるから」

故意なのか生来の天然なのか。マナは俺の反論にクスリと笑って、言った。

「やっと、いつもの兄さんですね」

「え？」

唐突に飛び出したマナの言葉にたじろぐ俺に向って、マナが優しく告げた。

「お帰りなさい、兄さん」

パタパタとスリッパを鳴らして遠ざかるマナの後姿をぼんやりと眺めながら、俺は退魔士と言う穢れた生業に全てを賭けて、心に誓う。

お前こそが俺の全てだ。

この世界が、この現実こそが俺の護るべき物全て。

たとえどれ程強大な力がこの現実を壊そうと、俺の手からマナを奪おうとしても、それは俺が許さない。

闇の住人が欲望に塗れてマナを奪い去ろうと手を伸ばしても、俺が手にした退魔士という“アイギスの盾”が必ずその野望を食い止めるさ。

力が潰え去っても、手足をものがれ引き千切られても、残った俺の体と魂が奴等の手からマナを護り抜く。

先の未来が自身の滅びと、マナの涙しか残らなかったとしても、必ずだ。必ず俺が護ってやるから。

親子

静かでまだ少し暗い頃、ベッドで寝ていた俺はゆっくりと目覚める。

基本的に、俺はどんなに遅く寝ても、大体五時に起きる。いつも思うが、俺の体内時計は正確なのか狂ってるのか解らないな。

とりあえず、暇だから妹と居候のために、朝食の仕込みだけでもしておこうか。

まず、俺は寝間着から普段着に着替える事にした。普段着といっても、今日は土曜なので制服には着替えない。

俺は、タンスから外出時に着る服装を選ぶと、着ている寝間着を放り投げつつ着替える。

選んだのは、縦縞の溝が入った黒のシャツとやや霞んだ黒のジーンズ。どちらもやや厚みがあり、しつかりとした生地で出来ている。今日は何処かに行くつもりは無いが、身支度はしつかりしてなければならぬ。

いつ仕事の依頼が来るかもしれないしな。特に、上層部の依頼は何度もチェックするつもりだ。

理由は簡単。マナの障害になりうるX……いや、マナを狙っているXを倒すために。七つの大罪に纏わる悪魔の名を持つ七体を全て

さて、そのためにはまず朝食の準備だ。それに、あの七体は生半可な気持ちや体力では倒せない。いつ依頼があるか解らないからな。もつとも、過去に三回しか戦った事が無いが。

そこで俺は部屋を出る。そこから一階へ降り、左側の廊下へ向かう事にした。勿論、その先のキッチンへ立つために。

ただ、突き当たりの右に位置するドアが微かに光っている。しかも、丁度キッチンとリビングがある部屋だ。

まさか、マナか？

いや、朝食は俺の担当だったハズ。家長の俺が決めたんだから間違いない。幾らマナがすっかりしているとはいえ、土曜は寝てるハズだ。ならば、確かめてみるか。

そこで俺はドアを引き、中へ入る事にした。

最初にキッチンのシンクが目に入る。次に横のリビングを見ると、呼んでいない客が上がり込んでいる事に気が付いた。もっとも、本人は俺に気付いてないみたいだが。

「おい」

俺の呼びかけに深夜通販——それも何万もするダイエット器具だと。ふざけやがって——番組を食い入る様に見詰めていた金髪の女が振り向いた。驚いた様に瞬く瞬。瞬きが隠す瑠璃色を思いつき睨みつけながら、俺は思い付く限りの嫌味を籠めて言った。

「そこで寛いでいる老けたプレイメイト。誰がそのソファーをお前の撮影に使って良いと言った？」

「ハ—イ、キョウヤ」

馬鹿がようやく俺に挨拶をする。しかも、幼さを感じる笑顔で。

ただ、幾ら身内でも不法侵入を許す気など無いが。

服装は、やや薄いピンクのカーディガンに純白のワンピース。下にはベージュのパンストを履いている。あとは、奴の特徴とも言える爛々と輝く眼や、欧米人の特徴を全て取り除けばマナそのものだ。

何故なら——

「改めて聞くが、何しに来たミシェル」

「もうキョウヤ。私を名で呼ばないで。親子でしょ？」

俺の冷たい言葉に対し、不法侵入者もとい、“神代宗家さん宅”のミシェルが抗議する。いや、招いた覚えがないから、やはり不法侵入か。俺は、親父すら家へ入れる事を拒否してるのに。

全く、無邪気なこいつを見ると、半分でも血が繋がっている事が信じられない。むしろ、こんな幼稚な奴が親だという事自体信じた

くもない。

まあ、ミシエル自身がイギリス人と日本人のハーフらしい。なので、クォーターの俺やマナが若干似てなくても、何らおかしくはない。もつとも、“らしい”というのは、過去に親父から聞いた話だ

が。
俺が考えていると、ミシエルはソファから立ち上がり、ゆつくりとした足取りで歩き始めた。まさかあの方向は——いや、ミシエルの性格上間違いないようがない。

向かう先は、流しの向かいにある冷蔵庫。丁度、リビングで奴が座っていたソファの近く。流石に家の勝手を知っているのか、冷蔵庫を徐に開け漁り始めた。
おもむろ

だが、すぐにミシエルの手が止まる。

「むーっ……やっぱり食材ばかりでつまんなーい！」

「当たり前だ。今までレトルトやインスタント、プラスチックの容器に入った食材を買った事が無い」

ミシエルは俺の言葉を聞くと、床に転がり駄々っ子の様に喚き出す。どうやら、欲しい物が見付からなかったようだ。

無理もない。基本的にここの住人は料理が作れるから。だからこそ自炊に拘る。俺が和食、マナが洋食といった様に、得意料理まである。

当のミシエルは……ファーストフードと少しの料理しか作れない。精々、ジャケットポテトかおにぎり……いや、過大評価してもポトフが限界だ。

少なくとも、あれ以上複雑な物を作った所を一度も見た事がないからな。

そもそも、おばあちゃんに料理を教わっても、すぐに忘れるから意味がないんだ。

元を辿れば、神代宗家自体が家事等を執事やメイド、専属コックに任せているから余計ダメになる。

そして、今みたいな不法侵入と物色。こっちはいい迷惑だ。

さて、未だ喚いているミシエルを玄関の外に捨ててくるか。俺は鷹が獲物をさらうかの如く服の襟を掴み、ミシエルを引き摺り始めた。

「やーっ！」

すると、ミシエルが駄々っ子から抵抗に変わったではないか。上下左右に激しく動きながら暴れる様は正にロデオ。俺はこの暴れ馬に負けないように、徐々に玄関まで引つ張る。

「何ですか……」

俺はミシエルを掴んだまま横を見ると、そこには寝ぼけ眼のマナがいた。星を散りばめた白いパジャマのまま、右手で両目を擦っている。

不味い、マナが起きてしまった。けど、おかしいな。マナの部屋は、特に防音を徹底した造りのハズなんだが。

「や、やあマナ……どうしたんだい？」

「ちよつとトイレに行こうとしたら、物音が聞こえたのですよ」
成る程、それならば防音は意味がないか。

いや、それ以前にこの状況は不味い。誰が見ても家庭内暴力にしか見えない。万が一コイツのせいで、マナに口を利いてもらえないなんて事になったら。

「マナ助けてえ！」

この戯言たわごとを聞き、俺はマナにバレないようミシエルを睨み付ける。すると、ミシエルは涙目のまま大人しくなる。

よし、誤解をどう解こうか――

「お母さんおはようございます」

「おはようマナ」

マナが朗らかにミシエルへ挨拶すると、ミシエルも釣られて笑顔で挨拶する。

違うマナ。コイツは神代ミシエルだ。どうか、脳内がお子ちゃんなコイツを母親と呼ばないでくれ。

「そつえば、お母さんどうしたのですか？」

「それがね、キョウヤが私を苛めるの」

ミシエルは二度目の戯言と共に、顔をマナの胸に埋める。そこから、ワザとらしくわんわん泣き出した。

不味い。これは非常に不味い。女性の繋がりは恐ろしいというが、この状況で弁解すれば地雷を踏むかもしれない。

さて――

「兄さん本当ですか!」

考えを纏めようとした時、マナがあり得ないと言わんばかりに声を出す。

やっぱり、ミシエルは疫病神だ。これ以上嘘を言われる前に外へ捨ててやる。

俺は孟スピードでミシエルをマナから引き剥がすと、ダツシュしながら引きずり出す。そして、目の前にあった玄関のドアから追出し、鍵二つとチエーンロックを掛けた。

外では、何かが叩く音と喚きが聞こえるが気にしない。よし、後はマナの誤解を少しずつ解いて、平和な一日を過ごそうか。俺は笑顔でマナを見ると――

「酷いですよ兄さん……」

――マナはそう呟き二階へ去っていった。

同時に、俺の心に大きな風穴が空いた。

ふっ……ミシエルを外に出し、マナは二階へ去った。これで俺は一人。

まあ良いさ。これが本来あるべき姿なのだから。これで良いんだ。これで――

雲一つ無い青空。そこには五歳の頃の俺が立っていた。

ミシエルは泣きながら小さな俺を抱き締め、親父は俺を見下ろしている。

「響夜、お前……」

俺は小さい頃から、他の奴と違つたと自覚してた。身体の中にある強大な力——俺の能力。

まだ幼かった俺は、力の危うさを考えた事が無かった。

けど、幼さのせいで危うく大切なモノまで失うところだったんだ。「響夜お前、自分が何をしようとしたのか解ってるのか！」

親父の怒号。その声は震え、明らかに恐怖が入り交じっていた。

ただ、俺はその声すら心に響かなかったんだ。俺の心を真に震わせたのは——

「マナ、嘘……だろ？ 返事をしてくれよ！」

俺が見てたのは、親父で無ければミシエルですら無い。目の前にいる、血塗れのマナだった。

流石に、幼い俺でも理解するのに時間は掛からなかった。

力の暴走。あの時の俺は力に心を喰われ、危うくマナを殺してしまつたところだったんだ。

そして、俺は大切な妹だけじゃなく、家族の絆すら壊してしまつたんだ。俺のせいで——

だからこそ、俺は一人でいなければいけない。俺は光にはなれない。求めてはいけないんだ。

マナはなお俺を慕っているが、俺にはその資格が無い。絆なんて力で簡単に崩れ去るから。

だからこそ、俺はミシエルを母さんと呼んではいけないし、呼ぶ資格も無い。

何故なら、俺は神代の住人であり闇そのものだから。俺は本来、二人に責められてもおかしくはないんだ。

だから、どうか俺に関わらないで欲しい。俺と同じ道を歩めば、暗闇しか無いから——

流石にあんな事があれば、今は家に居づらい……か。

そこで、俺はある場所へ向かう事にした。そのためには、さつき掛けたロックを全て外さないとな。

ロック二つとチェーンロック。それらを一つ一つ全て外し、俺はドアを押し開けた。

外に出ると空はやや明るく、太陽が少し輝いている。良い天気だ。雲一つ無く、昼間になれば洗濯物や布団を干すのに最適だな。

ただ、予想はしていたが、外にまだミシェルが居る。ミシェルは目を真っ赤にしていたが、俺がドアを開けた瞬間ダッシュで入っていく。俺は一瞬しまったと思った。だが、すぐに考えを改める。入ったモノは仕方無い。あの暴れ馬は、追い出すのに苦労する。

さて、ミシェルは忘れ気晴らしに外へ行こうか。俺は、屋敷から見て右にあるガレージへ向かった。

横を見ると直ぐに見える程の距離だったため、数十歩で辿り着く。四角い形でコンクリート製。入り口以外がハーブ畑になっている事を除けば、一般的な車庫と変わらない。

ガレージにはシャッターが降りており、鍵が掛かっている。そういえば、鍵は部屋に置いたままだったか。という事は、再び屋敷に戻らなければいけない。ただ、今はあまりマナやミシェルに会いたくないな。ならば――

「仕方無い。少し横着をしよう」

そう呟くと、俺は両手を真横に翳す。すると、同時に風が俺の体へと集まっっていく。風……いや、エネルギーは俺の周りを回転し、徐々に加速し始める。

音速、まだ足りない。更に加速。エネルギーは徐々に輝いていく。光速……いや、もっとだ。また更に加速。最早、エネルギーには残像すら無くなる。視認する事すら不可能だ。

よし、大体こんなものか。俺は“光を越えた速さへ加速したエネルギー”を徐々に纏い始めた。目では見えないが、遅れて皮膚の神経が触れた事を確認していく。

同時に、周囲から全ての音が完全に無くなる。俺はそのまま、一歩ずつ屋敷へと向かった。

屋敷の前に着くと、俺は音もなくドアを開ける。いつもは冷えた空気が漂ってくるが、今はそれすら感じない。靴を脱ぎ廊下を歩くが、何も響かない。俺は二階の寝室へと向かった。

少し歩き、寝室の前に辿り着く。すると、マナとミシエルがドアの前で、時が止まったかの様に固まっていた。

状況から察するに、マナは俺と和解させるためにミシエルを両手で引き摺り、ミシエルは嫌だと抵抗しているのだろう。その体勢のまま、二人は止まっている。

ただ、時間が止まっている訳じゃない。単に俺が“早くなった”だけだ。重力や摩擦すら感じない、言うなれば超光速の状態。感覚すらも超越してしまった俺が、時間を遅く感じてるだけだ。何者にも干渉されない速さ。これが俺の能力。

それにしてもマナ、俺の事を酷いと言っておきながら、ミシエルを連れてきてくれたんだな。そんなに、八年前……家族との絆を取り戻したいのか。

だが、俺にはやらなければいけない事がある。だから、もうしばらく我慢してくれ。

「すまない」

そう呟きマナの頭を撫でると、俺はドアを開けた。

中に入ると、俺は周りを気にせず机へ向かう。木製の机、その引き出しを開け目的の物を抜き取る。

皮製の財布と小さな輪に付いた鍵の束。二つを取り出すと、机の上にある携帯を掴みつつ再び引き出しを閉める。

そして、財布と鍵、携帯をジーンズのポケットに差し込むと、俺はドアを開け外へ出た。

今度こそ、朝食前の気晴らしに外へ出ようか。まだ六時じゃないから、しばらくドライブしてても間に合う。

俺はまだ固まっている二人に微笑みつつ、外へ向かう事にした。もつとも、帰ってもミシエルの朝食を作る気など更々無いが。俺は二人を背に、玄関へ向かった。

しばらく歩くと、玄関に辿り着く。よし、ここなら大丈夫だ。誰も居ない事を確認すると、俺に付加された能力を徐々に解除した。

解除すると、俺が纏っていたエネルギーが霧散していく。同時に、俺に音や温度が戻り始めた。

やはり、発動中に何も感じないというのは慣れないモノだな。感覚が無いと生きた心地がしない。風もなければ、重力や気温すら感じない。闇が広がる宇宙を、一人さ迷うのは、あんな感じなのだろうか。

さて、気を取り直してドライブだ。

俺は鍵の付いた輪を指で回しつつ、ガレージへと向かった。

少し歩き、再びガレージへ辿り着く。今度こそ俺は鍵でシャッターを開けると、中で待つ相棒へと向かった。

光沢を持った黒いフォルム。鋭利とも言える流線型のデザイン。パーツの全てが手入れされた俺の愛機^{バイク}。

俺はバイクを押しつつ、閉まっている門へ向かう事にした。

ガレージからバイクを押し歩き、俺は門に辿り着く。ただ、辿

り着いたのは良いが――

「ミシエルめ……どうやら本気で追い出して欲しいみたいだな」

目の前、しかも敷地内に一台の車が止めてある。明らかに、ワザと門の横に着けているな。

白くコンパクトなボディ。間違いない。ミシエルの愛車アルトだ。かつて、実家の手伝いと両立させた社員をヒントに、安さと実用性を追求し完成した車……だったらいい。名前の由来は、確か“ある時は何々”だったか。

現代もなお改良が続くマシン。お子ちゃまなミシエルとは正反対な歴史を歩んだ一品だ。

さて、流石に斬り捨てる訳にはいかないか。でも、門から退いてくれないとドライブすら出来ない。

やはり、持ち主には出ていって貰おう。

俺は車を背に、ミシエルの所へ向かった。

今度は高速移動を使わずに辿り着く。

やはり、まだマナとミシエルが居たか。マナは俺を見ると不味そうに俯くが、俺は真っ直ぐミシエルへ向かう。

「ハ、ハロー……？」

ミシエルは苦笑しつつ、俺から目を逸らす。どうやら、俺が何故来たか解ってるらしい。

ならば話が早い。

「さて、出ていくか斬り捨てられるか、お前はどっちが望みだ？」

俺は呆れも加えた声でミシエルを見る。対するミシエルは、涙目で強く首を横に降り始めた。

いや、大粒の涙を流し本気で泣いてる。マナが目の前にいるというのに。さて、どうしたものか……。

「兄さん、お母さんはただ構って欲しかっただけみたいですよ」

「知ってるさ。だからこそ、毎度ミシエルには構うなど言っている」
マナは優しく俺を諭すが、対する俺は堪忍袋の尾が切れ掛かっている。

先月、俺とマナが通う学校に英語教師として現れただけじゃなく、タダで飯を食わせるとやって来る。ハッキリいつて図々しいにも程がある。

親父と違い、尊敬する部分どころか親として何かした所を見た事が無い。どちらかといえばダメ人間。強いて良い所をいうならば反面教師だ。

実は、俺が家事を全て出来る様になったのは、少しでもダメ人間から離れたいたためでもある。あのミシエルの性格に嫌気がさしたからこそ、神代宗家から離れたんだ。

そして、新築の家を買い今に至る。

ただ、宗家に護るよう念を押したハズのマナが、去年俺の元へやって来た事が唯一の想定外だった。

流石に妹は追い返せなかったが、ミシエルだけは確実に追い返してやる。

今までは、マナの説得で大抵の事には目を瞑ってきたさ。ただ、ドライブをしようとしたら、車が勝手に停めてある。もう我慢ならない。

「ミシエル、何か言う事は？」

「お腹空いた！」

ミシエルは泣きじゃくりつつ、俺に音と共に空腹を伝える。

どうやら、謝る気は更々無いらしい。ならば、こちらにも考えがある。

俺はポケットから携帯を取り出すと、ある番号をアドレス帳から

選り始める。

「兄さん……まさか！」

「ミシエルには、一度お灸を据えなければ解らないらしいからな」

俺はその番号を選び掛ける。着信相手は佐賀美警部。警察だ。

「もしもし、誰だよこんな朝っぱらから……」

寝ぼけた声で、電話の主が現れた。見た目は若々しいんだが、電話の声を聞く限りそうは感じられない。

よしよし、ここまでは俺の予定通りだ。佐賀美警部、ミシエルの“教育”は任せたぞ。

「俺だ」

「おお、響夜か！ また事件か！」

俺の声を聞き、佐賀美警部は急に警察らしい口調へと変わる。

ああ、勿論事件さ。

ミシエルを再び見ると、俺の口元は歪んだ笑顔に変わっていく。

「空き巣に入られた。一応、犯人は捕まえたんだが、そいつが車を門の前に着けて困ってるんだ」

「成る程。つまり、ドライブ出来ないから、ミシエルを車ごと引き取ってくれと」

佐賀美警部は電話越しにククツと笑いつつ、俺に返事をする。勿論、互いに解る了解の意思表示でだ。

そこまで解ってるなら話が早い。数々の能力者による犯罪を取り締まったアンタなら、このネズミも大丈夫だろう。

刑務所送りにはならないかもしれないが、学校以外は自宅軟禁は避けられないさ。おばあちゃんには、二度とミシエルを近付けない様に言っておこう。

「じゃあ、飯を食べたらすぐに向かう。じゃあな響夜」

そう言つと、佐賀美警部は電話を切った。

俺はミシエルを見ると、勝ったと言わんばかりにガッツポーズをする。

対するミシエルは、泣き止んだばかりなのに、マナの胸に顔を埋

め再び泣き出した。

全てが上手くいったぞ。勝った！

ただ、勝ちと引き換えに一週間は、マナに一度も口を利いて貰えなかったが……

約束

ハハ……一週間掛けてようやくマナが仲直りに応じてくれた。

ただ、仲直りするための条件が厳しすぎる。出来れば、飲みたくないが……。

「兄さん、最初からです」

「ミシエルの地外法権を認めない。ミシエルを苛めない。ミシエルにご飯を作ろう」

「お・か・あ・さ・ん・ですよ」

要約すれば、ミシエルが家に入っても文句を言わないという事だろう。何度もマナから渡された紙を棒読みしてるが、マナは一向に許してはくれない。

あんなのを母親と慕う理由が解らん。

「兄さんは自分より下という時点で、他人を見下し過ぎです」

「一つでも勝るものがあれば認めてやるさ」

マナの言う通り、俺は他人を認めない。

神代家は基本的に弱肉強食。一番強いが、何らかの方法で全員を認めさせた奴が、次の当主になるというルールだ。

そんな考えが根底にあるからこそ、俺はミシエルを母親と認めない。

ただ、マナには能力を抜きにしたケンカで、一度も勝てた事がない。

マナは俺より魔力に恵まれている。だからこそ、基本的な身体能力が高く、平手の一撃でも腫れ上がってしまう。

出来れば、二度と敵に回したくない。

そんな妹だからこそ、俺は今機嫌を取ろうとしている。それなのに、何が気に食わないんだろうか。

「兄さん、お母さんは私達を産んでくれたのですよ」

「戸籍上は、な」

「もう、何で意地を張るのですか……」

もう、朝から昼までずっと続いている。居候は外出してるから、誰もフォローしてくれない。

マナはどうしてもミシエルを母親と認めさせたいらしい。ただ、俺にその気が無いと知ったのか、深く溜め息をする。

流石に、女の子が溜め息をするのは、兄として非常に不味い。

「いつか呼んでやるから、溜め息を付かないでくれ」

「今呼んで下さいよ……」

マナは目を潤ませつつ、暗い表情で呟く。

どうやら、俺はこの目に弱いらしい。俺の中に少しずつではあるが、罪悪感が芽生え始める。

負けた……ああ、負けたさ。

本来は兄として、神代家次期当主として言い聞かせるべきなのだが、結局は純粹さに負けてしまった。

その後、俺が妥協という形で決着した。

もう、何だっけ呼んでやる。あの日みたいに、マナを泣かせてしまえば俺は――

「しょうがない、明日は遊園地に連れてってやる。カオルとフェルゼ、あとミシエ……母親も一緒にな」

「本当ですか!」

「……ああ」

本当はミシエルを連れていくのは嫌だが、これ以上嫌われるのだけは勘弁してほしい。

マナと約束をすると、俺は明日への準備へ取り掛かる事にした。

外出

澄みきつた蒼い空、俺を攪る心地好い風。今日は洗濯日和だ。

ただ、現在俺……いや、俺達は洗濯をしている訳ではない。

昨日、家族を遊園地に連れていくと約束をしてしまった。そして現在、団体として遊園地に来ているというわけだ。

一日のみの乗り放題パス、それを昨日で全員分取り寄せるのに苦労したさ。オーナーの所へ直接向かい、何とか手に入れた。

もし、親父がオーナーの旧友でなかったら、遊園地行きは実現しなかっただろう。

来る予定の奴はマナ、親友……そしてミシエルのみ。親父とおばあちゃん、あと居候は、外せない用事があるらしく、今日は来れないらしい。

それを考えれば、本来なら俺も含めて四人のハズだ。それなのに、友だけは未だに居ない。

遊園地から少し離れた並木通りで待っているんだが。

理由は一時間前に遡る――

赤煉瓦が特徴的な遊園地のゲート。その受付で駄々を捏ねている姿がある。白髪が特徴で、見方によれば少女にも見える体型。

後ろ姿で顔は見えないが、何気無い仕草で解る。俺の親友、九条カオルだ。神代宗家の隣に住んでいた、由緒正しき退魔士の家系。更に言えば幼馴染みだ。

現在は、俺の個人的な引越しとほぼ同時期にやって来て、一緒に住んでいる。

いや、元々俺が住んでる家は、九条家が所有する物件の一つ。し

かも、契約書ではカオルが所有している事になっている。

つまり、俺が住んでいる家の大家は、カオルという事になる。

まあ、幼馴染みという事で、家賃をタダ同然にしてくれた事はありがたいが……。

とにかく、そんな親友が遊園地の入口で立っている。

流石、カオルというべきか。俺達より先に来ていたようだ。

ただ、未だに遊園地に入れてない所を見ると、やはりアレか。相変わらず、学習能力が無いというか、何というか……。

「えっ！ 何で遊園地にビアンカを入れちゃダメなの？」

「カオル様、当施設はペットの持ち込みを認めていません」

やはりか。また公共の施設に、ネコを持ち込もうとしてる。

カオルは一流の退魔士だが、同時にバカが付くほどの動物好きでもある。それこそ、犬やネコ、インコ……飼っている動物の種類を言えばキリがない程に。風呂や食事、寝る時も一心同体……らしい。

アメリカンショートヘア・シルバータビーのビアンカは、あいつが飼っているネコの一匹。他にも、セシリアやヴァン、様々な名前のネコが二十匹近くいる。

あいつは動物のしつけが上手だから、衛生に関係しない施設なら入れても問題ない。

ただ、殆どの施設はペットとの入場を認めていない。だからこそ、必ず今みたいなトラブルになる。

さて、放っておいたら本当に泣きそうだ。そろそろ友に助け船を出してやろう。

「おはようカオル」

俺は何気なくカオルに挨拶する。すると、カオルは声に気付き、俺のもとへやって来る。

両手に、灰色や白の毛、黒の模様が特徴的なネコを抱き抱えながら。

「響ちゃん助けてえ」

「カオル、ピアノ力を家に置いてくるんだ」

「う、うん……響ちゃんがそう言うならそうするね……」

俺の言葉を聞くとカオルは背を向け、とぼとぼと家に帰っていく。その後ろ姿は、何処か哀愁が漂っていた――

そして、現在に至る。約一時間待っているんだが、カオルはなかなか現れない。

おかしい。家から遊園地まで歩いて往復しても、三十分は掛からないハズだ。

それに、カオルは一流の退魔士。たとえ両手にネコを抱えてたとしても、地面を蹴る度に常人以上の加速が付くハズ。

スキップ程度でも十分で帰れるほどに。

幾ら奴が天然トラブルメーカーとはいえ、何か嫌な予感がする……。

…。

「マナ、少し先に入ってくれないか？俺はカオルを迎えに行く」

「う、うん……」

俺は能力を纏い、徐々に加速する。

音速、光速……そして、視認不能な速度まで加速していく。

何だこの胸騒ぎは。早く行かないと、何か取り返しが付かないことになるような。そんな気がする。

しばらくすると、いつもの高級住宅街に辿り着く。そろそろ俺達の家か。よし、能力を解除しよう。

纏っていたエネルギーが霧散し、徐々に音と感覚が戻っていく。涼しい風や暖かな日光、全てが元通りになる。

まあ、ここまで何もなければ大丈――

そう思った瞬間、先の方で爆発の様な轟音が青空を支配する。
ちようど家の方……まさか！

そして、家に着くと俺の嫌な予感は的中する事となる。

進化

家の方角から何度も轟音が鳴り響く。何か硬い物を何度も叩き付けた様な音は、今もなお止む気配が無い。

胸騒ぎがする。

不気味な轟音の方向へ俺はすぐに向かう。

轟音の発信源は、やはり家だった。いや、厳密には、家に侵入した存在が発している。

発信源の正体は、前後に一つずつ車輪が付いた存在。それらが五、六体集い、暴走族の如く群れを成して何かの周りを走っている。

バイク特有のエンジン音を発しているが、バイクと呼ぶにはあまりにも化物じみた姿の存在。

バイクの部分を下半身とするならば、文字通りバイクに繋がっている胴体は上半身。

人の骨格がそのまま上半身となっており、バイクに繋ぎ目無く付いている。金属と骨、相反する物質が融合し、一つのXとして君臨した存在。

奴等に敢えて名を付けるなら――

「ケンタウロス」

半人半馬の異形ケンタウロス。これ程奴等の特徴を捉えた名は無いだろう。半骨半二輪という部分は別とすればの話だが。

奴等に便宜として名を付けた後、俺は奴等を門の陰から観察をする。ケンタウロスが囲む何かを見ようと、身を乗り出してみる。

囲まれた箇所は、庭の草が紅く染まっている。その中心には――
「まさか……！」

白髪が特徴の少年が倒れていた。所々紅く染まっているが、長年

アイツを見てきているから間違いようが無い。

俺の幼馴染み、九条カオルの変わり果てた姿だった。

血は絨毯のように広がっており、明らかに人間の致死量を越えている。たとえ退魔士でも、生きれない程に。

そんな友の姿を見た瞬間、俺は既に踏み出していた。

俺は走りつつ能力を両手に纏う。太陽の光は両手に集まり、徐々に鋭利かつ巨大な形へと変貌していく。

光が収まると、俺の手には二本の太刀が握られていた。片刃でやや反りのある姿。成人男性二人分の身長を優に越えた巨大な力の塊。俺は走りつつ、太刀を横に振るう。太刀は手の動きに合わせて推進し、何の抵抗も無く障害を断っていく。

前方から二つのが迫る。それと同時に、俺は両手で円を描きつつ真っ直ぐ跳躍する。その様はまるで月を表す舞い。優雅さとしなやかさと同時に、鋭さを併せ持つ剣の舞い。

すれ違い様に、二つの轟音を切り裂く。そして、着地と同時に轟音は爆音へと変化していく。

仲間を三体も倒され激昂したのか、ケンタウロスの残り全員が一斉に俺を囲む。そして、俺の武器が届かない距離で、じつと隙を伺いながら俺の周りを回り始めた。

「確かに、リーチを考えつつ一人を相手する場合、それが最適だ。普通ならな」

俺はそう言うと、光を能力のエネルギーに変換し纏い始める。光は俺の周りを加速しながら回転し、最後には輝きを失っていく。

「こいつで決める」

この言葉と同時に、ケンタウロスの動きや轟音が止まる。

俺はまず、目の前で静止したケンタウロスに向かう。接近と同時に、左足を後ろに下げて軸にし、身体を回転しつつ右足を上げて弧を描く。

右足はケンタウロスの胴体へ推進し直撃する。それと同時に、ケンタウロスの胴体が少し宙に浮き始めた。

続いて二体目に近付き同様の攻撃。胴体がやや斜めに傾き静止する。

最後に三体目に向かおうとするが――

「バカな、いないだろ？」

声は音を超えた状態のため出ないが、俺はつい口を動かしてしまふ。

三体目が消えた。という事は――

考える前に、俺は横から強い衝撃を受ける。咄嗟に回転しつつ受け身を取り、ダメージを和らげる。俺は、立ってその正体を見ようとする。すると――

「成る程、進化したか」

そこには、姿が変わったケンタウロスがいた。

白骨の上半身は、両腕に車輪が付いている事以外は変わらない。

ただ、下半身はより人間の足に近付いている。例えるならば、バイクのパーツで人間の足を再現したような形。

バイクの車輪がローラースケートのようになっており、踵にはマフラーが付いている。腹部から腰までがエンジン、残りの部分が銀色のボディで構成されている。

ただ、変わったのは姿だけじゃない。

視認不可能な速さの俺に攻撃をしたという事は、俺と同じ領域で活動が可能になった事になる。つまり、もう高速での不意打ちは通用しない。

ならば、実力で搦じ伏せるまでだ。

高速

フツ、Xの進化とはいっ見ても厄介なモノだ。進化すれば、必ず高速移動を使ってくる。その度に、倒す事が困難になってしまうのだ。

元々俺の高速移動は、進化したXを倒す事前提に開発した技。但し、死体や無機物、自然物等がベースのXとは違い俺の体は人間。奴等みたいに何度も使える訳じゃない。

既に二回使用。肉体の限界を考えれば、一日に三回までしか使えない。それ以上使えば、命の危険にさらされる。更に言えば、制限時間は現実の約一分間。それ以上は、脳が強制的に解除してしまう。

ならば、高速移動を掛け始めた今のまま倒すしかない。三回目は滅多な事が無い限り、使わない様にしよう。切り札を使うのは、バカのする事だから。

俺はまず、両手を広げつつ奴へ歩み寄る。すると、対するケンタウロスも、一歩ずつやって来る。

互いの腕が届く距離にまで近付くと、まずケンタウロスが先制攻撃。梅雨の如く拳が俺に向かうが、俺は円の動きで受け流す。受け流すだけではなく、その隙に少しずつ腹へ当てていく。

この攻撃の違いの結果、徐々に優劣の差が生まれ始めていく。ケンタウロスの動きは徐々に鈍り、遂には片膝を地面に付いてしまった。

一発ずつのダメージ自体は少量だが、同じ箇所にも何度も叩き込むその結果、気付かないうちにダメージが蓄積されていく。呆気ない

幕切れたった。

同時に、互いの高速移動が解け、現実の世界に引き戻される。俺が今まで蹴りで浮き上がらせたXが爆発し、塵となって舞い上がっていく。

それを見た死に損ないは、人によく似た怒号と共に突き進む。もう戦えないハズなのに、怒りという本能に身を任せ俺に迫り来る。

Xは、俺達が幸せを勝ち取った結果生まれた副産物。

恐らく、アイツは元々持ち主がいたバイクだったのだろう。大切に使い古したあの姿を見れば解る。

恐らく、主人は何らかの原因で死亡。或いは、二度とバイクに乗れない体になったのだろう。

現在、アイツは主人を失った喪失のみで存在している。仲間と群れていたのも、互いの喪失感を埋めるため。

ならば、お前のために終わらせてやるさ。俺の全力を以て。

「レイディアントショット」

俺は両足にエネルギーを纏い、ケンタウロスに向けて跳んでいく。ケンタウロスは怒りの拳を振るうが、俺は回し蹴りで弾き飛ばす。そこから更に回転を掛け、文字通り飛びながら何度も蹴りを当てていく。

「安らかに眠れ」

哀れみの言葉と共に、踵落として地面に降り立つ。すると、ケンタウロスは両手を広げ、ゆっくりと後ろへ倒れていく。

「アリ……ガトウ……」

最期に、ケンタウロスは俺への感謝の言葉と共に爆発した。金属の破片は霧散し灰になっていく。そして、風と共に舞い上がり、大空へと還っていった。

「暴走する前に、誰かへ助けを求めれば良かったのに……」

この言葉は、何故出てきたのか解らない。

もしかしたらアイツ等が、かつてマナを傷付けてしまった俺と重なったからかもしれない。

ネコと違い恨みのみで動かなければ、まだやり直せたかもしれない。

ただ、あくまでももしもの話だ。過去は戻ってこない。そう、俺がアイツ等を手に掛けた様に、アイツ等もカオルを奪ったのだから「ただ、流石にこの状況は不味いか」

俺はひとまず冷静になると、未だに横たわる友に近寄る。

やはり即死……か。

つい最近まで、響ちゃんと言ったのが信じれないな。

一応、病院と警察に連絡しよう。どちらもお偉いさんに、親父の友人が居るから嫌だな。佐賀美警部と九条院長。

特に、九条院長はカオルの母親だ。更に執刀医が父親。あの二人は、俺を家族同然に扱ってくれた良い人だ。治療や予防接種を、俺達優先で受けさせてくれたからな。

ただ、そんな夫婦でも、変わり果てた息子を見て何を思うだろうか。

俺はそう思いつつ、友の親が居る病院へ電話する事にした。

復活

まずは携帯を開き、俺は九条院長へ掛けてみる事にした。今の時間帯は、休憩で外出しているハズ。ならば、携帯に掛ける方がより早い。

九条総合病院は、神ヶ丘の退魔士御用達の病院で、あらゆる医療を受けられる場所。

九条院長は患者が脳死や植物状態ではない限り、何でも治せる名医として知られている。あらゆる場所が破損しても、壊死させる事なく手術する天才外科医だ。

そんな名医でも、流石に今のカオルは治療不可能だろう。

だが、カオルをそのまま放置する訳にはいかない。黙っていてもどのみち、親には必ずバレるのだから。

ただ、電話を掛けてみるが、一向に通じる気配が無い。掛けても未だに留守電にならないという事は、恐らく手元に持っているハズ。いや、背後から見知った着メロが徐々に迫ってくる。ベートーヴェンの第九。神ヶ丘で俺が電話を登録してる人物。しかも、この曲を愛用する人物は一人しかない。

「響夜君？」

知っている声が後ろから聞こえ、俺はゆっくりと振り向く。

後ろに纏めた黒い髪、大和撫子がピッタリな顔立ち。背が高くスタイルが良い女性。九条院長その人が立っていた。

「九条院長……」

「知っているよ」

その言葉が俺の胸を決る。笑顔で俺と横たわるカオルを交互に見ると、カオルへと駆け寄る。

そして、変わり果てた我が子をいとおしそうに撫で、クスツと優

しく微笑んだ。

「あらまあ、派手に殺られたわねえ。じゃあ、ママが今から治してあげるからね」

まるで棒読みの如くサラツと言った。しかも、他人事の様に。

素人とはいえ、俺は人間が死亡する出血の量を知っている。ハッキリ言つて、カオルは医学上では手遅れの部類に入る。たとえ脳死や植物状態でなくても、殆どの血を失ったカオルが助かるなんて考えられない。

対する九条院長は、カオルを治すと言ったではないか。今まで現実離れた治療を何度も見てきたが、今度も現実離れた治療を見れるらしい。

「治せるのか？」

当然の疑問だ。治せるなら助かるが、もし強がりなら俺の内にあるであろう悲しみは増すかも知れない。

「当たり前でしょ。この程度はまだ手遅れの部類に入らないわ。それに――」

こう区切ると、笑顔で俺に向きつつ口を開く。

「今までヴァンパイアにやられた退魔士を元通りにしてるから、みんなのはまだ楽な部類よ」

初耳だ。

ヴァンパイアは上級Xに分類される。血液を貪るため、吸血鬼という名で和訳されている。

ただ、吸血鬼は戦つて生き残れるかどうかの存在。もし襲われて生きていたとしても、噛まれていれば仲間になる。

それを治してきたという事は正に化け物だ。もしかしたら、ヴァンパイアよりも恐ろしい存在かも知れない。

「まあ、確かにマトモな治療をしても助からないかな。けどね、私は一応退魔士専門よ。治療が常識的な訳無いでしょ」

「それはそうだ」

どうやら、友は救われそうだ。警察も必要ないらしい。なら、マ

ナに心配させないよう、一言メールしておくか。

俺は再び携帯を開くと、メールを書きマナに送信する。すると、少し経ってから了解の意思を示した言葉が返ってきた。

そして、再びカオルを見ると、信じられない事が起きていた。地面に染み付いた血液が消え、変わりにカオルの血色が良くなっている。

毎回治療を受けて思ってるが、短時間で何をやったのだろうか。しかも、医療機器が無のまま。家の玄関に掛けてあるAEDすら使っていない。つい目を離れた隙に、破損までもが治っている。

確かに、退魔士には治療専門の能力者が存在する。だが、それでも血液の再生と傷の修復を、同時に行う奴など見た事が無い。

これが、俺達神代と並ぶ退魔士の名家九条の実力か。ますます興味深い。

「面白いでしょ？」

俺の思考を見透かしたのか、九条院長は再び微笑む。その姿は神々しく、まるで女神のよう。

「あ……ああ。凄いな。何をやったかまるで解らなかった」

「当然でしょ。九条家秘伝技の一つだからね。いつかカオルにも教える予定よ」

カオルも可能なのか。ただ、カオルの能力は動植物の成長や進化を、一時的に促進させる能力だったはず。実際、栗爆弾やユーカリの火柱、ビアンカの獣人化等で何度も痛い目に遭った。俺は全く手加減してないのにも関わらずだ。

九条家伝統の能力だと聞いてたが、あの治療は能力の範囲内で行なったモノなのだろう。そう理解しておく事にした。

だが、ここまで非常識な治療を見ると、最早ゴッドハンドと呼ぶしか無い。どうやら、九条家の秘術を、普通の医学と比較してはいけないみたいだ。

「さて、久々に息子と会えた事だし、そろそろ帰ろうか。じゃ、カ

オルが起きたら宜しくね」

「お……おい！ まだ礼を——」

俺が最後まで言う前に、九条院長は俺を背に手を振り去っていった。

しばらくの間、嵐が過ぎ去った様な静けさが俺を支配していた。

百獣

九条院長に治してもらった後、しばらくカオルを安静にしていた。いや、すぐに血色が良くなったから、とりあえずカオルを家に運ぶ事にしようか。俺はカオルを背負い、そのまま家へ向かった。

家に入り、幸せそうに寝てる大家の部屋へ向かう。最上階、三階か……。戦闘後、人を背負ったまま階段を登るのは正直キツイ。

ただ、カオルも痛い思いをしたんだ。それに、リビングで寝かせて風邪を引いたら可哀想だ。

一応、俺の部屋で寝かせようとも考えた。けど、カオルは動物と一緒にじゃなければ落ち着かない奴だ。どのみち行かざるを得ない。

さて、ようやく三階まで辿り着いた。後はカオルの部屋まで送るだけだ。

少し歩くと、カオルの部屋のドアに辿り着く。ただ、ドアの前に一匹小さな生き物がいる。シルバー・タビーのネコ。アメリカンシヨートヘアが尻尾を振りつつ、俺達を歓迎している。

「ビアンカか？」

俺が名を呼ぶと、ビアンカは一声鳴く。どうやら、無事だった様だ。

ビアンカは、ずっとカオルの帰りを待っていたらしい。背負ってるカオルに、跳び跳ねている姿を見ればよく解る。

「ずっと主人を待ってたのか。偉いぞ」

俺は小さな奉公娘に、労いも込めて優しく撫でてやる。

すると、ビアンカは気持ち良さそうに身を任せる。うつとりした表情で両目を閉じながら。

さて、問題はここからだ。カオルの部屋へ入るには毎回勇気が必要

る。ただ、女の子の部屋へ入る勇氣とは別の種類だ。正直、あまり入りたくない。

ネコ一匹ならまだ可愛い。けど、中は様々な意味で混沌とした領域だ。X共が入り乱れる百鬼夜行が、まだマシに思えるほどに。

「とりあえず、入ってみるか……」

俺はビアンカを一度ドアから移動させ、ノブを回し一気に開ける。開けた瞬間、バックステップしながら逃げる。

するとカオルの部屋から、これでもかと言わんばかりに動物達が溢れ出る。床はイヌやネコ、その他小動物が走り回り、空中はトリや飛行能力を持った生物が飛び回る。

俺が開け放ちしばらくすると一度制止する。だが、俺を見付けると一斉に襲い掛かってきた。

「だから嫌なんだ」

俺は本音を呟きつつ、カオルをジッと見る。奴等の狙いは、確実に俺の背中のカオル。ならば――

「許せ友よ」

俺はカオルを背中から降ろし床へ置く。すると、動物達は一斉にカオルへ飛び掛かる。

後は優しい主人に遊んでもらうんだ。あと、すまないカオル。病み上がりになるだろうが、面倒を見てやれ。

俺はカオルに両手を合わせ、マナとその他のいる遊園地へと向かった。

知識

俺は急いでマナのいる遊園地へ向かう。戦闘での疲労の中、能力を使わず自らの足で走る。

道のり的にそこまで苦勞しないが、遅れてしまった分は挽回しなければいけない。ただでさえ嘘つきなのに、これ以上妹に嘘をつきたくないからな。

急いだ結果、思ったより早く辿り着いた。流石に、もう入ったか。入り口には、マナどころかミシエルすらない。

闇雲に探すのは面倒なので、俺はマナにメールを送ってみる事にした。

すると、一分も経たないうちに返信が来る。どうやら、観覧車にいるようだ。俺は、先にある巨大なシンボルに向け歩み始めた。

観覧車の下に着くと、丁度マナとミシエルが観覧車から降りていくところだった。

マナは俺を見つけると手を振り、ミシエルを引き連れてやって来る。

「兄さん！」

「待ったか？」

マナは俺の言葉を聞くと首を横に振る。

「メールの通り、カオルが体調を崩した」

流石に、家にXが入ったなんて、口が裂けても言えない。カオルが一度重傷を負った事もだ。

本当は妹に嘘をつきたくないが、つかなければいけない嘘もある。心配させたくないからな。

「残念ですね。じゃあ、帰ったらお粥を作ってあげましょうね」

優しいなマナ。きっとカオルは喜ぶだろう。今まで俺は、マナを

看病した事など幾らでもあるが、マナにされた事は一度もない。幼なじみとはいえ、羨ましい立場だと思う。

ただ、九条院長が既に治したから、健康そのものではあるが。

「カオルだけ羨ましいな。私もポリッジ食べたーい！」

ミシエルが駄々っ子の如く急に喚きだす。

また余計な事を。そんな事を言ったら、マナが本気で作るじゃないか。母親とはいえ、少しは空気を読んでほしい。

「ポリッジ……ですか？」

「ミシエルの言ってるのは、恐らく麦の粥だろう。ミシエルは甘党だから、米に塩を加えて煮た粥のハズがない」

マナへ答えた後、ややどうでも良い補足を加えて説明をする。

ミシエルが言うポリッジは、日本人によつては好き嫌いがハッキリと分かれる食べ物。煮詰めて粥状にした麦を皿へ盛り、ジャム等をトッピングする朝食だ。

恐らく、この時点で大多数が食べる事を挫折するだろう。

欧米では、基本的に粥とは麦の粥を指す。ちなみに、米の方はライスポリッジという英語訳がある。

任務でミシエルとヨーロッパに行った事があるから、英語や文化と共に嫌でも覚えてたさ。

そついったトリビアを軽く説明すると――

「兄さん凄いです！」

「こんな事、大した事じゃない。要は、ミシエルの求めてる食べ物とは別いう事だ」

マナが尊敬の眼差しで俺を見る。兄として妹に教えられる事は、内心ではあるが誇らしい。

ただ、ポリッジ自体は材料さえあれば誰でも作れる代物だ。かつて試しに作った事があるから、レシピは頭に入っている。洋食が得意なマナなら、俺が教えればすぐに覚えるだろう。

ただ、ミシエルは求めてる物と違つと知り、シヨックで落ち込んでいる。これが、噂のカルチャーシヨックか。実物が身近で見れる

と面白いモノだ。

まあ、俺も欧米人の――但し一部の文化だが――食品に糖分を加え、甘くしようとする行為が理解不能だ。俺自身、紅茶やコーヒーを無糖で飲むから特にそう思う。

まあ、アメリカのケロッグ兄弟が発明した、シリアルという食品を除けばの話だが。アレは栄養を考えてるから、食事としては効率が良い。

ただ、今のシリアル自体、病院の食事やケロッグ兄弟の喧嘩という過程で生まれた食べ物だ。

流石に、マナにここまで説明すると、長くなるから止めておこう。この話は、寝る前にとっておく事にしよう。

「ポリッジ……」

ミシエルの奴まだ言ってる。いい加減諦めたらどうだろうかと思う。

まあ、ミシエルにタダ飯を食わせてやる気など更々無いが。

「お母さん元気出して下さい。もし良ければ、私がレシピを調べて作りますよ?」

女神の様な言葉で、ミシエルの目に輝きが戻る。それどころか、ありがとうと言いつつ、マナに飛び掛かり抱き付いたではないか。この姿を見る限り、マナが母親に見えるな。

ミシエルは俺を見つめると、一瞬ニヤリと笑いすぐに舌を出す。

マナの頼みで家に入れるようになったから、調子に乗っているみたいだ。後で懲らしめてやろう。

「でも、兄さんに聞いた方が早いですね。兄さん、ポリッジの作り方教えてくれませんか?」

正直、妹の頼みでも、ミシエルに食べさせるのだから教えたくない。

ただ、穢れの無い瞳で見つめられると、断る気すら無くしてしまう。

ミシエルはタダ飯が食べたいだけだろうが、マナは母親に食べさ

せたい。どうやら俺は、妹の純粋な心に弱いらしい。

「解った。但し、ミシエルが家で余計な事をしたら、ミシエルをすぐに追い出すからな」

「ありがとう兄さん」

やはり、マナに礼を言われるのは悪い気がしない。ミシエルは俺に感謝すらしない様だが。

ただ、どうせマナに教えるのなら、多少アレンジを加えた方が良
いだろう。

俺は頭の中でレシピを再構築すると、マナ達と共に次のアトラク
ションへ向かった。

光陰

しばらく遊んではみたが、やはり慣れないものだ。殆ど自由奔放に育てられたマナと違い俺は、今までXを刈り取る者として生きてきた。マナやミシエルの様に、純粋な気持ちで楽しむ事は極めて難しい。

正直、二人が羨ましいよ。全く……。

それを知ってか知らずか。二人は何度も俺の手を引っ張り、無理矢理アトラクションに乗せようとする。これじゃあ、二人の人形だ。そう思うと、自分自身が可笑しくて、つい笑みが溢れてしまう。

「兄さん？」

マナの声でハツとする。心配そうに俺を見ていたが、その顔すら可笑しくて起爆剤へとなっていく。

「いや、すまない。何かお前達を見てると、俺が小さく感じてな」

「小さく……ですか？」

マナの問い掛けに、俺はそうだと言いつつゆっくりと頷く。

「そんな事はありませんよ。だって、兄さんは三歳の頃から、神器が使えたじゃないですか」

三歳から使えた……か。能力者が能力を一定以上極めた時、能力は別の存在へと進化する。それが神器だったな。俺の白夜ともう一つ。あの忌まわしき力。

強い武器は使い方を間違えれば、大惨事をもたらす。そう、マナを傷付けてしまったあの日の様に。傷付けるだけの力は、弱さと同義だ。

惨劇の被害者なのに、それでもお前は俺とその力を許し、認めるというのか。

「それに、生徒会ナンバー2の席も、兄さんの実力です」

「結果的に用意されただけだ。事実、お前の方が強いと思ってる」「え？」

これは世辞では無い。マナの才能は底知れない。かつてケンカをした時、能力を使わず俺を倒した。

それだけじゃない。猫のXと戦った後だって、本来ならゆっくりと傷口を浄化しなければいけない。Xの攻撃は、時に傷口の治りを遅くさせ、悪化させるからだ。

それなのに、マナ有能力で治した傷口は、ぶり返すどころか後遺症すら無い。

つまり、マナは無意識のうちに浄化の力を加え、能力を発動させた事になる。ただ斬る事だけしか出来ない俺と違い、マナを天才と言わず何と言えば良いのか。

場合によれば、俺を超える退魔士になるかも知れない。

それに、俺が捨て去ったハズの優しさまで持っている。やはり、俺はお前が羨ましい。

「お前は俺に無い全てを持っている。それを大切にすれば、お前はいつでも超えられるさ」

「ありがとう兄さん」

素直で良い。俺はゆっくりマナの頭を撫でると、今度は二人を引っ張り歩く事にした。

それにしても、まさかマナが俺に多少は憧れていたとは。貴重な情報を得られたよ。ただ、俺みたいな生き方をすれば、必ず破滅を招くだろう。退魔士の世界は、いつ死んでも可笑しくない世界だ。隊を作らなければいつかは滅びる。

特に、俺の隊はマナを護る事前提に作ってある。本来なら隊が作れるハズのカオルは、快く俺の隊に加わってくれた。

あとは、居候もといホームステイと、佐賀美警部のじゃじゃ馬か。確かに二人は強い。だが、まだ足りない。俺ですら敵わなかった七体を倒すには、マナを護るには更なる力が必要だ。

最低でも、俺やカオルと互角か、それ以上の奴があと二人。更に、俺達と協力し戦ってくれる者が――

「まあ、そんな奴がいるわけ無いか」

つい愚痴の混じった独り言が溢れてしまう。妹のためとはいえ、苦勞すると溜め息まで出るさ。

「何がですか？」

「神代隊のスカウトさ」

同時に、お前のナイトに相応しい存在を集めるための勧誘だ。

マナは俺の言葉が可笑しかったのか、クスクス笑い始める。

「兄さんの隊は十分強いじゃないですか。カオルやフェルゼさん、^{かなで}奏さんもいますよ？」

「いや、まだ足りないくらいだよ。最低でも、俺やカオルクラスがあと二人欲しい」

「欲張りですね」

マナの笑い声で俺は両手を挙げ、参ったのサインをする。やはり、マナにはナイトが必要だ。

「ズルい。私も隊に入りたい！」

「お前は最初から戦力として見てない。というより、入れる気なんて更々無いさ」

ミシエルの戯言に対し、俺はサラリと受け流す。すると、ミシエルは頬を膨らませ拗ねてしまう。やはり、ミシエルはお子ちゃまだ。それに、俺はミシエルを信用していない。母親としても、人間としてもだ。七体のうちの一人、ミシエルとよく似た男の放った言葉が気になるからな。

「お前は、ミシエルを猫か何かと勘違いしてないか？ 私達と同類で、私達よりも異質な存在のアレを」

まだミシエルが同類、Xと決まった訳じゃない。事実、ミシエルは生きて呼吸をしている。心臓も動いている。

それでも、あの言葉は家族の絆を壊すには十分だった。ミハエルと戦った後、親父を問いただした。だが、知っていたと裏切りの発言をされたからこそ、家族の絆は二度と治らない。

知っていて結婚した。その言葉が、ミシエルへの疑心を更に増大させたんだ。

だからこそ、信用できるのはマナと九条一家、そしてお婆ちゃんだけだ。彼等がいなければ、俺は間違いなく死を選んでいたから。

だが、マナはそんな闇を知らず、家族を信じている。だからこそ、俺はマナを全てから護ろうと決意したんだ。

たとえ、家族を敵に回しても。

「兄さん！」

俺は声でハツとする。見ると、マナは悲しそうに俺を見ていた。

「どうした？」

「兄さんが呼び掛けても返事をしないからですよ」

また、俺のせいで心配させてしまったのか。毎回申し訳無く思う。

「それに、悲しそうな顔をしてました」

「別に悲しくなんかないさ」

俺は笑って誤魔化すが、マナには逆効果だったみたいだ。俺を抱きしめ、震える様な声で俺に呟いたのだ。

「兄さんが、またいなくなりそうで怖いのです。一人で抱え込んで消えてしまいうで……」

俺は今のところマナの声を聞くと、謝る事すら出来なかった。それどころか、マナを抱きしめる事が出来ない。出来そうにもない。純粹だからこそ抱きしめると壊れそうで。何処かに忘れ去ったハズの俺の恐怖が、再び芽生えそうだったから。

マナの機嫌を取るための遊園地だったが、マナが求めているのは恐らく楽しさじゃない。ましてや、自分の安全ですらない。

多分、二度と取り戻せない物。家族の絆を再び取り戻せると信じ、今まで過ごしてきたんだ。

マナの気持ちが解ってなかった。そんな俺は大馬鹿者だ。

ミハエルや親父の言葉が、家族の絆を壊したんじゃない。本当に壊したのは俺自身だ。

けど、本当は認めたくなかった。恐らく、認めるのが怖かったんだ。俺が俺じゃなくなる気がしたから――

悪夢

気が付けば辺りは暗くなり、夕暮れとなっていく。結局、二人に振り回されて終わってしまった。

だが、悪くはなかった。また今度、仕事が空いた時に行こう。
「そろそろ帰ろうか」

そう言い、俺は帰るべく二人の手を引く。だが、二人は逆に俺の手を引っ張り、引き留めようとするではないか。もう暗いのに、まだ帰らないというのか。

「兄さんは、遊園地の楽しみ方を知らないのですね」
マナが笑顔で俺を見ながら言う。

遊園地の楽しみ方？ 実際、俺は娯楽にほぼ疎いから初耳だ。

「遊園地は、夜に別の顔を見せるのですよ」

二人は息を合わせ、ねーっと言う。夜に別の顔……まるで、この神ヶ丘みたいだ。夜にXが——今日の様に、昼という例外はあるが——出てくる事に似ている。

「具体的には、何があるんだ？」

「色々ですよ」

ますます解らない。どうやら、実際に見て確かめろという事らしい。二人は知っているみたいだが、教えてくれる気配はない。ならば——

「探しに行ってくるさ」

そう言いつつ、俺は夜の楽しみを探すべく走り始めた。

あれから探してみたが、夜の楽しみが見付かる気配はない。もしかして、時間に関係あるのかも知れないが、マナ達を置いてきてしまった。

一人で探すしかないか。そこで、俺は注意深く辺りを見回した。

周囲を見回すと、ある一点を中心に人ばかりが出来ている。基本的に若者が多く、中には家族連れもいる。

もしかして、夜の楽しみと関係あるのだろうか？　とりあえず、近付いてみようか。

俺は人だかりに向かい歩き始めた。すると――

「あれ？　生徒会の神代響夜じゃないか？」

男の声が俺の名を呼ぶ。どうやら、人だかりかららしい。

同時に、人だかりから歓喜の叫び声が聞こえ始めた。携帯のシャッター音と共に。

「うそ……本物！　響夜様！」

「マジかよ！　副会長か！」

不味い事になってしまった。俺はただ、夜の楽しみ方を知りたかっただけだ。それなのに、人だかりは俺へ押し寄せてくるではないか。

生徒会に副会長……か。嫌な単語を聞いてしまった。プライベートで来ただけだというのに。

生徒会という名が付いているが、そんなのはただの飾りだ。確かに、表では生徒会としての仕事はしているが。

ただ、実際は輝帝学園――学園という名のX討伐者育成機関だが――に存在する異能者のうち、特に強い九人のみで構成された組織だ。会長を頂点とした、輝帝学園及び神ヶ丘^{リュウヤ}の主戦力。能力者にとって憧れの存在……らしい。

もっとも、らしいというのはマナから聞いた話だが。更に、同世代にとって目標だから、自覚した行動を取って下さいと言われた事もある。

ただ、本人の意思に関係無くなってしまうモノだから、自覚しろという方が不可能だ。俺自身、なりたくてなった訳ではない。気が付けば、副会長になっていた。それだけだ。

だが、有名になりすぎれば、今みたいにファンが集まってしまう。

今更だが、変装をしてくれば良かったか。

俺は、しばらくの間人だかりに身を任せるハメになった。

結局、サインや質問責めに遭ったが、何とか終わったみたいだ。

その代わり、夜に何が起こるかは聞き出せた。

花火とライトアップ、そして着ぐるみのパレードらしい。確かに、パレード以外は夜にしか出来ない事だ。人だかりの正体は、パレードがよく見える場所に集まっただけという事だ。

だが、ここにマナがいないという事は、メインはパレードでなく花火かライトアップの様だ。二つがよく見える場所といえば――

「観覧車か」

俺は観覧車へと歩を進める。いや、進めようとしたが、さっき質問した女の子――多分近い歳か年下だろう――の一人が呼び止める。「そういえば、さっきうわ言の様に名前を呟く男の人が、観覧車の方へ行きましたよ」

「そいつは、俺と何か関係があるのか？」

少女は自信無さそうに頷き、続けてゆっくりと口を開く。

「確か、アリシア、エリス……だったと思います。他には、カオル先輩、マナちゃんの名前をうわ言の様に言った後、響夜さんを探――」

「ありがとう」

焦りで暴走しそうになる。そんな気を抑えるのが精一杯だ。マナの名前を聞いた瞬間、俺の体は獣に連なる者へと変化する。

衝動を理性で押さえ込む。怪訝な顔で俺を見送る少女に、その一切を気取られまいと踵を返して足を踏み出す。まだまだ神代響夜。まだ早い。

他人にそれを見せるな。知られていいほど、お前のそれは清浄な物じゃない。

自分の中では、その足の運びは年老いた老婆を思わせるほど鈍い。

だが、少女にとって見れば、まるで短距離に特化したスプリンター。そう見えるに違いない。

痛いほどの好奇と羨望に満ちた視線。それらを背中に感じながら、俺は観覧車へと向かう通路の植え込みを曲がる。

気配が途切れた。

地を蹴る足の裏で何かが爆ぜる。体が勢い余ってつんのめる。それを支えるために、踏み出した足の裏で再び何か。繰り返される気の暴走は、俺の体を尋常ならざる影へと塗り替えていく。

カオルやマナの名を口にして俺を捜している男。正体不明の存在が、俺の心の何処かに引っかかる。そして、鼓膜が痛くなるほどの警鐘を鳴らしている。

偶然であってくれればいいと、俺の中から声がする。

だが、その声を聞けば聞くほど、今日起こった事の全ての事象。それらのベクトルがその存在に集約していく様な気がしてならない。本来夜陰に紛れてでしか出没出来ない筈のXが何故昼間に、それも俺の家に現れた。俺と互角の力を持ったカオルが何故あそこで倒れていた。

カオルがやられるのなら、俺もやられておかしくない。

だが、進化前のXが束になって掛かってきても、そんな事は有り得ない。俺達は『そういう風』に出来ている。

では、逆に考えよう。俺達がやられる条件とは一体何だろう。何だ、簡単じゃないか。

『進化』を終えたXが束になって掛かって来た時か、あるいは——その可能性は、俺の防衛本能を刺激した。全身を凍気が包み込み、首筋が刺すように痛む。

——俺が守らなければならない者を狙ってきたのか。遂に、奴等は——

俺とカオルの抹殺は、あくまで目的に達するまでの過程に過ぎない。奴らの真の目的は——

「目的はマナだ」

その宝物の名前。同時に脳裏に浮かび上がる七体の名。

もし男がその内の一人であったならば、俺は自分の死と向き合う事になるだろう。

決死の奔流は、闇と共に俺の心に忍び込む。その運命を紡ぐ様に、聳え立つ巨大な系車。それは、ほんの目の前に迫っていた。

遊園地の中で観覧車というのは、一番のランドマークだ。

敷地内のどの位置からでも見つける事が出来るし、夜空を背景にライトアップされた巨大な転輪が動く様。それだけで、何か夢幻めいた物を人の心に忍び込ませる。目的の有る無しに関わらず、人が無意識に足を向けてしまうアトラクション。俺が向かおうとしている場所は、そういう場所だった、筈だ。

既に、その異変は遙か手前で感知している。人の領域を能力で超えた俺の足。それを緩やかに止めたのは、自らが持つ戦闘体験の積算による経験による物だった。

人いきれ、ざわめき、影、におい。およそ有機物の発するそれらの生の証が、俺の知覚には全く感じられない。

胸倉を掴まれる様な恐怖に襲われ、俺は周囲を見回した。マナとミシエル。二人の身内の姿を追い求める俺の眼は、自然と頭上でぎしぎしと音を立てる観覧車に向けられる。それぞれのバケットにそれぞれの思いを乗せ、十分足らずの空の旅を満喫できる筈の機械。それが今の俺には、運命の輪の様に見えた。

「どこだ、マナ」

聳え立つ魔空の車輪を見上げながら、弧虚の地にただ一人。心の底の焦りが、言葉を借りて外へと漏れ出した瞬間。それを伝って、俺の心にねじ込まれる何かがあった。

言葉でもなく気配でもなく、ただ圧倒的な何かを予感させる不穏な波。人の世界に存在する全ての言語で、『不気味』と言う単語を羅列しても尚、単語を蹴っ飛ばしてそれ以上の意味の記載を求めるような、何か。

“何だ、これは”

人外の世界に生きる俺の知覚は、その正体を魔力だと教える。だが、記憶はその判断を嘘だと叫ぶ。自身の分析能力が破綻をきたすほど。様々な色を湛えたそれは、世界のあらゆる感情が流れ込んで来る様に様々で、光に満ちている。

取り囲まれる俺の体は、恐らく魔力らしき物の渦の真っ只中に立っている。拮抗する力の本流が齎す無風地帯。天を仰げば、自分の真上には一点の曇りもない星達が瞬き、遙か高みで人たる響夜の姿を静かに見守り続ける。

だが、それは決して逃れる事の出来ない惨劇の予兆に過ぎない。その晴れを作り出した膨大な闇は、取り込んだものの全てを粉々にして、存在すらも抹消しようという負の気配に満ちている。

未知の恐怖、未曾有の戦慄。俺の中で小さな音がして『マナ』の名前が消え去った。

膨大な魔力の渦は、俺の体を避ける様にして移動した。大きく広がっていた魔力が、その面積を縮小し勢力の半径を縮めようとしている。

だが、それで魔力の総量が減った訳ではない。凝縮された魔力はその出口を上下に求めて御柱の先端を天上高くさし伸ばした。

竜巻の発生の工程を俺の眼前で具現化したその魔力は、自分の正体が俺に仇為す物だと言う事。それを、対峙したまま動きを止めた俺に向かって知らしめる。そして、そんな事をわざわざ教えらるまでも無く、俺自身の安全装置は次々と解除の方向へと向かっていった。

体の中で止められていたスナップが、一つずつ順番に外されていくイメージ。外れていく毎に、自分の内部で何かが膨れ上がり、次第に渦を巻いて全身を駆け巡る。その姿は、眼には見えなくても、自分の目の前に存在している竜巻。それと何ら遜色の無い禍々しさを秘めている。

灰色に染まり始めた目の前の竜巻は、俺の体の内部の異変を感じたかの様に変化を始めた。休止画面のテレビの様な砂嵐の向こうに、透けて見え始める影。俺の眼が影を捉え、その正体を口走った。「人型、とはな」

なるほど、と俺は納得する。

どうやら、今まで戦ったXとは訳が違うようだ。化生や物の怪の類ではない、明らかに、自分と同等の能力又はそれ以上の力を誇る、化け物。

型や目方が大きければ、強いと言う物ではない。Xの強さとは、その物が御せる魔力の総量による。例えるならば、大量の水をむやみに岩に叩きつけても壊れないが、その水を集積して一点に集めれば岩を断つ力を発揮する。いかに自分の力を操って、相手に効率よくぶつける事が出来るか。それが強さを図る目安となる。

俺の目の前に姿を現そうとしている人型の化け物は、その要点を十二分に満たしている。加えてこの魔力量だ。

恐らく、その力たるや俺が今までであつた事の無い位の――

「いや、違うな。……俺は、会つた事が――」

ある。それも三回も。

過去に出会つた『七つの大罪』。――似ている。

その一人、ミハエルの魔力とは全然違うが、似ている。

皮膚を耑り取り、肉を裂き内臓を千切り取って骨を握り潰す。そんな感覚。

人ならば瞬時に悶死しかねない瘴気の烈風を睨む。そんな俺の中で恐怖が花を咲かせ、その花を瞬時に握り潰すもう一人の俺がいる。退魔士としての俺は、剥き出しになつたその自分に全てを預け、死すらも他人事にする究極の博打に専念する事に決めた。

頭の心に、火が点いていく。その熱は、じんわりと全身へと波及する。全身の細胞が暴れだし、DNA^{レベル}単位でダンスを踊る。

当たり前だ。

負ければそれは即ち自身の死。勝てば至上の喜びを得られる。そ

んな一発勝負に、心躍らせる事の出来ない退魔士などただの臆病者だ。そんな奴は、とうの昔に墓の下。形も残さず、微生物の餌に成り下がっているに違いない。

俺はその悉くに、生き残って今ここにいるのだから。

「来る」

魔力の渦が孕んだ殺気を知覚した、俺の眩きがそのまま奴の引き金になる。竜巻から枝分かれた旋風の触手は、何条にも絡み付いて俺の方へと向かってくる。認識、そして行動。

頭で考えるよりも早く、俺の能力は作動した。

全身の力を両足に込めて踏ん張り、そこに渦を収束する。能力が重力に作用し、思いのままに操る事の出来る重力操作グラビティシフトに変化するまで一瞬。この程度の攻撃で排除する事は不可能だと、奴が認識するまで瞬き一回の間。

「まさかこれでこの辺の人払いをしたんじゃないだろうな？」

触手が砕けたその後で尋ねた俺に向かい、渦の影から微かな含み笑いが聞こえる。それを肯定だと受け取った俺には、もう迷いはない。

奴はX。それも人に危害を加える意思のある。退魔士にとって狩るべき対象。

「白夜、現界」

星の煌きを右手に集めて現れる一筋。やがてそれは、輪郭を為し形を現す。そして、身幅の細い一振りの刀へと変化する。浮き出す波紋すらも、煮え立つ様な揺らぎを湛えた白夜の柄。それを俺の手が吸い込まれる様に握り締めて、八双の位置に置く。地面を照らす白夜の光が、魔天の車輪の光を凌駕して地面を照らす。

既に奴を取り巻いていた竜巻は薄れ、体の輪郭をぼんやりと俺に見せ付ける。

両手を腰に当て、いや恐らくポケットにでも手を突っ込んでいるのだろ。こちらを見ながら、ニヤリと剥きだしになった歯の白さだけが、やけに俺の勘に触る。

だが、まあいい。

どちらにしても奴の力が強大な事には変わりが無い。ならばこちらを侮っている内に――

先手必勝。

足に集めていた重力を一瞬にして反転し爆発させる。世界が変わる。奴を頂点にした三角形。それを一気に消滅させる零距离へと。流れる景色は、既に俺の認識を超えた。その景色を切り裂く様に、三角形の頂点へと振り上げられる白夜の光跡。決殺の胡弓。

バン、と言う炸裂音。白夜が、止まる。

有り得ない、と俺は思う。そんな、バカな。

「……たたく、あぶねえ野郎だな。ここいら辺じゃ、辻斬りがトレンドなのか？ いっきなり斬り付けて来やがっておっかねえな、オイ」

奴の握った拳銃のトリガーリングが、寸分違わず白夜の刃を受け止めている。驚愕する俺の表情を揶揄する様に、未だに白い歯を見せる男がとばけた口調で言った。

フォトンチェンソー

白夜の切れ味の原理は光子鋸。つまり、光の粒子が刃の形に高速回転する事によって生み出される。ナノミクロンの剃刀だ。更に、対衝撃力を補完する為に、不可視の振動を絶えず伴う“光で出来た千子村正”。

光が干渉する全ての事象に対し、絶対的な力を行使して自由自在に断ち切る事が出来る。俺が知る限りでは、回避不能な武器だと俺自身は信じ切っていた。

だが、その刃の通用しなかった初めての奴がここにいる。

俺をからかう様に見つめるその顔には、満面の余裕と胸が悪くなる様な嘲笑。拮抗する力は互角。神すらも断てると信じた白夜の光は奴のトリガーリングに阻まれたまま、傷一つ付けられずに立ち往生している。

全身の神経が過負荷を起こし煙を上げるまで、能力の放出を高める。そんな俺の目に、光度を増した白夜の光が奴の姿を照らし出し

た。

アビーショットのジェノバトレンチに、コンフュージョンのパンツとは洒落が利いている。簡単に言うなら、パンクファッションのマトリックスか。

だが、あの映画の主人公は黒髪だったが、こいつは違う。オールバックに固めた金髪と同じ色に輝く双眸。とがった顎に、透き通る様な肌の色が妙に生々しく、しかも不気味ですらある。

太陽を覗き込む黒猫の様な目で、俺を見下ろした男。ワンダーランドの住人よろしく、俺に向かって尋ねてくる。

「無駄だつて。お前の力は俺に通用しねえ。それよりも質問に答えるよ。一体どういう理由で、善良な市民に斬りかかって来たんだ。辻斬り君？」

「善良な、市民？ この世界に来て間もない貴様がか？」

腹立たしさや苛立ちを押さえながら、奴に向かってカマを掛ける。気持ちの揺らぎは、白夜の切れ味に直結する。

ここで、動揺する訳にはいかなかった。動揺すれば、拮抗した力のバランスは一気に崩れ、奴に押し切られてしまふに違いない。

「遣つて来て間もない貴様に教えてやる。この世界には、銃や刀を人前でむやみに振り回しちやいけないって法律があるんだ。善良だと自分自身を主張するなら、先ず法の遵守を心に誓え」

「銃や——」

意外そうな顔で、自分の銃と接する俺の白夜を見比べて——

「——刀？ お前、自分で言つておかしくないか？ その言葉、そつくりそのまま熨斗付けて返してやつてもいいんだがな」

そう言つと、奴の手に力が籠つたのが白夜を通じて俺に伝わってくる。鬨ぎ合いに敗れた白夜と俺は、奴の片手に簡単に弾き返された。それ以上の追い討ちを避ける為に俺は間合いぎりぎりの距離まで飛びずさる。

「まあ、この世界にそんな決まりがあるとは知らなかったと認めてやるよ。だがな、いきなり斬りかかって来た相手に、はいそうです

かと殺られる訳にもいかないだろう。右の頬を叩かれたら、即座に撃ち殺す主義なんでね、俺は」

銃把を上げて、小首を傾げてにやりと笑う。スライドに細かなグルービングが施された大砲が、光をあたりに撒き散らす。

「そういうお前はどうかんだ？　まさか、この世界には辻斬りOKってな法でもあるのか、ええ？」

「俺は法の番人——いや違うな、人じゃない。」

言葉戦でも一歩も引けを取らない。奴の態度に、俺はある意味感心した。なるほど、どうやら俺の見立て通り場数が違う。寧ろ、この状況を楽しんでさえいる奴の嘲いを睨みつつ俺は言った。

「番犬だ。……貴様らを狩る為だけに存在する。唯の、な」

面白い。

体が熱い。渦巻く熱は、俺の細胞を隅々まで焦がして玩^{もてあそ}んでいる様だ。その熱りは、俺の顔を知らず知らずの内に狂犬の面に作り変える。

ぶん投げても壊れないオモチャを与えられた幼子の様に、縊れば直ぐに死ぬ生き物を与えられた子供の様に。

愉快だ。

俺との戦いに恐怖しない者が、生徒会の他にもいた。今の俺に向かって口答える奴が、リュウヤとカオル以外にいた。

強者の理論。壇上に立つて、自己の正当性を高らかに謳い上げる偽善者。仮面を被った悪魔が、俺の親友達と同列に立っている事は気に食わない。

だが、とにかくそうだと仮定するならば、奴は間違いなく強い。ならば、と俺は思う。その雛壇の骨組みが、唯の竹ひこで出来ている事を奴の体に教えてやる。

「どうやら、いろいろ知っている様だな。こここの所、親友から借りてる家に、頼んでもいない訪問者が多くてな。結構イライラしてた所だ」

「ほっ？」

にやりと笑っているが、奴の眼は真剣だ。どうやらこっちの意図を察したらしい。だが、俺の放った微かな殺気を受け止めて飲み込んで、更に煽るような口調で奴が俺に尋ねてくる。

「それはさぞ大変だっただろう。いきなり得体の知れないバイクの化け物とかが、束になって押し寄せて来たら……なあ？ マナちゃんにぞっこんラブの、シスコン神代響夜君」

名指しで俺が一瞬だけ動揺する中、続けて奴が口を開く。

「まああの美貌とプロポーションじゃあ、兄貴と言えども墜ちるわなあ。俺に言わせりゃ、やってないだけ立派なもんだ。いやいや大した男だ。俺にやってもマネ出来ねえ——」

「口を閉じてろ、下衆野郎」

マナの名まで出して俺を挑発するとは、賢しいにも程がある。それが奴の手だとしたら、悔しいが成功した事になる。俺の動揺は白夜の光を僅かに濁らせ、それを目にした奴の顔が嬉々として歪んだ。俺は小さく呼吸を繰り返し気を整える。俺の中の炎を消そうとした動揺を体の外へと追い出し、再び奴の顔を睨み付ける。輝きを取り戻した白夜が、今度は小さな唸りを上げて俺の手を震えさせた。俺の意思が伝わった証拠だ。

「どうやら貴様に用事が無くても、俺の方が貴様に用事が出来た様だ……貴様の知っている一切合財、この場で全部喋って貰うぞ」

小細工は無しだ。白夜の切っ先を正眼に置き、奴のにやけた顔を光で隠す。すると奴は、突然大音声で俺に向かって叫び始めた。

それは、まるで孤高の賢狼。大地の芯も震撼させる低周波と共に、導き出される名望の旋律。そして、畏怖すら感じさせる脅威の戦慄。「面白えっ、神代響夜！ お前のその薄っぺらいダンビラで一体何が出来なのか俺に見せてみる！ 出来るもんならなあっ！」

咆哮は奴の殺気を四散させ、狂喜の感情だけを置き去りにした。

即ち、隙且つ勝機。

俺は軸足の筋肉を炸裂させ、一気に殺し間に詰め寄る。刺突の動きは構えを変えない為、相手には距離が掴みにくい。

普通のXならば確実に仕留める事の出来る技だ。だが、恐らく奴の命に届かせるには少し足りないだろう。実際、至近に近づいた奴の目は、確実に白夜の切っ先を追っている。

踏み出した足に能力を注ぎ込み、重力を一瞬にして上昇させる。急停止を余儀なくされた俺の上半身が、慣性に従って前のめりになった。その瞬間、全身の筋肉に捻りを加え、直線的に働いていたベクトルを旋回力へと転換し白夜で一気に薙ぎ斬る。奴の目には、一瞬にして姿の消えた俺を見つける前に、白夜の刃が駆け抜けると言う寸法だ。

さっきの出会い頭の一撃とは違い、今度の技は完全に相手の予想を裏切る形で放たれた斬撃だ。少なくとも、ピンポイントで防御出来る筈の無い奇襲のハズだった。だが、俺の予想は甘かった。

猛烈な炸裂音と共に、繰り返された既視感^{デジャビュ}。奴の手の中にある砲台は、重厚を感じさせない俊敏さで、またもや白夜の刃を遮った。

「まったく、侘び寂び分かんねえ野郎だな、お前はっ！」

トリガーリングで飛び散った火花が、俺の視線を引き付ける。眼を奪われた事が、俺自身への窮地へとそのまま変化した。手首を返して白夜の刀身を受け流した奴は、そのままの勢いで巨大な銃口を真っ直ぐ俺の顔へと向ける。

狙いを付ける必要も無い、至近距離で打ち出される、鉛弾に似た何か。閃光^{フラッシュ}のカテゴリーを越えた圧倒的な銃口^{マズルフラスト}爆発が、俺の顔面に向かつて吐き出される。

音速以上の初速を誇る。その銃弾が、俺に届くまで人の時計では測れない。だが、極限にまで高められた俺の戦闘意欲が、その動きを可能にする。勝利を確信し、下卑た笑みを浮かべた奴の顔が、見る見る失望と驚愕に塗り替えられていく様。それを俺は、砲火の下から伺い見る。

「何だよ、その避け方あッ！」

銃と言う兵器は、人の反射速度を超える速度によって攻撃する事に意味がある。

言葉を返せば、それを凌駕してしまうと、銃の持つ攻撃力は銃弾の進路上にある物にしか被害を及ぼさない。俺が使役する白夜に比べれば、実に自由度の狭い不便な武器だと言えよう。

そんな軽口を返しつつ俺は、倒れつつも左手をバネに宙へと跳ね上がる。そして、地面に降り立つと再び白夜を両手で構えた。

予め相手の撃つタイミングさえ予想出来れば、躲わす事は容易い。そして、その予想は僅かな観察で為しえる。引き金を引く人差し指が白くなった瞬間、銃口から体をずらせばいい。たとえ、その距離が零距离であったとしても、だ。

踏み出した足の重みを利用し、上半身を反らせて火線避ける。体幹の確かさと柔軟性。そして、曰ごろの鍛錬と経験値の為せる技だ。

「今のお前の動きを見たら、お前を教えている物理の先生はさぞや嘆く事だろうぜ。河合塾の模試でも、お前は赤点確定だ！」

「馴れ馴れしく人の世界に干渉するな。^{バケモノ}Xのくせに。それに——」
地面すれすれに置かれた白夜を一気に振り上げ、奴の顎を狙う。

「非常識はお互い様だ——消えろっ」

囷の一撃。相手の動きを制限し、次の攻撃を確実に決める為の誘導。もし上体を反らせば、視線を切った奴が次の攻撃に移るより、こちらが白夜を振るう方が早い。再度銃で受け止められても、その時には奴の手は塞がっている。今度はさっきの様に、力を受け流す事は出来ない。

人の体は構造上、左右の動きに対する自由度の範囲は大きいが、上下に対する自由が少ない。人の体と関節を持ってしまった、奴のミスだ。

一直線に伸びる光は、迷わず奴の顎へ尖ったアッパーカットを繰り出す。どちらの手段を選択しても、俺の優位を疑わなかった。そんな俺の意識が、奴の選択した第三の手段を眼にして愕然とした。

白夜の刃を……掌底で——跳ね飛ばす、だと。
「驕ったな。あばよボウズ」

至近を通り過ぎる白夜の光に照らされた、奴の顔が狂喜に塗れる。今生の別れの応酬が、何時になったら結果を出すのかと言う事をふと考える。

だが、今の自分の置かれた状況は、明らかに敵の言葉を不当に再現する。それだけの説得力を持っていた。

黒曜の天蓋を埋め尽くす様に、俺の視界に侵入する死と言う名の銃口。俺である為の全ての物を吹き飛ばし、勝利の凱歌を上げる。そんな目的を胸にあられもなく本性を現した。

男が引き金を引くだけで、その大砲は俺の顔をめちゃめちゃにするだろう。吐き出す炎が、俺の頭を貫通して地面を焦がすイメージ。そして、俺がそれを躲す為のスペースは、あと二十センチも無い。あらぬ方向へと切っ先を飛ばす白夜を強引に手元へ。重量の掛かった右手に、真逆の力を加えた事で聞こえる表層筋繊維の断裂音。プチプチと言う音を焼き焦がす様。その瞬間、男の大砲が火を噴いた。

刃は間に合わない、ならば。

柄だけを俺の眼前に挿し翳して炎の進路を防ぐ。紛れて奔る本命を弾き飛ばす為に、俺は全ての力を白夜に込めた。炎に負けない白光の輝きが、闇を飲み込んで世界に輪郭を与える。

衝撃、火花、轟音。発生する順番など意味が無い。全てが一緒にたになって消散した瞬間、俺は戦闘の継続を確信する。決殺の一撃ですらも回避した。そんな俺の顔を奴は下卑た憤怒で睨み付けた。

「この、クソガキが！」

声になる一瞬の隙こそが、俺にとっての生命線だ。白銀の巨大なリボルバーが動き、次弾を銃口と撃鉄の間へと導いていく。再度の殺意を込めて放つ為に引き絞る指の動き。それが、今の俺にはひとくのろまに見える。

奴が悔し紛れに放った弾が地面を穿つ頃、俺の体は全身の発条を使って殺し間から離脱していた。

銃口を地面に向けたままで俺の影を追っていた奴が、ニタリと嗤

って呟いた。

「齒こたえありすぎて、正直ム力つくぜえ、神代響夜」

「銃で俺を殺れるとでも思っていたのか？ 残念だな、そんな物が通用するほど退魔業は楽じゃない」

再び取った間合いを計る様に、俺は白夜を正眼に置いた。奴の姿勢が変わっている。

両手をぶらぶらと銃の重みで遊ばせながら、猫背になって顔突き出す。瞳の奥で燃え上がる穢れた炎は、血に飢えた肉食獣の匂いを放つ。だが、その理性が途切れる事はない。明らかな殺意を秘めて対峙する奴の声が狂声を交えて俺に叩きつけられた。

「面白くなってきたなあ、おい。次はどんな手品で俺を楽しませてくれるんだ？」

ジリツと。俺を中心に回り始める奴の足。その一步が俺の間合いに踏み込む事は、今は無い。白夜の切っ先が、奴の体に向けられている限りは。焦燥交じりの攻撃は、痛烈なカウンターとなり跳ね返ってくる。その事を理解したのだ。

今の局面を打開する何らかの策を奴は持たない。奴が取った行動は恐らく、『観察』に近い意味を持っているのだろう。

ならば、見せてやる。

これで――終わりだ。

「――光、あれ――」

神が最初に世界に向けて告げた言葉、ヘブライの禁呪。

白夜の表面に現れるトライバルメッセージ。光を侵食する黒い文様が、刃を闇に消し飛ばす。柄を駆け上がる黒い茨が、握り締めた俺の手に絡まる。そして、生命力とも呼べる魔力の本流へと触手を伸ばしていく。

突き刺さる痛みと共に、弾け飛びリミッター。吐き出される暗黒の獅子。咆哮が血流と共に体内を循環し、再び右手に出口を求めて殺到する。指の股を引き裂き溢れ出す力の塊。毛穴から蒸発する殺意の焰。

再構成が始まる。

闇より冥き漆黒の恐怖。白夜を凌ぐ身幅と刀身は神の心臓に届くほど。盛り上がった鎬を元に、左右に伸びる諸刃の刃金。俺の手に握られし怪物が、滅ぼすべき闇を求めて揺らぎ輝く。巨大な大刀を操る為に伸びる長巻の柄を、俺の手が無意識の内に握り締めて重力に逆らう。

「……極夜、顕現」

その長巻に重みなどない。同じ間合いを取っていた奴の喉下に、突き付ける切っ先は白夜の様。だが、性質の異なつた猛烈な殺意の息吹を奴へと叩きつける。

奴の足は止まった。

「この刀を俺が使つ以上、お前に勝ち目は無い」

「勝ち目？ ……勝ち目、ねえ——」

呟いた奴の目が、じつくりと極夜の切っ先を見つめる。瞳を焦がした獣の炎は影を潜め、突き付けられた事実を品定めでもするかの様。虹彩を煌かせ、極夜の長大な刀身を追う。

「……なるほど、業物だな。手前が威張りくさつて言うだけの事はある。だが——」

言葉を切つた奴の顔が歪む。口角を吊り上げて嗤う顔。それには再び、余裕綽々で人を見下すあの忌々しい表情が浮かび上がった。

「——随分と懐かしいモノを出してくれたじゃないか。俺の記憶が間違っていないければ、そいつはミシエルの奴に無理矢理押し付けたハズなんだが。……この剣が何故ここにあるかは、正直どうでも良いが」

俺は奴が独り言の様な呟きに、思わず思考が停止する。ミシエルに預けた。奴は、この剣やミシエルについて知っているらしい。

ストームリンガー フラガラック
「混沌の剣、アンサラー……それすらも凌ぐ極夜か」

奴は一度言葉を切ると、面倒臭そうに右手を振る。

「まあ、今のテメエが扱い切れる類の魔剣じゃあねえよなあ？ 悪いことは言わねえ、止めとけ止めとけ。身の程知らずなテメエが使

うと、後でロクな事になりやしねえぞ」

「減らず口ともここでお別れだ」

奴に訪れる未来を予見して、その台詞と共に響夜を上段に翳す。示現流に示される一の太刀の構えを取った俺の心中は、しかして奴の言葉に驚きを隠せない。

奴が引き合いとして出した二つの魔剣。混沌の剣は、その見た目が極夜と寸分違わぬ巨大な黒剣。しかし、極夜の性格は奴が後述したアンサラーに近い。周辺全ての存在に対して即座に反応して殲滅するまで攻防を続ける、制御不能の最終形態。

だが、幸運な事に今俺の周りにいる存在は奴のみ。そして奴を倒しさえすれば極夜はその好奇心を失って元の形態——白夜へと戻る。故に、俺は極夜を選んだ。白夜では拮抗し続けるしかない戦局も、この極夜ならば打開できる筈だ。

「忠告はしたぜ？ 言っても判んねえ餓鬼には——」

極夜の放つ殺意の塊に眼を細めた男が嗤い顔を収めて銃を構えた。「——お仕置きが必要だな」

連弾の轟音と共に弾ける炎が、俺の体目掛けて吐き出された。

回転式拳銃特有のアクションと共に、銃口から死という名の炎が吐き出されていく。

奴の大砲のレンコンが物理法則を無視して動作する。発砲に遅れて回転が始まり再装填を行う。そんな筈の全ての段取りがキャンセルされ、吐き出された六発の弾に似た何か。

時間差で到達するのでなく面による制圧を試みた弾幕は開放された能力によって時の単位を引き伸ばした俺の感覚ですらも嘲笑う様に、一息で俺の間合いへと突進する。

俺の力の度合いを観察し、演算され尽くした角度で放たれた殺意の螺旋。それは、体術やベクトル置換などと言う子供騙しでは躲し切れないと分かる位に、見事な直線を描いて俺の元へと殺到した。

恐怖に競りあがり、胃袋と込み上げて来る胃液が俺の喉の奥を焦がす。一敗地に塗れる事が、確実に感じる奴の攻撃を迎撃する手段

が俺には無い。

だが、俺の意識が落日間近の地平の上を歩みだそうとした瞬間に、蜻蛉の位置に置かれた極夜は猿叫えんきょう紛いの刃鳴りを轟かせて刀身を消した。

闇に紛れる黒い刃先が、次々に奴の殺意を捉える。柄を握った俺の手を肩関節に至るまで支配して、主の怨敵を斬り飛ばす。その正体が一体何であつたのかを俺が知るより早く、現界を許された極夜は生殺与奪の欺瞞に満ちた奴の攻撃を無効化した。

「言つた筈だ、お前に——」

俺の声を聴き取つたかの様に、極夜の刃が闇の中に浮かび上がる。飼い主の意思を汲み取つた忠実な『黒犬』サーベラスが、咆哮を挙げて砕け散つた。割れる刃その全てが巨大な牙の様に研ぎ澄まされて、奴の放つた弾丸の光跡を遡つて進む。

「勝ち目は無い、と！」

俺に向けた殺意と同等の物が、形を変えて奴の下へと襲い掛かる。片眉を上げて怪訝な顔で、撃ち広げられた六本の牙が自分の体を穿つ為だけに差し迫る光景を立ち尽くしたままで待ち受ける奴の顔が奇妙に歪む。それが奴なりの絶望を表す不器用極まりない表現方法だと納得した俺は、存在すらも不愉快に感じるその存在の全てを切り刻んで大地の肥しにするよう極夜に命じた。

大気と言つ不純物を切り裂いて、一目散に飛び掛る魔剣の牙がその一点に集中して強烈な刺突の手応えを俺の体全体に告知する。

約束は違えない、未来は変えられない。俺自身が信じて止まない俺の力の発露の末に得た真実の顛末を確信した俺は、その瞬間に過ちを犯した。

そう、俺は奴の力を甘く見すぎていた。まるでペルセポネが手にしたソップの如く。

極夜が長巻の形をしているのは白夜からの形状を受け継いでいるからに過ぎない。第一形態の白夜が純粹に刀としての機能に特化しているのに比べて、最終形態とも言える極夜はその形状を限定しな

い。用途目標的に応じて自在に刃の形状を変化させ、任務を遂げる変幻自在の魔剣だ。

近接戦闘で成果が得られない事は、白夜の時に与えられた記憶を受け継いで理解している。故に極夜は、相手の最大の攻撃を防御した瞬間に訪れる寸暇の隙を突いて、中距離からの遠隔攻撃に自らの意思で切り替えたのだ。

奴が極夜を評して『アンサラ^{フラガラック}』と呼んだのは、極夜が嘗ての魔剣と同様に独立思考で攻撃すると言う事を知っていたから。

だが、知っていた所で、奴が極夜に勝る事は有り得ない。それ故に、極夜の読み通りに隙を作った奴は、極夜の戦術に引きずり込まれた拳句に刃の錆と化した。

奴の能力が相手との駆け引きに長けていた事は、疑いも無い事実。だが、それも人相手の事。課せられた目的を遂行する事のみを目的とした魔剣相手にそんな物が通用する筈が無い。

結局奴は、自らの傲慢によって、有り余る力を発揮できないまま極夜の刃に切り刻まれる羽目になった。それこそ本当の自業自得だ。「驕っていたのはどうやらお前の方だったようだ——」

勝者の余韻に浸って呟いたその言葉こそが、俺の驕りだったのかも知れない。必要以上に弛緩した緊張がその異変を感じ取った時、無意識の内に全身の筋肉が硬直した。

「——極、夜？」

敵を滅したのなら、任務を終えた極夜の形状は白夜へと速やかに変化する。だが俺の手の中で震える黒い長巻は、何かに怯えるかのように刀身を悶絶させた。

猛り狂う大波の様に、或いは制動器の壊れた重機の様に押し引きを繰り返す。その切っ先は、塵散りに刻んだ筈の奴の掌の上で引き付けられる様に止まっている。

「俺に得物を捨てさせた奴は随分と久しぶりだ。自慢していいぜ、神代響夜」

俺に向かって突き出された、掌にぽっかりと開いた黒い穴。繰り返

出された極夜の牙の全てが、その穴に向かって引き付けられていた。「……但しお前がそれを友達に自慢できるのはもつとずーっと先の話だ。みんなが来るのを一人ぼっちで待ってる、賽の河原の向こう岸でな」

奴の顔が大きく崩れた。怒りと嗤いを伴なった狂笑で捻じ上がった唇から発する、冥府の死者を思わせる野太い声が発動のトリガーとなる。

「なあ、知ってるか？ 黄泉の国つてのは、居心地が良いらしいぜ。もつとも——行ったら最後、二度と帰れない片道切符の旅という意味だけだなア！」

叫びの終了と共に奴の掌が消失した。いや、消失した様に見えて実はそうではない。掌に開いた闇の門は大きく拡大して現世の空間へと干渉を始めた。魔口より吐き出された黄泉の茨が極夜の刃に巻き付いて、圧倒的な力で極夜の魔力を引き千切る。

一瞬にして、一瞬にしてその魔力の全てを飲み込まれた極夜が、地球という惑星の重力の恩恵を与えられ、見た目通りの重みを俺の手に伝える。そうなれば俺の手はこの長巻を支えきる事はできない、手から零れ落ちた極大の黒剣は大きな音を立ててアスファルトの地面に転がり落ちた。

足元に転がった俺の力の全てをまるで悪夢の中の出来事であるかの様にただ呆然と見つめる俺の意識。輪郭すら感じられなくなった俺の存在に止めを刺す様に、俺の間近で奴の声が響いた。

「さあ、やろうぜ。ここからはガチの素手喧嘩勝負だ。」

魂の尾を切られるかと思うほどの殺気に溢れた奴の声に、俺は足元の極夜から視線を上げる。目の前で官能的な笑みを浮かべた奴の顔を俺の視覚が捉えたのは、その一瞬が最後だった。

そこにいるのは残像だ、と俺の知覚が叫びを上げる。

だが、俺の体は本能の導きに従って、極夜を手放した右手をそれに目掛けて繰り出した。勿論闇雲などとは程遠い、渾身の力と速度を加味した一撃必殺の上段突き。当たれば、奴の顎から上は間違い

なく吹き飛んで無様な屍を晒すハズ。

亜音速の拳が、衝撃波を撒き散らす。伝播する波は俺の視界の景色を波立たせて出来損ないの三次元画面に変化する。

拳に押し出される大気の塊が、まるで砲弾の様に奴の顔面に撃ち出される。だが、俺の攻撃の先遣を担ったそれは、奴の顔を——やはり、周囲の景色と同じ物に変化させるだけの効力しか齎さなかった。陽炎の様に消える奴の顔。そして——

グオツとかグアツとか、漫画の吹き出しに描かれた擬音が綺麗に聞こえるほど異様な声が俺の喉から迸る。声にならないのは、それが苦痛に寄る物ではない為。そして、無理やり吐き出された呼気に混じり、どす黒い血液が飛び出した為。俺の服の前身ごろが、あつという間に汚される。

“——右の肺が、潰れた”

肋骨が纏めて四本、一瞬にして持っていかれた。ダメージを喰った瞬間、次の展開を割り出す俺の思考。右側がやられたという事は、奴が俺の目から見て時計回りに移動したと言う事。

“蹴りで、迎え撃つ”

放った拳の反動を利用して体幹を限界まで捻り上げる。

放った拳の反動を利用して、体幹を限界まで捻り上げる。引き絞られた発条が、一気に解き放たれる要領で旋回する俺の右足。インファイトの間合いに奴がいるのならば、絶対に回避不可能な回し蹴りを放って奴に同等のダメージを与える。当たればその瞬間に、手品の解けた奴の実体目掛けて、容赦の無い連弾を浴びせてやる。

だが、俺の脚が一回転もしない内に、次の衝撃が俺の体を突き抜けた。突き抜けたというのは、妥当な表現ではない。何か俺の体内で炸裂したというべきか。

バンと言う音で肝臓が破裂。

ドンと言う音で脾臓が挫滅。

鍛え抜いた筋肉の鎧など、何の役にも立たない。衝撃が貫通して、俺の背骨に細かな輝を入れる。やばい。

幾ら俺でも、背骨が砕ければ立つてられない。全身に散らばった能力の残り滓を掻き集めて、必死で骨格の補強に廻す俺の努力。それを嘲笑う様に、次々と加えられる致命的な衝撃の数々。

神経は断裂して、俺の脳に生命維持不能のシグナルを送る事もできない。動脈静脈毛細血管の末端に至るまで、立て続けに与えられた衝撃が、その根幹にある心臓まで届く。不整脈、心房細動、心不全、拍動停止、パルスの消失。

血液の滞った俺の脳が理解する奴の世界。遡行する時間の中に立つ奴の姿と無様に狩られる俺と言う獲物の姿。

俺の時計の一秒が奴にとっての一分。いや十分か。奴にとっての今の俺。その存在と言う物は、只の肉の塊に過ぎない。

そう言えば昔何かの映画で見た事がある。主人公のボクサーが肉屋の冷凍庫の中で吊るされた牛の半身をサンドバック代わりに叩くシーンを。

あれが、俺か。

腹腔内を満たした血が、俺の腹筋を押し上げる。俺の生命の指標となる全ての血圧が、その一点に集中して外界に飛び出したいと喚き立てる。だが、俺自身は彼らの要求に応える事が既に出来なくなっている。

最後に、奴は俺の背骨へ直に打撃を加えて砕いた。

連結する神経と支え諸共粉碎された俺の体は、まるで軟体動物の様に地面に転がった。仰向けになった俺の目に映る、眩いばかりの天の星々。俺の命を迎え入れようと手を差し伸べる。その光をぼんやりと眺めながら、俺は考えていた。

マナの事を。

最期か、と思う。不思議な事にあれほど自分の命と引き換えに守ろうとしたマナの事を、今は何とも思わない。臓腑を焦がす様な情熱も、脳幹を砕くほど逆上せ上がった決意ですらも消失の一途を辿っている。

これが、死か。

穏やかな物だ。過酷な生い立ちも苛烈な生き様も全て無に帰して、マナの安否すらも案じる事すら出来なくなっていく。ただどこからか流れてくる、穏やかな波に漂うが如く流離う魂の行方を知る事も無く。

だが、俺が身を委ねた安寧を頭上に現れた暗雲がかき乱す。満天の迎光を隠した男の忌々しい顔が、蔑んだ嗤いを携えて俺の視界に現れて言った。

「どうした、ナイト。その体たらくで、保護者気取りとは笑わせるぜ。全然なっちゃいねえぞ、おい」

更なる戦いを焚き付ける様に、こめかみを蹴り上げる奴のつま先。頭蓋が陥没するほどの威力を今の俺は感じられない、物理の法則に従って振り子の様に揺らぐ俺の頭、ぶれる世界。

だが、その瞬間俺の脳裏に微かな炎が点って熱を齎す。それが何なのかは俺にも分からない。奴に負けた事が悔しいのか。それとも、奴の物言いに腹が立つのか。

いや、違う。

奴が俺に向かって唾棄同然に吐き捨てた揶揄の言葉、『騎士^{ナイト}』。

“マナッ！ 俺は——”

感情が激発した瞬間、俺の口から零れだす血反吐が頬を濡らした。体温と同じ温度を持つ、それが作り上げる血溜まりの中で俺の声が夜空に届く。

「……まだ、だ。まだ俺は、やれる——」

「ほう、負けず嫌いも国宝級だな。退魔士つてのはアレか、みんなテメエの様に悪足掻きしながら死んでいくモンなのか？ ま、DMなのもほどほどにしとけて忠告してやらん事もないが——俺は好きだぜ、そういうの」

にやりと笑った奴の手に光る鈍色の輝き。スライドの彫刻が星の光を集めて冷たく俺の目に跳ね返す。

「そういう奴に——」

銃口が俺の腹に向けられる。奴が狙いをつけたそこは、既に蛙の腹の様にはち切れんばかりに膨れ上がっている。

「止めを刺すのが、俺は好きだ」

視界を焦がすマズルブラスト。全身を跳ね上げる衝撃。ぶちまけられる臓腑と共に、撒き散らされる血飛沫が俺の体に、奴の顔に。冷たい痙攣に襲われる俺の顔をしゃがんで覗き込んだ奴が、心から喜びを表しながら俺に尋ねる。

「最期に、一応聞いておこうか。……狩人が、狩られるってのはどんな気分だ？」

血塗れの奴の顔を濁った視界で睨みつけながら、俺は応えた。

「——さい、悪、だ。」

そんな事に、最期の力を使うなんてどうかしてる——と一瞬考えたが、どうしてもそれだけは言って置きたかった。そして、その一言を境に俺の世界が変化する。閉ざされていく世界。失われる感覚、沈んでいく魂。

力が済し崩しに砕けていく刹那の時間を過ごしながら、俺の心は最期の雄叫びを上げ、祈りと呪いを闇に向かって吐き出した。

“——力を！俺に——”

煉獄の沼には底があるのだと、俺は初めて知った。

永遠に沈み込んで何もかもと混ざり合う感覚が途切れ、辿り着いたその底辺には何も無い。だが、見えない掌に触れる感覚が、見えない足の裏に届く感触がその場所の存在を俺に感じさせる。だが——俺が死んだというのなら、ここは世に言う死後の世界か。だが、花畑が無いじゃないか。川が流れてないじゃないか。

そうか、ここは地獄か。

Xと言えども、あれだけの存在を何の慈悲も無く狩り続けて来た俺の事だ。幾らマナに向かってこの命を捧げると声高に誓った所で、相殺されるべき物ではなかったと言う事か。

よるめく足を踏みしめ、俺は闇の中で立ち上がった。不思議な事に、あれだけ痛めつけられた体も元通りである事が分かる。痛みも

無く欠損も無く、明かりの無い新月の世界を何かに誘われる様に歩く。そんな俺の歩みはどこへ向かおうとしているのか。

ダンテの書いた『神曲』にこの世界が由来すると言うのなら、俺が向かう所は間違いなく第七圏『暴力者の地獄』。

裁きの対象は『隣人に対する暴力』か、それとも『神と自然と技術に対する暴力』か。俺の力を自然の業を蔑んだ物と地獄の管理者が汲み取ったとしたら、それも無くはないだろう。どちらにせよ、河に漬けられるか火の粉を浴びるか。酷い責め苦を味わわれる事には違いが無い。

出口を求めて彷徨う俺の足には、ただ冷たい底の感覚しか伝わってこない。とぼとぼと歩を進める俺が、自分の身の置き場の無さにほとほと嫌気が差して来た。その時、不意に暗闇のどこからか物音が聞こえた。

足を止めて周囲を伺う。元通りに聞こえる様になった俺の耳が、ほんの僅かな気配も聞き漏らすまいと精度と指向を最大限に研ぎ澄ませる。あまりの能力の開放に耳鳴りがして、脳の中で出血が起ったような痛みを感じた。その瞬間、再び物音は俺に向かって届いた。

今度は確かな形となつて。

“それでいいのかい？”

覚醒

辺り一面暗闇で覆われた場所。自分の姿も見えない中、俺はゆっくりと意識を集中させる。

ここは――

そうか、俺はあの男に敗れたのか。ならば、ここがあの世。しかも、地獄の様だ。

いや、もう天国か地獄かなんてどうでも良いか。

「本当にどうでも良いの？」

俺の言葉に応えるかの如く、少年の声が響き渡る。過去に何処かで聞いた事がある気がする。だが、何処で聞いたのか解らない。純粹さと同時に、懐かしさも感じられる。そんな不思議な声。

「まだ、やるべき事があるんじゃないの？」

声が静かに問い掛ける。

やるべき事？ 決まってるじゃないか。俺が家族と認める全てを護る事だ。

けど、俺は勝てなかった。認めたくないが、世界は広く俺は狭い。心の底では認めていたのかも知れない。ただ――

「可能性を信じて。まだ眠る力があるでしょ」

声が諭す様に語り掛けてくる。

そんな物があるのか？ けど、今の俺はあまりにも無力だ。骨は砕かれ内臓も潰された。たとえ生きていたとしても、立ち上がる事すら不可能だ。最早、戦う力すら無いからな。

「けど、神器が残ってる。生きている限り消えない武器がね」

その言葉と共に、体の感覚が徐々に蘇る。暗闇の中で俺の体が形成され、俺自身だと認識できる様になる。

右手には何もないが、鼓動が感覚として伝わってくる。俺には解る。全てを破壊しかねない兵器。今まで、マナを傷付けたと忌み嫌ってきた、極夜の息遣いが。

「兵器にするか、護る武器とするかは心次第だよ」

ああ、そうだな。俺は極夜を制御できないと思い込んでいた。それはそうだ。最初から、生きているコイツを力で屈伏させようとする。そんなのはXと変わらないじゃないか。

最初から共存する。何故そんな当たり前の事に気付かなかったのか。極夜は俺を護るために、ずっと戦っていたじゃないか。

「さあ、戦おう」

少年の声がハッキリと聞こえる。そうか、そういう事だったのか。俺は今まで、一人で戦っていた訳じゃなかったんだな。ならば、一緒に戦おう。

「行こう、一緒に」

言葉と共に目を開けると景色が変わっていた。暗闇という事に変わらないが、満天の星が輝いている。背中に硬い感覚。どうやら、戻ってこれたみたいだ。同時に、有り難くない気配が、頭上から漂っている。

「バカな……」

頭上付近には金髪の男が立っていた。それも、驚愕を通り越した表情で凍り付いている。

「言っただろ。極夜を出した時点で、お前は勝てないと」

俺の言葉と同時に極夜の刃が分かれ、俺の全身に突き刺さる。最初は痛みを感じたが、刃は徐々に融解し俺を内側から癒していく。

「てめえの能力は一応知ってるけど……そんな回復技アリかよ！」

奴はそうツッコミつつ、俺の顔面に向けてチョップしようとする。だが、俺は足の跳躍のみで宙へ舞い、逆さのまま奴を手ごと蹴り飛ばす。蹴りは三日月の如く弧を描き、奴の手だけでなく腹部にまで直撃する。

「そんなバカな！」

「ライトニング」

右足に能力を纏うと、微弱な電流が発生する。更に空中から上段

回し蹴り。狙いは顔面ではなく脊髄。電気や蹴り自体は軽めに抑えたとはいえ、スタンガンを直接受ける様な物だ。当たれば間違いなく気絶する。

だが、奴は急に不敵な笑みへと変わる。左手を前に伸ばしながら。「奪い取れ」

俺の足を掴むと、急に能力が解除される。しかも、魔力ごと消失している。俺はそんな違和感に気付き、直ぐ様蹴りで手を振り払う。「成る程、やはり勘は鋭いみたいだな」

言葉と共に、奴の笑みが狂喜へと変わる。こいつ、戦いで逆境を楽しんでいたのか。人間としては、あまり関わりたくないタイプだ。

「デイスペルか」

「いや、無効化した訳じゃないさ。俺の能力はスナッチだからな」成る程。だから奪い取れと言ったのか。恐らく、奴の高速移動は極夜に練り込んだ能力を利用した物。能力を奪い取れるなんて、厄介で嫌らしい能力だな。

だが、同時に嬉しくもある。俺と戦い恐怖しない。しかも、なかなかやられないが、同時に倒せる事も理解した。

そう考えると、嬉しくて笑いが止まらない。

「何が可笑しいんだ？」

奴の笑みが止まる。怪訝そうな顔だが、一瞬だけ恐怖が見えた。幾ら隠しても、誤魔化しようが無い。

「最早、お前は俺に勝てない」

「ほざけ。傷が治って振り出しになっただけじゃないか」

確かにその通りだ。今まで決定打を与えていない。だが、俺は極夜を……そして、自分自身を信じている。お前に勝てると。お前には負けないと。

俺は極夜を左手で構えつつ、星空を指差す。

「俺は常に進化し続けるさ。これからも」

言葉に反応し、極夜の刃が次々と分かれ宙へ舞う。いや、ただ分

かれているだけじゃない。刃が分裂し増えている。

増殖が終わると、刃が俺の両手へと集まっていく。気が付くと、俺の手に二本の剣が握られていた。

「二刀流ってアリかよ！」

「アリだ」

俺は二本になった極夜を交互に振るい進む。最初は、白夜による攻撃が通用しなかった。だが、白夜が進化した極夜。それが二本になったら、同じく銃で防御が可能だろうか。

「ちいっ！」

同じく銃で防ぎつつ撃ってくるが、俺は弾をもう片方で弾きつつ斬撃を浴びせる。同時に奴へ隙が出来るが、俺は攻撃の手を緩めず更に加速させていく。

いや、実際は加速させられている。極夜が二本になって以来ずっと。これが極夜の真の力か。

「不味いな……仕方無い。アレを使うか」

奴は血を吐きつつ、笑みを絶やさず不気味な言葉を発する。今までが全力じゃないというのか。

奴の言葉と同時に、嵐の様な魔力が身体から沸き上がる。

何か不味い。アレを止めると俺の本能が叫んでいる。

「歪め！」

嵐状の魔力が銃へと収束し、男はゆっくりと引き金に指を掛けた。

加速

俺は連続バックステップで離れると、奴の技とやらを相殺すべく極夜に力を込める。

すると、奴は高笑いしつつ銃を俺に向けてくる。

「まあ、倒す前に名乗っておくか。俺はヴォー——」

「どうせ覚えないから名乗らなくていい」

俺は皮肉を込めて奴の言葉を遮る。手でハエを払う様な動作をしながらだ。すると、奴は肩を落としてつつ、そうかいと呟く。

まあ、どうせ殺す気は無いから、気が向いたら聞きに行くさ。

「じゃあ、あの世への片道切符だ。受け取りな！」

奴は一度区切り、不敵に笑う。

「デイストラクト・カノン！」

銃口から黒い弾丸が吐き出される。いや、弾丸ではない。エネルギーすらも取り込み逃さない存在。ブラックホールか。全く、厄介な技を出してくれる。

だが、こつちも二本の極夜に充填が完了した。後は、新必殺技を試すのみだ。頼むから耐えてくれよ。

俺は極夜の刃全てを支配すると、刃は一斉に分離し両足へ集う。

そして刃は、足への衝撃に対する、プロテクターとして覆っていく。

「エクストリーム・ショット」

俺はレイディアント・ショットと同じく飛び、ブラックホールへ空中上段蹴りを当てる。すると、蹴りがブラックホールに負け始め、火花を散らしつつ徐々に押し返していく。

「どうした？ お前の力はこんなものか？」

「いや、まだだ」

俺は危機的状況で笑いつつ、更に上段回し蹴りをお見舞いする。そこから更に何度も当て、回転速度が更に増す。

すると、ブラックホールは後退しつつ、徐々に萎んでいく。

「マジかよ！」

奴は叫ぶが、最早止められないさ。

上段回し蹴りから真横の回転蹴りへシフトする。そこから更に回転速度が増し、遂にはブラックホールを破り竜巻と化していく。奴へまっすぐ突き進みながら。

「畜生！」

速度が増した空中回転蹴り。至近距離なら避ける事は出来ないさ。そう信じていたが、奴に当たる事は無く大きく空振りする。同時に俺は受け流すべく、胴体を横へ回転させる。加速は解除されるが、それでも強い衝撃で地面に叩き付けられる。

「逃がしたか」

一応、半殺しにした後極夜で回復させようと考えていた。だが、逃げられたなら仕方無い。あくまでも、深追いはしない主義だから「さて、マナ達を——」

探すかと言う前に、俺は言葉を止めてしまった。背後から、二つの強大なブレッシャーが押し寄せてきたからだ。

一つは嵐の様な魔力で、間違いなく奴の気配だ。もう一つは知らない。ただ、魔力の強さだけなら、明らかに俺や奴より上だ。たとえるなら吹雪。魔力の余剰部分が俺の肌を突き刺し、殆どの感覚を麻痺させている。

「君強いね」

後ろから暢気そうな女の声がする。強大な魔力の方向から聞こえるが、吹雪の中で木漏れ日が発生する程に異質な穏やかさ。出来れば、敵に回したくない存在だ。

俺は背後へ振り向くと、そこには奴と一人の女がいた。

女は肌が白く目は青色、そしてスタイルが良い。そこまでは、ミシェルを見てるから別に驚かないさ。ただ、髪は桜と全く同じ色をしている。脱色して染めたのかは知らないが、あんな色の髪は見た事がない。

ただ、奴は俺と全く別の驚き方をしている。俺がミシェルに出会

ってしまった時の驚き。あれが一番近い。

「何しやがるアリシア！」

女——アリシアというらしい——に向けて奴が食って掛かる。対するアリシアは、まるで聞こえなかったかの様にサラリという。

「あ、ヴォルフいたんだ」

アリシアの言葉に奴、ヴォルフが何だとは高らかに叫ぶ。まあまあと宥めているが、遠目だと痴話喧嘩にしか見えない。微笑ましい光景だ。

「ゴメンね響夜君。うちの亭主を倒させる訳にはいかなかったから。という訳で見逃してくれない？」

「あ、ああ……」

奴が既婚者という事に驚いた。結婚してるとは思ってたから。ら。

けど、アリシアという女が、わざわざ俺を見逃してくれる事も信じられなかった。何故なら、今の俺くらい一捻り出来そうな魔力だったから。仮に俺が逃がさなくても、実力で倒せただろう。逆に、俺が見逃して貰った気分だ。

「じゃあ、カオルに宜しくね」

「待てアリシア！ まだ決着は……！」

「黙れヴォルフ。アレは貴方の負けでしょ？」

先程までの暢気さから一変し、笑顔のままドスの利いた低く太い声を発する。同時に、俺とヴォルフの表情が瞬時に凍てつく。俺達を交互に見比べると、アリシアは笑顔でうんうんと、何か納得した様に頷き始める。

正直、怒った時のマナより恐ろしくタチが悪い。過去に、外国で野獣のXと何度も戦ってきたが、アレと同等かそれ以上の危険すら感じる。

「じゃ、そういう事でバイバイ」

そう言いつつ手を振ると、アリシアとヴォルフは残像すら残さず消えた。まるで、最初からいなかったかの如く。

同時に、俺は脱力し地面へ倒れ込んだ。久々の強敵。感覚までもがマナやミシエルの影響を受け、平和ボケした当然の結果だ。

さて、力が抜けた身体は動く気配が無い。このまま二人を待つか。そう考え倒れ込んでいると、意外な奴がやって来る。

春風のような穏やかな魔力。病み上がりになぜわざわざ来てくれたのか。すまないなカオル。あと何故……いや、どうやってピアノ力を連れてきた？

まあ、腕の中で大人しくなってるから別に良いが。

「そこで寝てると風邪引くよ？」

カオルは微笑みつつしゃがむ。すると、ピアノ力はカオルの腕から、俺の腹へ飛び乗り丸まったではないか。正直、やや迷惑な気分だ。

「これが寝てると本気で思ってるのか？　というより、怪我人は寝ておくべきだ」

互いに、ジョークを言いつつ笑い合う。心を許した者だからこそ出来る会話。言葉は少ないが、安心も出来る。

俺はカオルへ全てを話すと、カオルは難しそうな表情をする。同時に、悲しさや嬉しさも感じられる。

「そっか、生きてたんだ」

誰に語るでもなく、カオルは空を見上げて呟く。どうやら、アリスアやヴォルフとは知り合いの様だ。

「どういった関係なんだ？」

「響ちゃんやマナちゃん、あと奏ちゃんより付き合いは短いけど……友達？」

何故そこは疑問形なんだ。というより、何故佐賀美奏が数に入っている。そこは敢えて置いておこうか。

それにしても、カオルに俺やマナ、隊の連中及び生徒会以外に友がいたのか。本人には悪いが、カオルって中身に反して見た目が弱そうだから、自分から友が作れないと本気で思っていた。だが、そんな不安はどうやら失礼だったみたいだ。

「あれでも、二人同時に倒した事があるよ」

冗談だろ？ 俺ですら善戦して互角。そこから極夜を進化させたからこそ、引き分け——俺個人は勝ったと思っているが——に持ち込めたんだ。アリシアは更に上。俺と互角のカオルが勝てるハズが無い。

いや、カオルは能力が悪質だから、ハメ技で倒したのかも知れない。どうやら、得手不得手がある様だ。

「とりあえず、アイン・ソフ・アウルを使いこなしたんだ」

「あんなのは使いこなしたうちに入らない」

俺はカオルの言葉で、まるで諦めたかの様に苦笑する。

俺の能力アイン・ソフ・アウル。無限光という名だが、実際は空間に存在する物を粒子化させ支配する能力だ。正直、あの能力に果てがあるのかすら怪しい。

だが、ヴォルフと戦い目指すべき方向が見付かった。多分、まだ強くなれる。そして、先に立ちほだからであろう七体のXも倒せる。その可能性も見付かったさ。

正直、良い収穫だ。次こそは——

親友

しばらくの間、俺は戦いの余韻をじつくりと噛み締めていた。何処かを見ているわけではないが、偶々寝転がっていたので視線が空へ向いている。

夕闇に数多の星が散りばめられており、赤と光、そして生まれたばかりの闇のコントラストが特徴的だ。

「カオル」

「どうしたの響ちゃん」

俺が遠くを見た様に名を呼ぶと、カオルは天使みたいな微笑で尋ねてくる。

「俺は……俺はまだ強くなれるだろうか？」

俺はゆつくりとだが、今日手に入れた希望や決意を込めて友に問う。するとカオルは、しばらく顎に手を当て考える動作をする。

だが、考えが纏まったのか、急に鼻で笑い始めたではないか。幾ら幼馴染みとはいえ、あまりにも酷い態度だ。

「これ以上強くなるの？」

「悪いか？」

俺は苦笑しながら、カオルの質問に質問で返す。

「響ちゃんらしい悩みだと思ったよ」

「お前の考えている、俺らしさとやらをいつか聞いてみたい物だ」俺達は砕けた言葉で茶化しつつ、しばらく語り合っていた。ただ、それでも誰かが来る気配は無い。辺りも何故か夕闇のままで、俺達の居る場所だけ時が止まってしまった。そういった違和感すら感じられる。

流石にマナとついでにミシェルを探そうと考えていたが、俺は何故か体に力が入らなかった。恐らく、極夜で複雑骨折と内臓破裂を無理矢理治したからか。或いは、病み上がりでまだ疲労が残っているにも関わらず、無理な必殺技を使ってしまった。その挙句、地面

に全身を叩き付けられたからだろう。

またか。また九条院長の世話にならなければいけないのか。そう考えると、自分が情けなく感じてしまう。カオルを治して貰ったばかりなのに、今度は俺が治療される側か。

Xに襲われた退魔士の治療から二週間と経っていない。俺はこれ以上、九条院長の負担になりたくない。

ただ、退魔士を始めた頃から、色々怪我をしたさ。利き腕が丸ごと、Xに切断された時だけじゃない。能力や能力者を悪用する人間相手に戦い、全身に銃弾がめり込んだ時もあった。そういったあらゆる怪我を、九条院長はいつも治してくれた。九条総合病院の常連と化してしまった俺を、いつも笑顔で治療してくれた良い人……いや、白衣の女神だ。

他にも、小さい頃からミシエルの代わりに相手してくれたさ。水飴やクッキー等、手作りのおやつも何度貰ったか。ハッキリ言って、九条院長の方がミシエルより親に相応しい。

だからこそ、九条院長には頭が上がらない。出来れば、迷惑をかけたくない。そういった事情をカオルに話すと――

「僕が応急処置しようか？」

カオルの口から意外な言葉が返ってきた。ただ、カオルの能力は回復ではなく補助系統だ。幾ら九条院長の子とはいえ……いや、待てよ。

確か、九条院長は教えればカオルも使えると言っていた気がする。「出来るのか？」

友を疑っているわけではないが、つい茶化すような口調で言ってしまう。すると、カオルは不機嫌そうにだが、ゆっくりと口を開き始める。

「母さんの様に完治は出来ないけど、立てるようにはなるよ。多分」
今、聞いてはいけない言葉を聞いてしまった気がする。サラッのだが、“多分”という言葉の口にするのか。“多分”という言葉の恐ろしさを今、改めて知ってしまった瞬間だよ。一瞬だが、親友を

疑ってしまった。

ここは絶対治すとか、僕に任せてなどと言うべきではないのか。そう考えてはみたが、カオルに悪気はない。いや、悪気がないからこそ余計にたちが悪い。

例えるなら、料理をした事がない小さな子供に、いきなり包丁を持たせる。そんな危なっかしさだ。

「大丈夫。僕に任せてよ」

俺の不安を察したのか、“未来の名医殿”は安心させようと言葉を掛ける。

いや、もう遅いから。お前が“多分”という言葉を口にした時点で、俺は十分不安だ。

「大丈夫だよ。響ちゃんは今まで何度も死にかけた事もあったけど、一度も死ななかったじゃないか」

それは、お前の母親の適切な治療が、俺を何度も助けてくれたからだ。能力治療以外にも、局所麻酔だけで縫合を試み成功する程だし、しかも、患者に意識があるままで。治すためなら何でもする。傷痕どころか後遺症すら残さない。医学については良く解らないが、九条院長の手術は神業だろう。

ただ、確かにそうだ。もしかしたら、俺は運が良いから殺しても死なないのかもしれない。そう考えると、思わず微笑んでしまう。

「解った。任せる」

それだけを言うと、俺は両目を閉じて静かに待つ事にした。さて、カオルがする治療の結果、九条院長への更なる迷惑にならなければ良いが――

「いくよ。ゲブラー、ティファレト」

カオルがそう呟くと、俺の身体がほんのり暖かくなる。いや、異変はそれだけじゃない。筋肉や身体中の細胞が急に活性化する。そんな感覚が駆け巡る。全身が徐々に振動し、激しい痙攣へと変化していく。

同時に、心臓の鼓動が徐々に大きくなり、血液や魔力が俺を刺激

する。

「うん、中身は大体治ったね」

カオルがそう言うと、俺を襲っていた感覚が徐々に薄れていく。中身は治った……か。確かに、腕を振り回せば普通に動く。日常生活どころか退魔士生活にも戻れそうだ。

いや、それだけではない。五感が急に強化された気分だ。動くどころか、全身に力が満ち溢れている。俺は跳ねるように起き上がり、ゆっくりと両目を見開く。

「凄いなこれは」

確かに動く様にはなったが、カオルの技は治癒術なんて生易しい物なんかじゃない。明らかに、俺自身が強化されている。

どうやら俺の魔力が活性化され、全ての身体能力を補っているみたいだ。これなら力をあまり加えなくても、一掴みのクルミやパチンコ玉なんて簡単に握り潰せるかも知れない。体力テストや診断すら、難なくクリアしそうだ。けど、ここまで来れば最早ドーピングだ。

「これも九条院長に？」

「いや、僕のオリジナルだけど」

独学の治癒術でこの威力か。それでも、完成度は普通の治癒術士と比べると遥かに高い。普通の治癒術士でも、解呪を除けば止血が平均のハズだ。

マナのように服ごと傷を治す者がたくさんいれば、死亡による退魔士不足などすぐに解消されるだろう。神ヶ丘でもそうそういない。

九条院長曰く、治癒術を医術として使える様にまで発展させるには、医学の知識も必要らしい。以前に興味本意で聞いてみた事もあるが、あの時の九条院長の表情は本気だった。

ならば、複雑な治癒術になる程、より繊細な技術が必要となるのだろう。

ただ、これでも完治してないうえに、九条院長と比べて劣るといのが驚きだ。まあ、九条家が何を基準に、“完治”と言うのかは

知らないが。

今更気づいたが、予想以上に九条家の人間は、退魔士……いや、治癒術士の中でも特別かも知れない。

「本当にこれで完治じゃないのか？」

「うん。母さんならアレルギーすら起こさず、免疫力を向上させるからね。末期じゃなければ、ガンすらも治せるって言ってたよ」

嘘だろ？

まさか、それでしばらく病知らずになるとか言わないよな。手術無しでガン治療。日本人は、毎年かなりの数がガンで死んでるんだ。それすらも覆しそうだ。

いや、あの院長なら本当にやりかねない。非常識な医学と治癒術を兼ね備えたあの人なら。

どうやら九条家の“完治”とは、蝕む物全てを消し去る医術の事を言うらしい。

「とりあえず動けるよね？」

「当たり前だ」

俺は跳ね回りつつ、上段回し蹴りで何度も空中を切ってみる。すると、音すら聞き取れない。そんな早さの蹴りになっていた。

これに、高速移動を加えたらどうなるのだろう。そこへ更に、新しい極夜の加速も加えたらどうなるのか。使いこなせば、今まで一度も勝てなかった、生徒会長のリュウヤに勝てるかも知れない。もっとも、副会長でも嫌なのに、会長になる気など更々無いが。

「もしかして、会長に試そうと考えてない？」

「何故それを？」

表情は殆ど崩れてないと思う。それなのに、何故俺の考えている事が解ったのだろうか。

カオル、お前まさか読心術も使えるのか？

「響ちゃんはクールそうだけど、慣れさえすれば考えている事は解りやすいからね」

少し傷付いたかも知れない。言葉をオブラートにすら包まない、

お前の悪意無き言葉その物に。俺はそんなに単純なのだろうか。

しかも、俺が考えていると、カオルは笑顔でトドメの言葉を放ってきた。

「ただ、いつも上から目線な態度を取るけど、実は熱く他人を放っておけない損な性格」

「随分、分析されている様だな俺は」

長い間同じ時を過ごせば当たり前か。しかも、全て俺の短所だ。全て心当たりがあるから、否定のしようが無い。

同時に、カオルは俺の事を誰よりも解ってくれている。その事実が何よりも嬉しい。

「マナちゃんを妹としてではなく、異性として意識している。しかも、相思相愛」

今、とんでもない言葉をカオルから聞いた気がする。九割くらいは、捏造が入っているのではないかと疑ってしまう程に。

確かに、カオルの分析力は認めてやっても良い。ただ、幾ら友でも言っても良い事と悪い事があるだろう。

「——実はミシエルさんの愛が欲しい」

「絶対に嘘だ」

カオルは勝ち誇ったかの様に、満面の笑みを浮かべる。まるで、自分の言った事には自信があるみたいに。

「本当は実家に帰りたい」

今までの言葉で、俺の身体がわなわなと震え始める。何かの制御装置が外れたみたい。いや、既に外れている。

「カ・オ・ル。少し俺と話をしようか」

「ご、ごめんなさい！」

謝ってももう遅い。俺はカオルの首を掴み引き摺りつつ、じつくりと“話”をする事にした。

共闘

話し合いという尋問をした後、俺達は遊園地のベンチで座っていた。いや、厳密に言えば半ば貸し切り状態か。辺りに人は全く居らず、夕陽が寂しく輝いている。

「説教が長過ぎるよ響ちゃん……」

「自業自得だ」

確かに、説教が長くなつた事は反省している。ただ、たとえ友でも限度という物があるだろう。少し一方的に攻めてしまったが、灸を据える程度なら丁度良い。

それにしても、大体十分以上話したハズだが、辺りが今以上に暗くならないのは妙だ。

「カオル」

俺は真剣な表情で、カオルの名を呼ぶ。

「響ちゃんも辺りの違和感に気付いた？」

「当たり前だ」

カオルも気付いていたのか。俺とカオルの感じている違和感は恐らく同じ。

原因は解らないが、周囲の時間が止まっている。多分、能力者がXが関わっている。誰だ、一体何処に居るんだ。

「カオル、何か感じるか？」

そう言いつつ、俺は全神経を張り巡らせていた。退魔士は鍛えれば、魔力感知の精度が上がる。ただ、魔力感知の精度だけなら、俺よりもカオルの方が上だ。本人曰く、意識しなくても魔力が見えるうえに、魔力だけで個人の特定が可能らしい。

だからこそ、カオルにも頼っている。

「活動してる魔力を一つ感じるよ。ミシェルさんの魔力だね」

「本当に一つだけか？」

俺がそう聞くと、カオルは自信が無さそうに一言呟く。

「少し違和感のある魔力が、辺りにある事を除けばね」

おかしい。ミシエルはマナと行動を共にしていた。ならば、必ずマナの魔力が側にあるハズだ。それに、遊園地の客の魔力すら感じないだと。まさかとは思うが――

「カオル、ミシエルの所へ案内してくれ」

「解った」

俺達はミシエルの方へ向かう事にした。

ヴォルフと戦う前までは、ヴォルフが何らかの能力で人を避けたのだと考えていた。ただ、能力者の能力は一人につき一つだけだ。

“奪い取る”能力以外に持っている事などあり得ない。それに、奴は皮肉屋だが嘘が苦手そうだ。

更に言えば、アリシアという女も違う気がする。あくまでも経験上の勘だが、アリシアは力で押し伏せるタイプだろう。吹雪の様な魔力という性質上、時を止め人を消すという芸当は向いてない気がする。

ならば誰だ。マナの能力にこんな力はない。いや、それ以前に半ば運任せな部分があるから明らかに違う。残るはミシエルか第三者となる。

ミシエルの能力は未だに知らない。確かに、興味が無かったというのはある。ただ、俺が交流しようとしなかったという理由もある。仮に、第三者が居たとしてもそれで良い。妹に危害を加えたという証拠さえ見付ければ、カオルに頼らずとも俺が始末してやるから。どうやって。いや、何のために時を止めたのか。それを突き止めなければ話は進まない。

ならば、先へ進むまでだ。

「着いたよ」

カオルの不意打ちにより俺の思考が止まる。

ただ、辺りを見回せども、マナやミシエルどこるか魔力の気配すら感じない。

緑に塗られたベンチとゴミ箱、赤茶のタイル以外何もない。そんな殺風景な場所が続くだけ。

「本当にここなのか？」

俺は率直な疑問をカオルにぶつけてみる。

確かに、俺の魔力感知はカオルより遥かに劣る。だが、あくまでも遠距離の話だ。目に見えない程に離れていたら、流石の俺でも感知は不可能。そんな俺でも、近くに居れば解るハズ。

すると、俺の疑問に対し、カオルは少し拗ねた表情を見せる。

「今でも感じるよ。ミシエルさんと……これは！」

話しているとカオルは、急に焦った表情で辺りを見回し始める。

カオルが焦った時は、今までもろくな事が起こらなかった。

マナも含めた俺達の師匠は九条院長。その共通点を除けば、能力や戦闘法といった方向性はまるで違う。俺が近距離特化なのに対し、カオルが遠距離特化。マナはオールレンジで対応が出来る。

それでも、カオルの実力は俺とほぼ互角。そんなカオルが焦るという事は、俺も警戒しなければいけないらしい。

「何があつた？ いや、何が居るんだ？」

俺はカオルと対照的に、平静を装ったまま問いかける。

すると、俺の平静に安心したのか、カオルはゆっくりと言葉を口にする。表情に恐怖を浮かべながらだが。

「アポストル級のXが最低でも三体。しかも、すぐ近くに」

アポストル級のXが三体。とても正気の沙汰とは思えない数だ。

カオルを助けた時にも実際に見たが、Xは時間が経てば進化する。

だが、それは一般的な退魔士の解釈であり、正確には不適切だ。

人の感情が増大する様に、Xも憎しみや怒り等に囚われれば感情が増大する。思念や想いから誕生したとはいえ、奴等にも立派な心がある。だが、問題は心の方だ。

進化の袋小路に立たされた人間と違い、Xは生まれてもなお進化する。進化のために必要なトリガーは、X自身による感情の増大。元々の思念や想いに頼る事無く、自ら考え感受性を高めていく。ま

るで、赤ん坊から成長していく様にだ。

しかも、Xは進化する度に姿形が人間へと近付いていく傾向がある。自宅で戦ったケンタウロスは二足歩行になったが、アポストル級のXはそんな生易しい物じゃない。爆発的な戦闘力を除けば、外見は人とまるで変わらないからだ。

Xは生まれたばかりの者をバース、バースから進化し人へ少し近付いた者をネクストと呼ぶ。

そして、ネクストから更に進化し、人間その物の姿になった者。高速移動だけでなく、能力までも使える様になった存在。そんな奴等を便宜上、アポストル級と呼ぶ。

「何かの間違いじゃないのか？」

いけないと解っているが、俺はつい現実逃避紛いの発言をしてしまった。

いや、間違いであって欲しい。アポストル級は数こそ少ないが、一体でもかなり強い。俺達生徒会が全力で戦っても、物によれば苦戦を強いられるほどに。

他の二体の階級が群れたとしても、まだ努力すれば倒せそうだが、アポストル級ともなればそうもいかない。奴等は知能が高ただけでなく、人間の言葉までも操る。能力戦だけでなく、心理戦に持ち込まれたら厄介だ。

「せめて、ヴォルフみたいに言葉巧みな奴が仲間ならば……」

居ない奴をアテにしても、どうにもならない事は解っている。仮に居たとしても素直に協力しないだろう。戦った者だから解るさ。

だが、アポストル級ならば猫の手どころか戦力をも借りたくなる。「じゃあ、今すぐ喚んでみる？」

俺は思わずニヤリと笑ってしまう。

そうだ。こっちには、カオル——どちらかと言えばアテにしているのは本人ではなく、能力のセフィロトの方だが——というジョーカーがあつたじゃないか。

ならば、すぐに呼び出して貰おうか。

「頼む」

「解った」

一言で会話を済ませると、カオルは両腕を横に広げ静かに目を閉じる。同時に、カオルの身体から溢れている魔力が虹色の柱へと変化し、太くかつ高く昇り空を貫いていく。

「ダアト。出でよ、ヴォルフ・ゼーレ。アリシア・ヴァレンタイン！」

カオルの言葉と共に、虹色の柱から二つの光が放たれる。光は地面へと降り立ち、徐々に人の形へと変化していく。

金髪の男と桜色の髪を持つ女を確認すると、俺は口を吊り上げる。

「何だってんだオイ？」

「わあー、綺麗だったねえ」

それぞれ間抜けな言葉を発しているが、戦力として使えるならそれで良い。少なくとも、心理戦においてヴォルフは心強そうだ。何でアリシアまで付け加えたかは知らないが。

「何だ、シスコンの響夜か」

口の悪さは戦った時と変わらないか。急に呼び出されても、瞬時に順応するその頭。見倣いたい物だ。

シスコンという部分は訂正して欲しいが。

「まさかとは思うが、マナを一人で助けられないから等の理由で、喚んだ……じゃないよな？」

「そのまさかだ」

全く、頭の回転は正に驚異的だ。一を知って十を知るとい言葉を実行するとは思わなかった。

けど、事情が解っているなら話が早い。

「とりあえず、嫌だと言っておくぞ」

「何だと？」

まだこちらから話を切り出していないのに、アッサリと断っただと。冗談じゃない。こっちはカオルに頼み喚んでやっているんだ。

しかも、一番消費が激しいらしいダクトだ。他の生徒会メンバーを呼ばず、わざわざお前を喚んでやった。それなのに、何だその態度は。

それに対し、オマケで付いてきたアリシアは、カオルを高い高いしつつ回っているが。

「当たり前だ。タダで何とかなるほど世の中は甘くねえんだよ」

確かに、言われてみればその通りだ。相応の報酬が無ければ、人は動かない物だ。今まで貯蓄で生活していたから、忘れてしまった様だ。

「タダじゃなければ良いのか。幾らだ？」

個人でも、少々コジャレた別荘くらいなら買える資金は持っている。だから、多少の出費は痛くもない。タイやオーストラリアだろうと、ある程度なら平気だ。

「金じゃねえ！」

「ならば何だ？ 我が儘な奴だ」

「お前にだけは言われたくない。親の顔が見てみたいぜ」

やはり失礼な奴だ。しかも強欲。よくこんな奴とカオルが友達になった物だ。正直に言うが理解に苦しむ。

お前にだけは言われたくないという部分はともかく、親の顔が見てみたいは余計だ。奴等はあくまでも反面教師なのだから。

「美味しい飯食わせろ」

「何？」

「何度も言わせるな。動かすなら、美味しい飯を食わせると言っているんだ。ちなみに三人分な」

何だ、そんな事か。ならば簡単だ。俺やマナ、カオルは料理が得意だから、目を瞑ってても朝飯前に決まっている。

あり得ない事だが、もしも口に合わなければ、九条院長の料理を食わせれば黙るハズだ。

「とんだ悪党だ」

俺は考えるまでもなく手を差し出し、承諾の意思を伝える。

「後悔するなよ」

対する奴は、越後屋から“甘いお菓子”を貰う代官の如く笑い、俺へ手を差し伸べる。

俺達は互いに手を握り合い、これから戦うであろう敵のために悪巧みを企て始めた。

震撼

手駒は十分に揃った。だが、問題は――

「どうやって、現状を開くか……」

今は時が止まって、周囲には誰もいない。せつかく戦力を揃えたにも関わらず、八方塞がりとは正に最悪だ。近くにミシエルと敵がいるらしいが、見えない上に干渉できないとは。妹が危機かも知れないというのに、何も出来ないのか。こんな状況だからこそ、今は焦ってはいけない。解ってはいるんだが、つい焦りたくなってしまう。

さて、どうしてくれようか。

「カオルのセフィ……」

「無理だよ響ちゃん。セフィロトは万能じゃないんだよ」

まあ、万能な能力だったら苦労はしないか。それでも、俺の能力を遥かに上回る性能と、使い勝手の良さを持っている。だからこそ、一応は頼ってみた。

流石に、未来の名医兼凄腕退魔士もお手上げという事みたいだ。

という事は、二人を生け贄として引きずり込んだだけか。しばらくの間、遊園地の店で飲食には困りそうに無い。一応払っておけば、無銭飲食にはならないだろう。

そもそも、遊園地の時が止まっているのなら、外はどうなっているのだろうか。

「あのね、外には出れないよ？　だって、出てもまた同じ場所に戻ったもん」

俺が考えていると、アリシアが間延びした言葉で後ろから話し掛けてくる。

同時に、香水と彼女自身の香りが背後から漂い、俺の鼻を攪り心をかき乱していく。

正直、危険なフェロモンの持ち主だ。例えるなら、香りで虫を誘

うツボカズラ。マナより厄介かも知れない。

試したという事は、ダアトを使わなくても、既に閉じ込められていたのか。という事は、カオルを無駄に働かせただけの様だ。カオルが真実を知る前に、いつか労いも兼ねて料理店へ連れていこう。まあ、抜け出せたらの話だが。

確かに、ヴォルフが来た時点で客は居なかった。ならば、アリシアの言葉も頷ける。

だが、何故俺達四人だけが取り残されたのだろうか。解らない事だらけだ。

「二人は現状について、何か知ってるか？」

「知らね」

ヴォルフは知らないみたいだ。いや、アリシアの方は跳ねながら手を挙げている。どうやら、何か知っているらしい。

「これはね。ミシエルさんのカルペ・ディエムだよ。時間を支配する能力ね」

俺が適当に予想していた事の一つが、見事に当たってしまった様だ。だからこそ、別に驚きはしないさ。アリシアがミシエルを知っている事も、特別何も感じない。

もしかしたら、他のミシエルかも知れないが、神ヶ丘でミシエルと言えばあいつ以外は知らない。

カルペ・ディエム。確か、意味はラテン語で“その日を掴め”だったか。何かの古語であつた気がするが、正直あまり思い出せない。ただ、ミシエルにピッタリ過ぎて、解りやすい能力だと思う。名前に捻りが無い所が特に。

「少なくとも、あのミシエルさんに勝てる存在は、この世界にいないと思う」

「家へ来る度に、何度も退治しているが」

俺の言葉を聞き、アリシアは驚愕の表情で俺を見つめ始める。まるで、起き上がった死人を見ているかの様に。

何か不味い事でも言ったのだろうか。もしかしたら、退治してはいけない存在なのかもしれない。だが、そんな事は俺の知った事ではない。あいつには、毎回迷惑しているのだから。

「響夜君、よく今まで滅ぼされなかったね」

今度は間延びせず、声が震えている。しかも、物騒な言葉まで聞こえた気がする。

「滅ぼされるも何も、親子だから」

俺の言葉を聞くと、アリシアはやっぱりねと呟き頭を抱え始める。何か、アリシアと言葉のキャッチボールが出来ていない気がする。特に、“ミシエル”の話題になった瞬間から。

「君の妹のマナちゃんかミシエルさんに似てるから、もしかしてと思ってたわ。やっぱり、親子だったのね。特に、君はミシエルさん以外にあの人の面影もあるし。滅ぼされないのも納得したかな」

「どういう意味だ」

“あの人”の面影。あの人とは誰なのか解らない。

俺はどちらかと言えば親父よりも、若い頃の祖母に似ているらしい。いや、白髪以外は若々しい祖母の若い頃など、想像すらできないが。

神代に縁のある人物なのだろうか。

「しかも、あの神代家と結ばれるとは。ミシエルさんと神代家って、何の縁かな……」

「どういう意味だと聞いている」

「あ、ゴメンゴメン」

ようやく気付いたらしく、アリシアは困った表情で俺を見つめる。ただ、明らかに目が泳ぎ始めているが。

ミシエルと神代の縁。少しミシエルについて気になってきたかも知れない。

神代は古くから続く退魔士の家系。そんな家が何故、親父と何処の馬の骨か解らないミシエルの結婚を許したのか。今まで疑問に思っていた。

七体のX・マモンことミハエルの言葉を聞いてから、ずっとミシエルに疑惑を抱く日々を送ってきた。

だが、アリシアは何か知っているらしい。ならば、今聞いておこう。

「単刀直入に聞く。ミシエルは何者だ？ ミハエルという男とミシエルの関係は？ ミシエルと神代の関係は？」

俺はアリシアに次々と質問を浴びせていく。すると、アリシアは俺から逃げ、ヴォルフの後ろへと隠れる。

「うっ……質問は一つずつにしてよー……」

アリシアはヴォルフの腰から顔を覗かせ、涙目で俺へと抗議している。少しやり過ぎたみたいだ。後で謝ろう。

困っているアリシアを見かねたのか、やれやれと首を振りつつヴォルフが代わりに口を開く。

「どれも機密事項だ。教えてやる訳にはいかねえ。ただ、あえてヒントをやるなら、ミシエルは生きたままXになった奴だ。出産の時点でそうだったらしい」

「ミシエルは、物心が付く前からXだったと言うのか。有り得ない」
Xは一定量を超えた思念の集結か、強い未練を残したまま死ぬしか発生しない。

だが、出産の時点でXという事は、どちらにも属さない事になる。出産という行程を経てこの世へ生まれたX。そんなのは、今まで聞いた事がない。

「お前が知らないだけで、実際は結構いるぞ？ 例えば、アリシアやエリスとか」

「実は、両親が能力者のXなの。ちなみに、エリスは私の妹ね」
ヴォルフの言葉に対し、アリシア本人が肯定とも取れる発言をする。

突然変異で生まれたXに、Xの両親から生まれた二世代。Xにも、様々な種類があるらしい。しかも、どちらも人間と全く変わらない個性と自我を持っている。強い思念や怨念の類いで誕生していない

Xは、案外無害なのかも知れない。

今まで、Xと名の付く存在と何度も出会ってきた。だが、その度に何度も戦い倒している。

それでも、今までXを悪だと割り切って戦ってきた訳ではない。人へ危害を加えるからこそ、戦わざるを得なかったただけだ。

「私の事、恐い？」

俺の考えが解ったのか、アリシアが不安そうに尋ねる。

「いや、別に。けしかけてこなければ、無闇に戦うつもりはない」

「響ちゃんならそう言うと思ってたよ」

フツ……どうやら俺だけ仲間外れだったみたいだ。カオルも、アリシアの正体を知ってたらしい。

まあ、カオルが正体を知りながらも友と呼ぶのなら、信用できる事は確かだ。カオルは人見知りが激しいから、あまり他人にはなつかない。そんなカオルが、ダアトを使って呼んだんだ。無害に決まっている。

「もしかして、カオルが信頼してるから信頼できる……そう安易な考えに至ってないか？」

皮肉生産機が、皮肉を込めて嘲笑している。相変わらず、不愉快極まらない発言をしてくる。

カオルが信じているから信じれる。その何処が悪いのか。

「アリシアは、アポストル級のXで換算すると、大体二体から三体の強さだ。そんな奴が町中で暴れたら——」

ヴォルフの言わんとする事に気付いてしまった。アリシアは良識的なXだが、同時にタチが悪いXでもある。そういう事が。

アポストル級は大体、神器が使える退魔士と互角に渡り合える。

神器の中には確か、ビルを一瞬で粉々にする威力の物もあったハズだ。

アリシアをその神器二つか三つ分に置き換えてみる。暴れまわるだけで、町が廃墟になりかねない。いや、それ以前に人が生きている事すら怪しい。たとえ、準備運動だとしてもだ。

「命が惜しければ、アリシアを戦わせるな。そういう事か」

「ああ。暴れたアイツは誰よりも恐ろしい。本気を出した九条ヒカルや沙夜婆さんよりはまだマシだが」

九条院長やおばあちゃんと比べる程とは。ヴォルフが、あの二人を知っている事に驚いた。ただ、アリシアの実力については、少し修正を加えなければいけないらしい。

あの二人は、アポストル級がまだ可愛く思えるほどに強い。実際、俺が高速移動の状態でも、あの二人に攻撃が当たった試しなどないから。だからこそ、俺は二人の強さに憧れている。

しかも、俺の師である九条院長の師匠がおばあちゃんだ。だからこそ、隣同士という事以外にも、普段から親近感が沸くのかも知れない。

「飽きたから、そろそろ出よっか」

俺がそう考えていると、アリシアは急に話を切り出してくる。

いや、出られないから悩んでいるんだが。もしかして、脱出法を思い付いたのだろうか。

「まさか、アレをする気か。確かに、カルペ・ディエムは能力だが

……」

アリシアの言葉を聞き、今度はヴォルフの顔が徐々に青ざめていく。アリシアは、アポストル級を超える強さを持つX。ならば、ヴォルフが何故青ざめているのか容易に予想が付く。

「いっくよー！」

この掛け声と同時に、アリシアは右腕を何度も回転させていく。

しかも、吹雪の様な魔力を集束させながらだ。

集まった魔力はより強くかつ白く発光していき、拳から肘が見えなくなっていく。

「アリシアパンチ！」

自身の名が付いた技を高らかに叫び、アリシアは右足を後ろに下げつつ空間を殴りつける。

同時に大気や地面が震撼し、俺達は天高く撥ね飛ばされていく。

撥ね飛ばされた先に待っているのは、重力が掛かった落下のみ。俺は後に来る衝撃に備え、魔力の膜を纏い始めた。

そして、遂に地面へと叩き付けられ、鈍器で殴り付けられた様な衝撃が全身へと襲い掛かる。

まさか、これ程の力とは思わなかった。格闘技の原点とも呼べる純粋な力。それだけでも破壊的がある。ならば、これに格闘技を加えたら、一体どうなるのだろうか。

「だから、言っただろ？」

未だにうつ伏せとなっているヴォルフが、呻き声をあげつつ俺に呟く。最早、声に覇気すら感じられない。

対するカオルは、度重なる魔力の消費が祟ったのか、ピクリとも動く気配が無い。魔力を見る限り、死んではいないようだ。

多分、カオルは気絶しているだけだろう。ネコのビアン力を護るために魔力の殆どを消費し、自分の防御が間に合わなかったらしい。事実、ビアン力は何事も無かったかの様で、愛するご主人様に擦り寄っている。

大気の振動が止むと同時に、今度は空間に異変が起こり始めた。空間にヒビが入り、徐々に拡がり大きな穴を形成していく。そして、穴から吸い寄せる力が発生し、ここに居る全てを飲み込んでいった。

擬人

空間に出来た穴に吸い寄せられてすぐに、俺達は硬い床へと叩き付けられていく。

再度の痛みに呻きつつ、周囲を見回す。先程とほぼ変わらない遊園地の景色。ただ、違う部分があるとすれば、夕暮れの代わりに続く満天の星空。そして、“何か”から逃げようとする人々だ。無数の金切り声が響き渡り、遊園地の楽しい雰囲気が嘘の様に感じる。

「確かに、カオルの言った事は本当だったみたいだ」

俺はそう呟き、逃げ惑う観客とは正反対を見つめる。そこには、三人の人間の姿をした“何か”が居た。観客とは対称的に、真顔で悠々と歩いている。人の姿をしてるが、“奴等”の発する魔力が俺の本能という鐘を鳴らしている。

一人は、吟遊詩人の様な格好をした銀髪の男。茶色のコートと、同色でつばの広い帽子が特徴的だ。右手で長い木製の琴を抱えている。けど、フラミンゴの様に伸びた脚が、長い琴を短く感じさせている。

二人目は、金の金属光沢に近い色。それを毛髪に染め上げた、リゼントが特徴の男。引き締まった体つきをしており、長身が更に際立たせている。それ以外は、背中に虎の刺繍の入った白の服。特攻服に近い服装が特徴的だ。

最後は中学生に見える少女。艶のあるオレンジの髪。それを、深紅の細いリボンで後ろに束ねている。首にも同様のリボンが付いているが、首の方は少し色が霞んでいる。後は髪と同色で、フリルが付いたワンピースが特徴的だ。

髪の色を除けば人間と変わらない。

だが、人の物とは明らかに違う、赤黒い魔力が三体の全身から溢れ出ている。どの魔力も強大な光を放っており、まるで血の色となった太陽の様だ。

ミシエルやアリシアがXと聞かされたとしても、あの魔力を見せ付けられれば誰でも信じないだろう。例えXだとしても、“何か”が根本的に違う。魔力の強弱ではない。生と死の様に、決して交わる事の無い“何か”が。

俺はしばらく三人を見つめていたが、すぐ我に返り魔力探知を張り巡らせる。確かに、何処かからミシエルの魔力が漂っている。その中に、マナの魔力も微かだが感じる。

だが、マナの魔力は今にも消えそうだ。魔力が消え掛かるという事は、生命活動が正常ではない状態。つまり、風前の灯を意味している。

「マナ、何処だ！ 何処に居る！」

俺是最悪の事態を想定しつつ、愛する者の名を叫ぶ。

すると、俺の言葉に呼応するかのように、マナの魔力が脈打ちながら俺に伝わってくる。どうやら、死んではいない様だ。少し安心したが、マナが危険な事には変わりない。今すぐ助けに行かなければ、取り返しの付かない事になる。

マナの魔力を感じたのは、奴等が歩いてくる方向とは真逆。丁度、俺が居る場所と方角が重なる延長線上だ。確か、あそこは観覧車。ヴォルフと戦う前に向かったから間違いない。

カオルの言葉から推理すると、あの三人はアポストル級のX。マナを助けるには、奴等をまっすぐに突っ切るか迂回するしかない。奴等をやり過ぎつつ、マナを救う方法。それを考えると、前者は明らかに自殺行為だ。だが、俺にはヴォルフとアリシアがいる。カオルは戦闘不能だが、二人がいれば関係無い。

俺は振り向き二人を一瞥すると、任せろと言わんばかりに親指を立てる。ヴォルフも既に立ち上がっており、戦闘の準備が整っている。ならば――

「アンタ、九条の弟子でしょ？」

知らない女の子の声を聞き、俺はすぐに声の方へ向く。すると、アポストル級のXと思われる少女が、俺の目と鼻の先に現れていた。

どうやら、既に気付かれていた様だ。回避は不可能という事か。
「ちよつと、シカトするわけ？」

少女は苛々した様に声をあげつつ、俺へと詰め寄ってくる。
近くで見るとやはり小さい。例え、俺の身長を入れなくてもだ。

「何故、俺が九条院長の弟子だと知っている？」

俺がそう聞くと、少女は嘘でしょと言わんばかりに表情を歪める。
「アンタ、九条から何も聞かされてないの？」

続けて少女は、話が違うじゃない等と呟きつつ頭を抱え始める。
どうやら、九条院長と何か口約束をしていたらしいが、結局破られた様だ。

或いは、九条院長が俺に伝えるのを忘れたのかも知れない。あの人は気まぐれな性格だから、考えられなくもない。

「じゃあ、アタシの正体を知らないのね？」

少女が確認するように問い掛けてくる。勿論、出会った事などない……ハズだ。例え、アポストル以前のXの時に出会っていたとしても、頭や胴体を攻撃して倒している。存在する訳が無い。

「興味ないが、一応聞いておいてやる」

「アンタ、あの時と同じく苛つく程に上から目線なのね。まあ良いわ。とりあえず、これに見覚え……無いかしら？」

少女がクスクス笑いつつ、自らの首にあるリボンへと手を掛ける。
あの時——ならば、一度出会った事があるのか。くすんだ赤いリボン。首に巻いている。そこまで考えていると、俺の中に何かが引っ掛かり始めていた。

——可哀想に。飼い主に捨てられたのか——

まず、ノイズが走るラジオの様に、俺の頭へと声が響き渡っている。確かに、俺は何処かでこの言葉を発していた。

——解るさ。俺もかつて孤独だった。だから、お前の気持ちも理解は出来る——

更に鮮明な声へと変化し、今度は風景も見え始める。神ヶ丘の路地裏で、俺は先に居る“何か”へ確かにそう呟いていた。いや、思

い出した。そいつは――

――今、楽にしてやる――

ハッキリとした声と同時に、くすんだ茶色のネコが鮮明に見える。赤いリボンが特徴的な――そうだ、ゴールデンウィークに戦ったXだ。

「お前、あの時のネコか」

「そつ、死の淵から舞い戻って来たわ」

少女は悪戯の如く笑いながら、俺の顔をいとおしそうに撫で始める。まるで、久々に恋人と出会い喜ぶかの様に。

「有り得ない。確かにお前の首は――」

そつ、確かに俺はネコの首を白夜で跳ねた。それは間違いない。ただ、それならば何故、ネコはアポストル級となって俺の前にいる。俺には理解出来ない。

「あの時は正直、終わったかと思ったわ。けどね、消えゆく所に九条がやって来たのよ」

少女はそこまで言うのと、意地悪そうな表情で俺を見つめる。ここまで言ったなら、後は自分で答えが出せるでしょと言っているかの様だ。

「九条院長が、お前を救ったと言うのか？ 有り得ない。お前の討伐は九条院長の依頼だ」

そつ、神ヶ丘の住人を傷付けるXの討伐。それは九条院長が依頼した物だ。それは、間違いないと言い切れる。

理由は、病院で治療出来る容量に限界が来たからだ。それで親父に依頼し、親父は俺を向かわせた。そして俺は、ネコのXと出会い討伐に成功する。

そこまでが、俺の知っている真実。

「けどね、事実なのよ。ちなみに九条とは、アンタと戦う以前に何度も戦った事があるけど、勝てなかったわ」

少女は思い出を懐かしみつつ、再び語り始める。

「でも、九条は一度もアタシにトドメを刺さなかったわ。アタシ達

よりも気まぐれで、何を考えているかも解らない。多分、今生きているのも九条の気まぐれね」

確かに、九条院長の本質は“気まぐれ”だ。カオルが死の淵から蘇ったのも、九条院長がたまたま通り掛かったから。顔を見たいという理由で。いや、本当にたまたまだったのか。

ネコの依頼もそうだ。討伐するだけなら、生徒会メンバーを全員投入すれば一気にカタがついたハズ。九条院長の収入は、退魔業や外科を中心とした医術。そして、たまに屋台を開く事もある。そんな九条院長が、本当に依頼料を少しでも安くしようと考えるのか。答えはノーだ。

仮に安くしたとしても、息子のカオルに頼めばタダで済んでいたハズだ。それなのに、依頼が俺へと回ってきた。

もし、依頼を回してきた親父が、最初から九条院長に頼まれていたとしたらどうだ。何かの思惑があったとしたら。

更に、ケンタウロスとの戦闘後。冷静に考えれば、親と仲の良いカオルが、九条院長に出掛ける事を報告していない訳が無い。それなのに、何故家にやって来た。

まるで、俺やカオルが最初から戻ってくる事を、知っていたかのように。

そして、九条院長とネコのXによる“何か”の約束。どうやら俺は、最初から九条院長という神の掌で、踊らされていただけだったらしい。

「九条院長、また俺をはめたのか……」

「それを言われると、アタシもそうね。お互いに苦労するわね」

ネコのXもとい少女は、同情するかの様に俺の肩へと手を置く。どうやら、俺達は本当の意味で似た者同士だったみたいだ。

「オイ……既に、Xの話術に乗せられてるじゃねえか！」

ヴォルフが俺に向かってそう叫ぶ。同時に、俺はハツとなり、少女からバックステップで遠ざかる。

そうだ。幾ら俺と同じく、九条院長に悩まされた者だとしても相

手は×だ。最初に戦った頃よりつい同情してしまったが、神ヶ丘の住人の大多数を攻撃している。それは明白な事実だ。

理由がどうであれ、事実には変わりない。

「すまない」

「何があっても吞まれるな。吞まれる前に、飲み込んでやれ」

ヴォルフはそう言うのと、解ったかと言わんばかりに俺へ笑い掛ける。皮肉を湛えた嘲笑ではなく、子を諭す親に近い表情だ。こいつ、こんな顔も出来るのか。

だが、お陰で目が覚めた。認めたくないが、感謝している。

「それでマナを——女の子を傷付けたのはどいつだ？」

「あの特攻服着た奴よ。ちなみに、後ろの白髪を倒したのもね。まあ、アタシは殺しなんて趣味じゃないから、理解なんて出来ないけど」

あの青髪リーゼントが、マナとカオルの敵が。^{かたき}ならば——

「俺が奴を倒そう」

「ちよつと、九条の弟子！ アンタの相手はアタシよ！ 勝手に決めないで！」

俺の言葉を聞くと、少女はつかつかと俺へと迫って来る。表情は明らかに起こっている。無理もない。九条院長は恐らく、俺と戦わせるために少女をここへ呼んだのだろう。

だが、当の俺は何も知らされておらず、更にミシエル能力で行方不明。そして、敵討ちで無視される。待ちぼうけを食らった少女からすれば、正に踏んだり蹴つたりの状況だろう。

ただ、素直で律儀な性格。×にしては珍しく、人殺しを良しとは考えない。そういった最低限の良識を持っている。

流石の俺でも、少女に哀れみすら感じる。

「俺は二対一でも構わないが。いや、吟遊詩人も含めれば三対一か」

「いや、某は主と戦うつもりは無い^{それがし}」

俺の挑発に対し、吟遊詩人は静かに答える。声も含めた奴の立ち振舞いには、何処か俺に対する余裕すら感じ取れる。

まるで、狩りに自身のある貴族の様だ。

「何故だ？」

「マモンに指一本すら触れる事が出来なかった主が、某に勝てるのも？」

マモン——ミシエルに似たあの男、ミハエルの事だ。七体のXの一体。

悔しいが、奴に指一本すら触れる事が出来なかった。いや、何故あの吟遊詩人がこの事を知っている。まさか、ミハエルの仲間。奴の同族か。

「大した自信だ。ミハエルの仲間か？」

「如何にも。某の名はバラライ・バラード。またの名を暴食の使徒・ベルゼブブという」

ベルゼブブ。七つの大罪の一つである、暴食を司る悪魔の名だ。

元々は、気高き王という意味のバアル・ゼブルが語源らしい。だが、異教徒を嫌うヘブライ人が、読みの似ている糞の王と呼び蔑んだ。その事から、今の呼び名となったと言われている。

成程、七体のXの一体か。すぐに出会えるとは思っていなかったが、棚ぼたには違いない。

「お前を倒し、マナが七分の一は安心して暮らせる様にやるさ」

俺は右手を真横に振るい、魔力を集めていく。魔力は光となり、俺の刀である白夜へと変化していく。

俺は白夜を両手で構えると、バラライに向けて刀を振るう。

「ほう、彼女の神器が使えるのか。信じられないが、やはり彼女に似ている」

だが、バラライは高速振動する刃を、指二本で受け止めている。信じられない。今日で白夜による攻撃を受け止めたのは、ヴォルフも含めて二人目だ。

しかも、止めたのは反射と動体視力のみ。特別な技能は何一つ使っていない。攻撃に臆さず防御するとは。

こいつ、Xとは違う意味で化け物か。

「彼女とは誰だ？」

「答える義理などない。せつかくの名刀でも、使い手が未熟とは」
バラライは詠うように語ると、不適な笑みを浮かべる。

「良いか、神器とはこうやって使うのだ。マーカー！」

バラライはそう呟くと、余った右手を空へと掲げる。すると、掌から血の様な液体が滴り、徐々に凝固し“何か”が形成されていく。手に現れたのは、細長く赤黒いレイピア。斬るのではなく、あくまでも突く事に特化した剣だ。ただ、普通の武器とは違い、赤黒い魔力をうつすらと纏っている。

「何だ……それは？」

俺はついこの言葉を発してしまう。Xが神器を使うなど有り得ない。

能力者や魔導師、Xはそれぞれ魔力の使い方が違う。魔力を特定の事象に変化させるのが能力者だとすれば、魔力を設定したプログラムの变化させるのが魔導師だ。そして、魔力を生命エネルギーとするのがX。

Xがアポストル級に進化する時、“代謝に使われない魔力”が能力へと変化する。ただ、神器を生み出す余裕などないハズだ。

能力を極めた者が使える神器。神器は例外なく強力な代わりに、莫大な魔力を消費する。生まれつき魔力が高い力オールドでも、連続で五回出せるかどうかだ。

ただ、九条院長曰く、俺の場合は例外らしい。少しでも魔力を節約するために、脳内で勝手に神器の強さをセーブしてしまう。それ故に、本来の姿である極夜へと変化させるには、極夜の“鞘”である白夜を能力で“粉碎しなければいけない”らしい。

つまり、俺は本来の戦闘力と引き換えに、他人より多く神器が使えるという事になる。

だが、目の前にいるバラライの“アレ”は、俺の例外とは明らかに違う。魔力を節約している訳でもなく、バラライ自身も消滅していない。魔力の枯渇は代謝の停止。つまり、Xの消滅を意味してい

る。

確かに、魔力の高いXも存在する。魔術を操るXは、歴史的に考えれば存在する。だが、神器を使う個体など、今まで聞いた事が無い。

「何を驚いている？ 主はまさか、Xは神器が使えないとも思っていたのか？」

俺の思考を読んだのか、バラライが俺の頭にある疑問を代弁する。「アポストル級のXが神器を使えるとは思えない。お前は何者だ？」
「当然だ。某はアポストル級のXではない。主も能力者なら覚えておくがいい。我らは、超越者——ラースルだ！」

超越者。聞いた事がある。能力者が七つの大罪のどれか一つを強く宿していた時、死と同時にX化した存在。存在すれば、戦闘力のみならアポストル級のXを上回るとされている。

だが、あくまでも“存在すれば”の話。超越者は理論上存在しないとされる。何故ならば、能力者やXの魔力という、方向性の違う魔力を同時に併せ持つからだ。Xの魔力は、俺達能力者にとっては汚染物質でしかない。O型を除けば、違う物では輸血出来ないのと同じだ。

だからこそ、併せ持つという事は、魔力による拒絶を意味している。それ故に存在しない。

「有り得ない。超越者など——」

「ならば、お前の母ミシエルやその双子ミハエル。お前の後ろに居る二人は何だと言う？」

ミハエルがミシエルの双子。成る程、どうりでミシエルに似ている訳だ。

まさか、バラライやミハエルも、生まれながらにしてXの力を持った人間。突然変異か。

「その顔を見る限りでは、ようやく無知を認めたらしい。では、去らばだ。トリリオンアロー」

バラライがそう呟きつつレイピアを構えると、剣先から赤黒い光

線が俺に向けて放たれた。

生屍

俺は至近距離の攻撃で、思わず弾く様に声を漏らす。だが、至近距離だからといって、避けられない訳ではない。

俺は大気中の電気に熱を込めると、一気にバリアとして展開していく。バリアといっても、前方しか護れないという粗い造り。だが、観客がいなければ、防御法のスタイルなど関係無い。

「主、やるな」

バラライが、感嘆のため息と共に俺を称賛する。まだ奴の技を相殺してないが、至近距離で技を防がれ今は無防備だ。それなのに、まだ余裕の表情とは。正直な所、少々不愉快だ。

「だが、先程までであった某の琴は——右手から何処へ消えたのかな？」

この言葉と同時に、バラライの口が一気につり上がっていく。その表情は、正に勝利を確信したモノ——強者が弱者を見下す様な顔だ。

奴の表情に気を取られ、俺は言葉の意味に気付かなかった。いや、「気付けなかった」のかも知れない。

「バカ！ 右だ！」

ヴォルフの叫びで、ようやく真意に気付いてしまう。

真横から風を切る音に気付いた頃には、舌打ちする隙すら無い。

「しまっ——」

俺は最後まで、言い切る事が出来なかった。何故ならば、肋が碎ける音と同時に、琴が脇腹へとめり込んでいたからだ。俺は突然の不意打ちになす術もなく、真横へと吹き飛ばされてしまう。

俺はそのままタイルに叩き付けられるが、すぐに立ち上がる。

「何故、琴が……。いつの間に……？」

俺は苦悶の表情で呻きつつ、頭に浮かび上がった疑問を口にする。確かに奴が神器を出す瞬間、右手に琴が無かった。だが、それで

も解らない事が一つだけある。

真正面が神器による攻撃で、同時に真横からの琴による攻撃。至近距離にも関わらず、琴の攻撃には“奴の魔力”をまるで感じなかった。つまり、琴の攻撃には魔力が一切関わっていないという事。能力や魔法で動かした訳ではないらしい。

そんな事は、協力者が琴を投げ付けられない限り有り得ない。

「大技は確かに隙が大きい。その隙を狙うのは、賢明な判断だ。だが――」

この言葉と同時に、バラライは琴を左手で拾いつつ俺へと近付いてくる。

「マジシャンにおいて、隙とは――自分の技を隠すためではない。これに似た物が、日本の諺にあるだろう？」

「木を隠すなら森の中……か。解っていたつもりだったが、まさか兵法として使うとは」

Xに手品の基本を説かれるとは。ある意味、複雑な気分だ。注意や視線を集め、隠していた技を一気に魅せる。一点だけ見ていれば、間違いなく見えないだろう。

だが、トリックがあると解れば、攻撃を避けるなど容易い。

「肋も数本折れた。立つのもやつとだろうに」

バラライが、俺を憐れむように呟く。だが、折れた程度で負けと判断するのは、俺を少々なめている。アイン・ソフ・アウルによる技。まだ、全て使っていないというのに、今までが全力だと思われると不愉快だ。

レイディアント・シヨットやそこから派生した技は、元々は九条院長から教わった物。魔力での肉体強化ドレーンクによって使える技だ。

今から使う技は、九条院長から禁止された技の一つ。今の状態で使えば、体に負担が掛かるだろう。だが、痛みが激しい今のような状況でこそ、真価を発揮する。

「それはどうか？ ペイン・イレイズ」

俺は一気に魔力を放出し、徐々に身体中へ浸透させていく。そこ

から細胞や電気信号、更には痛覚を司るシナプスへと意識を集中させる。すると、徐々に痛みが和らいでいき、完全に消えていく。

だが、怪我が治った訳ではない。神経による痛覚を一時的に停止させただけだ。無理をすれば当然、怪我が悪化する。

俺の能力は、あくまでも粒子支配。能力で支配する粒子とは、エネルギーや物質の構成要素、魔力も含めた全てだ。

ただ、発動には欠点がある。まず、粒子の名称と性質を知っていなければ発動しない。何もない所から、知識を引っ張り出す事が出来ないのと似たような物だ。まあ、ある程度の努力のお陰で、簡単な技ならば無意識で使える。

ただ、致命的な欠点がまだある。粒子を特定の形に留める事は出来ても、固定して物質を生み出す事など不可能。勿論、細胞も例外ではない。今まで何度も克服しようと努力をしたが、この欠点だけは何の成果も得られていない。

「また、治療を受けなければいけないらしい」

カオルに治して貰ったが、カオルの魔力はもう無い。ならば、必然的に九条院長の所へ行かなければならない。

あの人に、迷惑を掛けないよう今まで努力——実際は、カオルに頼っただけだが——はしてみた。だが、結局振り出しになった様だ。

「無理をする。だが、某は若い芽をあまり摘み取りたくない」

「俺はまだ倒されていない。今は、ここで死ねないんだ」

そう、俺はマナの兄だ。どれだけ傷を負おうとも、俺はマナを傷つける者全てを倒す。本人の前では言ってない。ただ、そう誓ったんだ。

かつて、俺はマナに怪我を負わせてしまった。だが、そんな俺をマナは許してくれた。

俺は確かに、マナには敵わない。ただ、それは強さではない。器の差だ。だからこそ、俺は立派な兄としてありたい。例え不器用でも、マナを悲しませたとしてもだ。

兄としての姿は、形だけかも知れない。だが、護れるのならば何

だって良い。退魔士以前に、俺はマナの家族なのだから。護る理由は、それだけで十分だ。

「戦いが終わったら、マナをすぐに助けてやる。だから、お前なんかに躓く訳にはいかない」

それが俺の答え。奴を倒せるならば、“あの技”を使っても構わない。あまりの破壊力故に、九条院長にすら見せた事が無い。

粒子支配の極みとも言えるあの技。上手く制御すれば、被害が少ない状態で奴を跡形もなく消し去る事が可能。だが、使い方を誤れば、俺自身がただでは済まないだろう。

対象の内側にエネルギーを送り込み、限界まで球状に押し固める。そこから疑似太陽を生成し、一気に爆砕する技。俺の数多ある技のうち、ゼロ距離で真価を発揮する奥義。三番目の威力を持つ“スーパードヴァ”を。

「某が悪かった。出来れば戦いを避けたい。その思いは、主に対する侮辱だったな。ならば――」

言葉と共に、バラライの魔力が徐々に変化していく。赤黒い魔力が漆黒へと染まり、天まで届きそうな蝙蝠の翼の形へと変化していく。

「某の能力、ドゥームズデイで主を消してくれようぞ！」

魔力の翼による羽ばたきと共に、俺は大きく吹き飛ばされる。羽ばたきによる風が突風と化し、俺も含めた地上の全てをなぎ払っていく。

くっ、風圧で体勢が立て直せない。これでは、スーパードヴァすら使えない。使う事前提だった故に、二番目の威力を持つ遠距離技どころか、一番強いアレすら使えない状況だ。

だが、俺は――

「喰らうがいい」

バラライの翼が徐々に変化し、表面から人の顔をした何かが現れる。何かは解らないが、撃たせる訳にはいかない。

俺は風圧の勢いを削ぐと、白夜を舗装された広場に突き立てる。

だが、熱したナイフでバターで切るかの如く、広場を易々と切り裂いていく。

成る程、白夜の高速振動という性質が祟ったか。だが、まだ終らない。終わる訳には――

「奪い取れ」

この掛け声で、風圧とバラライの翼が消滅していく。ヴォルフが全てを奪い取ってくれたのか。だが、何か様子がおかしい。

「やっぱり、キャパが足りなかったか……」

言葉と同時に、ヴォルフの全身から大量の血が溢れ出す。ヴォルフの血が雨となり、俺の身体へと降り注いでいく。

つまり、ヴォルフの奪い取る能力は、有限だったという事か。

「何故だ？ 何故――」

俺が問い掛けるより先に、ヴォルフは自嘲気味に笑い始める。

「ククツ……さあな。多分、彼女とお前が、ダブっちまったからかも知れねえ。お前、嫌というほどに彼女とミシエルに似てるぜ」

口では余裕そうに話している。だが、ヴォルフ息遣いは荒く、話すだけでやっとの様だ。ヴォルフが前を向いているから、奴の表情はよく見えない。だが、話す度に嘔吐の音が聞こえ、生臭い金属臭が漂っている。

彼女とミシエル。彼女とは誰かなど知らないし、知る由もない。だが、何かを護ろうとして戦った。その気持ち、今の俺には解る気がする。

「あめえよバラライ。俺には、あらゆる攻撃が通用しない。そう教えたハズだろ？」

そう言いつつ、ヴォルフがバラライへずつ一步近付いていく。ヴォルフの表情は見えないが、声色からすると笑っているのだろう。

「死に損ないが何をい――まさか主……いや、貴殿は！」

ヴォルフの言葉を聞いた瞬間、バラライが急に後退りをする。

「強さの序列で、てめえは下から二番目だ。そんなてめえが、俺に勝てる訳がねえ」

バラライが下から二番目の実力だと。信じられない。ならば、バラライより強いXが、あと五体もいるというのか。

しかも、ヴォルフがバラライより上の実力者。何故、奴がそう言い切れるのかは解らない。

もしかして、奴も七つの大罪に纏わるXなのかも知れない。けど、一度戦ってみたが、俺と互角の強さだった。まさかあの実力で、まだ本気を出していなかったというのか。

「某も以前より力を付けた。だからこそ、貴殿と戦ってみたい」

「いや、てめえを倒すのは俺じゃねえよ。響夜、白夜を太陽光として分解しろ。それで、奴の能力が無効化可能だ」

ヴォルフが振り向き、吠える様に喋る。すると、明らかにバラライの表情が変化していた。余裕に満ちた表情が、恐怖へと塗り潰されている。

太陽光で無効化が可能。成る程、夕闇から夜へと変化している今だからこそ使える能力。それが、奴の使っている能力の正体か。

「正直、誰かの命令に従うのは気が進まない。だが——良いだろう」

俺は白夜を前へと構えつつ、バラライに向かい微笑む。同時に、白夜を制御する力を消し去る。白夜という形が徐々に崩れていき、光へと変化していく。

「止める！ 止めてくれ！」

白夜が解放され、光がバラライを包み込む。すると、バラライとその魔力が徐々に溶けていき、そして完全に消滅する。

ただ、それでも解せない事がある。

「お前のお陰で倒せたが、何故奴は消えた？」

「奴の能力はドゥームズデイ。内容は、死んだと認識したモノの蘇生」

死んだと認識したモノの蘇生。それと奴が消えた事に、一体何の関係があるのか。そう聞く前に、ヴォルフは再び口を開く。

「あの能力の効果は、死んだ生物のX化が基本だ。ただ、実際は相殺した技や壊れた物質も関係無い。奴は何でも、X化した状態で蘇

生が可能なんだ」

X化させた上での蘇生。それが、バラライの能力。

X化した存在は、基となった存在を超えるという。例えば生物でなくとも、X化が可能と言われている。但し、それには強大な魔力と思念が必要だ。生物や無生物を問わず。

だが、バラライの能力ならばそれすらも関係無いらしい。即興で屈強な兵士を生み出す。そんな奴に戦争を挑まれば、間違いなく敗北するだろう。何故ならば、相手の兵士や兵器が“死を迎える”度に、奴の兵士へと変わるのだから。

「質が悪い能力だ」

本当に質が悪い。倒せば倒すほど、自分が不利になるなんて。それでも、下から二番目。ならば、残りの五体は一体どんな能力を持っているというのか。

「まあ、あのままマーカラの技をお前が相殺してたら、カウンター攻撃でお前は確実に死んでいた。だが――」

「能力自体に欠点があるのか」

確信は無い。だが、俺の答えにヴォルフは静かに頷く。

「その通りだ。所詮Xといっても紛い物。どの生物よりも脆く弱い。紫外線と熱を与えてやれば、それだけで奴の生み出すXは壊れていく」

続けて、死体から復活した奴やヴァンパイアが太陽の光に弱いのは、そこから来てるんだと言って締めくくる。

成る程、太陽の光が弱点とされる怪物の話。大抵は、奴の能力による産物か。奴を倒しさえすれば、自然発生を除いた殆どのXが消滅しそうだ。

いや、それ以前にバラライは一体、何世紀前から存在しているのだろうか。ミシエルやミハエルを知っているという事は、二人も同じ時代に生まれたのだろうか。

いや、有り得ない。数世紀も存在しているXなんて。考えただけでも馬鹿馬鹿しい。仮にいたとしても、Xという肉体を維持するた

めに、どれだけ膨大な魔力が必要だろうか。

「まあ、七体のXのうち一体を倒したんだ。これで――」

「いや、お前が倒したのはダミーだ。ちなみにダミーの正体は、血中の赤血球にドウムズデイを使った紛い物。本体は更に強い」

赤血球に能力を使う。成る程、赤血球は核がなく使い捨てられる細胞。毛細血管など細い血管へ入るために、核を無くし折り畳めるようになっていて。だからこそ、細胞の隅々まで酸素が送れる……らしい。もっとも、九条院長から聞いた話だが。

その性質や特徴故に、ある意味で赤血球は元から死んでいる細胞。正に、能力で自分のクローンを造るのに最適という事か。

「まあ、Xを倒した事に変わりはない。マナの小遣い程度は稼げただろう」

そう言つと、俺は再びマナの居る方向へと歩を進める。マナは俺の大事な家族。だからこそ、早く助けなければいけない。忘れる訳がないさ。

「待て、良い物をやろう」

だが、ヴォルフが俺を呼び止める。俺が呼び掛けで止まると、手に銃と数発分の弾を押し付けてくる。レンコン型のリボルバーが特徴的な、銀色の回転式拳銃。引き金自体が、力をあまり使わない所にある。成る程、シングルアクションか。

俺は奴の理解不能な行為に、思わず思考を止めてしまう。だが、すぐに冷静さを取り戻し、軽く言葉を投げる。

「銃刀法違反の共犯者になれと？」

「いや、敢えて言うなら王子様のキスだ。それをマナに撃ち込んでみな。どんな怪我也、瞬時に奪い取る弾丸だ」

あらゆる怪我を奪い取る弾丸。正直、胡散臭いキャッチコピーだ。信用出来る訳がない。

だからこそ、俺は銃に弾を装填し、ヴォルフに向けて放つてみる。すると、ヴォルフの怪我が徐々に治り始め、代わりに弾丸が弾け飛ぶ音が聞こえる。

「てめえ、俺をモルモットにすんじゃねえ！ この治し方はかなり痛えんだぞ！」

「良かったじゃないか。傷が治って」

ヴォルフが喚き散らしているが、俺は笑いつつ敢えて無視を決め込む事にした。

やはり、信用するには何事も見た上での経験が一番だ。百聞は一見にしかず。昔の人間は上手い事を言っただと思う。

それにしても、この治療法は案外使えるかも知れない。敢えて言うなら、痛みを伴うという部分は改良が必要だ。それを考えれば、九条院長やマナ、カオルの治療法はかなり優れている部類なのかも知れない。

「アンタ達、やっと漫才が終わったの？」

声の方へ向くと、オレンジ髪の少女が俺達を睨み付けていた。ただ、表情は不機嫌そうだが。どうやら、今まで無視されてご立腹らしい。

「ああ、ネコか」

そこで俺は、思い出した様に呟く。構ってやれば、少しは機嫌が良くなるだろう。

「まあ、呼び名は何だって良いわ。とりあえず、九条の弟子！ アタシと勝負しなさい！」

流石に、これ以上戦いたくはない。俺はヴォルフとアリシアに背を向け、手を振って別れを告げる。これ以上、マナを待たせたくないから。

「待ちなさ——」

「後で構ってやるから、そこで待っている」

ネコの言葉を遮ると、俺はマナの所へと駆けていった。

類似

辺りを見渡してみるが、前後左右に敵が見えない。ようやく振り切ったか。このまま、マナの所へ――

「アタシからは逃げられないわ!」

辿り着くのは難しい様だ。言葉と同時に、前方からオレンジ色の髪をした少女が出現する。どうやら、わざわざ俺を追い掛けてきたらしい。

今思い出したが、人間の脚力でXから逃げられる訳がない。こいつ等の十八番は、一瞬が一分に感じる程の高速移動。今日既に、ネクスト級に進化したケンタウロスと戦った時に見ている。

「どう? アタシと戦う気になったでしょ?」

少女が人差し指を向けつつ、俺に向かって尋ねる。俺はそんな少女に溜め息を付きつつ、両手を挙げて参ったという意思を示す。

今日自宅にXが現れたと思えば、今もなお変な奴に付き纏われる。俺は今日、何かに憑かれていたのだろうか。

「解った。特別に相手をしてやる。ただ、その前に聞きたい事がある」

「何よ?」

そう、敢えて触れない様にしていた事。それは――

「九条院長の弟子ならば、誰でも良かったんじゃないか? マナやカオル、更に一部の教員も彼女の弟子だ」

「え?」

俺の言葉に対し、少女が疑問の表情でフリーズする。しかも、何をバカな事を言ってるんだと、今すぐに言いたそうな顔だ。

まさかとは思うが、俺以外にいる九条の弟子。その特徴を知らなかった……というオチかも知れない。九条院長から聞いた弟子が、俺だけだったという可能性もある。

「ああ、そういう事ね」

少女の方は何かに納得したのか、右手で握り拳を作り左手に打ち付ける。嫌な予感がするのは気のせいだろうか。

「簡単よ。九条が五人の弟子の中で——アンタが一番強いって言うたからよ！」

少女はそう叫ぶと、体内の魔力を一気に放出する。奴の放つ血色の魔力がオレンジへと変化し、魔力が三対の翼を形成していく。その様は正に天使。俺達異能者が、便宜上名付けた使徒級^{アポストル}。その階級に相応しい姿だ。

変化はそれだけじゃない。少女が宙に浮き、俺の周囲で“魔力が練り上げられた”残像を出しつつ飛行する。ただ円を描きながら飛ぶのではなく、残像でドームを形成する感じた。残像が徐々に増していき、最終的には本物の少女がどれか解らなくなる程の数になっていく。

九条院長、余計な事を言ってくれたな。確かに俺は、九条院長の弟子の中でも強い。だが、カオルも俺と互角の実力だ。ならば、カオルでも良い気がするんだが。どうやら俺は、また知らないうちに九条院長の悪質な病の被害者^{モンスターベアレント}となつたらしい。

「何だこれは——」

少女の滑空が停止すると同時に、俺は何百にも増えた少女を見回す。全員が空中停止しながら羽ばたき、俺を見下ろしている。

「これがアタシの能力コピーキャット。アタシを複製する能力よ」

これは中々の能力だ。“残像だった少女全て”から、アポストル級の魔力を感じる。ならば、全員の高速振動も可能という事か。

ただ、正直言ってまだ足りない。そもそも、“今まで隠していた魔力”を堂々と出している事が間違いだ。Xの魔力は、基本的に血の色。ただ、あの色は本来の色を隠すためのオブラート。色がオレンジ色へと変わったという事は、あれが少女の持つ本当の魔力か。

愚かな。魔力の色と性質、能力を俺に見せた瞬間から、敗北は決まっているというのに。ヴォルフには出来なかったが、少女の能力ならば条件を満たしている。

「どう？ 流石にアンタでも、三百八十体いる分身全てを相手出来ないでしょ？」

少女が勝ち誇った様な笑みを浮かべつつ、大きく胸を張る。ダメだ。どうやら、一度痛い目に遭わなければ理解出来ないらしい。

「既に、相手をしてやる必要は無い。ソリユーション」

俺は技名を呟くと、周囲へ魔力の霧を散布する。すると、少女の分身が魔力単位で分解され、分身は跡形もなく消えていく。

ソリユーション。戦闘で解析した能力や魔法の構成要素を基に、自身の能力で上書きし魔力へと還す技だ。 “性質を理解している”
事により、初めてこの技のトリガーが引かれる。アイン・ソフ・アウル 粒子支配という能力だからこそ可能な技だ。

「嘘……」

俺の能力による技を見た瞬間、少女は有り得ないと言わんばかりに首を振る。

「嘘じゃないさ。単に格の差だ」

俺は静かにそう呟き、続けて口を開く。

「お前の敗因は、魔力による具現化が能力だったという事だ」

そう、敗因は単に相性が悪かったというだけ。ヴォルフみたいに、直接触れなければ発動しない能力。ああいう系統ならば、良い勝負が出来ただろう。他にも、カオルや九条院長の様に、世界の法則その物を操る能力。二人の能力は能力の支配が適用されない——それ以前に、法則なんてどうすれば操れるのか不明だ——から、俺の能力にとって相性が悪い。

分解するには、魔力を何かに具現化する能力。魔力自体が能力として体外に排出されれば、後は勝手に自滅してくれる。

「実に惜しい。手の内を明かさなければ、俺を倒せたかも知れないのに」

能力を使わず、高速移動で攻撃すれば勝てただろう。何故ならば、俺は今日既にリミットである三回まで、高速移動を使っている。だからこそ、軽く仕留める事が可能だ。

ただ、四回目以降は使えない事もない。唯一の欠点は、能力の暴走により神ヶ丘のシステムにダメージを与えかねない事だ。そもそも、暴走自体が俺の一番強い技へのギア。少女など、クレーターを残して跡形もなく消える。

ただ、少女は自分の敗けを認めたくないのか、下を向いて静かに震えている。

「何よ……何よ偉そうに！」

少女が急に顔を上げ、俺に向かい叫ぶ。表情は明確な怒り。怒りに呼応するかの如く、翼を形成していた魔力が噴射へと変化していく。

「アンタ達人間は、神になったつもりなの？ 冗談じゃないわ！」

言葉と同時に、少女の瞳から大粒の涙が溢れ出す。どうやら、逆鱗に触れてしまった様だ。

「アタシは……アタシは、アンタ達の玩具にされるために、生まれてきたというの？ ねえ……？ 教えてよ……」

——俺やマナは、戦いの道具なんかじゃない！——

少女の言葉で、俺の脳裏に忌まわしき過去が蘇る。全く、嫌という程に俺達は似ている。

かつての俺は、世界に居場所が無いと考えていた。退魔士としての俺。神代の次期当主としての俺。Xの混血かも知れない俺。そして、ミハエルの能力で暴走し、幼いマナを傷付けてしまった俺。全て俺自身だ。ただ、どれも重く辛い。

だからこそ俺は、そういった責任に押し潰され、マナを置いて家から飛び出した。もう傷付きたくない、もう誰も傷付けたくない。今思えば、現実逃避でしかない。正直、後悔している。

行くアテもなく、さ迷っていた俺を救ってくれたのは九条院長だ。あの人は、俺を本当の息子の様に接してくれた。だからこそ、俺は九条院長に感謝している。

俺は今まで、父親の隆盛や母親のミシエルにすら甘える事など無

かった。妹のマナは俺になついていたが、当時の俺には祖母や九条院長、カオルしか心を開ける人間がいなかった。いや、違う。退魔士としての俺が、無意識に心を閉ざしてしまったんだ。

お陰で、カオル以外の幼馴染みと距離を置くようになり、俺は孤独になつてしまった。

そんな時だ。九条院長があの家を俺にくれたのは。当然、俺は九条院長の申し出を一度断った。だが、九条院長はそれでも折れてはくれない人だ。ならば、カオルを大家にして家賃を払えば良い。それならば、自立したのと同じだと。そうして、俺達二人の生活が始まったんだ。

だが、ある日生徒会メンバーとマナが、俺達の家へとやって来た。メンバーの中にはカオル以外の幼馴染みが多数。懐かしき顔触れだったが、正直俺は会いたくなかった。だがあいつは――

そう、俺の運命は、あの日から変わったんだ。

猫箱

——神代家の人間、マナの兄、母親がX？　じゃあ、本当のあんたは何処にいるのよ！——

よりによつて、あいつの言葉を思い出すとは。当時の俺は、あいつの言葉全てが過去の俺には衝撃的だった。けど、あいつの言葉で俺がマナとやり直す事が出来た事は事実だ。

——確かに、今までのあんたは演じてきただけかも知れない。けど、あんたには響夜という立派な名前があるでしょ！——

唯一、俺を“ただの響夜”として認めてくれた少女。小鳥遊冬音^{たかなし とつね}生徒会で最弱の九番目。マナにとって良き先輩。当初は、そんな認識しか無かった。

だが、あいつの真っ直ぐな心。俺がかつて、何処かに置いてきてしまった想い。マナを引き連れ、マナの目の前で堂々と俺を殴り飛ばした。その時の言葉、正直痛かったな。今まで受けてきた如何なる攻撃よりも、俺には確かに響いていた。いや、今でも響いている。お陰で俺は、マナを妹としてでなく一人の人間として向き合う事が出来たんだ。

だからこそ、過去の俺自身でもある少女に負ける訳にはいかない。そうたる冬音。

懐かしき過去を思い出しつつ、俺は少女を鼻で笑う。

「何が……何が可笑しいっていの！」

涙で赤くなつた目で睨みつつ、少女が俺に向かい叫ぶ。だが、少女が怒れば怒るほど、俺には滑稽に映ってしまう。

何故なら、少女は“過去の俺”ではないからだ。“今の俺”は、少女の先に居る。最早、似て非なる存在。過去の——あいつの言葉が、それを思い出させてくれたから。

「お前は、今の自分に満足しているのか？」

俺は静かに諭すかの如く、少女に問い掛ける。何となく、少女がX化した理由が解った気がするから。だからこそ、救いたいと考えている。

「満足……してる訳ないじゃない」

一瞬躊躇ったが、少女は静かに自分なりの答えを俺に告げる。どうやら、自分自身を理解している様だ。賢いが故に苦悩する。先に進むのを躊躇っている。勇気の切っ掛けすらない。

多分、かつての俺と同じ場所に立っている。

「お前にはまだ良心がある。多分、誰よりも戦いが嫌いなんだろう。誰も殺していない事が、何よりの証拠だ」

そう、これが俺の導き出した少女の人物像だ。

Xが存在するには、魔力を摂取し続けなければいけない。確かに、大気中にも魔力は存在する。だが、大気中の魔力だけでXの代謝に追い付くか。答えはノーだ。

ならばどうするか。そうなると、Xは三つの道を歩む事になる。

一つ目は、代謝の限界による消滅。二つ目は、地球上に幾つか存在する魔力の源泉に住み着く。三つ目は、生物や他のXを襲い魔力を奪い取る。少女の場合、明らかに三つ目の選択肢で存在している。

ただ、三つ目は殺して奪い取った方が手っ取り早い。何故ならば、魔力は強い思念によって増大するからだ。絶望を与えて殺した方がより効率良く魔力が獲得できる。

だが、少女はそれを実行していない。確かに、人間を——一般人より魔力の高い能力者を襲っている。それでも、死者が一人も出ていない。代謝を維持するだけならば、感情に身を任せて殺した方が早いハズだ。それをしない理由は——

「お前は、人間を信じたい。違うか？」

「そうよ。けど、アタシは人間が怖い。また苦しむのが嫌だから」

俺の問い掛けに対し、少女が肯定する。多分、今から話す少女の言葉が、ただのネコからX化した事の正体だろう。強い思念によって生まれるX。思念には、未練の内容など関係無い。

「アタシは、親も兄弟もないの。ある少女が望んだからこそ、アタシが生まれたハズだった」

「ハズだった？」

かつてはネコだったのに、親も兄弟もない。普通は有り得ない。ネコは人と違い、一度に多くの子供を産む生物だ。五、六匹いてもおかしくないモノだが――

ここまで考え、俺はある可能性に辿り着いてしまう。望まれて産まれて尚且つ、兄弟が誕生しない。そういった生殖方法は確かにある。遺伝子技術の発達により誕生した技術。日本では認められていないが、“死んだ” ペットともう一度暮らすための夢。確かに、外国には存在する。それは――

「クローン技術か」

「そうよ。けどね、アタシが愛される事は一度もなかったわ」

そう、幾らクローン技術でも、死んだペットが戻る事などない。命は全てにおいて一つだ。代わりという例外はない。

幾ら遺伝子が同じでも、毛の色や性格が完全に一致する事など有り得ないのだから。

「毛の色が違うと言われ、オレンジ色の毛を灰色に染められたの。正直苦しかった。ただ、愛する女の子のために、耐える事が出来たのよ」

少女がここまで言うと、俺は少女の表情に闇が見えた気がした。

ネコは舐める事により毛繕いをする生き物。そんなネコに、人体にも有毒な染料で毛を染める。ただでさえ、発癌物質も混ざっているというのに。とても、正気の沙汰とは思えない。良心的に――いや、生き物の接し方の時点で、既に飼い主として失格だ。

あまりにも、酷すぎる仕打ちじゃないか。少女が、ネコが何をしたというんだ。

「けどね、あの子は性格が違うつてアタシを嫌ったの！」

俺の思考に対し、少女が急に叫ぶ。まるで、自分の悲しみを俺に叩き付けるかの如く。

よりによって、俺の予想の一つが当たる結果になるとは。そうなのと、少女の結末は――

「しかも、アタシが苦しんでも何もしてくれなかった。アタシは――アタシは墓すら立てられず、そのまま死んだのよ！」

俺の予想が完全に的中するとは。だからこそ俺は、いつも俺自身が嫌になる。

飼い主の虐待とも呼べる飼育。それが原因でX化したネコ。X化において、いつも悪いのは人間の方。全くもって皮肉な話だ。もはや、笑う気にすらならない。

遺伝子を――生き物の命をオモチャにして、引き起こされた悲劇。人間とは、なんて傲慢な生き物なのだろうか。真の化け物とは、Xではなく人間なのかも知れない。

いや、まだ人間は真の化け物ではない。真の化け物とは、いつも俺自身なのだから。

「そうか。ところで、飼い主はその後どうなったんだ？」

一番気になる所だ。X化した理由に当たる過去。それを聞く限りでは、飼い主が無事で済むとは考えられない。

「死んだわ。しかも、交通事故で。好い気味よ」

俺の言葉に対し、少女が吐き捨てる様に答える。

成程、飼い主へ復讐する前に死亡。事実を知っているという事は、復讐するために向かったのだろう。

因果応報。言葉だけなら、聞こえは良いかも知れない。だが、復讐からは何も生まれない。復讐からは、また新たな復讐が誕生する。だからこそ、Xが増える事はあれど減る事など無い。奴等は、あくまでも被害者なのだから。

「だが、お前は何処へ行こうとしている？ 復讐が出来ないならば、お前は何がしたい？」

「そんなの、アタシにも解らないわよ！」

少女の悲痛な叫びで、俺は確信に至る。

やはり、迷っているのか。多分、存在理由が欲しいからこそ、未

だに存在し続けている。自分が解らない——いや、知らないだけだ。自分自身を否定され、少女は未だに苦しんでいる。

九条院長が、俺に少女をけしかけた理由。きっと、今までの行動は気紛れなんかじゃない。九条院長の意図が、今ならば解る気がする。九条院長は、俺が少女と同じ痛みを知っている者だからこそ、俺に全てを託したんだ。

「俺と同じか」

「アンタに、アンタなんかアタシの何が解るって言うの！」

「ならば、お前に俺の何が解る？」

少女の叫びと同時に、俺は静かに問い掛ける。自分でも驚く程、言葉に込められた冷徹な響き。それに本能で気付いたのか、少女が一瞬だけ震える。

「正直、他の能力者やお前達Xが羨ましく妬ましい。今まで、そう思っていた」

俺は俺自身の言葉を皮切りに、俺の想いを語り出す。叶わないと知っっているがらの渴望。それ故の絶望。恐らく、俺の気持ちを理解出来る奴など存在しない。人どころかXにすらいない。

「何を急に……」

「俺は能力者とXの混血だ。今まで薄々気付いてはいたが、今日確信に至った」

「な……」

俺の言葉に、少女が言葉を失う。それはそうだ。信じると言われて、信じられる話ではない。実際、俺も受け入れるのに長い月日が必要だったのだから。

あの時のヴォルフの言葉は、殆ど肯定に近かった。お陰で、ようやく自分について理解出来る様になったんだ。

「だからこそ、お前に聞こう。俺は能力者か？ それともXか？」

「アンタは……アンタは能力者よ」

Xの立場に居る少女からすれば、俺は“能力者に見える”のか。だが、少女の言葉だけでは不十分だ。少なくとも、俺の心の中に響

いてこない。冬音の言葉や行動に比べたら、遥かに劣ってしまうのだから。

「傲慢だ」

「何ですって！」

少女の叫びが虚しく響く。そう、俺にとって少女の言葉は傲慢でしかない。

「それは、一方の立場にいるからこそ言える言葉だ」

「じゃあ、アンタは何だっというのよ？」

「化け物さ」

俺は自嘲するかの如く、たった一言で少女の言葉を切り捨てる。俺という存在をより簡潔に、より解りやすく表した言葉だ。

そう、俺は能力者でありXでもある。同時に、どちらでもない。ならば化け物という表現が一番当てはまる。それが、この俺だ。もつとも、それは“数ヶ月前の話”だが。

「だが、ある少女が俺を救ってくれたんだ。俺より遥かに弱い。そのくせに、俺を殴り説教する。正直、傑作だった」

「ふーん。で、何て説教したのよ？」

自分の心の闇を何処かに置いてきたのか、少女が興味無さそうに問い掛けてくる。いや、訂正だ。表情だけならば、言葉の先を知りたいと望んでいる様に見える。少なくとも、俺はそう感じていた。

「そいつは俺に向かい、響夜という立派な名前があると説教をしたんだ。実際、そいつは俺を一度も神代と呼んでいない」

そう、俺はいつも神代の天才として持て囃されてきた。物心が付いた時から、能力と神器が使えたからだ。だからこそ俺は、今まで他人に弱い部分を見せなかった。いや、見せる事が出来なかったんだ。

退魔士において、力こそがステータス。個人の感情なんてどうでも良い。よりによって俺は、退魔士の名門・神代家に生を受けてしまった。幼い頃から、何度自分の境遇を呪った事か。マナを傷付けた事も含めて俺は、俺自身が一番嫌いだった。

だからこそ俺は、この世から居なくなってしまいたい。そう強く願う様になつていた。そうすれば、少なくとも俺が幸せになれると信じていたから。こういった想いが、家出を自然に促していったんだ。

だが、冬音は他の奴等と明らかに違っていた。俺が神代の人間だと知らなかった訳じゃない。カオルと同じく、一人の人間として見てくれていたんだ。

「だからこそ俺は、例え化け物でも俺自身を認められる様になったんだ」

最早、能力者が×かなんてどうでも良い。シュレーディングァーの猫という発想自体が、そもその間違いだつたんだ。五分五分というパラドックスによるジレンマ。それを構成する猫箱うんめいなんて、最初から破壊してしまえば良い。

答えが二択しかないならば、どちらも選ばなければ良いんだ。癪だが、あいつに教えられた答えの一つだ。だからこそ俺は、マナや目の前の少女を見捨てる気など更々ない。誰かが救わないならば、俺が全て救ってやる。

「だからこそ、答えてやる。俺は俺だ。事実がどうであろうと、響夜という一人でしかない。それが、俺の答えだ！」

これが、少女に対する俺の宣戦布告だった。

名付

「俺は俺……か。アタシはアンタが羨ましいわ。自分の運命を受け入れて、尚も生きようとする。アタシにはまだ出来ないから」

そう、“まだ”出来ないだけだ。切っ掛けさえあれば、どんな奴でも変わる事が出来る。何故ならば、俺がそれを証明しているからだ。少女も恐れなければ、変わる事など容易い。

変化に恐怖を感じるのは、生物として当然の感情だ。だが、恐れているだけでは、何も変わらないし変わらない。俺は既に、そういった恐怖を克服している。だからこそ、過去に対し恐れる事など何もない。

「お前も変わる。そう言っても、受け入れる事は容易ではないかならば、俺を倒して否定してみせろ」

そう言いつつ、俺は両腕を真横へと広げる。

そう、もっとも原始的だがより効果的な事だ。自分が正しいのなら、力で押し伏せれば良い。気に食わないのなら、敵と見なす全てを否定すれば早い話だ。もっとも、俺自身は倒される気など更々ないが。

俺はマナの前で、二度と負けないと誓った。実際には、マナを一人にさせないという約束だ。だが、それは“死んではいけない”事と同義。俺の敗北は、つまり死亡だ。俺が死亡すれば、自動的にマナとの約束を破る事を意味している。

俺に言わせれば、勝利とは生存という言葉と同義。ならば――

「じゃあ、アタシはアンタを倒す。それで良いわね？」

少女が、笑みを浮かべつつ俺に問い掛ける。理解が早くて好都合だ。来い。俺が全て受け止め流した上で、お前を倒してやる。

「ああ、倒せるものならば」

俺は微笑みつつ、右手の親指のみを立てる。そして、自身の首を横へかつ切る動作をする。

「言われなくても——やってやるわよ！」

言葉と共に、少女の姿が消え俺は吹き飛ぶ。成る程、高速移動か。いきなり能力を使った時よりは進歩した様だ。だが、まだ足りない。ペイン・イレイズで痛みを感じないだけではない。この程度では、まだ俺やカオル、そしてヴォルフ達が立つ場所には遠く及ばないから。

「足りない、まだだ」

「負け惜しみかしら？」

少女が出現し、俺を回し蹴りで弾き飛ばす。そこから、更に追い討ちを掛けてくる。

確かに、コピーキャットを無効化した時より、明らかに少女は賢く強くなっている。だが、この程度ではまだ俺を倒せない。更に言えば、未だにマナとの約束を破る程のダメージすら負っていない。そもそも、ペイン・イレイズで痛みすら感じないが。所詮はこの程度か。

いや、違う。コピーキャットという能力自体が可能性の塊だ。少女が考えている以上に強大。応用すれば、俺を倒せるハズなんだ。「負け惜しみ、か。そう考えてる時点で、お前は俺に敗北している」そう、敗北しかない。何故ならば、俺の言葉を聞き流しているからだ。俺自身を化け物と称した理由が、まるで解っていない。ネコに俺が何者かと聞いた訳も今に解る。

Xも魔力の摂取に利用しているが、人を絶望させ殺せば魔力が増大する。正確には誤りだ。実際は、絶望で脳のリミッターが解除されただけ。人間の本能を引き出し、本来の魔力を使わせているに過ぎない。つまり、あらゆる能力者は普段、本来の力を引き出せていないという事だ。

だが、そこにXの特性を加わるとどうなるか。Xは思念の増大によつてのみ進化する。同時に、魔力も増大し強くなるんだ。Xは進化する度、より人に近い姿となる。いや、“より天使や悪魔に近い姿”になるという表現が正確か。アポストル級の人の姿は、本来の

戦闘力を封じ込めているに過ぎないのだから。

ただ、俺は能力者とXの特徴を併せ持ったまま生まれている。つまり、追い詰められる度に、俺は本来の戦闘力を引き出す事が可能いや、正確には追い詰められてこそ、初めて本来の戦闘力が引き出せるんだ。

「言っただろ？ 俺は化け物だと。能力者とXの特徴を思い出してみろ」

「アンタ何言つて——まさか、更に強くなるためにわざと！」

そのまさかだ。早く倒さないといけない。マナが待っているから。少女を倒しつつ、素早くマナの所へ向かう。高速移動が使えない以上、この方法しか存在しない。

「早く倒さないと、俺は更に強くなるぞ。さあ、どうする？」

ただ、同時に少女の悪足掻きという物を見てみたい。窮鼠猫を噛む。現時点で窮鼠は俺だが、すぐに立場が逆転する。その時、少女はどう対処するのか。実に楽しみだ。

本当ならば、高速移動を四回以上使用した上で、極夜を腹に突き立てても同様の事が可能だ。だが、この方法は確実に暴走する。周囲の大惨事だけでは済まない。メインや予備も含め、電気系統の設備が確実に故障する。住宅や病院、発電所も関係なく。今は夜だから、使えば住人がパニックを起こす。

だからこそ、こんな面倒臭い方法しか使えない——もう一つ、あるにはあるか。

「妹の所へタダで行かせてくれるのならば、使わなくて済む」

「そんなに大切なのか？ アタシには理解出来ないけど……」

俺の提案に対し、少女は疑問に満ちた表情で尋ねてくる。

そうか、こいつは家族の暖かさを知らないまま死んでいる。ならば、理解が出来ないのも当然。哀れ、実に哀れ。やはり、Xは悲しい存在だ。

「理解出来ないなら、感じてみるが良い。俺の強さをな」

言葉と共に、掛けていたペイン・イレイズを解除する。すると、

今まで溜めてきた激痛が一気に押し寄せ、俺を気絶へと追い込もうとする。

だが、まだ倒れる訳にはいかない。正直、一番やりたくない方法だが、マナの事を考えれば手段は選べないか。

俺は両手を合わせ、全身の魔力を一気に解放していく。

「フォックス・スリープ」

体内の魔力が無数の刃となり、脳を除いた全身の血管を切り刻んでいく。全身の傷が痛みに変化し、快楽へと昇華している。独特の生暖かさと金属臭が全身を支配するが、そんな感覚すらも無くなっていく。

意識が遠退き倒れつつも、俺は常に護るべき者を思い浮かべる。

笑顔——あの子の笑顔を守りたい。あの子だけは、俺とは違う道を歩んで欲しい。誰かがお前を傷付けようとも、俺が何度も助けてやる。だからこそ、俺は何度でも妹の名を——お前の名を呼んでやる。

「マナ……マナアッ！」

掠れた声で、俺の大切な者の名を叫ぶ。例え全てを失っても、この意志だけは潰させやしない。例え、俺が俺でなくなってもだ。

すると、俺の意志に呼応するかの如く、俺の体内に存在する魔力が増大し放出されていく。魔力が流血を防ぎ、消えかけていた意識を一気に覚醒させる。そして、俺を能力者やXとは別の存在へと再構築していく。

俺は覚醒した力で立ち上がり、魔力を更に放出する。白い魔力と赤黒い魔力が一気に放出され、俺の周りで螺旋を描く。二つの魔力が混ざり合い、二つの色とは明らかに違う色へと変化していく。

スカイブル

その色は、正に空色。俺が大好きな青空の色。雲や星すらも包み込んでしまう、透き通った蒼天の色だ。俺の——化け物としての本来の力。俺の魔力が背中から放出され、三対の翼へと変化していく。変化は魔力だけではない。髪が一気に腰付近まで伸び、黒から空

色へと変わっていく。

変化が完全に終了した事を確認すると、俺は顔を上げ少女を見据える。

「な、何よその姿……。その翼、魔力……。なの？」

少女が驚くのも無理は無い。俺の翼は確かに魔力だが、少女の翼とは密度がまるで違う。最早、エネルギーではなく物質化している。素養が無い者でも翼だと視認する事が出来、更に触れる事が可能な程に魔力が密集している。

「そうだ。これが俺の真の魔力。そして、真の姿だ」

俺はそう言いつと、足の指先をバネと仮定し、少女の所へと跳ねる。その時間は、少女の瞬きや高速移動の制限時間にすら満たない。

「早い！」

少女の顔に驚愕が浮かび上がる。

「違う、お前の反応が遅いんだ」

俺はすかさず少女の腹部を払う。すると、少女がパチンコ玉の如く吹き飛ばされ、苦痛の悲鳴をあげながら宙に舞う。そして、大きな音と共に地面で一度跳ね、強く叩き付けられる。

少女の軌道を全て確認すると、俺は地面に倒れている少女へ一步步つ向かう。

「立て……。ない。そんな……。！ コピーキャット！」

掛け声と共に、少女の体から分身が次々と発生する。だが、飛行しながら出していないせいか、出現する速度が明らかに遅い。小さな水滴が、水道から一滴ずつ落ちるくらいの感覚だ。

「悪足掻きだ」

分身が出る度に、俺は手刀で分身を断っていく。本来ならば人間と硬度が変わらないであろう分身も、手に感覚が残る事もなく霧散していく。霧散して魔力となるが、魔力は俺の体内へと吸収されていく。

「アンタ……。本当に能力者……。なの？」

「言ったハズだ。化け物だと」

そう、俺は能力者でありXでもある。つまり化け物だ。だからこそ、俺は少女に忠告した。この姿には、デメリットが多過ぎるからそれに、手加減が難しいんだ。

マナを半殺しにしてしまったあの日から、俺はこの姿と力が使える様になつていた。自由自在まではいかないし、力の制御も難しい。何より、魔力の燃費が悪い。

維持可能な時間は十分。それ以上は魔力の枯渇。すなわち、死亡を意味している。

「降参しろ。出来れば、命を取りたくない。せつかく、Xとしてやり直す人生だ。優しいお前ならば出来る」

「出来ないわよ！」

まだ心を開けないか。だが、俺は少女がやり直せると信じている。Xとしてでなく、一つの存在として彼女を知ってしまった。だからこそ、言い切れるんだ。

正直、俺の考えは退魔士としては失格かも知れない。だが、俺は誰の指図も受けない。俺のやり方でやらせてもらう。俺はあくまでも俺だ。

「ならば、せめて名前を聞かせろ」

「無いわよ。もう忘れたから……」

俺が話を切り出すと、少女は戸惑う様に声を発する。

「ならば、俺が名付けても良いか？」

「何でも、良いわよ……」

少女が、消え入る様な声で了承の意思を伝える。

何が良いだろう。ただ、出来ればあまり変な名前を付けたくない。名付けるには、簡潔かつ解りやすい名が良い。そう、今日戦った“ケンタウロス”の様に。

少女の基がオレンジ色のネコ。しかも、赤いリボン付き。この中で名前として使えるような物は——よし、決まった。

「ならば、イブニングという英単語の綴りの略でイヴでどうだ？

お前の毛から、夕方を連想して名付けてみた」

俺が今まで名付けた中では、上出来の部類だ。簡潔で解りやすい名付けるといふ儀式は、何よりも神聖なモノだと思う。名前に意味を持たせる。それと同時に、存在として意味を持たせる。名前を付けられた存在は、何者にも否定する事が出来ない。

ならば、俺は——俺とマナは誰にどの様な意味を込められ、今の存在へとなったのだろうか。マナという漢字は“愛”と書く。マナの名前ならば、何となく解りそうだ。だが、“響夜”という意味はまるで解らない。何故ならば、誰に名付けられたかなんて聞いた事が無いからだ。

カオルは草木が薫るという字に、琉球の琉で“薫琉”と書く。かつて九条院長から聞いた事がある。名の由来は聞いた事無い。本人曰く、考えて付けたいらしい。

だからこそ、俺は少女の名を考えて付けた。少女に、イヴとしての存在意義を与えるために。

「イヴ、か——まあまあね」

俺の名付けに対しまあまあと言いつつ、少女——イヴは新たな名前を気に入った様に復唱している。

「さて、気に入ったらしいからそろそろ行くか」

俺は動けないイヴを置いて、マナの所へ向かおうとする。すると、後ろから可愛らしい抗議——むしろ、罵倒に近い言葉——が俺の背後から何度も聞こえてくる。

「何だ？ 俺は忙しいんだ。後にしてくれ」

「ちよつと、アタシを置いて行くつもり？」

そんな事が、愚問だ。実に愚問。太陽に向かって、あなたは何故太陽という名前なのかと聞く程に愚か。答えは決まっているというのに。

「当たり前だ。悪いが、俺はいつもマナを優先している。付き合ってたっただけ、ありがたく思うが良い」

「鬼、悪魔！ やっぱり、アンタ達は似た者師弟よ！」

「Xから、そんな言葉を聞くとは思わなかった」

鬼に悪魔。どれも別のカテゴリーに該当するXの呼称。能力を持たない人が使う罵倒だと聞いた事はある。まさか、俺達により近いアポストル級のXから、あんな“人間らしい”罵倒を聞く事になるとは。俺はイヴを滑稽に思ってしまい、つい微笑んでしまう。

成る程、九条院長にもボコボコにされ放置された様だ。ならば、恨んでやって来ても無理は無い。似た者師弟とは、正に光栄な誉め言葉じゃないか。

「いつでも相手してやる。だから、そこで寝ていろ」

そう言つと、俺は爪先で踏み込みイヴのもとから去っていった。

必然

一歩また一歩と弾く様に駆けていく度、俺は少しずつ加速していく。マナの微弱な魔力を感じる方向へと。

残り八分か。少しお喋りが過ぎた様だ。だが、まだ間に合う。何故かは解らないが、そうだと解る気がする。兄妹として共鳴しているのか。或いは、何か別の要因で繋がっているのかは解らない。ただ、まだ救う事が出来る。俺の中の“何か”がそう教えている。だからこそ、戦いで冷静さを保っていたかも知れない。

マナの微弱な魔力が更に近くなる。同時に、微かだが脈動らしき波動も感じる。だが、そんなモノで俺に不安は生まれなさ。俺は

「マナ」

俺の魔力感知に引つ掛かる距離へ辿り着くと、俺は思わず名前を呟く。同時に、俺は変身を解除し、愛する家族のもとへと駆け出していく。

近付く度鮮明になっていくその姿。何度も見ているから間違いようがない。彼女が普段から手入れしている髪は、乱れて地面に広がっている。腹部の傷から溢れ出たであろう、彼女を眠らせるために存在する鮮血のカーペット。まるで生け贄とするかの如く、彼女を中心に広がっている。そんな姿を見て俺は、すぐにマナの身体へと駆け寄った。

カオルと同じか。確か、イヴが言っていた。二人は、青髪の特攻服に倒された。だが、カオルと違いマナはまだ救えそう。何故ならば、魔力を感じる事が出来るからだ。俺は少しだが安堵し、いとおしそうにマナの頬を撫でる。

すると、マナの身体に変化が現れる。金色に輝く円がマナの身体に出現し、円の内部に直線で幾何学的な模様を描いていく。まるで、

見えない筆が走り書きするかの如く。円の縁には見た事がない文字が描かれており、何を意味しているのか解らない。ただ、この円が何なのかは、本来“あの分野”が専門外の俺にも解る。

「魔方陣か」

マナの身体に、これでもかと敷き詰めた円。それは、魔術を使う時に出現する魔方陣だった。恐らく、この魔方陣自体の役割は延命か再生のどちらかだろう。周囲に存在する微弱な魔力を吸収し、瀕死状態のマナの生命力へと変換している。

成る程、だからこそカオルと違い、マナの魔力を感じ取れたのか。生命として、死という概念が成立していない。あらゆる人間の生命力とも呼べる魔力。それ自体が消えてないならば、少なくともマナは死ぬ事はない。そういう事か。

しかも、魔方陣が発する光の正体が、明らかにミシエルの魔力。十数年も面を合わせてきたから、見間違える事などない。一応、親として娘を救おうとは考えたらしい。ただ、マナを置いて逃げ出した部分だけは誉められないが。

それにしても、よくも妹に無茶な術式を組み込んだな。生きてる人間の身体に、魔力で魔方陣を直接刻み込むとは。こんな滅茶苦茶な物を何個も刻んで、もしマナに何かあつたらと考えなかったのだろうか。

正直、あまり考えたくはない。だが、互いの魔力が拒絶か反応した挙句、マナの身体が爆発していたかも知れないんだ。両親の魔力は確かに拒絶が少ない。だが、アマチュアの応急でもやって良い事と悪い事がある。

いや、ミシエルに文句を言っても仕方ない。とりあえず、たまたま成功例となった部分は感謝しようか。マナの笑顔が再び見られるのならば。

「マナ、痛いと思うが許してくれ」

俺はベルトから銃を引き抜き、両手で構えマナの腹部に向ける。そこから撃鉄^{ハンマー}を引き起こし、マナに向けて一発放った。いや、放っ

たハズだった。

俺の放った銃弾は、確かに爆音と共に当たるハズだった。だが、金属が軽く跳ねる音と同時に、銃弾が跳ね返されていく。銃弾の軌道上に、盾らしき魔方阵が出現した状態で。

「ミシエルめ、やってくれるじゃないか」

ならば、俺の残っている魔力を全て、白夜に変え叩き斬ってやる。俺は銃をしまい、右手に残った全てを込める。魔力が発光し刀になる――ハズだった。だが、現れたのは光で出来た飾り気が無いナイフのみ。

そうか、無理矢理魔力の限界を引き出し解除だから、本来の脳にセーブが掛かった状態に戻ったのか。現在使える魔力はこれだけ。何とも情けない状況だ。ナイフ状になった神器か。一応、白夜と同じくらいの高速移動の音が聞こえる。ならば、効果は同じか。

俺は右手でひ弱な白夜を構えると、盾に向けて振るう。だが、当たる直前に白夜が弾け、魔力となって霧散していく。

「ミシエルめ……どうやら、俺を怒らせたみたい様だ」

幾ら縮んだとはいえ、普段と能力は遜色がない。そんな白夜があるのミシエルの盾でアツサリと打ち消される。正直、事実を受け入れる事が出来なかった。いや、受け入れられるハズがない。

あんな幼稚な母親に、俺の全てを否定されたと考えるだけで苛々する。文字通りともいえる、十数年の血と汗による努力の結晶。それをよりによって、何の生産性もない“怠け者”に一瞬で消された。その事実が面白い訳がない。むしろ不愉快だ。

そう思っていると、空中に新たな魔方阵が出現する。唯一違う所は、中央に赤い文字で“警告”と書かれている事。しかも、丁寧に漢字で書かれている。

「やはり、俺をバカにしているのか」

俺は諦めの溜め息と共に、両手を挙げつつ首を横に振る。同時に、警告の文字に変化が訪れる。警告が消え、“排除”の赤文字へと変化する。

どうやら、俺の行動を威嚇か何かと勝手に判断したらしい。やはり、ミシエルは疫病神だ。

「排除だと。冗談じゃない」

排除と書かれた魔方阵から、無数の金色の光が俺に向けて放たれる。放たれた光は更に分裂し、クラスター爆弾の様に降り注ぐ。それに対し、俺は何度もバックステップや横跳びで回避する。だが、回避した光は着弾する度に、何度も強烈な爆風を至る場所から叩き付けてくる。

「厄介な。だが、魔力に頼る事のみが、俺の全てではない」

そう、魔力が無くても回避ならば可能だ。退魔士の名門として続いてきた神代が、戦闘における魔力の枯渇を想定しない訳がない。当然、俺は幼い頃からそういった修行もしている。それに、神代がそれに連なる者が、もし反逆した時の対処法も。

マナに刻み込んだ術式。構成要素はミシエルの魔力——つまり、血族の魔力だ。ならば、放たれる光も——自動で発動する様にはなっているが——ミシエルの魔力で構成されている事になる。つまり、ミシエルの魔力を知っているから、術式自体は破壊可能だ。ただ、ここまでは神代の初歩的な対処法。魔力その物が無ければ使えない。例え、魔力が無い状態での回避を使っても意味がない。

だが、俺の半分はX。ならば、他者の魔力を取り込む事が可能なはずだ。しかも、拒絶が最も少ない親の魔力。もし取り込む事が出来れば、マナを救い出す事が可能だ。ならば、答えは一つ。

「こい、ミシエル。お前の魔方阵を叩き潰してやる」
プログラム

俺は攻撃を回避しつつ、排除と書かれた魔方阵へ進む。魔方阵に触れさえすれば、魔方阵を自分の魔力に変換する事が出来る。その後は、能力でソリューションを発動させ、あの忌々しい魔方阵を消し去るのみだ。

「ヴォルフじゃないが、奪い取ってやる」

俺は魔方阵の前に立つと、両手で魔方阵に触れる。すると、ミシエルの魔力が俺の中に入り込んでくるのを感じる。

だが、入り込んでくる魔力が多すぎる。必死に抑え込んでいるが、魔力の出力が更に強くなっていくのを感じる。これは、少々不味い事になったかも知れない。

俺が魔方陣から手を話した時には、既に手遅れの状態になっていた。フォックス・スリープと同様の状態。暴走した魔力により、俺は内側から徐々に切り刻まれていく。

ただ、異変はそれだけではない。Xの魔力に蝕まれた時と同様に、内側から魔力同士が反発し炸裂していく。例えるならば、ネズミ火花を内側から投入された様な感覚。同じ家族だからとはいえ、俺とマナでは明らかに違う反応だ。まさか、母親の魔力に殺されかけるとは思わなかった。本当に血族なのか疑いたくなる。

「だが、使えない事はない。ソリユーション」

俺は力を振り絞り、能力に全神経を集中する。同じ魔力ならば、無効化が可能なハズだ。さあ、その忌々しい盾と攻撃の魔方陣め、跡形もなく吹き飛ぶが良い。

俺が能力を解放すると、目の前の魔方陣は音を立てつつ砕け散る。やはり、ミシエルは俺に勝つ事が出来ないらしい。

「勝った」

俺に敗北などあつてはならない。例え、親であつたとしてもだ。ミシエルの魔方陣と戦い、勝利の余韻に浸ろうとする。その瞬間だった。

「そんなバカな」

つい言葉を漏らしてしまう。何故ならば、目の前の光景が信じられなかったからだ。

破壊したハズの魔方陣が、再び組み上がっている。しかも、新たな魔方陣こぶんを周囲に引き連れた状態で。悪い冗談だと思う。まさか、俺の様なハッカーに対する、防衛プログラムまで組み込んでいるとは思わなかった。悪夢だ。全力でも、勝てるかすら解らない。

こういうのは、生徒会の八番目てんさいくんが得意分野だ。だが、カオルに頼みヴォルフとアリシアを呼んでしまった。今更男子寮に電話をして

も、間に合うとは思えない。距離は、遊園地から俺の家までの二倍に相当する。どう足掻いても二十分掛かる。

テレポーターで呼んで貰う事も考えたが、その考えもすぐに訂正する。奴の能力自体が、外部に干渉するタイプ。ならば、まともにテレポートが出来るかすら怪しい。

全く、お手上げた。まさか、目の前に最強の女王^{マナ}が居るのに、俺自身が王手^{チェックメイト}となるとは。実に情けない。

「待った——は無いだろうな。まあ良しさ。マナの目の前ならば悔いはない」

後に、ミシエルが九条院長がマナを助けてくれるだろう。ならば、別に良い。マナのお陰で、ここまで生きられたのだから。フランダースの犬で、ネロがパトラッシュと共にルーベンスの絵を見た。アレは、この様な気分なのだろうか。今ならば、解る気がする。

俺の両膝が、地面に崩れ落ちる。ミシエルによる裁きの雷で、焼き尽くす事を受け入れるかの如く。そして、昼と夜が逆転した。そう錯覚する程に広く高い、光の波が押し寄せてくる。

マナ、ありがとう。そして、さようなら——だ。

「ざあんねん。君はまだ死ねないんだよね」

鈴の様な声と共に、波が目の前で断たれていく。まるで、旧約聖書に登場するモーゼの如く。断たれた波は細かく分解され、綿毛の様に舞い消滅する。

俺の前に立っていたのは、俺が憧れている能力者だった。艶のある黒髪と同じく、風に靡く^{なび}白衣を着た女性。白衣のポケットに手を突っ込み、俺とマナの間に仁王立ちしている。

「九条……院長？ 何故……」

俺の疑問に対し、九条院長は振り向き俺に微笑む。

「ヒロインは常に、美しく登場するモノよ」

全く、こんな時にも平常心を崩さないのか。ある意味、恐ろしさを感じるよ。

「というのは冗談で、私がカオルを改造したからよ。意識を失えば、

私の携帯のアラームが鳴る様にね。ついでに、GPSも表示される。理解した？」

いきなり聞かされて、理解出来る訳がない。それに実の息子を改造……何か嫌な言葉を聞いた気がする。もし本当ならば、過保護にも程がある。

だが、カオルが倒された時、九条院長が何故まっすぐ来れたのか。改造の内容を考えれば、何となく納得がいく。少々やり過ぎだと思うが、彼女なりの愛なのだろう。

そして、息子を確実に死なせないための改造か。医者なのにも関わらず、九条院長がマッドサイエンティストに思えてしまう。

「ふむふむ……ミシエル、マナちゃんにとんでもない事をしたみたいね」

俺の不安に対し、九条院長が何か納得した様に頷く。

とんでもない事など、言われなくても解るさ。あんな術式をマナに組み込んで、俺すらも撃墜しようとする。正当防衛にしては、明らかに殺傷能力が高かった。正直、殺されると思う程に。

「マナちゃんは魔力に強く反応するから、術式をミシエルごと取り込んでしまったのね」

ならば、今のマナはミシエルと融合していると言うのか。冗談じゃない。つまり、中にいるミシエルを分離しない限り、術が発動し続ける。何度無効化しても、術が解けないという事か。

「ならば、九条院長。あなたならどう打開する？」

「えーっと……殺す、かな？」

俺の問いに対し、九条院長が微笑みながら答える。

笑顔で“殺す”と言われたが、嘘か本当かなんて解りはしない。

九条院長の場合、基本的に気まぐれな性格だ。子供っぽく、コロコロと表情や思考が変わる。ネコみたいに自由気まま。故に、何処までが真意なのか誰にも解らない。長年見てきた俺ですら、九条院長の本心がまるで解らないのだから。

「ちなみに、何を殺すと？」

「マナちゃんとミシエルだけだ」

ダメだ、九条院長の言葉が冗談に聞こえない。間違いなく、マナが殺されてしまう。

俺にはもう、九条院長を止める力が残っていない。それに、九条院長を止める方法が思いつかない。九条院長を止めるには、おばあちゃんか生徒会長リュウヤしかいないから。

だが、おばあちゃんは外出中。リュウヤは生徒会と皇グループの雑務だろう。

「それにしても、弱くなったねミシエル。私を初めて追い詰めた貴方が、実の娘に取り込まれちゃって」

九条院長が昔を懐かしむ様に語りつつ、倒れているマナの所へと歩み寄る。あの忌々しいミシエルが、超人的な九条院長を追い詰めた事がある。九条院長本人から語られても、正直実感が湧かない。

仮に九条院長の言葉が本当だとすれば、ミシエルは俺の想像以上に強いという事になる。九条院長を追い詰める程の実力を持ったX。九条院長が何故、ミシエルを野放しにしているのが気になる。

だが、九条院長にマナを殺らせる訳にはいかない。マナは、俺の大切な家族だ。例えば師を敵に回しても、俺はマナを護りたい。

俺はマナと九条院長の間に割り込み、両手を広げて九条院長に立ちはだかる。

「あら響夜君、まさかの反抗期？」

「マナは、俺が護る」

俺の言葉を聞くと、九条院長が急に俺の顔を殴り飛ばす。俺は体勢を整えようとするが、九条院長から胸ぐらを掴まれ激しく揺すられる。

「甘ったれた事を言うな！」

九条院長の激しい剣幕を見た瞬間、俺の身体に震えが走る。

「何が護るよ。現に、誰一人護れなかったじゃない！」

九条院長の怒りが、俺を鋭く貫いていく。

誰一人護れなかった。九条院長の言葉で、俺は思わず我に返る。

カオルやマナ、遊園地の観客。確かに、俺は誰一人護れなかった。この事實は、何があっても覆す事が出来ない。俺は、何て事をしてしまったんだ。自らの感情のままに行動した結果、取り返しの付かない事になりかけていた。とても償い切れない。

「まあ、チビネコを間接的にけしかけたのは私だから、あまり君を責められないんだけど」

九条院長が手を離し、困った様に呟く。恐らく、チビネコとはイヴの事だろう。ただ、イヴのお陰で覚悟を決める事が出来たのも事実だ。

「私ってさ、案外不器用なのよね。ミシエルが何者なのか知っておきながら、響夜君達に話せなかったし」

九条院長も知っていたのか。九条院長の口ぶりだと、俺やマナに話そうと考えていた様だ。だが、話す前に知ってしまった。それはどうしようもない。ただ、九条院長は俺達の事を考えた結果、今まで話さなかったのだろう。親の様に、愛してくれていた事実。それだけが解れば嬉しい。

だが、それならば何故マナとミシエルを殺すと言ったのか。全く理解できない。

「ならば何故――」

俺がここまで言うのと、九条は人差し指で俺の唇にそっと触れる。悪戯の様な笑みを浮かべながら。

「細胞ってさ、代謝で作り替えられるじゃない？ 生と死の循環だよね。だから、マナとミシエルを繋いでる部分を一度殺して新たに作り替えるのよ」

難しい言葉を使っているが、意味合い的には二人を分離させるという事だろう。九条院長は考えて行動していた様だ。疑っていた俺が悪かったと思う。

だが、そんな事をどうやってやると言うのか。九条院長が、優れた医者だという事は知っている。現に、死んだと思われていたカオルすらも蘇らせた。だが、混ぜってしまった二人を分離。今度こそ

不可能だ。出来る訳がない。

「まさか、不可能だと思ってる？　ざあねん。既に実験済みなのよ」

俺の不安を察したのか、九条院長が嘲笑う様に語りかけてくる。

ここまで来れば、最早笑うしかない。九条院長はデタラメな存在だ。その事は、今まで解りきっていると考えていた。だが、俺は何一つ理解出来ていない様だ。九条院長の語る技は、もう人間やXの領域じゃない。神の領域だ。

「じゃあ派手に——暴れてみようかな！」

九条院長が掛け声と共に、肩から“何か”を二つ放出する。二つの“何か”が一瞬蠢き、マナの方へと突撃する。だが、“何か”は盾に弾き跳ばされ、俺の頭に激しく衝突する。

痛みに耐えつつ、俺は“何か”を掴み顔の高さまで掲げる。すると、目の前には一匹のネコ。種類は、アメシヨ一のシルバータビーだ。ビアンカよりも大きな奴だ。何処かで見た様な気もするが、正直思い出せない。

対するネコの方は不満らしく、俺の手から逃れようと暴れている。
「コラ響夜坊！　いつまで私をぶら下げておく気だい！」

恰幅の良いオバサンを連想させる声が、ネコの方から聞こえてくる。ネコのくせに、いきなり俺を坊や扱い。良い度胸じゃないか。

「響夜、ローザを降ろしてあげて」

九条院長が、諭す様に俺を見つめる。だが、やはりネコが気になる。何故か知らないが、名前も含めて妙に懐かしい。ローザ、ローザ、何処かで——ああ、思い出した。

「まさか、マダム・ローザ？　死んだビアンカの母ネコか」

カオルの親友ビアンカ。彼女は、九条院長がかつて飼っていたネコ——名前は確か、ローザとネコだ——から生まれた最後の子猫。二匹は元々年寄りだったから、二匹ともビアンカを残して死んだ。それは間違いない。

「ようやく思い出したのかい……。まあ、Xになって再び出会えた

のも何かの縁かねえ？」

小さい頃から遊んでくれたマダム・ローザに、こうしてまた出会えるとは。Xとして生まれ変わった。その事実に対しては、少し複雑な気分だが。

だが、マダム・ローザは九条院長の身体から出現した。この事が意味する事実はただ一つ。

「使い魔として契約したのか」

「正解。元々飼ってたから、二人はアツサリと了承してくれたのよ。二人——という事は、もう一つの“何か”。その正体が解った。マダム・ローザのつがい、かつてはネコ達のドンだったネ口か。

恰幅の良いフワフワなネコ。腹を触っても嫌がらず、身を任せているおおらかなオス。だが、妻や子供を護る時には、牙と爪を使う事すら躊躇わない。そんな男気のある勇敢なネコだった。そんなネ口と、マダムは常に寄り添っていたつけ。

だからこそネ口は、神ヶ丘の子供やネコから慕われていた。ネ口とマダムの葬式で、沢山の子供やネコが集まり別れを惜しむ程に。俺から見れば、幸せに逝けたと思う。いや、思っていた。

だが、あの二匹がXとなり戦っている。何か未練があったのか。俺には解らない。それでも、あの二匹が眠る事なく存在している。そんな事実、俺は何故か心に苦痛を感じていた。

「心配しなさんな。私達の未練は、大したものじゃない。いずれ解る」

マダムの言葉に、何となく曇りが見えた気がする。いずれ解る。この言葉だけは、辛く悲しく聞こえてしまった。まるで、取り返しの付かない事の様に。

あの幸せそうだった二匹が、何を悲しんでいるのか。それを俺が知る事は出来ないだろう。聞けば教えてくれたかも知れない。けど、この時の俺は聞けなかったんだ。聞いてはいけない。何となく、そんな気がしたから。

「ヒカル。あの二人、対物理と対魔法の障壁で護られてやがる！」

もう一匹のアメショー——恐らく、ネロだろう——が、九条院長の所で叫ぶ。しかも、元飼い主を呼び捨てにしている。飼い主だから契約してくれた……というのは、九条院長の嘘か思い込みだろう。この関係は、かつての主従ではない。恐らく、互いに戦友として見ている。信頼しているからこそ、指示がスムーズに伝わるのか。

「知ってる。だからね——こうするの！」

掛け声と共に、九条院長の右手からステッキ状の白い棒が出現する。

まさか、手品のために出したのだろうか。いや、九条院長がそんな無意味な事をする訳がないハズだ。ただ、あの棒はどう見ても武器に見えない。それ以前に、棒から魔力すら感じないんだ。アレをどうやって使うのか、想像すら付かない。

「これ、私のケリユケイオン。神ヶ丘で一番万能な神器ね」

何か胡散臭いキャッチコピーだ。どこからどう見ても、白く塗った手品用のステッキじゃないか。九条院長には悪いと思うが、あんな“弱そうな”神器を今まで見た事が無い。

それ以前に、今まで見た事がなかった師匠の神器がアレだと。正直、様々な意味でショックを受けた。能力がかなり強くても、神器は真逆の方向性じゃないか。

棍こんにしては短く、あまり近距離戦には向いてない。槍の柄にしては細いから、敵をなぎ払う事すら出来ない。結論から言えば、戦闘には不向きだ。

「大丈夫。一応は貴方の師匠なんだから、私を信じなさい」

「いや……流石に無理だ」

魔力が見えない以上、あの神器に特殊能力は無さそうだ。だからこそ、あの神器は弱いという結論に至った。

「カオルの治療は信じて受けたのに、何で私は信じれないかな？」

「何故、それを……」

バカな。二人しか知らない事を何故知っている。九条院長に迷惑を掛けなかったための措置だったか、どうやら筒抜けだった様だ。

だが、あの時は九条院長の魔力を感じなかった。九条院長の魔力は、あまりにも強大で個性的だ。今でもカラオケにあるミラーボールの如く、無差別にカラフルな光を放っている。故に、物凄く目立つ。例えるならば、全裸の変質者が街中を歩き回る程に。

だからこそ、あの時は居なかったと言い切れる。

「忘れたの？ 私が何かに触りさえすれば、あらゆる情報がリークするのよ」

そうか、九条院長の能力はアストラル。第五元素——情報^{エーテル}を支配する能力。錬金術紛いの反則な能力だ。

ただ、能力で情報を読む事も出来る。以前、そう聞いた事がある。知っているのは、遊園地^{エーテル}の残留思念を読み取ったから。全く、プライバシーを完全に無視した能力だ。

「まあ、その事は後で叱るけど。とりあえず、神器の説明ね。この神器は、私の能力を余す所無く使えるのよ。要は、シンプル・イズ・ザ・ベストね」

九条院長のアストラルを極限まで引き出す神器。それが、手品ステッキもといケリケイオンの正体。ただ、シンプル・イズ・ザ・ベストにも程がある。

九条院長の性格上、どうせろくでもない事だろう。アポストル級ですら、彼女に深手を負わせた奴は一人もいない。それ程に強いのだから。

いや、訂正しよう。強弱で説明出来る類いではない。殺されるか生かされるか。物事における生殺与奪すらも、思い通りに支配してしまうレベル。九条院長と戦った相手に、権利などありはしない。手を出した時点で、敗北が決まっているのだから。

「ヒカル、そろそろ交代してくれ！ 何かヤバそうだ！」

ネロが、九条院長に救援を求めている。よく見ると、マナが真っ青の翼を生やして立っている。いや、浮いていると言った方が正しいか。

天使化——便宜上、翼が生えた状態をこう呼ぶ事になっている——

は、俺やアポストル級のXの戦闘力を高める形態。ならば、俺と血が繋がっているマナが使えてもおかしくはない。だからこそ、マナの背中に翼が生えても別に驚かない。

だが、正当防衛にしてはやり過ぎだ。俺はあの状態で何とか手加減したが、マナ達には手加減する理由がない。ただ、自分達に危害を加える全てを排除するのみ。そこに、一切の感情も入りはしない。天使化を止めるには、魔力の枯渇が無力化しかない。ただ、一度取り込んだミシエルの魔力は、あまりにも濃度が濃かった。恐らく、魔力の枯渇は不可能だ。無力化も、俺自身が試したけどダメだった。つまり、八方塞がりか。

ならば、母親の様に愛している師匠を信じるしかないみたいだ。頼む、マナを救ってくれ。

母強

「さあて、二十二年前との違いを見せてあげようかな」

九条院長が、マナを指差し宣戦布告する。

二十二年前。確か、親父と九条院長は同じ年。だから、今は三十八歳。そこから差し引くと十六歳。今の俺と同じ年齢から、ミシエルと戦っていたのか。

「響夜君。私はその頃、神ヶ丘で私に勝てる人なんて居ないと思ってたの。ただ、先生を除いてね」

多分、先生とはおばあちゃんの事だろう。九条院長の師匠がおばあちゃんだと、かつて親父から聞いたことがある。

おばあちゃんは、神ヶ丘最強の能力者であり退魔士でもある。俺が小さかった頃、おばあちゃんと一緒に海外でXの討伐をした事があった。ただ、海外での戦いはあまり思い出したくない。何故ならば、今でもトラウマになっているからだ。

九条院長が“あの”おばあちゃんの弟子ならば、九条院長の言葉に納得がいく。

「ミシエル、私がかつて味わった苦しみを教えてあげる」

この言葉と共に、九条院長が真上にステッキを振るう。確かに、ステッキを振るっただけ。俺にはそう見えた。

だが、瞬きする間もなく、ステッキが身の丈以上の戦斧へと変化している。嘘だろ。モーシヨンどころか、魔力すら全く感じ取れなかった。ただ振るっただけで、あつという間に変化する。まるで、本当に手品ショーを観ているかの様に。

対するマナは、一瞬で九条院長の背後を取る。そこから、スコールの如く無数の光を九条院長に浴びせていく。光が激しい轟音と熱風に変化し、九条院長が居た場所から光の柱が昇る。その光は闇夜を白へと塗り潰し、周囲が一瞬で昼に変化していく。

「九条院長！」

俺は吹き飛ばされない様に踏ん張りつつ、大声で九条院長を呼ぶ。だが、光の柱からは爆音しか聞こえない。

あの攻撃を至近距離から受ける。幾ら九条院長でも、形など残っていないだろう。これが、ミシエルの力の片鱗だというのか。夜を昼に変える程の魔力。人間で勝てる訳がない。

九条院長が居なくなつた以上、次は俺の番。能力すら使えない今ならば、マナによって確実に殺される。いや、寿命が延びたと考えれば良いか。マナに殺されるのならば、俺は何も文句はないし悔いもない。

「ざあんねん。この程度じゃあ、私に傷を付ける事すら出来ないの」柱の中から、九条院長の間延びした声が響いてくる。同時に光の柱が渦を巻き、徐々に萎んでいく。その中心には、九条院長が平然と立っていた。服に埃すら着いていない状況で。しかも、渦と化した光が九条院長の口へと吸い込まれている。

まさか、魔力を食べているのか。有り得ない。人間の身でありながら、Xの魔力を取り込むだと。俺ですら、“触る程度”の魔力で死にかけたというのに。

「響夜君。もしかして、死んだと思った？　まるで解ってないわねえ。私とミシエルの実力を」

九条院長が暢気に話している間に、マナが極太の光線を放つ。だが、九条はそれすらも手の払う動作でかき消してしまう。

笑顔で言われても、解る訳がないだろう。理解出来る奴がおかしに決まっている。至近距離で避ける暇すらない。その状況で無傷で立っている。しかも、他人の魔力を摂取すると、拒絶反応を引き起こすという常識。九条はそれすらも否定している。

九条院長の行動がまるで読めない。それ以前に、理解できる領域じゃない。

「響夜君知ってる？　脳って記憶のみに使い続けても、人間の一生で使いきれぬモノじゃないの」

「それが、何だというんだ？」

あまり知りたくないが、人間とは常に好奇心というモノが邪魔をする。後に、恐怖と後悔が待っている。俺の本能が、そういった警笛を鳴らしているというのに。

「私の能力は、情報を支配する能力。ならば、脳に情報を書き加え続けると——どうなると思う？」

この言葉で、ある結論に達してしまう。

脳に直接アストラルを使う。理論上、有り得ない事はない。運動に使われる筋肉や五感を司る神経は、全て脳の情報によってコントロールされている。もし、九条院長がそれを使えるならば、潜在能力を自在に引き出せる事になる。

ただ、それでも脳の大部分は残るだろう。もし、そこにあらゆる敵の対処法が書かれていたら、九条院長を倒せる奴など存在しない事になる。

「まさか、能力でドーピングや対処法を……」

「正解。じゃあ、ヒドラって知ってる？」

ヒントを与えるから、後は自分で考えろと。面白い。やはり、貴方は良い師匠だ。答えを与えるよりも、自分で答えを模索させるその姿勢。見倣いたいモノだ。

ヒドラ——別の読み方はヒュドラやハイドラなど。ギリシャ神話に登場する、九つの首を持つ蛇の怪物。猛毒と不死身に近い再生能力を持ち、首が切られれば倍になって生えてくる。確か、ヘラクレスは切った箇所を火で炙り、再生を止めたと何かで読んだ事がある。ただ、九条院長のいうヒドラとは、コンピュータの方だろう。チエスの世界チャンピオンすらも打ち負かした頭脳。演算によって導き出された答えで対処し、チャンピオンを徐々に追い詰めていく。「成る程、アストラルの前では戦いなどチエスでしかない。そういう事か」

「正解。やっぱり、貴方みたいに賢い弟子を持つて幸せね」

考えたくないが、九条院長にあらゆる策など無意味だろう。

脳の演算によって導き出された答えで、敵を徐々に追い詰めてい

く。恐らく、リアルタイムで導き出される。そこに感情が入らない分、あらゆる退魔士を超えている。九条院長と戦う事その物が、ある意味無駄でしかないのだろう。

九条院長。 “能力の応用” という一つを取ったとしても、俺には勝てる気がしない。勝てる方法が思い付かない。脳という、数多のデータベースを使いこなす魔女。いや、自分の脳すらもハッキングしてしまう、ウィザード級のハッカーだ。人間の業^{わざ}には違いないが、とても人間の身で追い付ける気がしない。

「ただね、ミシエルは更に上だったのよ」

九条は懐かしむかの様に言いつつ、マナを真横に蹴飛ばす。だが、対するマナは翼の羽ばたきで衝撃を和らげ、無表情のまま体勢を整える。

そんな九条院長ですら、ミシエルに追い詰められた過去がある。一体、どんなイカサマを使ったというのか。

「あの子は、時間その物を操れるの。攻撃しても風化させられ、巻き戻して何度でも蘇る。その代わり、あの子の攻撃だけはXの高速移動よりも速くなる」

成る程、ミシエルには脳の演算なんて関係ない。そういう事が。恐らく、魔方陣の復活は、巻き戻しで復活させた物。増加は、早送りです早く作り上げたのだろう。

ただ、二人の能力はあまりにも強力。戦えば、確実に大惨事になる。それこそ、止める事が可能な人物なんて限られてくる。

「大丈夫。私は死なないし、響夜君に指一本触れさせないわ。それに、策があるからね」

ここは、九条院長を頼るしかない。おばあちゃんといいでに親父が居ないならば、九条院長も含めた生徒会メンバーの親しか戦力に——いや、あの九条院長が、過去に追い詰められた事があるという程だ。つまり、九条院長が倒されれば後がないという事。

ならば、九条院長を信じよう。それで、マナが救われるのならば。「さあて、昔と違う点を見せようかな」

九条院長はそう言いつつ、白衣の横にあるポケットを探り始める。そして何かを見つけたらしく、暢気にあつたあつたと言いながら何かを引き抜く。

その正体は、ガラスみたいに透明な円柱の何か。握れるサイズで、病院の大きな注射器に似ている。ただ、円柱の内部は鮮やかな血の色をした何かで満たされている。

「それは？」

「あら、ラピス・フィロソフォルムに決まってるじゃない。錬金術のアレよ」

ラピス・フィロソフォルム——賢者の石の事か。ただ、何故賢者の石をわざわざ、解りにくいラテン語読みにしたのだろうか。

もう、色々と突っ込む氣力が失せてきた。伝説の物質を何故、医者である貴方が持っているのかなど疑問が浮かんできた。けど、九条院長の事だ。マトモな方法で手に入れた訳じゃないだろう。能力を^{アストラル}駆使して創ったに決まっている。

「このラピス・フィロソフォルムはね、ミシエルの血液や魔力を基に創ったの。ただ、ちよつと特別な三人の血液で、更に発展させたけどね」

ミシエルで賢者の石を。随分とお手軽に出来るモノだ。ただ、ミシエルのカルペ・ディエムが時を操るならば、ある程度の事が出来るそうだ。

ただ、それでも“賢者の石”にしてはまだ欠陥が残っている。物質を別の物質に変化させたり、不老不死の薬を生み出したり。ミシエルの能力ならば、“魔力の続く限り”は不老不死になれるかも知れない。けど、それだけでは賢者の石と呼べない。

特殊な三人。そいつ等が、ただのミシエル成分を賢者の石に変えているのか。

「ちなみに、その三人とは？」

「響夜君とレヴィアタン、あとサタンね。厳密に言えば、能力の方だけ」

まさか、俺の能力も賢者の石として使われていたとは。全く、世の中何が出来るか解らないモノだ。

ただ、レヴィアタンにサタン。どちらも、七つの大罪を司る悪魔の名。それぞれ、嫉妬と憤怒を司っている。ミハエルやバラライと同じ。使徒の名か。

「俺はともかく、何で二人の能力を持っているんだ？」

「貰ったのよ。ミシエルが先生に託されたついでにね。まあ、あの二人は他の使徒と違って良識的よ。こちらから手を出さない限り、何もしないという意味ではね」

ミハエルやバラライとは違うのか。ただ、良識的なXなど今まで聞いた事がない。魔力を取り込むためならば、手段は選ばない奴等だから。イブみたいに、人間を完全に憎めない奴も例外ではない。魔力が尽きかければ、生物としての生存本能に支配される。

ただ、今更思うが九条院長は何者なのだろうか。過去やコネを聞く限りでは、ただの医者や退魔士だったとは思えない。九条院長は、一体どのくらいXや使徒について知っているのか。少なくとも、俺の想像より遥かに先へ行っている。

「百聞は一見に如かず。ただ、君に見せてあげられるのは一瞬だけね」

言葉と共に、九条院長は斧を天高く投げ捨て、“賢者の石”の容器を右手で握り締める。そこから容器を左腕に当て、容器の頭部を掌で押し付ける。すると、内部の賢者の石が減っていき、最終的には完全になくなる。

成る程、あの容器は針の無い注射器か。賢者の石とは、体内に取り込んで使っらしい。

だが、九条院長に何も変化がない。別に、見た目では魔力の量が増した訳でないし、姿が変わった訳でもない。それこそ、間違い探しが成立しない程に。

「レイディアント・ショット」

九条院長が口を開き、あの技名を唱える。だが、九条院長はただ

立っているだけ。蹴りの動作すらしていない。対するマナは魔力の充填が完了し、いつでも撃てる状態だ。翼が開き、背中から真っ青な光を放っている。もう発射する。そう思っている時だった。

確かに、二人の位置は変わっていない。だが、マナの全身から軋む音が鳴り響く。同時に、何かを叩いた様な鈍い音が一気に押し寄せ、マナを後ろへと吹き飛ばしていく。

まさか、技名を唱えた瞬間から使っていたというのか。予備動作すら視認出来なかった。高速移動ですら、予備動作があるというのに。元は九条院長の技とはいえ、全くとはいかないにしても俺と同じ技のハズ。とても信じられない。

「言っただでしょ？ 見せてあげられるのは、一瞬だけだってね」

九条院長はそう言つと、上空から落ちてきた斧を手で掴み肩に構える。表情は正に、充実した勝利を味わう勝者の顔だ。

そして、今までの戦いが嘘だったかの如く、辺りを再び静寂が支配していく。

疑念

今改めて思った事がある。九条院長が師で良かったと。神代の間でも、俺より強い者はおばあちゃんだけだ。

ただ、神代で強かったとしても、強いだけの奴など世界に幾らでも存在する。九条院長は、今までずっと実戦で教えてくれていた。そついう意味では、弟子として感謝している。

「さあて、マナちゃんとミシエルを真つ二つに割ろうかな」

「どうやってだ？」

「こうするの」

俺の問いかけに、九条院長は微笑みつつ進む。右手の斧を地面に引き摺りながらゆつくりと。方向は勿論マナだ。

ただ、その姿はまるで死刑執行者。とてもじゃないが、救おうとしている様には見えない。例えるならば、天使の微笑みを顔に貼り付けた奴。正に、白衣の悪魔だ。

真つ二つや殺すなど。そういった今までの誤解を招く発言。加えてあの圧倒的な強さ。これ等の要素が、大和撫子な九条院長を悪魔へと変化させているんだ。

九条院長院長がマナへと進むが、マナは倒れたまま九条院長に目掛け光を乱射する。あのダメージで、まだ攻撃出来るというのか。

そうか、今までマナは気絶したまま戦っていた。だから、どれだけダメージを負っても意味がない。そういう事か。

ただ、九条院長もただでは受けていない。斧を片手で軽々と振り回し、全弾マナに打ち返していく。攻撃を反射され受ける度に、マナの攻撃回数が減っていく。どうやら、回復だけで手一杯になった様だ。まさか、九条院長はこれを狙っていたのか。

「さて、クイーンは既にキングの目の前ね」

チェックメイトは目前。既に、九条院長がマナの目の前にいる。「チェックメイト」

勝利宣言を言い放つと、九条院長は斧を真上に構える。そして、マナに目掛けてまっすぐ振り下ろしていく。

だが、断たれたハズのマナに傷はなく、出血すらしていない。このまま何も起こらない。そう思い始めた時だ。

マナの身体から、青と金色の輝きを放つ魔力が溢れ出ていく。丁度、九条院長が斧を振るった箇所から。まるで、水と油が分離する様な光景だ。

しばらくすると光が収まり、そこにはマナとミシエルが分かれた状態で倒れていた。二人共外傷が無く、静かに寝息をたてている。

「凄い……。断っただけでなく、治療も同時にか」

「アフターサービスよ。ちなみに、お代は気にしないでね。隆盛からタンマリと戴くから」

傷を治しただけでなく、治療費は親父が支払ってくれる。つまり、俺には何も出費がないという事か。俺はそこに、九条院長の思い遣りを感じ取っていた。

他者を思いやり、他者のために怒る。とてもじゃあないが、今の俺にはまだ出来ない。九条院長と俺では、器と格の差が違いすぎる。まあ、今の俺に出来る事は何もない。魔力も尽きたし、後は九条院長やヴォルフ達に任せよう。休んでもバチは当たらないだろう。寝転んで、戦いが終わるまで待つとするか。

「こゝらっ、サボっちゃダメだぞ」

休むべく寝転がってみるが、九条院長は寝坊助を起こすかの様に揺すり始める。魔力も尽きた状態でまだ戦えと。いや、流石に無理だ。無理に決まっている。

敵はあと一体。ヴォルフとアリシアの能力は知らないが、魔力の質から考えれば既に倒した頃だろう。

正直、マナを救えたから良いじゃないかと反論したい。けど、九条院長はきつと許してくれないだろう。他人任せにせず手伝えと言うに決まっている。

「もう戦えないが」

「じゃあ、良い物をあげるね」

良い物。どうせ、またるくでもない物だろう。白衣のポケットを漁る表情は、まるで子供の様に輝いているが。

ポケットから出てきたのは、赤い液体が入った小瓶。コルクで栓をしているだけ。如何にも、怪しげな代物だ。

「とりあえず、これを飲みなさい」

「何だこれは？」

「何って、エリクシルだけど」

賢者の石の次はエリクシルか。九条院長は、本当に何でも作れるらしい。飲めばゲームみたいに、魔力も含めて全回復……そんな代物があるとは思えないが。

魔力の回復は、基本的に自然回復のみ。俺は多少失敗したが、Xみたいに他者から吸収という例外もある。ただ、能力者にとってあまり現実的ではない。

魔力を人工的に生成する技術があれば良いが、数多の能力者や魔導師が挑み匙を投げた難題だ。それこそ、何世紀という単位で。

フェルマーの最終定理よりも古く、誰も答えを出せていない。能力者や魔導師ですら、“魔力が何か”という答えには辿り着けていないのだから。

故に、魔力は自然回復でしか回復しない。だからこそ、俺はどう足掻いても戦えないんだ。

「飲めば、肉体と魔力が回復するの」

「九条院長は、魔力が何かを理解しているのか？」

「当然でしょ。そうじゃなければ、自分の魔力やモーション無し有能力、魔力の吸収が使える訳がないじゃない」

ならば、今まで魔力や動きが見えなかったのは、あまりの速度で見えなかった訳じゃないというのか。本当に、立ったままで魔力ゼ口の技を使っていたと。有り得ない。ガソリンや電気などといった動力がない。そんな状態で、車を動かす様なモノだ。

「そんな能力、聞いた事がない」

「可能だからこそ、私はミシェルに勝ってここにいる訳だけど？
事実、魔力は全て身体強化に回しているの」

もし、九条院長の言葉が本当ならば、九条院長は俺達より遥かに先へ行っている事になる。俺達と九条院長との間で、埋める事が出来ない溝。恐らく、その溝こそが九条院長の強さのヒントであり正体だろう。

もし、九条院長の強さを加えたならば、七体のX——使徒を全て倒せるかも知れない。

「とりあえず飲んでみて。騙されたと思ってイッキイッキ！」
「解った解った」

俺は差し出された小瓶を受け取り、コルク栓を開けて一気に飲み干す。味は意外にも、南国を感じさせる爽やかな完熟マンゴー。滑らかな甘味の中にある、芯に含まれた仄かな酸味まで再現されている。普通に、ジュースとしても良いのでは。そう思う程の味だ。

「別に、何も変化はないが……」

「じゃあ、神器を出してみなさい」

出ないと思うが、言われた通りにしてみようか。俺はまず、手を前に突き出し構える。そこから魔力を光に変え、より鋭くしている事をイメージする。白夜を出す時は、特にこれを意識している。

意識をしてみると、俺の右手で魔力が渦巻いている。ただ、魔力が収まると白夜とは“別のモノ”が握られていた。闇夜を連想させるさせる漆黒の大剣。

「極夜か」

「おめでとう。魔力が回復したみたいね」

確かに極夜だが、今までの極夜とは明らかに違う。まず、白夜と違い極夜は高速振動などしなかったハズ。なのに、極夜から振動音が聞こえてくる。白夜の特性も加えた、新たな極夜か。

「ちなみに、今までみたいに白夜も使えるけど、白夜や高速移動を介さずに極夜が使えるの」

高速移動のエネルギーを白夜に掛けなくても使える。成る程、想

像以上の強化だ。

ただ、生命活動以外の魔力はほぼ枯れているにも関わらず、何故神器が使える様になったのかは理解できない。

「魔力ってね、この星の生命力なの。能力者や魔導師、Xが使っている魔力の全ては、この星から貰っていると考えた方が良いわね」

魔力の正体が星の生命力。九条院長は、どうやってその答えに辿り着いたのだろうか。バラライから七体のXの正体が超越者、九条院長から魔力が星の生命力と聞かされても納得が出来る物ではない。「それが何を……」

「解らないかな？ 私や君が倒そうとしてる七人の使徒が、何処から魔力を捻り出しているか」

九条院長と使徒が、星から魔力を貰い能力を使っている。そう言いたいのか。確かに、魔力の源が星の生命力ならば、力として使えたら強力な技が使えるだろう。但し、九条院長の説を認めるならばの話だが。

星なんて大きなスケールで言われても、とても信じられる話ではない。もし本当ならば、誰も勝てないという事になる。それを認めるのが嫌だったんだ。マナを今度こそ失いそうで怖かったから。

「証拠は——」

「ミシエルよ。彼女に出会うまでは、私も信じなかったけどね」

最後まで言う前に、九条院長が言葉で遮る。ミシエルが証拠。ミシエルも九条院長と同じ。

ミシエルが同じ。そこに何か引つ掛かりを感じてしまう。確か九条院長は、自身と使徒が星から魔力を捻り出していると言っていた。ミシエルも同じならば、ミシエルが使徒だと遠回しに言っているみたいだ。

少々、カマをかけてみるか。

「ミシエルは色欲の使徒か？」

この言葉に、九条院長が吹き出し腹を抱えて笑い出す。何が可笑しかったのか理解出来ない。

しばらくして発作が治まったのか、九条院長が謝罪しつつ俺に話し始める。

「着眼点は間違っていないけど、本人が聞いたら怒ると思うよ。だって、色欲は罪で一番下。最弱の使徒よ。ミシエルとはまるで正反対ね」

確か、ヴォルフも言っていた。バラライの実力は下から二番目だと。バラライの司る大罪は暴食。罪では六番目だ。

七つの大罪は上から順に、傲慢・嫉妬・憤怒・怠惰・強欲・暴食・色欲だったハズ。確かに、実力が七つの大罪の序列に反映されるのなら、ヴォルフや九条院長の言葉に納得がいく。

ミハエルの司る大罪が強欲で、バラライが暴食。九条院長の言葉から、ミシエルの司る大罪を推理する。ならば、一つしか考えられない。

「傲慢の使徒。ミシエルが最強だというのか」

「正解。ちなみに、ミシエルは現存するXで一番強いわ。彼女の正体は――」

「ヒカル！」

あいつの叫びで、俺と九条院長はその方向へ向く。そこにはやはり、ミシエルが九条院長を睨み付けて立っていた。まるで、それ以上言つなと言わんばかりに。

「あら、あと少しで良いところだったのに」

九条院長は悪びれる事なく、ミシエルに話し掛ける。まるで、世間話をしていたかの様に。

「ヒカル、今のキョウヤに真実を聞かせるべきじゃない。貴方は、それが解らない人じゃないでしょ？」

九条院長の平静で怒りがおさまったのか、ミシエルが宥める様に語る。お願いだから言わないで。これ以上、我が子に真実を聞かせないでくれ。そういった、ミシエルの恐怖が伝わってくる。

「知ってる。けどね、親友として――いえ、かつての義理の姉として言わせて貰うね」

ここで、九条院長が一度言葉を切る。

九条院長とミシエルが義理の姉妹。そんな事、今まで聞いた事がなかった。初耳だ。それ以前に、二人の過去を聞いた事がなかったから。

そう考えていると、九条院長が再び語り出す。

「いつまでも、響夜君に隠し通せる事じゃない。マナちゃんは何故狙われているか。その原因となった、彼等兄妹の出生。彼等には知る権利があるのよ」

俺とマナの出生が、使徒に狙われる原因。まるで、俺達は最初から生まれてはいけない。九条院長から、そう死の宣告を告げられたみたいだった。

「真実を知る事が、常に正しい訳じゃない。真実を知ったら、二人は二度と日常に戻れなくなる。ヒカルは、ヒカルはカオルだけじゃなく、二人の未来までも奪うつていうの？」

成る程、九条院長はあくまでも真実を語りたい。ただ、ミシエルは真実を知られたくないと考えている。

だが、ミシエルの言葉に疑問が残る。まるで、カオルは最初から九条院長に未来を奪われている。言葉ではそう解釈出来てしまう。

「解った解った、私の負けよ。じゃあ、貴方達親子に一つだけ忠告しておくね」

「何だ？」

「なあに？」

俺とミシエルの問いかけに対し、九条院長が表情を変える。その顔は真剣その物。今から話す言葉が、冗談でない事を伝えている。

「私達親子や貴方達親子……ううん。能力者やXも問わず、運命は全て選ばされているの。この忠告を無視すれば、取り返しのない事になるわ」

「どういう事だ、九条院長……いや、先生！」

「Nobody's perfect」

一言だけ俺に向けて放つと、九条院長は微笑みながら白衣を翻し

去っていく。しばらくは背を向けながら軽く右手を振っていたが、次第に見えなくなっていく。

Nobody's perfect。直訳すると、誰もが完璧でない。九条院長が、何を言いたかったのかは解らない。ただ、あんな表情は初めて見た。

九条院長とミシエルは、あとどれくらい俺とマナに隠し事をして
いるのだろうか。

九条院長は真実を知るべきだと考えている。けど、対するミシエルは真実を知る事だけが正しくはないと考えている。恐らく、どちらも正解だろう。二人とも、俺達を想った上での発言だ。

正直、自分の事を解っている様で、実際は解っていなかった。九条院長に聞けば教えてくれるだろう。けど、まだ聞きたくない。ミシエルの発言が原因だ。あいつのせいで、恐怖が邪魔をしてしまう。Xとの連戦や超越者。星の生命力に出生の秘密。正直、頭が付いていかない。頭の整理が必要だ。九条院長から貰った知識を有効利用する。そうすれば、九条院長から教わった二体と、ミシエルを除いた四体の使徒に勝てる。

マナが笑顔で過ごせる世界。俺の願いは、既に手の届く場所にあるから。

平穩

あれから、長い沈黙が続いている。互いに気まずい空気——いや、別に俺は気まずくなどない。ただ、ミシエルが勝手に沈んでいるだけだ。

「あのねキョウヤ。実は私……」

「超越者というXだった、か？」

先に沈黙を破ったのはミシエル。だが、俺はミシエルが最後まで言う前に、ミシエルの言葉を解釈し勝手に繋げてみる。ミシエルの事だ。どうせ、自分がXだと知らないと思っているに違いない。

「知ってたの？」

この問いに対し、俺は静かにああと呟く。すると、ミシエルは夜空を見ながら悲しい表情をする。今にも辛そうな表情、生まれてから今まで見た事がない。

「そう……だよ。私が家に来た時、キョウヤがモーメントを使ったかもしれないと思ってたの。正直、予想が外れてて欲しかった」
今にも震えそうな声。実の子にXと知られたからか。それとも、実の子がXの力を使える様になったと知ってしまったからか。それは解らない。ただ、元気だけが取り柄のミシエルに、いつもの元気がまるでない。それほど、シヨックだった様だ。

まさか、あの時の高速移動を視認していたとは。流石は、俺の親だと言うべきか。

“モーメント”は、Xが使う高速移動の正式名称。ただ、この言葉を使うのは、アポストル級でも頭に光の輪が着いた奴のみ。真のアポストル級と呼ばれるXだけだ。それ以外のXの高速移動と何が違うのか解らなかったからこそ、敢えて区別していた。ただそれだけ。

ただ、ミシエルの言葉から考えれば、高速移動の全てをモーメントと呼ぶみたいだ。

「もしかして、極夜の変形も出来る？」

「今日可能になった」

この言葉に、ミシエルがこの世に終わりが来たかの如く驚く。あまりにも大袈裟なりアクションだ。何か悪い事でも言ったのだろうか。

「何処まで使えるの？」

「何処までって……二刀流だけだが」

俺の言葉に何か安心の要素を見付けたのか、ミシエルがホッと胸を撫で下ろす。正直、何故一気に不安が消えたのかは解らない。まるで、俺がミシエルの正体を知る事よりも恐ろしい秘密。それを知られる事を回避され、安心したかの様だ。

ただ、一つ気になる。極夜を何処まで使えるか。まるで、二刀流以外にも複数の形態があると言っているかの様だ。

「更に変形するのか。それは楽しみだ」

少し、ミシエルから言葉を引き出してみるか。大きな餌と釣り針ならば、大きな魚が釣れる。手元の情報が少ないならば、カマをかけてみるのが手っ取り早い。

ただ、何故ミシエルが俺もまだ解っていない極夜の特性を知っているのか。まるで、最初から俺の神器が何なのかを知っているかの様だ。ただ、有り得ない。同じ名前と特性を持つ極夜が、過去に存在しない限り有り得ないから。

神器は個人の能力を解りやすく具現化した物だ。故に、一子相伝が不可能。同じ能力や経験があつたとしても、同じ神器がこの世に二つ以上存在する事など有り得はしない。

「極夜は変形で真価を発揮する神器。キョウヤの使う極夜はね、他の神器とは根本的に違うの」

「具体的には？」

「物心が付いた時から神器が使える。今までおかしいと思わなかった？」

確かに、三歳の頃から既に神器——白夜が使えていたらしい。五

歳になり、極夜まで使える様になっていた。ただ、今まで俺は人より感受性が高いと思っていた。故に、早い時期から能力や神器が使えたのだと。今までそう考えていた。

だが、もし仮に白夜——いや、極夜が最初から生まれ持っていた神器だとしたら。あまり認めたくないが、ミシエルが知っていても説明がつく。

「極夜はね、神代家の開祖であり私の契約者。うっん、それ以前に私の親友だったサクヤの神器なの」

朔夜^{さくや}。おばあちゃんから聞いた事がある名だ。

神代家の礎を築いたとされる英雄にして、神代家では実質的に最初の女性当主。英雄と呼ばれている所以は、当時の九条家当主を皇家当主と共に護ったからとされている。九条家の力を狙っていた、当時の異能者やXから護るために。

故に、皇・神代・九条の三つ——神ヶ丘では御三家と呼ばれている——の家系は結束が強い。それに、能力自体も日本の異能者でもトップクラス。実力主義の生徒会。その一から三位までの実力者が、俺も含めて御三家の人間という事で証明している。

今でも、朔夜は御三家で神の様に崇められている。正直、あまり軽々しく口にして良い名ではない。

けど、まさかミシエルがああ朔夜と契約していたとは。ミシエルが神ヶ丘や神代に拘り続ける理由が、少し納得した気がする。ミシエルの言葉が、本当だとするならばの話だが。

けど、俺の神器が朔夜の神器だった。そこだけは納得がいかない。何故ならば、朔夜は数百年前の人間だ。数百年経てば、神器どころか魔力なんて、個人の識別すら不可能なほど跡形もなく分解されていく。

仮に朔夜がミシエルに預けたとしても、極夜を“神器として”維持し続ける事など不可能だ。維持するには、それこそ莫大な魔力が必要。

幾ら魔力が強大な力オールドでも、神器・シュヴァリエを全て具現化

し続けて一日が限度だと聞いた事がある。本人から聞いたから間違いない。

あと、他人の魔力で拒絶反応が起こるならば、ミシエルが魔力を与えた時点で極夜は粉々に碎けるだろう。人とXでは拒絶が強すぎる。特にミシエルは、息子の俺ですら触り程度で死にかけたんだ。少なくとも、ミシエルは魔力を与えていないハズ。

Xみたいに極夜自体が自我を持ち、魔力を摂取し続けていたなら話は別だが。いや、極夜には明確な自我がある。ヴォルフとの戦いで、初めて知る事が出来たから。ならば、魔力の吸収も出来るのではないだろうか。

「意思のある神器か……厄介な存在だ。だが、確かに強い」

「でも、極夜に飲み込まれないでね。極夜は神器でもあるけど、剣の形をしたXでもあるの。あのサクヤでも、扱いが難しいって言うたよ」

神ヶ丘の伝説にもなった。そんな開祖すら使いこなせなかった強力な神器基^{もと}X。ミシエルめ、何てモノを押し付けたくれたんだ。だが、面白い。使いこなせば、必然的に開祖を超えた証となる。

極夜の二刀流でまだ使いこなせていないならば、更に上の力を秘めている事になる。使いこなせばマナを護れる。

「使いこなしてやるさ。極夜にマナを護る力があるのならば」

「またマナを殺しかなければ良いけどね。極夜は、手加減という言葉を知らない子だから」

恐らくミシエルは、十年前の事を言っているのだろう。だが、今の俺はかつての俺とは違う。

手加減を知らない神器。ならば何故、俺のいう事を聞いてくれたのだろうか。二刀流しか使えない以上、俺が朔夜を超えたとは思えない。けど、制御は出来た。それに、俺を何度も救っている。一緒に戦おうと語り掛けてくれた。何故だ。

俺と極夜の相性が良いのか。或いは、“別の何か”が関係しているのか。極夜に気に入られた……まさかな。

とりあえず、ミシエルには黙っておこう。話したところで、またリアクションに付き合わされるのも面倒だ。

そう思っていると、ある場所から声が聞こえてくる。丁度、マナが倒れている方向。どうやら、マナが目覚めようとしているみたいだ。マナの瞼が徐々に関き始める。そこからマナは上半身を起こし、寝惚け眼で辺りを見回し始める。全く、いつ見ても可愛い。思わず微笑んでしまう。

しばらくマナを観察していると、焦点が合ったのかマナが俺をじっと見つめている。

「兄……さん？」

「おはようマナ。そんな所で寝ていると風邪を引くぞ」

俺は込み上げてくる爆笑を我慢しつつ、出来るだけ自然に挨拶を試してみる。

すると、俺の言葉の真意に気付いたのか、マナは頬を赤く染めて俯き始める。その姿は、視線が気になる小動物のよう。実に可愛らしいじゃあないか。

「もう……兄さん意地悪です……」

「悪かった」

俺は一言マナに呟く。マナに意地悪をした事じゃない。マナとカオルを護れなかった事に対してだ。九条院長が居なければ、二人とも失っていたかも知れない。

今すぐ抱き締めてやりたいが、今の俺にそんな資格などない。

「兄さん、何かありましたか？」

「何にもないさ」

マナが言い終わる前に、俺は微笑みつつ嘘を塗り重ねていく。悪いのは、二人を護れなかった俺自身だ。ならば、知らない方が良い。「騙されませんよ兄さん。そう言っ、いつも傷付くのは兄さんじゃないですか。兄さんは、傷付く時には必ず嘘をつきます」

マナの不審そうな睨みと共に、鋭い言葉が俺の心を深く抉ってい

く。そう、俺が傷付く道では必ずマナに嘘をついてしまう。心配をかけたくないから。同じ道を歩ませたくないから、つい嘘をついてしまうんだ。

「けど、とりあえず兄さんを許す事にします。どうせ、兄さんは言っても聞く人じゃないですから」

そう言つと、マナは拗ねた様にそつぽを向く。明らかに呆れられている。そのくらい、俺でも理解出来るさ。

ただ、少し悲しい。マナに嘘をついた事とは別の意味で。マナに俺がどう映っているか。何となく解った気がする。いつか、汚名返上をしなければいけない様だ。

「兄さん、少し尋ねても良いですか？」

「何だ？」

何だろうか。今、心臓が高鳴っている。これ以上都合の悪い事を聞かれて、果たして隠しきれるか解らない。

「カオルさんが寝込んだ話。嘘ですよ？」

「何故、そうだと思うんだ？」

ここで、俺の心臓が警笛を鳴らし始める。レッドゾーンに突入した事を報せるために。

そんなバカな。メールでは声を聞くどころか、表情なんて見れないハズ。ならば、マナに嘘を見破れるハズがない。何故解ったんだ。「だって、兄さんとカオルさん。入院はあつても、一度も看病された事がないじゃないですか。カオルさんは何らかのトラブルに巻き込まれた。そう考えた方が自然です」

彼女の微笑みに、俺は完全に敗北を認めてしまった。卑怯だ。勝てる訳がない。

これ以上嘘をついたとしても、確実に看破されてしまうだろう。仕方ない、正直に話そうか。勿論、最低限の情報しか与えるつもりはないが。俺はマナに、今までの事情を話す事にした。

「——という訳だ」

「自宅でXに襲われた……そんな……」

「事実だ。もつとも、俺が全て蹴散らした」

俺の言葉を聞いても、マナはまだ不安らしい。無理もない。居候フェルゼと違って同居が少ない大家とはいえ、俺とマナにとって大切な家族だ。家が隣だったからこそ、本当の兄弟の様に過ごしてきた。故に、他人事じゃない。

しょうがない。あまり使いたくなかったが、奥の手を使うとしてしよう。

「当のカオルは、動物と戯れていたが」

「僕を身代わりに逃げた……の間違いじゃないの？」

俺はアイツの声に、思わず振り向いてしまう。噂をすれば、九条カオル本人がやって来た様だ。ネコのビアンカを抱えている所は相変わらず。まるで、仲良しのカップルの様。

流石に、長時間戦えば目が覚めるか。

ただ、俺はマナだけでなくカオルまで拗ねさせてしまった様だ。

「酷いよ響ちゃん……」

「兄さん。親しき者にも礼儀あり、ですよ」

「悪かった」

いつも通りの会話。これ程楽しく大切なものだったのか。お陰で沈んでいた心が晴れ渡り、俺は思わず笑みを溢す。それに釣られたのか、二人も俺に微笑んでくれる。

何物よりも明るく暖かい。俺にとって唯一心が安らぐ場所であり、帰るべき場所でもある。

だからこそ、護らなければいけない。帰るべき場所を。護れるならば、二人のために何度も剣を振ろう。九条院長の言葉以前に、俺自身のために家族を護ろう。

何が来ても、家族を失わない様に。何があっても、暖かさを消さない様に。俺はそのためだけに戦うのだから。

戦友

二人が無事ならば良い。後は――

「響ちゃん。もしかして、ヴォルフに加勢するつもり？」

「ああ、そのつもりだが」

俺は右手に極夜を携え、一歩ずつ歩いていく。すると、カオルが両手を広げて俺の進行を阻止しようとする。表情は、不安その物。これ以上行くなと訴えている。

「響ちゃん。向こうは地獄だから行かない方が良い」

「知っている。だが、九条院長に頼まれたから仕方がない」

ヴォルフにはアリシアがいる。ヴォルフ曰く、アリシアはアポストル級Xの倍に当たる実力者。ならば、負ける要因など考えられない。

それに、アリシアの実力の片鱗は俺も見ている。魔力や気迫だけじゃない。九条院長が最強のX――正直、半信半疑だが――と称したミシエルを破っている。そこにヴォルフが加われば、大抵のXならば倒せるハズだ。

「母さんがそんな事を……。けどね、一つだけ言っておくよ。アリシアは既に倒されている」

「バカな……」

信じられない。正直、カオルの言葉でも信じたくはない。攻撃の要が破られた。そういう事実その物が、俺には受け入れ難かった。

「事実だよ。敵の能力名はドライブリミッター。自身の攻撃を上乗せして、相手の技を跳ね返す。それが、青髪のXが使う能力さ」

攻撃を上乗せして跳ね返す。成る程、アリシアにとって相性が悪い能力という事か。どうやら、アポストル級の倍の実力が祟った結果らしい。強ければ強いほど不利になる。本当に質の悪い能力だ。

「だが、ヴォルフには回復技と戦略が――」

「無理だよ。ヴォルフの神器・アルギュロトクソスを君が持ってい

る限り、ヴォルフの手段は限られてくるんだ」

ヴォルフの神器。その言葉で、俺はベルトに挟んでいる銀色の銃を見る。これが、ヴォルフの神器。もし、今でも具現化し続けているなら、アイツは丸腰のまま戦っているのか。

アイツは——アイツは大切な武器を俺に貸したというのか。会ったばかりの俺に何故。自身が不利になるだけだ。それなのに何故、マナを助けるためだけに貸した。カオルの友——本当にそれだけなのか。

「ならば、手助けに行かなければ——」

「無理だ、勝てる訳がない。それに——それに僕は、君を二度と失う訳にはいかないんだ！」

どうやら、カオルは意地でも俺を止めたいらしい。言葉に強い決意を感じ取れる。だが、俺はヴォルフ達を見捨てる気はないし、マナやカオルの前からいなくなる気もない。

俺は決して英雄になる気などない。ただ、俺や家族と見なした者そして、俺達三人が大切に思う全て。それらを護るために剣を振るっているだけ。例え、一期一会でも良い。そこへ三人の誰かに対する絆さえあれば、他に理由などありはしない。

「大丈夫、俺は帰ってくる。お前達が俺を想ってくれる限り何度でも」

「でも……」

「じゃあ、三人で行きましょう」

マナの言葉で、俺とカオルが一瞬驚く。確かに、三人ならば今の状況を打開する事は出来るかも知れない。

俺達は、今までずっと一緒だった。それこそ、戦闘の癖を知り尽くしている程に。それに、俺達は戦闘技術を九条院長から学んでいる。その内の二人は生徒会メンバーで、もう一人は次期生徒会候補になりうる実力者。

確かに、生徒会候補で同じ家出身の者が二人存在した場合、より強い奴だけが生徒会入りする——派閥争い防止のためらしいが——

という裏ルールも存在する。ただ、“生徒会”という枠さえ除外すれば、戦闘における分野は違えど実力はほぼ互角。能力とその応用数から見ても、チームとして十分だ。

「どうするの響ちゃん」

考えるまでもない。俺の答えは既に決まっている。

「行こう、一緒に」

「君ならそう言うと思ったよ」

カオルはそう言いつつ、左手を前に差し出す。そこに俺とマナも左手を乗せる。同時にそれぞれの右手に、カオルは天使と悪魔の片翼を象った弓、マナは青い回転式の銃を出現させる。俺達が共通の敵と戦う時、決まってやる儀式の様なモノだ。俺達は右手に携えた神器を宙に掲げつつ、左手を押し下げる。

「ミッシヨンスタート」

俺の言葉と共に、俺達は左手を離し目的地へと歩いていく。そう、全てを終わらせるために。

炸裂

俺とマナ、そしてカオル。三人では久々の共闘だ。だが、かつてみたいに息があった戦いが出来るのか。それだけが気掛かりだ。戦闘スタイルさえ変わっていなければ、何とかなりそうだが。

今までの共闘は、あくまでも実力を補うためのモノだった。ただ、俺達はかつてのそれとは違う。

かつては、三人でアポストル級をようやく一体倒せる実力だった。だが、今は一人でアポストル級を一体——当然、相性によつては倒せない奴もいるが——倒せる。だからこそ、今の共闘で何が起るか想像もつかない。とりあえず、二人のスタイルを思い出してみるか。

マナの戦闘スタイルは確か、神器の銃・ブルーローズで様々な効果を持つ魔法弾を撃つ戦い。そこに魔力のナイフと蹴りによる接近戦、更に能力・エクサメロンも加わる。遠近どころか、攻防や補助にほぼ隙のない戦闘スタイル。

カオルの戦闘スタイルは、変幻自在の神器・シュヴァリエによるトリッキーな戦法。そこにセフィロトが加われば強いが、問題はネコのビアンカだ。ある意味、カオルの戦法の中では一番強いが、よく考えれば欠陥だらけ。何故ならば、あのネコは——

「兄さん、どうかしましたか？」

マナの言葉で、一度思考を中断する。やはり、お前にも解るのか。「お前と同じだ」

「そう、ですよ。兄さんやカオルさんと一緒に戦う。それ自体が久々ですから……」

俺だけじゃない。マナも同じ。仲が良いからこそ、もしもの事態が恐ろしい。

特に、今回の戦いは下手をすれば命を落としかねない。二人は、

実際に瀕死の状態になった。だからこそ、慎重にならざるを得ない。

「大丈夫。僕達なら出来る」

俺達の心情を察したのか、カオルが諭す様に語る。

「無理に合わせなくても良い。あくまで自分のスタイルを貫きつつ、何が足りないかを感じるんだよ」

もつともな発言だ。ただ、口で言っても果たして実行可能か。その答えは、正直難しいといったところ。本能で感じるしかない。解ってはいても、そう簡単に出来るモノではない。幾らバランスが取れた俺達でも、仲間を巻き込まない保証などないからだ。

「Nobody's perfect」

カオルがこの言葉を歌う様に唱える。親である九条院長と同じ言葉か。誰もが完璧でない。共通する言葉を使う所は、やはり親子とすべきか。

そういえば、カオルも自身のセフィロトは万能じゃないと言っていた。九条院長もあの言葉を使ったという事は、九条院長や能力のアストラルも完璧でない事になる。成る程、自分の弱さを認めているからこそ、九条親子は強いという事か。

「まあ、味方の攻撃が当たったとしても、回復技があるから平気だよ」

「そうですね。少し安心しました」

ちよつと待った。確かに、俺達は回復技が使える。いや、俺は今日使える様になったばかりだ。ただ、俺の回復技だけ不完全という事は、身をもって体験している。つまり、攻撃を受ける度マナとカオルの世話になるのか。

ならば、全ての攻撃を回避してやるさ。俺が二人より優れているのは、回避と反射の速度。フルに使えば可能だ。

「カオル、敵までの距離は？」

「もう少し。真っ直ぐに進めば――」

この言葉で、カオルが言葉を止める。同時に、俺も周囲の異変に気付いてしまう。無数に存在する魔力の気配。真夏の蛍の如く漂っ

ているが、一つ一つが血の色に輝いている。どうやら俺達の足止めか、ヴォルフの手助けをさせたくないらしい。

気が付けば、俺達は無数のXに取り囲まれていた。Xからバイク特有のエンジン音が聞こえる。姿は見えないが、特有のエンジン音——つまり、ケンタウロスか。

「兄さん。Xに囲まれました」

マナの怯えた声が聞こえてくる。無理もない。数はざっと見積もり、八十以上で百未満。どれだけの時間、思念を帯びたバイクをかき集めればこの数になるのか。まるで想像が付かない。

「解っている。だが、切り抜けるしかない」

マナを安心させようとするが、逆に俺とマナの士気が下がるだけだ。言葉で幾ら奮い立たせても、圧倒的な戦力の前では無力。まるで、一匹の虫がスズメバチに挑むかの様だ。

「いや、響ちゃんが居るなら、素直に相手をしなくても良いよ。だって、相手はバイクだよ？」

そうか、相手はバイクだ。あの時は、カオルを傷付けられたから、つい力で制圧してしまった。カオルは、俺達の友であり家族だからだが、今は違う。カオルのヒントで活路が見えた。バイクという事は、相手は金属の塊。俺だからこそ勝てる。そんな戦法を今思い付いた。

能力の対象は磁力。空間の一点に磁力を集中させ、奴等を一網打尽にする作戦で行くか。俺は魔力を解放し、上空の一ヶ所に磁力を発生させる。

「終わりだ。マグネティズム」

技名を唱えると、魔力の気配が全て上空に集まっていく。よし、成功した様だ。後は、二人だけで十分か。

「行きます。プリズミツク・ミーティア！」

マナが銃を両手で構え、トリガーを何度も引く。すると、銃口から様々な色を放つ閃光が解放たれ、次々と上空の魔力を撃ち抜き爆破していく。それは真夏を彩る花火の如く、夜の闇に咲き誇って

いる。

炎色反応と違う点は、光の色の正体は魔力による物。魔力と大気中の粒が、反射と屈折を繰り返している。だからこそ、空が鮮やかに輝いている。

マナと花火が見れなかったが、代わりに良いモノが見れた。なかなかのショーじゃないか。

六発撃つ毎に空薬莖を排出し、戻すと自動で魔力がリロードされる。リボルバー専用のクリップを使用せず、装填と射撃を同時に行う。そんなマナに、ガンナー特有の弱点など存在しない。

正直、マナを敵に回したくないと思う。流石に、マナとは戦いたいと思わないさ。連射しても尽きる気配すらない魔力。魔力の連射で顔色すら変えないなんて、恐ろしいにも程がある。

「僕も良いよね？ 特別に、取って置きを見せてあげるよ」

カオルの取って置き。まさか、“アレ”を使うつもりか。

カオルは、基本的に補助がメイン。そんなアイツが使う、セフィロトの中でも数少ない攻撃用のセフィラ。同時に、頂点とも呼べる第一セフィラ・ケテル。創造と宇宙を司る神の力。

本人から聞いた事はあるが、ダアトの次に燃費が悪いらしい。だが、それを補うのがケテルの性能。“想像”したモノを“創造”へと変化させてしまうという強力な力。それが、ケテルの正体。

「マナ、今すぐに出来るだけ遠くへ逃げろ」

「そうですね」

早く逃げないと巻き込まれる。そんな危機感があるにも関わらず、マナは随分と楽しそうだ。

全く、あのマナがよくここまで成長したと思う。泣き虫で甘えん坊。そして、いつも俺から離れようとしなかった。そんなマナが、身も心も立派な退魔士になっているとは。やはり、月日が経つのは早いモノだ。

ただ、それでも俺にはもう一つ気掛かりな事がある。それは、カオルの想像力があまりにも強大過ぎる事。

最後に見たケテルの効果は確か、掌サイズの小型ミサイル乱射だったか。しかも、アポストル級一体を叩き潰すためだけの創造。小さいとはいえ、何十も乱射したアレは地獄絵図だった。大きさに反して、爆風が災害クラスだったから。

アレを例えるならば台風。唯一違うのは、熱が身体中を何度も激しく打ち付ける点だけ。正直、アレは二度と受けたくはない。

ケテルとして具現化されれば、俺達は呆気なく吹き飛ばされていくだろう。正直、カオルはマナよりも恐ろしい存在かも知れない。

「ケテル・スピアダーツ」

カオルの掛け声と共に、無数の細長い何かが上空に出現する。数は不明だが、その何かが幾つも集まり空に歪な球を造っている。大きさは、個人で所有する山くらいといったところか。

魔力すら感じなかった。それなのに、あれだけの質量を一瞬で出現させたとは。これで全力でないというのか。

「さようなら」

カオルの悲しそうな言葉と同時に、上空の何かが激しく輝く。更に、激しい轟音と共に、強大な熱と爆風が押し寄せてくる。俺は足に重力を纏い、マナを強く抱き締め飛ばされない様にする。

同じ爆発でも、マナの時とは明らかに違う。空の花火なんて可愛いレベルではない。最早、アレは兵器だ。きっと、頭の中で核弾頭か何かを想像したに違いない。あの技をまともに喰らえば、塵一つ残らないだろう。そう考えていた。何気なく、魔力探知をするまでは。

「待て、まだ魔力の反応が消えていない」

「嘘……」

倒したハズのケンタウロス。魔力も含め粉々に砕けてはいる。だが、“魔力の消滅”はしていない。

魔力の消滅は、生物やXの絶対的な死を意味している。消滅していないという事は、死んでいないという事。つまり――

「死者蘇生能力――ドゥームズデイか。どうやら、俺達はトラップ

に引っ掛かった様だ」

バラライ・バロード。奴の“手品”は予想以上だったらしい。まさか、最初からこの俺を欺いていたとは。

観客である俺達の目をXの方へ向けさせ、自分は手駒を増やすために町へ出る。恐らく、奴のクローンは一体だけじゃない。琴を投げたのも、隠れていたクローンによるモノだろう。

奴の仕事はバイクを壊しただけ。手駒を増やすためだけにマナやカオル、更にはイヴも含めた全てを捨て駒にする。

俺を出し抜くなんて、やってくれるじゃないか。だが、野放しにする気などない。

「同じ手は通じないさ」

俺は極夜を両手で構え、魔力を光へと変化させる。そこから更に極夜の刃に光を纏わせていく。本来ならば、生物に数多の恩恵を与えるハズの光。まさか、Xに効果的なのが太陽の光とは。何とも皮肉な話だ。

「ウルトラ・ヴァイオレット」

俺は極夜を空に向け、擬似的な太陽光を発射する。再生しつつあるケンタウロスを照らしつつ、徐々に形ある物から虚ろへと溶かしていく。まるで、最初から何もなかったかの様に、辺りは静けさを取り戻していく。

「兄さん、凄いですよ……」

俺の偉業に、マナは言葉が思い付かない様だ。ただ、俺も対処法を知っていなければ、マナと同じく戸惑っていたかも知れない。有効な手段を持っていたとはいえ、結果的に俺一人で撃破か。

とりあえず、攻撃で遊園地を崩壊させなかっただけ良い方か。空中ならば、遊園地に被害なんて出ないから。

「先に進もう」

俺の言葉に二人は頷き、再び目的地へと歩を進めていく。全てを終わらせるために。

愛情

攻撃ですらない擬似太陽光で撃破。熱と紫外線を少なく調節したが、何とも呆気ない結果だ。ヴォルフが教えてくれた対策に、嫌でも感謝しなければいけない。

死者蘇生という自然の摂理を覆す能力ですら、完全な蘇生など不可能という事。死により近い立場にいるXでも、死という概念に抗えない。そういう点では、俺達と変わらないらしい。

だからといって、倒さないという訳ではない。青髪のXとバラライは、俺が倒さなければいけない存在だ。何故なら、青髪は俺の家族を。バラライは俺のプライドを傷付けたからだ。命よりも大切なモノを傷付けて、タダで済ませる気など欠片もない。

「倒してやるさ」

俺はそう呟き、徐々に濃くなっていく魔力へと向かう。最初は砂埃のような薄さだったが、今は赤い濃霧へと変化している。霧吹きで闇夜でも発光する鮮血を撒いた様な風景。地獄をさ迷っている気分だ。

おかしい。三体のXの中に、ここまでの魔力がある奴などいただらうか。いや、間違いなく存在しなかったハズ。魔力の増大が、短期間であつたというのか。有り得ない。オーラ状の魔力が、風景を変えてしまう程に変化するなど不可能だ。

「兄さん、どうかしましたか？」

「敵が近くなつた様だ」

「そう……なのですか？」

この魔力に気付いていないというのか。おかしい。マナは俺と大差のない魔力感知が可能のハズ。それなのに見えない。おかしくなつたのは、俺の方なのだろうか。

「響ちゃんもアレが見えるの？」

「ああ、何故だか知らないが」

カオルも見える。いや、俺の魔力感知の精度が、カオルと同じか近い領域にある。そういう事か。

そういえば、九条院長も似た様な事を言っていた。エリクシル服用後に、カオルと同等の魔力になったと。もしかして、アレが関係しているのではないかと思う。

いや、止そう。あの人の言葉に、常識など一切通用しないから。常識という枠で考える事自体が間違いだ。

そう考えていると、右側から別の魔力を感じる。新たに生じた黄昏色の魔力、知っている奴のモノだ。その方向へ向くと、夕暮れのような髪の少女がいる。そいつは――

「イヴか」

俺はかつて子ネコだった存在の名を呟く。対するイヴは仁王立ちしつつ、俺を忌々しそうに睨み付けている。立っているという事は、どうやら回復したらしい。華奢な見た目に反して、再生力が強力という事か。

「アンタ、カティと戦うつもり？」

カティ、知らない名だ。名前だけでは情報量が少なすぎる。

「カティとは誰だ？」

「特攻服の男よ。フルネームはカティ・ドウ。バイクのXらしいわ」俺が尋ねると、イヴは一瞬驚くが素直に答えてくれる。

バイクのXで名はカティ・ドウ。成る程、随分とマニアックなネーミングセンスだ。自ら名の由来はバイクですと言っている。確か、奴の能力はドライブリミッターだとカオルから聞いた。納得がいく能力名じゃないか。

イタリアのオートバイ製造会社。及び、そのブランドでもあるドウカティ。確か、ボローニャに本社があった気がする。ただ、全盛期を考えれば多少レトロなXだと考えている。恐らく、何処かのバイクマニアから逃げ出したのだろう。

「さあな。ただ、奴は俺の獲物だ」

「随分と嬉しそうじゃない」

「そうか？ 気付かなかったが」

イヴに指摘されたが、恐らくは正解だ。X化するまで愛を注がれたバイク。俺の考えは退魔士として失格かも知れない。ただ、奴が欲しいと思っている。家に持ち帰り、パーツ毎に分解してみたい。

「響ちゃん。もしかして、あのXが欲しいと考えてない？」

「考えてたが」

俺は平静を装いつつ、カオルの言葉に答える。何だ、バレていたのか。ただ、お陰で正気を取り戻す事が出来た。奴はマナとカオルの仇。正直惜しいが、戦闘で壊れたとしても世の中の摂理。そう受け入れるしかない。バイクは諦めよう。

「響ちゃんらしいね」

「どういう意味だ」

カオルの微笑みにムツとしつつ、俺は思考を張り巡らせる。いや、張り巡らせようとしたが――

「あ、この子可愛い」

イヴの間抜けな声で、一度思考が停止する。

イヴの視線の先には、カオルに抱き抱えられたビアンカ。当のビアンカは、円らな瞳を輝かせてイヴを見つめている。そして、イヴに害がないと解ったのか、挨拶するかの如く軽くひと鳴きする。

「ビアンカっていうんだ。良い名前ね」

ネコ同士通じ合ったのか、一人と一匹が互いにコミュニケーションを取り始める。ビアンカという名を知った――という事は、ビアンカの鳴き声を言葉として理解出来るのか。ネコ同士、何か通じ合えるモノがあるらしい。

いや、ビアンカの特性上、通じているのはイヴの方が。その気になれば、ビアンカは人語を話す事が可能。何故ならば、カオルとビアンカは一人と一匹で一人前――俺を基準にした話だが――の能力者だから。

アイツ等は常にシンクロし、知識や経験を共有している。カオル

が知恵や魔力という様に、ビアンカは本能と運動能力。セフィロトという能力が互いの長所を橋渡しする事で、アイツ等は初めて真価を発揮する。故に、ビアンカは人間により近い存在。ただ、何故カオルとリンクしているのか、九条院長にすら解らないらしい。

イヴの言葉に、ビアンカが鳴いて返す。これを繰り返すだけ。イヴの方は何も知らないとはいえ、微笑ましい光景じゃないか。

「兄さん、あの人は誰ですか？」

俺が微笑みながら観察していると、横からマナが疑惑の眼差しを向けてくる。もしかして、イヴに嫉妬しているのか。それで、嫉妬の矛先を俺に。やはり、俺は罪な男だと思う。

ただ、俺が異性で愛しているのはマナだけだ。勿論、家族という範囲だが。

「心配するなマナ。アイツはイヴ。ただの俺のファンだ」

「ファンじゃないわよ！」

俺の軽いジョークに対し、イヴが本気で怒っている。やはり、面白い奴だ。直情故に、期待通りのリアクションをしてくれる。

ただ、マナの方は未だに疑いの眼差し。俺を嘘つきだと思っている眼だ。さて、次の手でいこうか。

「ならば、ストーカーだ。実際に、俺を追いつけていたじゃないか」俺は笑いを堪えつつイヴにウインクする。多少皮肉もあるが、合わせろという暗黙の了解も込められている。

これ以上、マナを怒らせたくない。マナ限定ならば殺されるのは別に構わないが、死なない程度に痛め付けられるのは嫌だ。いざという時は、カオルとイヴを置いて逃げる覚悟も出来ている。

「な……確かに、アンタを倒そうとは考えていたわ。けど、二回共アンタが勝ってるじゃない」

二回……ああ、依頼の件と今日で二回戦ったのか。ただ、最初に比べれば随分と話の通じる奴になっている。本当に素晴らしい変化だ。今ではそう思う。

俺の中にある、イヴの成長を喜ぶ心。一種の親心みたいなモノか。
「兄さん、詳しく聞かせて下さいね」

マナの表情が、疑いから笑みに変わっている。笑顔顔を顔に貼り付けているが、本心では全く笑っていない。俺だからこそ解る。普通に怒るよりも恐ろしい。

「解った」

俺はマナに悟られない様、平静という名の仮面を被る。だが、内心では若干マナに怯えている。取り繕いながら、真実を話す事にした。語る度にマナは驚いているが、結局は受け入れているらしい。やや呆れているみたいだが。

「要約すると、イヴさんが数週間前に兄さんを傷付けた張本人。しかも、兄さんとカオルさんは自宅でXに襲われた。今はアポストル級三体を相手に奮闘中……」

ここまで言うのと、マナが落ち込んでいく。今までの俺の言葉が嘘だらけだった事。或いは、Xに特攻していく無謀さに呆れているのか。とりあえず、俺が原因だという事だけは間違いない。

ただ、アポストル級三体という言葉にも、嘘が込められている。口が裂けても、マナを狙うXがいる。その正体が超越者でしたなんて事は言えない。真実を知れば、マナは自身を責めるかも知れない。だからこそ、俺は進んで悪役になろう。マナを引き取ってからそう決めている。

「兄さん」

「何だ」

俺が静かに問うと、マナは俺の身体に顔を埋める。俺は一瞬戸惑うが、しばらく身を任せてみる事にした。

「お願いですから、居なくならないで下さい……」

マナの声が震えている。声だけじゃない。身体や感情、マナの何もかもが震えている。マナから感じる心は恐怖。俺を抱き締める腕は、まるで俺の存在を確かめるかの様に力強い。

そうか、俺はまたマナを孤独にしまったのか。全てはマナのために。そう思いつつやってきた事が、実はマナを傷付けていたとは。

今すぐ抱き締めてやりたい。何か言葉を掛けてやりたい。けど、マナを傷付けない方法が思い付かない。いつも平気そうな顔をして、実は俺に氣を使いつつ無理をしていたのか。

何故、気付いてやれなかったんだ。マナは、小さい頃から何一つ変わっていない。優しいが繊細で脆い。俺をいつも慕っていたが、それ故に危うい一面も持っていた。誰かのために泣けるが、純粹故に誰よりも傷付きやすい。それが、俺の知っているかつての——いや、今までのマナだ。

肉体と共に、精神も成長したとばかり思っていた。けど、本質的な部分は変わっていない。アイツは、マナは優し過ぎる。そんな彼女を兄である俺が傷付けていたとは。何とも皮肉な話だ。

変わったのはマナじゃない。俺の方だったんだ。年月と共に、俺は知らないうちに失っていたのか。嘘で塗り固め、嘘で自分を偽り続けてきた。そのツケが廻ってきたらしい。

今の俺が何を言っても言い訳になる。そんな感じがして怖かった。「マナちゃん。響ちゃんは、何も死にたいから戦っている訳ではないんだよ」

カオルが諭す様に語り始める。すると、マナは俺から離れカオルの方へ向く。

「響ちゃんはね、今でもマナちゃんを独りにした事悔いているんだよ。誰よりも優しいから、家族を護りたいから戦っているんだ」

自分の事とはいえ——いや、自分の事だからこそ、本当の事を言われるのが恥ずかしい。他人事のように聞いてはいるが、いつまで聞き手のままでいられるか解らない。

しかも、語っているのが親友だからこそ、余計に質が悪い。自身の耳とカオルの口を塞ぎたい程に。

「響ちゃんが疲れたり傷付いた時、響ちゃんが帰ったと実感できる

のはマナちゃんだけなんだ。マナちゃんが居れば、響ちゃんは何度でも帰ってこれるんだよ」

まるで、灯台を目印に戻ってくる船の様な言い方だ。だが、間違っ
てはいない。いつも、いつも安心出来るのは、確かな暖かさがあるから。だからこそ、俺は何度も帰る事が出来るんだ。

俺を待つてくれる家族。俺を理解してくれる親友。二人がいる俺は、誰よりも幸せだと考えている。

そんな幸せを崩す奴は全て倒す。善悪で倒すではなく、俺のかけがえのない家族を傷付ける者を全て。

例え、その道程が天寿を全うするまでだとしても、俺は二人を護り続ける事を誓おう。別々の道を歩んだとしても、二人が人生という名の旅を終わらせるまで俺は護り続ける。

この身が滅びたとしても、俺の意志や希望だけは消えさせはしない。そう、例え敵同士になったとしても。二人が信じ続ける限り、俺は生き続け何度でも蘇ってみせる。

契約

「兄さん」

「マナ」

互いに気まずい雰囲気。だが、歩み寄らなければ何も解決しない。そう考えて言葉を掛けるが、向き合うタイミングも含めてほぼ同時。どうやら、俺達は似た者兄妹らしい。

「ごめんなさい」

「すまなかった」

謝るタイミングも一緒か。ただ、マナの方は少々震えているみたいだが。どうやら、俺を傷付けたと考えるらしい。俺は全く気にしていないというのに。

「何故謝る？ お前は間違っていない」

「兄さんこそ」

「俺は……無意識に、愛する者を傷付けてしまったからだ」

俺が恥ずかしそうに呟くと、マナが急にクスクス笑い出す。俺が滑稽に見えたのだろう。お陰で、俺の体温が急激に上昇する。どうやら、俺の身体にも温暖化がやって来たらしい。

正直、マナにだけは笑われなくなかった。本当に、どちらが保護者なのか時々解らなくなる。

「だって、フェミニストな兄さんが、愛なんて言葉を使うからですよ」

「確かに、女性是谁もが美しい。だが、お前の事は特に美しいと思っっている」

確かに、俺はフェミニストかも知れない。女性とは比べるモノではない。女性是谁もが美しく、誰もが活躍出来る権利がある。それが俺の持論だ。だが、持論にもマナという例外がある。

いや、ミシエルという例外もあるか。勿論、忌々しい奴という意味で。アイツは、精神年齢も含めて絶対に相容れない存在。一緒に

いると、こっちもバカになりそうで嫌だ。

「アンタ達って似てるわね」

「似てませんよ！」

イヴの言葉にマナが反発する。ただ、言葉には少し丸みを感じる。どうやら、イヴを受け入れる準備が出来ている様だ。

けど、別に否定しなくても良いじゃないか。正直、俺はかなりシヨックを受けた。

「さて、鬼退治ならぬ天使退治に行くか」

「罰当たりなネーミングだよ響ちゃん」

俺の言葉に対し、カオルの爽やかなツツコミ。俺はツツコミに対し、鼻で笑ってみる。ただ、ネーミングは間違っていないと思う。ただ、お陰で少し気が楽になった。

俺は心を奮い立たせるかの様に、本来の目的を果たすべく前に進む。早足で現実逃避しながら、俺は思考をクリアにしようとする。

「兄さん、照れていますね」

「アンタ子供ね」

「お前達にだけは言われたくない」

二人のからかいに反論しつつ、俺は先へと進んでいく。相手をしている、本来の目的を忘れてしまいうさだ。

俺が歩けばマナとカオル、更にはオマケも付いてくる。本来ならば関係ないハズのアイツが。

「いつまでくっついていくつもりだ？」

俺は呆れつつも、イヴに向けて言葉を掛ける。すると、イヴは一瞬ビクツと震え、マナの後ろへと隠れていく。マナの背後から顔を覗かせている姿。何とも愛嬌があるじゃないか。

「だって、行く場所が無いから……」

「兄さん、何とかありませんか？」

イヴの気持ちを察したのか、マナが俺に訴え掛ける。つまり、家に置いてくれという事か。

俺は別に構わないが、居候が増えるのか。既に、フェルゼという

怠け者が居るというのに。

大家であるカオルは、基本的に実家が現地じこちでの生活だから、あの家の住人にカウントしないとしてもた。

「どうする？」

「部屋なら幾らでもあるよ」

大家殿の了解も得たから、イヴを家に置いて良い事になった。ただ、イヴをこの先どう扱うのか。そこだけが問題だ。

イヴはX。しかも、Xの頂点とも呼べるアポストル級だ。人間同様に食事でも活動出来るが、同時に魔力も摂取しなければいけない。魔力の枯渇は死を意味する。

ならば、身体を維持出来る量の魔力を何処から供給するか。

食事により魔力を得る。言うだけならば簡単だが、あまり理想的ではない。Xを養うという事は、イヌやネコのそれとは違う。そんな事が出来れば、飢餓で苦しむ子供を救う事が可能だ。

ならば、人が襲われるのを黙って見ているか。これもダメだ。九条院長に迷惑を掛けてしまう。それに、再び俺が出るのも面倒だ。

もう一つ、方法があるにはあるが、あまり実行したくない。まあ、マナならばやりそうだが。

「だが、維持するための魔力は何処から供給する？」

俺は結局、何も策が浮かばないまま問い掛ける。すると、イヴが気まずそうな表情をする。どうやら、自分の置かれている立場が解っている様だ。

賢いからこそ、結果や欠点が解り苦しんでしまう。正に、俺と共通した欠点であり、マナとは正反対の性質だ。マナは頑固で、決して諦める事がない。俺やイヴにはない長所とも言える。

さて、頑固者が何か言い出す前に、俺は九条院長に策を聞いてみるか。そう考え、携帯を開こうとするが――

「じゃあ、私と契約しませんか？」

行動するよりも先に、マナが手を挙げつつ提案する。見る、嫌な予感的中してしまった。よりによって、俺が実行したくないと考

えていた方法じゃないか。

「良いの？」

イヴがマナに問い掛ける。声色には不安と同時に、マナの身を案じている。少なくとも、俺にはそう感じられる。

「勿論ですよ」

「止せ！」

俺は即座にマナの言葉を否定する。正直、マナの気持ちを尊重してやりたい。ただ、契約となれば話は別だ。

Xと契約し、使い魔として使役する。実行するだけならば簡単だ。四つの行程さえクリア出来ればの話だが。

そのうちの勝利と支配。既に俺が実行している。イヴに勝利し、イヴという名を与え認めさせた。ならば、この二つはクリアしたと考えても良いだろう。俺が仲間と認めた奴ならば、誰がやっても契約は成立する。マナならば、俺が既に条件を満たしている事は理解出来るだろう。

問題は、これからマナのやろうとしている共鳴と代価だ。どちらも危険で、殆どの奴がXを使い魔にしたいくない理由でもある。

共鳴は、互いの魔力に意識を上乗せしシンクロさせるためのモノだが、一歩間違えればXに魔力を根刮ぎ吸い取られて死ぬ。或いは、意識が一つになり目を覚まさない事もある。

代価は、命を象徴するモノをXに差し出す行為。ある意味、命を寄越せと言っている様なモノだ。イヴでは有り得ないと思うが、力欲しさに契約し心臓を喰らったXも実際にいる。

だからこそ、俺はマナに契約をして欲しくないんだ。

「兄さん、私は大丈夫ですよ」

「お前は、契約のリスクを知らないからそう言えるんだ」

俺はマナを諭す様に訴え掛ける。マナは俺の家族だ。だからこそ、危ない真似だけはして欲しくない。

「兄さんの慌てた表情、久々に見ました」

俺の心配に対し、マナは悪戯っぽく笑う。けど、今回だけは冗談

で済まされない。あくまでも実行するならば、愛するお前を叩いても俺が止めてやる。

「何度も言います。大丈夫ですよ。私は既に、お母さんと契約していますから」

既にミシエルと契約している。その事実には、俺は驚いていた。マナが契約者だという事実ではなく、あのミシエルと契約しているという事実には。ミシエルとの契約を意味する事は――

「ミシエルがXだと知っていたのか？」

「兄さんが家から出ていったあの日、お母さんが教えてくれました」
「知らなかった。まさか、マナが知っていたとは。ミシエルと共鳴した……つまり、契約の過程でミシエルの記憶を覗いているという事。過去から現在に至るまでのアイツを知っているという事だ。」

ただ、ミシエルの記憶は危険過ぎる。ミシエルの生まれた時代は、あの神代朔夜が生きていた時代。数世紀という単位だ。そんな膨大な年月を一度に叩き込まれ、マナの精神が無事だとは考えにくい。

「記憶は……大丈夫なのか？」

「大丈夫ですよ。少々衝撃的な記憶でしたが、実際は数十年しか活動していないみたいです」

誕生してからたった数十年。ならば、神代朔夜との出会いは嘘だというのか。そう聞くと、マナは笑顔で首を振る。どうやら本当らしいが、ミシエルや超越者について解らない事がまた一つ増えた様だ。

「お母さんは、朔夜さんの死後ずっと眠っていたみたいです。眠っている所をお婆ちゃんと九条先生が見付けて、今に至るみたいです」

数世紀もの間、ずっと眠っていた。それを聞いて俺は、ミシエルを情けなく思ってしまう。あまりにもバカらしくて、これ以上聞く事すら面倒だ。全く、ミシエルらしいというか何というか。

数世紀も眠っていた。ならば、魔力は――いや、九条院長が言っていたな。魔力の正体は地球の生命力。九条院長と使徒は、地球の生

命力を使っているのだと。もし、地球単位で莫大な魔力を使えるならば、魔力を維持したままのワールドスリープも出来そうだ。

「じゃあ兄さん、契約しても良いですね？」

「好きにしる。但し、俺は責任を取らないぞ」

俺の言葉に満足したのか、マナは嬉しそうにイヴの手を握る。

ただ、口では責任を取らないと言ったが、いざとなれば手を差し伸べるつもりだ。既に、九条院長に連絡する準備が整っている。ポタン一つで、ベートーヴェンの第九と共にやって来る。最初から、マナに危ない橋を渡らせる気などない。

後は、見守るだけか。結局は何も出来ない。俺の力は破壊を生み出す。護る事には向いていないらしい。全く、そんな自分に歯痒さを感じる。

「じゃあ、始めます」

言葉と共に、マナとイヴは互いの魔力を混ぜ合わせる。そこから更に同調し、辺りを純白に照らしていく。

取替

静まり返った遊園地で、マナとイヴが共鳴をしている。ただ、俺は二人を見ているだけしか出来ない。つい、もしもの事を考えてしまふ。それが、俺の不安を加速させていく。

周囲だけが昼になった風景の中、俺は敷き詰められたタイルの上で座り込む。夜なのに、一面のレンガ色がハッキリと解る。言い換えれば、二人は互いの魔力を燃やし合いつつ、目映い光を生み出している事になる。

「なあ、カオル」

俺は我慢出来ず、カオルに問い掛け沈黙を破る。すると、カオルは首を傾げ俺を見つめる。

「俺は魔術について詳しくはない。だからこそ、知識と技術を持つお前に聞きたい。マナとイヴの状況について教えてくれ」

俺の問い掛けに対し、カオルはそうだねと口にする。

「今は記憶を見合っている状況だね。互いを知るために。ただ……」
カオルはここで言葉を切る。今の明るさですら照らせない程の暗闇。それが、カオルの表情から感じられる。どうやら、契約に対し何か不安があるらしい。

「ただ、何だ？」

「二人は、決して癒せないトラウマを抱えているからね。例えば、響ちゃんがあの日の事をイヴちゃんに覗かれても、イヴちゃんを拒絶しないと言い切れる？」

あの日の事。極夜の暴走で、マナを傷付けてしまったあの日の事か。今でも忘れられない。いや、忘れられるハズがない。俺はあの日、大切な何かを失ってしまった。家族の絆だけじゃない。もっと、根本的な何かを。

確かにあった温もり。それに至る何かをあの日に置き忘れ、同時に忘れてしまった。多分、マナを護りたいという気持ち。そして、

両親——いや、神代家その物を拒絶してしまう程の理由。

まあ、他人に覗かれて快く感じないのは事実だ。マナの場合、俺が傷付けてしまった記憶がある。肉体的にも、精神的にも傷付けてしまった。俺を恨んでもおかしくはない程に。

イヴは飼い主の勝手な理由で苦しみ、短い生涯を終えてしまった。今でも、飼い主への憎しみと人間を信じたいという気持ち。そんなジレンマに押し潰され苦しんでいる。

もし、そんな二人の意識が混ざり合ったらどうなるか。想像したくない。二人には、まだ生きていてほしい。だからこそ、俺は見続けていだけなんて嫌だ。そう考えていると、二人に変化が訪れる。二人は光の中で抱き合い、涙を流している。互いの温もりや存在を確かめるかの如く。痛みに苦しみつつ、互いに救済し合おうとしている。

二人から感じ取れる感情。それは正に慈愛。優しさがあるからこそ、二人は拒絶しないのか。俺には眩し過ぎる。

次第に光が萎んでいき、二人は糸が切れた様に地面へと倒れる。

抱き合ったまま、ピクリとも動かない。俺は極夜を地面に放りながら駆け寄り、二人を抱き締める。

「戻ってこい……戻ってこい！ マナ、イヴ！」

俺は二人を呼び戻すために、何度も叫び続ける。死ぬな、死なないでくれ。そう思うが、想いに反して二人が冷たくなっていく。

「くそ……俺はまた何も出来ないというのか？ 俺は何のために力を手に入れた？ 俺やマナのような奴が、二度と出さないためだったハズだ。それなのに……！」

俺は何度も自分を責め続ける。だが、後悔しても二人は戻らない。九条院長に連絡を。そう思い、携帯のボタンを押そうとするが——

「二人を救いたい？」

何処からか声が響く。俺がヴォルフに敗れた時、意識の中から聞こえた声だ。

「極夜、お前なのか？」

俺は極夜に向かい問い掛ける。

「人と人ならざる者。両者を救おうとした、かつての朔夜と同じ場所へ立っている。だからこそ問い掛ける。二人を救いたい？」

極夜から聞こえる声は俺の質問を無視しつつ、逆に俺へと問い掛けてくる。だが、俺の答えは既に決まっている。俺は、二人を死なせる気などないから。

「当然だ」

「何故？ 血を分けた妹に全てを押し付け、その者とは二度も戦った。そんな過去を持ちながら、二人を救おうというの？」

声が嘲笑うかの如く語り出す。悔しいが、奴の言っている事は全て事実だ。俺はマナに全てを押し付け、家から逃げ出した。イヴとは二度も戦っている。

俺を試しているのか。だが、愚問だ。過去がどうであろうと、俺の決意は変わらない。

「過去は関係ないさ」

俺の言葉に対し、声が何とだけ呟く。そう、過去は今の俺に関係ない。

「例え一期一会だとしても、かつては敵だったとしてもだ。俺は、何も失いたくないだけだ」

そう、俺は何も失いたくない。ただ、それだけが俺の願望。

失いたくないのならば護れば良い。捨ててしまったのならば拾えば良い。奪われたのならば取り戻せば良い。俺はアイツの言葉で、既にそう悟っている。

「成る程、小鳥遊冬音の影響か。だが、現実はその甘くはない。願いが強ければ、損失による絶望は強くなる」

嘲りが更に強くなる。俺をずっと見ていたのか。いや、見ていなければ言えない言葉ばかりだ。痛い所を何度も突いてくる。

だからこそ安心した。何故ならば、俺の意志を呼び覚ますだけではないから。俺はかつての俺じゃない。俺が変わる事で、全てが――世界が変わるんだ。

例え少しでも、確かに変化し続けている。そうする事で、俺は何度でも進化し続けていく。

「ならば、俺が救ってやるさ。俺が空を見続けている限り、俺は何度でも進化し続ける。奇跡すらも、俺の味方に見せさるさ」

もう俺は揺るがない。俺は既に、過去のそれとは別の存在だ。傷付くのが怖いならば、恐れずに護れば良いだけの話だ。選択肢を自分で作り出す。こうして、俺は新たな未来を紡いでいく。ただそれだけだ。それに、出来なければ冬音^{アイツ}に笑われてしまう。

「ようやく、響ちゃんらしくなったね」

カオルがそう言いつつ俺に駆け寄る。

「どんな時でも自分の道に行く。それが、僕の大好きな響ちゃんなんだ。だからね極夜。響ちゃんの輝きを信じてみないかい？」

カオルが、俺を信じてくれている。信じられなくなったのは、俺自身だったという事か。

だが、お陰で俺らしさとは何かが、ようやく解った気がする。

「お前を倒してでも、マナとイヴを救ってやる。それが俺の答えだ」俺の決意を伝えると、声が大笑いし始める。

「正解。その言葉さえ聞ければ、代価としては十分だ」

代価——まさか、極夜は俺と契約するために、わざと俺を言葉で追い詰めていたのか。だが、契約に必要な残り三つ——勝利と支配、共鳴の手順を踏んでいない。

「安心してほしい。ミハエルが無理矢理神器を解放した時、既に死なない事で三つをクリアしているから」

暴走した力を抑えたからこそ、三つをクリアしている。そういう事か。実感が湧かないが、今俺達は契約している状態にあるらしい。ただ、一つだけ気になっている」

正直、どうでも良い疑問だ。ただ、解らない事をそのままにする事だけは出来ない。そんな俺の気持ちを察したのか、声は何でも聞いてと俺を促す。

「お前、何で一人称や二人称を示す言葉がない？ お前の会話自体

に不自然さを感じる」

「ああ、その事か。何故ならば、転生前と転生後の関係だから。簡単に言えば、本来は二人で一人の存在なんだ」

転生前と後の関係。二人で一人。恐らく、俺と極夜の事だろう。

俺が朔夜の神器の生まれ変わり。その事実は少々受け入れにくいだが、今の俺には関係ないさ。俺の意志がなくなる訳じゃないから。

成る程、一人称や二人称についてようやく理解した。どちらでも表せない存在であり関係であるからこそ、敢えて使わなかったという事か。

「さて、お別れの時間だ。溶けて混ざり合う。こうして、契約は完了する」

声にノイズを感じる。どうやら、極夜としての自我が俺に取り込まれつつある様だ。

だが、そうなれば神器としての極夜はどうなる。何も語らなくなるのか、或いは形を失うのか。恐らく、俺だけではなく極夜にも解らないだろう。極夜の言葉を認めるならば、極夜は俺自身。何となく、奴の考えが解る気がする。

「お前はどうか？」

「混ざって一部となるだけ。ただ、二つちゅ——おく。レヴィアタ——ず倒せ。奴は、災厄——のだ。そし——ベルフェ——ルを——オルをマナと——です——」

声のノイズが強まり、とうとう完全に消える。多くの謎を俺に残したまま。

内容は恐らく、レヴィアタンは必ず倒せ。奴は災厄その物だろう。ただ、ベルフェゴールはマナとどうすれば良いか解らない。レヴィアタンと敢えて区別したという事は、倒せという内容ではないハズだ。

「全く、最後まで優しいんだね君は」

聞き取れるか聞き取れないかの小ささで、カオルがそう呟いたのを俺は聞き逃さなかった。

カオルは言葉の意味を理解している。そう感じ取れる内容だ。ただ、敢えて聞かない。時が来れば、いずれ解ると信じているから。

「さて、二人を呼び戻すよ。ダア——」

「待て、俺がやろう」

一日で何度も消費したカオルに、ダアトを使わせる訳にはいかない。それに、今の俺ならば二人を救える気がする。いや、救ってみせるさ。

「さあ、思い浮かべる。過去は、決して辛い事だけではなかったハズだ。出会いと切っ掛けを思い出してみせろ」

俺は眼を閉じている二人を再び抱き、静かに語り掛ける。親が子を寝かし付ける時に読んでもくれる物語の様に。かつての俺とマナ、そしてミシエルがそうだった様に。

俺は二人の頬を撫でつつ、そつと魔力を注いでいく。すると、冷たかった二人に体温が戻り、自発的に呼吸を再開していく。

「そして、そつと眼を開けてみせろ。何も恐れる事はない。もう、お前達は一人なんかじゃないから」

俺の言葉に反応し、二人が徐々に閉ざしていた眼を開けていく。

「兄……さん？」

俺はマナとイヴを強く抱き締める。俺にも出来る事があった。俺が救ってみせた。それ以上に、二人を取り戻せた事が一番の幸せだ。「戻れないと思ってた。けど、確かな暖かさを感じたから戻ってこれた。ううん、今でも感じる。ありがとう、きょうや」

イヴが俺に向かい笑顔を見せる。年相応の女の子らしい表情だ。やはり、女の子には笑顔が似合う。

いや、待て。確かイヴの奴——

「初めて俺の名を呼んでくれたな」

「そうだったかしら？」

イヴがわざとらしく惚ける。俺を名で呼んでくれた。以前では考えられない程の大きな進歩だと思う。

「ところで兄さん」

「何だ？」

「イヴちゃんに謝って下さい」

契約の途中だというのに、もうちゃん付けで呼んでいるのか。ただ、何故俺がイヴに謝らなければいけないのか。まるで見当が付かない。

「兄さん、イヴちゃんの首を斬りましたよね？」

確かに、俺はイヴの首を斬った事がある。ただ、アレはやらなければ殺される。そう思ったからこそその行動だ。

だが、アポストルまで進化したイヴの言葉を考えれば、殺意その物はなかったらしい。死者が出なかった。それを奇跡ではなく必然だと考えていれば、或いは変わっていたかも知れない。

「俺は誰にも謝らないさ」

「兄さん！」

俺が笑いながら言い放つと、マナは俺の首を掴みつつ激しく揺さぶり始める。最初は平気だったが、徐々にマナの握力が増していく。今にも俺の首をへし折ろうとしている。

「まな、もう良いよ。済んだ事だから」

「甘やかしちゃいけません。兄さんはすぐに付け上がりますから」
イヴがマナを宥めようとするが、マナは俺を許してはくれそうにない。また俺は、マナに屈するのか。あまり気は進まないが、やらなければ俺が絞められる。

「悪か——」

ここまで言うのと、マナの締め付けが緩む。いや、急激に力を失ったと言うのが正確か。代わりに、腕から恐怖による震えを感じる。

俺は、マナが感じる恐怖の正体を知っている。根源は、俺達が向かおうとした場所から迫ってくる二つの魔力。正確には、そのうちの一つだ。

独特の金属光沢を放つ圧倒的な魔力。古くから魔を退ける力があるとされ、十字架等に使われる金属と同じ色。

それは、一言で表すと銀。金色の魔力を持つミシエル。アイツと

瓜二つの容姿を持つ、“奴”が纏っている魔力だ。

「ミハエル」

俺は、倒さなければいけない宿敵の名を呼ぶ。すると、銀色の――丁度人間サイズの竜巻が目の前に発生する。竜巻は次第に圧縮していき、一気に暴風と強大な魔力を俺達へ叩き付けていく。

俺は吹き飛ばされない様、自身と三人の重力を増加させる。地面から足が離れていきそうな力が押し寄せる。だが、俺の能力構成は常に万全。吹き飛ばされるハズがない。

竜巻が収まり、中から人の形をした“何か”が現れる。今は、契約時の光がない。だからこそ、全体像が見えない。

ただ、俺は人影の正体が“奴”だと確信していた。魔力の色だけじゃない。独特のプレッシャーが、俺に訴えかけている。だからこそ、俺には解るんだ。

「全く、遊園地なのに花火どころか、イルミネーションに彩られたパレードすら無いとは」

人影が呆れた様に呟く。その時、俺の警戒は一気に脱力へと変化していく。まさか、闇の住人であるXが、花火やパレードの出迎えを期待していたとは。ある意味、イヴより人間臭いXかも知れない。もっとも、花火やパレードを台無しにしたのは、お前の“愉快的仲間達”だが。全く、図々しいにも程がある。

「そういえば、娘とここで落ち合う約束をしているんだが。アリシア……何処にいるんだ？」

奴が不安そうに、娘の名を呼び始める。遊園地で落ち合う娘。人のXでアリシア。条件と一致する奴は一人だけ。だからこそ、間違えようがない。

アイツ、アリシアの父親だったのか。そういえば、アリシアが両親はXだと言っていた気がする。ミハエルとミシエルが双子の兄妹という事は――俺とマナにとって、アリシアは俺達の親戚に当たるのか。正直、複雑な気分だ。

ソレは別として、今はチャンスだ。奴は俺に気付いていない。今ならば、仕留める事が出来る。

俺は一気に魔力を練り上げ、目の前に擬似的な物質を造り上げる。具体的には、地面に回転する砲台を出現させ、砲台に二本の棒を付けただけの物。俺の技の中でも、精密さと破壊力だけで考えれば二番目に強い。そのための装置だ。

両手を二種類の電極に見立て、装置の棒を握り締める。弾丸は俺の魔力。両手から発生させる電気はトリガー。後は、角度を微調整して奴を撃ち抜くだけ。

「シューティングスター」

俺は技名を呟き、魔力を一気に固めていく。すると、魔力は電磁力で加速していき、目標へ真っ直ぐ突き進んでいく。“理論だけ”の擬似的なレールガンだが、X一体を葬り去るには十分な威力だ。後は勝手に吹き飛ばしていく。

魔力の弾丸が、何度も風を切る音を立てながら推進する。これで一体。以外と呆気ないモノだ。そう思っている時だった。

だが、俺の予想に反して、弾丸は奴に当たる事なく次々と破裂していく。正確には、当たる寸前で魔力に戻されている。しかも、魔力へと還す度に、還した魔力を呼吸するかの如く取り込んでいる。今まで出会ってきたXの中でも、特に質が悪い。

「既に、お前の存在には気付いている」

言葉と共に、奴の気配が俺の後ろへと現れる。いつの間に後ろを取られたんだ。そう思いつつ、俺は奴を倒す方法を模索していた。

「暗闇で戦えば、人間より感覚が上の私達が圧勝する。ただ、ソレは私の美学に合わない」

後ろを取っているにも関わらず、奴は未だに何もしてこない。それどころか、美学まで語り出すとは。何処まで俺をバカにしているのだろうか。

「ならば、こうしよう。アイソレーション！」

謎の言葉と共に、奴の身体から膨大な魔力が溢れ出る。魔力は眩

い光を放ち、俺達を包み込んでいく。

光が収まったのを感じると、俺はゆっくりと瞼を開ける。辺りには光が溢れている。ただ、風景が遊園地とは明らかに違っていた。

「マナ、カオル！」

俺が呼び掛けても、誰も返事をしない。代わりに、俺の声が虚しく反響している。

下に広がる、白と黒の正方形のストライプが続くタイル。縦横八つに区切られ、計六十四マスのタイルが広がっている。この空間はまるで――

「成る程、チェス盤か」

「そう、チェス盤だ。人間が生み出した、歴史のある高尚なゲームを模した場所。言い換えれば、ここは私の心象その物」

声の方へ向くと、そこにはミハエルがいた。中性的な顔立ちで、金髪を首の長さまで切り揃えている。服装は、純白のスーツに黄色のネクタイ。何処かの社長に見える。そんな感じた。血縁だからだろうか。何処と無く、マナとミシエルに雰囲気似ている。

心象を現実に影響を与える。そんな技は今まで聞いた事がない。

ここまで風景を変えろとは、流石は――信じるならばの話だが――超越者といったところか。

「まあ、アイソレーション自体は、我々超越者や血を分けた者ならば誰でも使える。元々は、我々が力行使する事によって発生する、世界の歪みを最小限にする術だ。確か、神代や九条も歴史的には使えるハズだ」

世界の歪みを最小限にする。まるで、奴等が世界を大切にしている様な言い方だ。視点を変えれば、自分が正義だと言ってる様にも聞こえる。実に不愉快だ。

歴史的には使える。ならば、俺とカオルの先祖も奴等と同族。超越者という事か。もしかしたら、奴等と同じく今でも先祖は存在するのか。ただ、それを確かめる術は今の俺にはない。

九条院長が異常なまでに強いのは、先祖の力により近付いた結果かも知れない。ならば、その先祖とやらにより近い俺とマナ。一番強いとされるミシエルの子として生まれた俺達ならば、どれ程の潜在能力を持っているのだろうか。

「ところで、敢えて二人きりになった理由は何だ」

俺は警戒しつつも奴に尋ねる。わざわざ俺を別の空間へと飛ばした理由。恐らく、戦う意思はないのだろう。ただ、生憎俺には戦う理由がある。

「単刀直入に言おう。マナを我々に引き渡してくれ」
「断る」

俺の言葉を聞くと、奴はそうかと呟く。その時の表情と眼差しからは、何処か悲しさを感じる。

「姪に危害を加えるつもりはない」

「既に、カティというXが加えている」

そう言うのと、ミハエルの表情が更に曇る。ただ、ソレは矛盾を突かれて焦ったモノではない。知らなかったという表情だ。

「部下の動きを把握できていないとはな」

「人望の無さなら、妹や妻、末っ子のエリスがいなくなった時点で自覚してるさ」

ミシエルだけでなく、妻子にまで逃げられた。憐れな奴だ。話がリアル過ぎる。Xのくせに、超越者を自称する種族のくせに情けない奴。それが、俺の懐いた奴のイメージだ。

ただ、言動は別としても、魔力は化け物クラス。今は体内へと抑えているが、強大な波動までは隠しきれていない。吹雪が強い夜に感じる、痛みに近い寒気。アレによく似た感覚が、俺の肌に伝わってくる。

「響夜。超越者は、何故生まれると思う？」

「他のXみたいに、強い思念で生まれるからじゃないのか？」

俺がそう問うと、奴は残念だと言わんばかりに首を振る。どうやら、他のXとは違う存在らしい。

「君達の言葉で言い表すならばチェンジリング。それが私達の正体だ」

矛盾

チェンジリング。確か、日本語訳では取り替え子。ヨーロッパの民話で伝わっている言葉だ。

妖精が人間の子供を拐い、代わりに妖精やそれ以外の種族の子を置いていくとされている。

「ただ、私達の場合は民話のソレとは違う。生まれる前から、世界に選ばれX化した存在。神に遣える天使その物だ」

生まれる前から、地球に選ばれた存在。それが奴等の正体。

だが、傲慢な考え方だ。まるで、自分達が人類を裁く者だと言っている様に聞こえる。自分が人類より上だと考えているのか。ますます気に入らない。

「随分と傲慢な考え方じゃないか」

「事実だ。全てはこの星の意思。我等の神。君達の言い方に直すならば、地球のXの代行者だ」

地球のX。確かに、強い思念と魔力を帯びれば、あらゆる存在や概念はXに変化する。九条院長の言葉が正しいと仮説する。魔力の正体が地球の生命力ならば、それを生み出す地球がXになってもおかしくはない。

それに、世界では一日で十万人死亡しているとされる。その時の思念を地球が吸収しているとすれば、どのXよりも強大なXになるだろう。

「九条ヒカルは、我等の神を滅ぼそうとしている。だからこそ、マナの力が必要なんだ」

今までの言葉を聞いても、奴の瞳に嘘はない。ただ、俺には信じられなかった。奴の言葉が正しいければ、神は地球のX。X化した存在を倒せば、例外無く消滅して灰となる。それを九条院長が望んでいるとは思えなかったから。

聞いた話だが、九条院長が医者になったのは、幼少に母親を病で

亡くしたかららしい。当時、名医として有名だった九条院長の父親。カオルの祖父が手術しても、治す事が出来なかったという。その後トラウマが切っ掛けで、アストラルという強大な能力が覚醒したらしい。

二度と、他人に自分と同じ悲しみを与えたくない。そう思い医学を学び、更にXから人を護る術を手に入れるために、おばあちゃんの弟子になっただけらしい。

そんな悲しい過去を持つ九条院長が、世界を滅ぼしたいと考える。それ自体が考えられない。

「何故、九条院長がそうすると言い切れる？」

「九条ヒカルが契約した、ある三体のXが問題なんだ。通称、上位使徒と呼ばれる三体。奴等の思想は危険過ぎる」

ミハエルが更に語る。奴曰く、レヴィアタン、サタン、ベルフェゴールの三体は、チェンジリングとは違う生まれ方をしたXらしい。かつて人間だった者が、世界に憎しみを持つ事で誕生するX。世界の崩壊を望む使徒。裏切り者の超越者。

奴の言葉を真実だとするならば、九条院長は何故三体と契約をしたのか。仮に脅されて契約したとしても、契約の“共鳴”の時点で死亡している。意志疎通が不可能だから。

ならば、上位使徒と利害が一致して契約したか、ミハエルが嘘を付いている事になる。

「九条ヒカルを倒せば、上位使徒は弱体化する。そのためには、我々Xをより完全な存在にしなければいけない。だからこそ、マナの魔力及びエクサメロンが欲しいんだ」

成る程、奴の思想とやらがよく解った。奴があくまでも“正義”のためにやっているという事も。ただ、俺は奴に賛同する気などない。奴の正義は、あくまでも奴の正義。俺には、奴に賛同する理由など無かった。だからこそ、俺の中では奴と戦う意思が固まりつつある。

「気に入らないな。お前の誰かを犠牲にするやり方が」

「綺麗事だ。我等が盟友朔夜は、我等を救う代わりに同族の人間によつて殺された。理想を現実とするには、多少の犠牲が必要だ」

確かに、奴の言う通りだ。朔夜を友だと言う事にも驚いている。奴等にとつて、神代朔夜は恩人なのだろう。

ただ、奴の言葉は朔夜の死で正当化しているに過ぎない。自分の弱さをマナや九条院長、神代朔夜といった他人に押し付けている。正直、俺は奴を軽蔑する。

「それは、上位使徒を自分で倒せないお前の言い訳だ」

「上位使徒の強さを君は解っていない。奴等は妹に準ずる強さだ」

ミシエルに準ずる強さ。それを聞くと、俺は抑えようとせず笑い始める。ミシエルで比較した奴が、あまりにも滑稽だったから。

奴はミシエルや上位使徒をまるで勝てない存在だと言っている。その時点で、俺は奴の思想とやらが間違いだと悟ってしまった。

「俺はミシエルを苛める事が出来る。ならば、同じく心を持った上位使徒も倒せるハズだ」

「そんな……あのミシエルが？」

ミハエルの表情が、不安と焦りの入り交じったモノへと変化する。

“あのミシエル”という表現についてやや疑問を感じるが、俺の言葉は事実だから仕方ない。

「お前が、世界とやらのために戦っているのはよく解った。ならば、俺はマナのために、マナを傷付ける全ての使徒を倒してやるさ」

「思い上がるな。人間の身である君が、我々を倒すだと？　くだらない。所詮は世迷い言だ」

俺の言葉に対し、ミハエルが皮肉な笑みを浮かべている。同時に、奴の身体から少しずつ銀色の魔力が溢れてくる。

「ならば、私を倒す事で証明してみせる！」

奴の叫びと共に、銀色の魔力が波となつて押し寄せてくる。俺は即座に周囲の重力を軽くし、宙高くまで軽く跳ぶ。

「行くぞ極夜」

俺は極夜を右手に握り締めると、左手を真横へと向ける。すると、

極夜が無数の刃に別れ、一気に増殖していく。そして、刃が徐々に両手へと集まり、二本の剣へと変化する。

俺は二本に分裂した極夜を握ると、加速しながら地上へと降下していく。目標は、真下のミハエル。ここまで加速すれば、防御など不可能だ。後は、今すぐ刃を振るうだけ。

「物理乖離」

ミハエルが謎の言葉を発する。同時に、上空の俺に向けて腕を突き出している。明らかな自殺行為。そう思いつつも刃を振るう。

だが、攻撃が当たる事は無かった。いや、正確には攻撃は当たっているが、まるで手応えがない。幻を斬った様な感覚。両断したハズの奴の身体には、傷一つ付いていない。俺は攻撃の力が勢い余り、そのまま地面へと叩き付けられる。

奴はただ不気味に笑っているだけ。魔力は感じる。それにも関わらず、攻撃が当たらない。一体何の能力だ。ドゥームズデイの様に、反則染みた能力なのか。能力の正体がまるで解らない。

「どうした、君の力はこんなモノか？」

更に何度も斬りかかるが、傷や手応えすらなくすり抜けていく。居るハズなのに、奴を斬る事が出来ない。斬れないならば、策を変えられるだけだ。

俺は奴の胸部に極夜を突っ込み、奴の魔力をかき集めていく。俺の中でも三番目に強い技。相手の魔力を球状に圧縮させ、一気に爆発させる奥義。

「スーパードヴァ」

「魔力乖離」

だが、俺の予想に反して、攻撃が不発に終わる。いや、正確には不発に終わったが、さっきまで斬れなかった奴が斬れている。極夜が刺さっている箇所から、確かに傷口と流血が発生している。

「ダメージ乖離」

ミハエルが苦痛を浮かべつつ、技名と思われる言葉を呟く。すると、胸に刺さっていた極夜が遠くへ吹き飛び、傷口が一気に再生し

ていく。

「成る程、そういう能力か」

俺の予想が正しければ、性能だけならバラライのドゥームズデイより上。恐らく、こいつの能力は――

「あらゆる結合を無効にする能力か」

「その通り。私の能力はタワーオブバベル。全ての結び付きをゼロにする能力だ。この能力を使えば貫く事のみに特化し、それ以外の事象に一切干渉されない攻撃。死に結び付くあらゆるダメージの無力化。能力や魔法を魔力に還す事が出来る。まあ、これ等も応用の一部でしかない」

タワーオブバベル。バベルの塔か。旧約聖書にも登場する。天まで届く塔を人間が造ろうとしたという。一般的には建設中に、神の怒りに触れて崩されたと認識されている。

ただ実際には、聖書にそんな事が一言も書かれていない。神の力で言葉が通じなくなり、混乱して各地に散らばった。こちらが定説らしい。

成る程、だから結び付きをなくす能力。タワーオブバベルか。

今までが応用の一部でしかない。ならば、他にも厄介な技がある。そう考えた方が良い。

だが、奴の能力には致命的な弱点がある。あまり確証はない。ただ、魔力乖離とダメージ乖離の時点で、不可解な現象が起きている。あくまでも、異能者からXと化した超越者の構成要素及び能力が、人のソレとほぼ同じとするならばの話だが。

「お前の能力は、一回につき一つの事象しか対象に出来ない。違うか？」

「その通り。だが、知った所で君に何が出来る？ それに君が言う欠点は、能力だけを考えた欠点だ」

能力だけを考えた欠点。ならば、能力の欠点を補うモノがあるという事。その正体は何か。

高速移動——モーメントでカバーしても、たかが知れている。今の俺にはモーメントが使えない。だが、代わりに天使化が出来る。確信はないが、この空間は現実とは違う。ならば、極夜を身体に突き刺しても、神ヶ丘のシステムにダメージを与える事はないハズだ。ただ、奴も同じ事を考えているだろう。異世界を造る技自体、世界の歪みを最小限にするためだ。つまり、奴も被害を考えずに天使化が出来るという事になる。

視点を変えよう。奴をXではなく、一人の能力者と考える。能力者、この部分で何かが引つ掛かる。魔力、能力、神器——能力と神器。成る程、そういう事が。

「能力で防ぎつつ神器で攻める。それがお前の戦法か」

俺が導き出した結論を言くと、奴が両手を叩きつつブラボーと呟く。正直、当たって欲しくなかった。攻守を同時に行うヒットアンドアウェイ。盾や回復等の補助をしつつ攻撃を行う。恐らく、隙が殆どない。

どうやら、俺はハズレを引いたらしい。

「君は少しのヒントで、すぐに答えを導き出すのか。実に素晴らしい。だが、実に惜しい。君みたいに、才能ある若者を潰すというのは」

ミハエルが首を横に振りつつ、残念そうに呟く。

才能がある。正直、不愉快に感じる。聞き方次第では、俺が努力していないとも取れるから。

俺の能力には致命的な欠点がある。俺はソレすらも技にする事で、様々なXを倒してきた。俺の功績は、あくまで努力で勝ち取ったモノ。それを才能という言葉で片付けられる。不愉快極まりない。

「ただ、私の神器は君みたいな者を倒すのに最適な力だ。見せてやる——ロングヌス！」

奴の魔力が、右手で激しく輝き始める。魔力は徐々に物質化していき、細長い何かを形作っていく。

変化が終わると、奴の右手には冷たく鋭利な銀色の槍が握られて

いた。刃の部分は二又。音叉に似ている。

「このロングヌスは、少々扱いが難しくてね。普通の人間相手には、あまり効力を発揮しないんだ。ただ――」

奴が槍を振るう。その速度は凄まじく、音がまるでない。

人間が危機に陥ると時間だけが切り取られた様に、全てがスローモーションになる事がある。だが、奴の槍にはそれすら無かった。

何故なら、気付く前に――痛みすら感じる前に、俺の腹が斬られていたのだから。そこから、急に思い出したかの如く、耐え難い激痛と大量出血が俺に襲い掛かる。

俺は思わず苦痛に顔を歪めつつも、状況を瞬時に理解し舌打ちする。

「お前に攻撃を当てる事以外を乖離すれば、気配や抵抗すらもゼロにする事が可能だ。半永久に加速する事はあれど、物質やエネルギーに減速させられる事など有り得はしない」

奴が違和感を感じる程に、淡々と能力を語る。

タワーオブバベル。予想以上に厄介な能力だ。正面から戦っても、勝てる気がしない。

ただ、少し気になる。ミシエルに似ているのに――いや、ミシエルに似ているからこそ、奴に違和感を感じる。

今の状況を自慢する訳でもなく、ただ言葉を発するだけ。ミシエルが奴だったら、うざったい程に騒いでいる所だ。

奴自身に感情が無いのではない。奴の言葉から、まるで感情を感じられないんだ。道化と戦っている様な感覚。喋っているのではなく、あくまでも舞台上で演じる時のセリフ。それを聞いている様な感覚に近い。

「ただ、あくまでもタワーオブバベルの力を付加しただけ。ロングヌスの持つ特殊能力は、そんなモノではない」

奴が槍を前に構えると、気が付けば俺は何度も胴体を突かれていた。但し、どれも致命傷ではない。

だが、俺はすぐに身体の異変に気付いてしまう。奴に付けられた

全ての傷口が反応し、一気に開いていく。俺は膝から落ち、そのままチエス盤へと倒れる。

「ロンギヌスの能力とは、斬った数だけ傷が深くなる事だ。更に言えば、斬った対象に名前や出生全てに神や不死、英雄等。凡人にはあり得ない事が当てはまる程、ロンギヌスの威力は増していく」

奴は得意気になる事もなく、ただ淡々と語っていく。

あり得ない事が当てはまる程、威力が増していく。聞いただけでは解らない。今日の時点で出血が多いせいか、頭がまるで働かない。「君の名前は神代——そう、名前に神の字がある。先祖の朔夜は英雄。母親はミシエル。極夜というXを身体に宿している。天使化が使える。魔力その物が使える。つまりは君の出生全てが、ロンギヌスの威力を強化しているんだ」

成る程、それがロンギヌスの能力か。勝手にペラペラ話して——気に食わない。

つまり、俺と奴は何もかも相性が悪いという事か。能力も神器もそして性格も。あまり、友達になりたくない相手だという事が良く解った。

攻撃をすれば防がれ、防御をすればそれすらも無視される。一点のみに能力を集中し、残りは乖離した攻撃。攻撃自体、反射による回避すらも出来ない。反射による、回避。

待て、何かが引つ掛かる。奴の能力に、何か見落とした所がある。攻撃を防御。防御を無視。攻撃のみに集中。反射、回避。ロンギヌスの能力——成る程、そういう事か。見えた、奴の能力にある致命的な欠点だ。

俺はあまりにも馬鹿馬鹿しく思い、つい高笑いしてしまう。出血すらも忘れ、まるで狂ったかの様に。

「やはり、君ではまだ早過ぎたか」

「いや、問題ない。お前の弱点を大体理解したから。ソリューション」

俺は自身を対象に能力を掛けていく。厳密には、ロンギヌスの特

殊能力を形作る奴の魔力。俺の身体から、異物を全て排除していく。そこから、極夜を無数の欠片へと変化させ、自身へと突き刺していく。極夜が一本無くなった代わりに、傷口が全て塞がっている。

「極夜をそこまで使いこなしているとは思わなかった。だが、弱点を理解したとは？」

「ああ、理解したさ。お前のタワーオブバベルが、一方通行でしかないという事が」

俺の言葉に、奴の表情が明らかな動揺へと変化する。

やはり凶星か。奴はイヴよりもお喋り。更に、奴は戦闘開始から能力を見せ過ぎていたんだ。それ自体が、致命的なミステイクもあり、俺にとつて幸運の女神でもある。要は、俺に考える時間を与え過ぎた。それが、お前の負ける理由だ。

「お前の能力は、一回の発動につきカテゴリーを決めなければいけない。能力の同時発動が出来ないんだろう？　つまり、同時に攻撃や防御、補助が出来ないんだ」

「良く気が付いた」

俺の言葉を聞き終わると、奴は軽く両手を叩き始める。バカにした様な感じはなく、純粹に俺を認めた上で誉めている。やけに素直だ。それとも、まだ勝てると思っているのか。

「だが、知っているのと勝てるのとは違う」

「だろうな。いや、今の俺には――俺達には関係無いか」

俺は立ち上がり、真っ直ぐ奴を指差す。既に勝利が確定している。俺は奴に勝てるかと確信している。

超越者といつても、所詮は元人間。ならば、奴が勝ち続ける事など、決して有り得はしないんだ。

「何様なんだ君は」

「神代響夜だが」

「良いだろう。ならば、強欲の使徒マモンとして、君を倒してみせる」

互いに名乗ると、互いに魔力を放出する。先制として奴が槍を振

るう。いや、正確には振るおうとしていたが正しいか。槍が俺に届く事は無かった。

何故ならば、奴の身体は地面に吸い付き、決して動く事など無いのだから。俺はすかさず、奴の腹部に拳の一撃を加える。上から下へ。重力に逆らわず、重力を上乗せした状態で。

「そんなバカな……！」

初めて、奴に狙って一撃を与えられた。ただ、俺にとっては大きな進歩だ。

「お前の重力を支配した。ならば、振る事も突く事も出来ない」

俺はすぐに次の一撃を加えようとする。だが、その前に奴の口が開く。

「能力乖離」

「極夜！」

俺は床に転がっていた方の極夜へ叫ぶ。すると極夜は宙を舞い、俺の右手へと向かっていく。俺は極夜を掴み、奴に何度も斬り掛かる。

「だが、ロンギヌスの能力を忘れたか！ 半分になった極夜で回復すれば、君に武器はない。私の勝ちだ！」

奴が槍を振るう。避けられない。いや、避ける必要が無かった。

俺の腹部に槍が刺さる。その次に、奴の心臓目掛け極夜を振るう。肉を切らせて骨を断つ。逆上すれば、トドメの一撃に突きを使うと信じていた。だが、それこそ望むところ。刺さった刃物は抜く事が難しい。真に武器を失ったのは奴だ。

確かに今の攻撃は致命傷。だが、俺にとっては数秒だけ生きていれば十分だった。槍が刺さっているという事は、神器を通して奴の魔力が流れ込んでいるという事。ならば、流れ込む魔力を読み取り、逆流させる事も可能だ。

「ソリューション」

奴の神器が消え、次に奴の魔力が消滅する。

そして、俺の思惑通り奴が微笑み始める。

「私の魔力は地球から引き出している。つまり無限だ。無効化した程度で——」

「いや、ソリューションの効果は無効化じゃない。相手と正反対の性質を持つ魔力を生み出し、常に分解する触媒へと変化させる。その効果は、能力に使った魔力が消えるまで。さあ、その触媒は——何処へ消えた？」

「まさか……！ 魔力乖離……魔力乖離！」

奴は能力を使おうとするが、何も変化が現れない。対する俺は極夜を分解し、傷口を一瞬で回復させる。そう、奴の敗北は決まった。「チエスでは、王の前へ来た時こう言うんだろ？ 終りだミハエル——チエックメイト」

俺は拳を握り締め、ミハエルの顔面を殴り飛ばす。すると、奴は吹っ飛びながら床を跳ね、着地と同時に転がっていく。

危なかった。もし、奴の性格が異なっていれば、勝機は殆どなかっただろう。それほどに、奴の能力は悪質過ぎる。勝てた方が奇跡なんだ。

そう考えていると、俺の身体から力が無くなっていく。極夜の回復は、やはり身体に負担が掛かるらしい。俺はそのまま倒れ込み、ミハエルを見据える。

「本当に、厄介な奴だよ君は。流石は妹の——ミシエルの子だ」だが、倒したハズの奴が急に立ち上がり始める。魔力が復活し、巻き戻しをしたかの如く傷口が回復していく。

バカな。喋るだけでなく、立ち上がっただと。有り得ない。

「超越者は、周囲に魔力さえあれば何度でも復活が出来る。あの程度の傷で、私を倒せるとも？」

認めたくはない。だが、認めざるを得ない。X以上の化け物め。「君程度で、あのミシエルを苛めた？ 笑わせる。ミシエルはXの女王、最強のXだ。敢えて息子に手加減をしていた。何故、この思考に到らなかったんだ？」

思考に至らなかった訳じゃない。至れなかったんだ。常にミシエ

ルからは、奴に匹敵する魔力が感じられなかった。

いや、正確には俺とマナより弱い魔力しか感じられないんだ。ミシエルの魔力その物は、決して弱くない。ただ、戦闘に特化している神代家全体で考えれば、最弱の部類に感じてしまう程だ。

ミハエルの言葉が正しければ、ミシエルは本来の力を隠している事になる。ミハエルが魔力を隠していても、強大さは俺でも理解出来る。

だからこそ、信じられないんだ。ミハエルの言葉が。ミシエルに――実の母親に殺されかけた今日の出来事が。

「そもそも、ミシエルの全体的な魔力を視認する事など不可能だ。ミシエルの魔力は、神ヶ丘に全て割り振られている。言い換えれば、神ヶ丘のシステムその物なのだから」

「どういう事だ？」

ミシエルが俺の街・神ヶ丘のシステムその物。言葉だけでは理解不能だ。

「言葉の通りだ。神ヶ丘は、ミシエルがいなければ成り立たない。言い換えれば、ミシエルさえ倒せば神ヶ丘は簡単に滅びる――と説明すれば解るかな？ いや、君が知る必要はないか」

奴が独り言の様に呟くと、左手と背中が銀色に輝き始める。ロングヌスを出す時と同じ量の魔力が、背中と左手合わせて九つ出現する。

輝きが止むと同時に、左手と背中にロングヌスが出現していた。

両手に一本ずつ持ち、背中に八本翼の様に浮いている。

「悪夢だ」

俺は自嘲するかの様に苦笑する。一本の時点で、空想を殺せる能力を持っている。それにタワーオブバベルが加わり、更に殺傷力が増す。

もし、十本のロングヌスでそれが可能だとしたら、奴に勝てる者など存在するのか。一本ですら、追い詰められてたというのに。

「私のロングヌスは、見て解る通りの数だ。私の真の力は、乖離を

加えた十槍流。つまり、今まで私は一割の力で君と戦っていたんだ」
一割の力での強さ。成る程、俺はただミシエルより強いと思い込んでいただけか。ミシエルを含めて、こんな奴があと六人いる。全員倒せる奴が存在するのか怪しいモノだ。

時間支配に蘇生、結合をゼロにする能力。ならば、残り四つの能力もそれなりに悪質なのだろう。

だが、解つていても俺は引き下がる訳にはいかない。俺は、まだマナを諦めたくないから。俺は誓ったんだ。マナを護り続けると。勝てないんじゃない。勝つんだ。そこに、敗北などあつてはいけない。ならば、俺は最後まで足掻いてみせるさ。

「何……だと？」

奴が驚きの表情を見せる。何故ならば、俺は足が震えつつも、ゆっくりと立ち上がったから。覚束ない足取りで、ゆっくりと奴に近付く。

不思議と、痛みも何も感じない。それに、今いる場所——アソシエーションは、世界の歪みを最小限にするための空間。ならば、俺に出来る最善の策は一つしかない。

「止せ、私はお前を殺したくない！」

「優しいんだなお前は。いや、お前が最初に戦う使徒で、本当に良かったと思う。俺を——ここまで追い詰めてくれたのだから」

イヴに使った天使化には、もう一つ裏技がある。それは、極夜を自身に突き刺し同化する事。ただ、一度使えば神ヶ丘に被害を及ぼしてしまう。

だが、この空間ならばどうだ。もし、奴の言葉が本当ならば、被害を最小限に防ぐ事が出来る。ならば、出し惜しみなどしない。

「見せてやる。俺の天使化を」

「ならば、私は全力でお前を止めてやる。もう誰も、悲しませたくないから！」

互いの思惑を胸に秘めつつ、俺達の戦いが本当の意味で始まった。

蒼天

天使化を発動する。条件を満たすだけならば簡単だ。強い意志を持ちつつ半殺しになるか、極夜を自身に刺すだけ。

ただ、アイソレーションという空間内でも、不安な要素はある。

特に後者の方法は、神ヶ丘のシステムを止めかねない。全てのエネルギーを魔力へ変換し、吸い付くしてしまう。その結果、停電等の直接的な原因となる。

確実に成功させるには、三つの技術が必要だ。ただ、どれも――特に魔力制御に特化したX、超越者寄りの技だ。今の俺には使えない。

「戦う前に教える」

俺は奴にある疑問をぶつける事にした。ミシエルに聞けば、教えてくれたかも知れない技術。だが、俺は敢えて奴に聞いてみる。ミシエルに頭を下げるくらいならば、敵に聞いた方がまだマシだ。

当然、奴が何だと呟く。その瞬間、表情だけは警戒を解いたのを俺は見逃さなかった。

「天使化って、部分的にも使えるのか？ 例えば、身体の一部や神器に付加するとか」

俺の疑問に対し、奴が呆れた様な表情をする。恐らく考えた事は、“何だそんな事か”だろう。奴等超越者にとって、簡単な疑問だったに違いない。その疑問に対する答えこそ、俺の求めているモノだという事も知らずに。

「可能だ。天使化状態の魔力を強化したい部分に集中すれば、部分的な天使化が出来る」

「ならば、アイソレーションも部分的に出来る――違うか？」

俺が続けて問うと、奴はああと一言だけ呟く。これで二つ目。ただ、二つ目に対しては疑問点がある。それは――

「アイソレーションの使い方を知らないから、俺には意味がないか」

「簡単だ。契約の共鳴と真逆の事をすれば良いだけの話じゃないか。まあ、君が言う部分的に使う技は、ミシエルや上位使徒しか使えないが」

俺が更に問うと、奴が得意気に語り出す。途中、ミシエルをいとおしそうに、上位使徒の部分を忌々しそうに言っていたが。

共鳴と真逆。魔力を混ぜず、他人の思考を完全に拒絶すれば良い。そう考えれば良いだろう。

ただ、部分的なアイソレーションは、ミハエルにすら使えないのか。俺の予想通りならば、アイソレーションは武器にも盾にもなる。使いこなせば、戦略の幅が広がるだろう。

「最後に、魔力——」

「もう質問は終わりだ。君を倒し、マナを連れていかせてもらう」
誘いに気付いていたか。いや、もう十分だ。既に、新たな戦略を頭に構築しているから。お陰で、奴を倒せる可能性が格段に上がった。

超越者が人より上。そういった傲慢さを叩き潰してやる。二度とマナに手を出さないよう、“恐怖”という文字を魂に刻み込んでやるさ。

「極夜」

「無駄だ。君にはもう、神器を出す力などない」

確かに、白夜ならばともかく、極夜を出す程のない。

ただ、それは外部の話だ。内部——体内には、既に二本分に相当する極夜の欠片が刺さっている。

もし、俺の仮説が正しければ。全ての存在は魔力で出来ている。地球上で魔力は使えば分解されるが、決して無くならない。二つの仮説が正しければ、俺は更に進化出来る。

生命を維持している欠片を全て魔力に変換できるならば、この技に反応するハズだ。

「ソーリューション」

俺は魔力を体内に練り込み、分解する触媒に変化させる。すると、

体内に激痛が走り、表面にも傷として発生していく。同時に、極夜として消費したハズの魔力が、一気に俺の魔力として還元される。

最早、フォックス・スリープを使わなくても良い程の重体だ。やった事は無いが、これに極夜を加えればどうなるのか。試してみるか。

俺は極夜を二本発生させ、次々と身体に刺していく。すると、極夜が分解し吸収されていく。俺の魔力はうねりとなり、スカイブルの竜巻へと変化する。

だが、周囲では予想外の事が起きていた。ミハエルが発生させた空間——アイソレーションに亀裂が走っている。世界の歪みを最小にする技ですら、俺の裏技的な天使化に耐えられないのか。このままでは、神ヶ丘の全エネルギーを吸い尽くしてしまう。

いや、まだだ。理論を知ったばかりだが、あの技しかない。

「アイソレーション！」

俺は放出し続けている魔力に、アイソレーションを発動する。だが、魔力は少し揺れただけで、空間には何の変化もない。

同じだ。マナを傷付けてしまった時と。極夜が覚醒した時と同じ。あの時は、ミハエルの言葉がショックで、死のうとしていた。結果、何も知らず止めに入ったマナを巻き込んでしまったんだ。

白夜が極夜に変化したのは、刺す寸前だった。外には、マナとカオルがいる。まるで、あの時と同じじゃないか。

いや、違う。あの時は、俺と違って自由なマナが羨ましく妬ましかった。だが、今は違う。アイツの本心を知り、冬音の言葉で俺は変わりたいと考えた。だからこそ、今の俺が存在する。

奪わせやしない。俺やX、超越者にすら命を奪わせない。護るべき家族が二人いる。ならば、俺は——

「アイソレーション」

俺は再び唱える。大切な者の顔を強く、真っ直ぐ思い浮かべる。それ以外の思考は何も要らない。

「俺は——俺は、家族を護るために戦おう。そう決意したんだ」

俺の呼び掛けに対し、魔力に変化が現れる。今まで、制御出来なかった膨大な魔力。全てが、俺に集約していく。

体内へ浸透。次に、外部をアイソレーションでコーティング。髪をスカイブルーの長髪へと変化させる。全ての魔力が、俺とシンクロした瞬間だった。

「バカな……完璧に近いシンクロだと？ 君は——君は本当に、Xの力を持つ人間なのか？ 魔力だけならば、まるで上位使徒クラスじゃないか」

俺の天使化——翼は生えていないが——を見て、奴が始めて恐怖を見せる。

上位使徒クラス。という事は、まだミシェルに届いていないという事か。だが、臆病風に吹かれた奴を倒すには十分だ。

「誰かに言った気もするが——化け物さ」

俺は右手を突き出し、極夜を出現させる。すると、現れたのは極夜を蒼に染めた様な神器。

俺はこの神器の名を何故か知っている。契約して、俺の魔力と混ぜた極夜の記憶が、教えているのかも知れない。

「行くぞ、スサノオ」

俺はスサノオを両手に握り締め、奴に向かって駆け出す。極夜とは比べ物にならない程の加速。最早、摩擦や風すら感じない。

この状態で放つ技は、俺の奥義の中でも特に強い。本来は暴走時に使う技だが、制御した今ならば使いこなせる。

俺はまず、奴に向けて薙ぐ。すれ違い様に、背後から更に一撃。

着地したと同時に、軸足で回転しつつ三閃。停止して上から振り下ろし。次に加速を利用し、様々な方向から斬り続ける。

「お前に対するレクイエムだ。ディバイン・アーツ！」

俺は右足で跳びつつ、極夜を大きく横へ振るう。同時に、俺の天使化が強制的に解除される。魔力の過剰な消費を脳が察したのか。全く、余計な事をしてくれる。

「すぐに解けるのが天使化だと？ 笑わせる。技すら使っていないじゃないか」

奴は安心したのか、急に狂ったかの如く笑い始める。だが、間違いだという事を知るだろう。既に、勝利は俺のモノだ。奴の未来には、敗北しかない。

「いや、俺の勝ちだ」

俺は頃合いを見計らい、右手で指を鳴らす。すると、奴の身体に無数の傷が発生し、大量の血液が吹き出す。

「そんな……そんなバカな……！」

奴は倒れながら呟く。倒れたと同時に、奴は完全に動かなくなる。「再生が自慢の超越者でも、流石に百発喰らえば再生に時間が掛かるハズだ。まあ、命までは取らないさ」

敗北を感じたのか、奴のアイソレーションが崩れ去っていく。俺は奴に背を向け去ろうとする。

「確かに、私の負けだ。だが、私にも——私にもプライドがある！ デクテット・スラッシュュ！」

奴の言葉と共に、俺は宙に浮かぶ槍に何度も切り刻まれていく。最早、視認する事すら不可能な攻撃。ロンギヌスの能力が上乘せされ、傷口が大きく開いていく。

「呆気、ない……」

俺の意識が徐々に遠退いていく。あれ程切り刻まれれば、流石に死んだか。すまないマナ。俺はまた、お前を護れそうにない。

俺の瞳を闇が支配すると、意識は糸が切れたかの様に落ちていく。こうして俺は、闇へと沈んでいった。

利用

しばらくの間、俺は闇の中で漂っていった。どれ程漂ったのかは解らない。まあ、時間を確認する事など不可能だが。

俺は——そうか、ミハエルと戦い敗れたのか。ならば、ここはあの世。地獄らしい。

悲しい過去を持って生まれた。そんなXを何体も倒せば、俺が地獄に堕ちるのは当然か。妹を護ろうとしたとはいえ、何とも皮肉な結末だ。

このまま、漂い続けるのも悪くない——か。そう思っていると、闇を一筋の光が貫く。暖かな光が真上から俺を照らす。すると、俺は光を浴びると同時に、徐々に感覚を取り戻していく。

体温を取り戻した俺は、光に向かって右腕を伸ばす。まるで、子が親を求めるかの様に。

だが、俺の右腕が光に届く事は無かった。足掻こうとする意思に反して、俺の身体は闇に沈んでいく——

頬を撫でる風を感じ、俺は目を覚ます。見渡す限りの白い部屋。俺以外に誰もいないせいか、余計に広く感じてしまう。いや、実際には一人と一匹いる。

良く見ると、金髪の忌々しい面が椅子に座って寝ている。俺の上には何処かで見た様な子猫。多分、ビアンカだと思う。だが、俺はカオルと違い、ネコの顔など解らない。

俺が寝ていたのは、パイプ製の簡単なベッドだった。左側にある窓では、純白のカーテンがなびいている。周囲の情報が頭の中で結び付いた瞬間、俺は状況を理解してしまう。

そうか、俺は“また”やってしまったのか。つまり、俺はまた生き延びたという事だ。今居る場所を考えると、間違い様がない。ま

た九条総合病院の世話になっっているらしい。

そう考えていると、遠くから複数の足音が聞こえてくる。“見舞い”に来たとは思えない様な団体客。九条院長の招待に違いない。

「ねえ、本当に入るの？ 可哀想だよ」

「何言ってますの！ 自業自得ですわ！」

ドア越しから聞こえてくる声。カオルが宿めようとしている相手はアイツか。間違いない。

あんなに騒げば、患者にとっては――九条総合病院に長期入院する患者なんて、いるのかすら不明だが――迷惑だろうに。

「しっかしまあ、いつ見てもバカみたいに広いなこは。屋敷かつーの。お前んちの母ちゃんの凄さ、今になって思い知るぜ」

俺の知っている声が、呆れた様に呟く。俺が呆れているのは、お前達だと言いたい。

生徒会の三から五まで来ているのか。カオルはともかく、何でコウキとルナまで来ている。水と油の様な二人を連れてくればどうなるか。カオルや九条院長は、決して知らない訳ではないだろう。

「まあ、あのバカは一発殴らないと気が済まないけど」

「止めて下さい冬音さん！」

響き渡る怒声と止めようとする声。マナと冬音まで来ているのか。これは不味い。俺はベッドから降り、窓から逃げようとする。その時、ネコをミシエルの膝に乗せる。だが、右腕の点滴が邪魔で動きづらい。

そこで、点滴を抜こうとする。だが、左手で管に触れた瞬間、俺の身体に高圧電流が襲い掛かる。九条院長、やってくれたな。きちんと退院するまで、逃がす気はないらしい。

だが、この程度で俺は屈しないさ。

格闘しているうちに、点滴その物に叩き潰されてしまう。騒音を聞き付けたのか、ドアが激しく音を立てて開く。ノックすらない。完全に開くと、俺を見下ろす五人の姿が見える。

「何やってるんですか……兄さん」

マナの呆れた様な表情で、俺の目線までしゃがみ込む。そんな妹を見ると、俺は苦笑いするしかなかった。カオルは元々小さいから、しゃがんではいない。

他の三人は、別の理由で見下ろしている。いや、見下しているが正解か。実に不愉快だ。

マナ達に手伝って貰い、何とか俺は立ち上がる。ベッドへ戻った瞬間、冬音に顔を思い切り殴られる。普段の俺ならば避けられる不意打ち。だが、今の俺には避ける事すら出来なかった。

「何をする」

更に殴り掛かろうとする冬音の左手を掴む。だが、点滴のある右腕は自由が聞かず、右手のストレートを更にお見舞いされる。

「またマナを泣かせたみたいね。まるで進歩していない！」

更に三発目。今度は拳骨。細腕で殴られたら、本来ならば大して痛くない。だが、魔力強化をしているため、見た目に反して物凄く痛い。文字通り、全身を揺さぶる様な激痛が走る。

「冬音さん。兄さんは、私を護るために——」

「マナは黙ってなさい！」

「はい……」

冬音の一喝で、マナが急に大人しくなる。その時、冬音のサイドテールが、猫じゃらしの様に揺れる。

俺を“響夜”として殴ってくれる唯一の存在。何処にでもいる“普通”の能力者。努力のみで生徒会入りした少女。

身寄りのない“特殊”な子供が引き取られる孤児院出身。親がXに殺された子供。虐待により異能が覚醒した子供。異能とは関係無い家系に異能者として生まれ、親に忌み嫌われ捨てられた子供。そういった子供達が引き取られる施設の出身。

冬音の場合、Xに両親を殺されている。しかも目の前で。当時、

凄腕の退魔士で、俺にとっては姉弟子の冬音の姉・小鳥遊ハルカ。彼女が気付いて戻った時には、家は全壊していたらしい。

ハルカ自身、単身赴任していた。そのため、神ヶ丘の孤児院に引き取られるまでは、妹の消息が掴めなかったらしい。冬音自身は、引き取られるまでは能力故に、施設を転々としていた様だが。

だからこそ、冬音はマナの肩を持つとするのだろ。家族の誰にも、頼る事すら出来ない。そんな孤独を誰よりも理解出来る。だからこそ、マナとかつての自分が、重なっているのかも知れない。

誰よりも痛みを理解出来る。マナを大事に思ってくれる。誰よりも人見知りの激しかったマナがなついている。そんなアイツだからこそ、俺は冬音を気に入っている。

「悪かった。もう無茶はしない」

俺が謝ると、冬音は急に吹き出し笑い始める。

「珍しく素直じゃない」

「珍しくは余計だ」

全く、お前と会話をすれば、いつも俺のペースが崩れていく。だからこそ、日常に帰ってこれたと実感出来る。

「響夜、私からの見舞いの品ですわ」
わたくし

和紙製の帯で結ばれた長髪を掻き揚げつつ、ルナが何かを俺の胸元に押し付ける。良く見ると、バスケットに入った嗜好食品の詰め合わせ。中央では、網目がやたら多いメロンが陣取っている。他には、果汁一パーセントのジュース擬きとミルクチョコレートか。

「嫌味かこれは。俺が甘い物は苦手だという事くらい、知っているハズだが？」

そう、俺は甘い物が苦手だ。正確には、コーヒーと紅茶を除いた嗜好食品。それ等を三食以外で取る事に、やや抵抗があるからだ。カオルやコウキと同じく、神ヶ丘育ちの幼馴染み。そんなルナが、俺の食事スタイルを知らない訳ではないハズだ。

「お黙りなさい。貴方の融通がきかないのは、糖分が足りないからに決まっていますわ」

ルナが扇で顔を隠しつつ上品に笑う。全く、無理矢理なこじつけにも程がある。気に入らない。

神道に精通する月城家の長女。神社の巫女の癖に、逆撫でする様な物言い。雅や上品さを被った様な魔性の女。上品そうに見えるが、本性は計算高く物凄く腹黒い。ストレートな冬音とは大違いな性格。昔から苦手だ。

折角のフルーツだが、後でミシエルの餌にしよう。

「オイ、響。^{きょう}俺からも差し入れた」

コウキの奴が、俺に紙を二枚を差し出す。一枚目は、挿絵や写真が付いた拳銃のカタログ。使用可能な弾まで書かれている。二枚目は、様々な刀剣のカタログ。刀鍛冶^{メーカ}まで詳しく書かれている。

「いつも済まないな。親父さんにもそう伝えてくれ」

「御得意さんだから、割引しとくぜ。ちなみに、俺のオススメはレツドホークな」

全く、逢坂家の品揃えには感心する。退魔に必要な物が何でも揃っている。武器や護符、速効の回復薬どころか日用品までも。元が極道——逢坂家の人間曰く、極道をヤクザと間違えられるのは不愉快らしい——の家系とはいえ、強力なアイテムを“何処から”取り寄せているのか。長年、神ヶ丘で暮らしている俺ですら解らない。

「これだから殿方は……」

俺とコウキの会話に呆れたのか、ルナがやれやれと首を振る。まるで、戦いが野蛮だと言っているかの様に。

だが、この場にいる俺達は知っている。ルナの奴は暗器型の神器を使う。更に神器で、相手——人間やXを問わない——を徹底的に痛め付ける戦法を好むという事を。一思いに爆破するコウキとはまるで正反対だ。

まあ、戦略ではカオルに勝る者はいないが。どちらにしても、カオルとは相性が悪過ぎる。

「とりあえず、元気そうだから私帰るわ」

冬音はそう言うと、背を向けて手を振る。当然俺は、ただ冬音が

出ていく様子を見ているだけ。

殴るだけ殴っておきながら、サッサと帰るなんて奴だ。しかも、ほぼ無抵抗な俺を一方的に。だが、まあ良しさ。文句ならば学校でも言える。

「彼女を責めるなよ響。あれでも、五日間病院に通い続けていたんだぜ」

文句を頭の中で考えていると、コウキが真剣な表情で俺に語る。

五日間通い続けていた。そうか、俺は五日間も眠り続けていたのか。だが、俺の見舞いに來た奴等は、俺が目覚めても慌てる様子はない。俺が目覚めると信じていた。そういう事か。

「まあ、アイツは少々ツンデレだからな」

「つん、でれ……？ 何だそれは？」

ツンデレ。ロシアにあるツンドラの仲間だろうか。言葉を聞いても、意味がまるで解らない。それ以前に、何語なのかすら見当がつかない。

「コウキ、響夜に変な言葉を吹き込んではいけません！」

何故かルナが怒り、コウキの方はわざとらしく舌打ちする。ツンデレとは一体何だ。とりあえず、カオルに聞いてみるか。カオルならば、何でも答えてくれると信じているから。

「カオル、ツンデレとは何だ？」

「いわゆるオタクと呼ばれる人の用語だね。確か、ツンツンデレデレの略だったと思う」

ツンツンデレデレ。略してツンデレ。何だ、日本語だったのか。

オタク……また解らない言葉が出てきた。オタクと呼ばれる人。新種のXか何かだろうか。新たな文化や言語を生み出す種族。そう解釈しておこう。

まあ、カオルのお陰でまた一つ新たな知識を得る事が出来た。やはりカオルは物知りだ。

「ところで、カオルは何でそんな知識を知ってますの？」

ルナがジト目でカオルを見る。ルナの表情からすると、どうやら

オタクは何らかの迫害を受けている種族らしい。

ルナの視線に耐えられなかったのか、カオルが慌てた様に話し出す。

「か、母さんから教えて貰ったんだよ」

「ああ、あの人なら納得ですわ」

カオルの言葉にルナが納得する。聞く度に、オタクとはどんな種族なのか。知りたいと同時に、ますます解らなくなってきた。

「こらっ、納得しないの」

言葉と共に、ルナの背後から九条院長が出現する。少しムツとしている九条院長に対し、ルナは化け物を見たかの如くビクツと震える。

入ってくる気配すら感じなかった。地獄耳も含めて、流石九条院長だ。

「いつの間に……。居るならば居るって言うてくださいませい……」

「ざあんねん。私って、背後から驚かすのが好きなの」

呼吸が荒くなっているルナの言葉に、九条院長がイタズラっぽく笑う。子供っぽいが、あまり良い趣味とは言えない。

「響夜君おはよう。とりあえず、起きたから退院ね」

そう言つと、九条院長が俺の点滴を外し始める。何故か、九条院長の場合は電流がない。その事実と氣遣う言葉がない事に、若干不満を感じる。

外された点滴を良く見ると、液が入った袋に“響夜君のご飯”と書かれている。電流も含め、九条院長の遊び心が詰まった点滴だと思ふ。

「まあ、響夜君は彼が治してくれたみたい。だから、私の出る幕じやなかったのよ」

九条院長が、本当に残念そうな表情で呟く。意外だ。俺を治してくれたのは、九条院長じゃないのか。

九条院長が治療をしない程の治癒術を使う奴。九条院長が認めざるを得ない程の実力者。“彼”とは誰だ。

「懐かしい顔が家に来たかと思ったら、響夜君を置いて去っていったのよ。このシスコン野郎を宜しくな——ってね」

九条院長が思い出を懐かしむ様に微笑む。

シスコン野郎だと。正直、そいつにふざけるなと言いたい。

口調からするとアイツか。ヴォルフ、奴は何者なんだ。使徒を知っているだけでなく、高度な治療術まで使える。バラライが、まるで自分より上位の存在として扱っていた程。

九条院長が懐かしいと言う。ヴォルフも、おばちゃんや九条院長を知っている感じだった。

九条院長の知り合い。人のX。バラライより上。ヴォルフの正体は、ミハエルの言っていた上位使徒——まさかな。あんな殺意の欠片すらない奴が。“ただの戦闘狂”が、世界を滅ぼせる訳がない。

「その後、毎日君の家に通うよりも、目の届く場所に置いた方が良く考えたのよ。それで、君は入院していたの」

つまり、俺の怪我は治っていたが、毎日看病に行くのが面倒だった。そういう事か。九条院長は、神ヶ丘でも五本の指に入る程の実力者。面倒と言っても、体力はあるだろうに。そうとは思えない発言だ。

ただ、面倒と言いつつも、看病はしてくれていた。その部分はありがたいと思う。

「じゃあ、響夜君が元気になったから、そろそろ私達は行くわね」

九条院長がそう言うと、病室を去ろうとしていく。同時に、カオルも寝ているビアンカを抱えつつ後を追う。

「カオル、お前もか」

「うん。明日は、久々に外へ行くからね。だからこそ、今日は実家でゆっくりするんだよ」

カオルが寂しそうに語る。

カオルが外へ行く。しばらくは、神ヶ丘から離れる——つまり、外の仕事という事か。カオルがいないならば、神ヶ丘も少し寂しいな。

そう考えていると、カオルの腕の中でビアンカが目覚める。俺を見つめると、挨拶する様に軽く一鳴きする。

「おはようビアンカ」

俺は挨拶をしつつ、ビアンカの頭を優しく撫でる。すると、ビアンカは満足そうに再び鳴く。

「ビアンカ、今回は君を連れていけないんだよ。僕が帰ってくるまで、家で待っていてくれるかな？」

カオルが諭す様に話すと、ビアンカは嫌だと言わんばかりに何度も鳴き始める。寂しそうな鳴き声。カオルの感情だけでなく、言葉も理解している。カオルを想ってくれる優しい子だ。

「ビアンカ、我が儘は聞けないよ。僕だって寂しいんだ」

今度は、ビアンカがカオルの腕に爪を立てて噛み付き始める。甘噛みには違いないうが、カオルの表情は明らかに痛がっている。どうやら、少々強めに噛んでいるらしい。

「解った。君を連れて行くよ」

ビアンカが噛むのを止め、満足そうに鳴く。流石に、甘やかし過ぎだ。仲良しなのは良い事だと思うが。

「じゃあね響ちゃん」

「ああ」

互いに挨拶を交わすと、今度こそカオルは去っていく。母親に付いていく姿は、昔とまるで変わらない。

ただ俺の場合、今と昔では全く違う。親に対する愛情が、心から抜け落ちてしまった。マナを傷付けたショックからか、家族との思い出。その大半を失っている。

家族だという認識はあるが、記憶の一部——特に五歳の思い出が抜けている。俺の記憶なのに、俺自身が信じられない時がたまにあるんだ。

何か重大な損失をした様な。そんな悲しみが、何故か俺を支配している。そう、重大な何かを。

「俺達もそろそろ帰る。じゃあな響」

「学校で、またお会いしましょう」

コウキとルナも去っていく。今残っているのは俺とマナ、そしてミシエルだけ。

「さて、俺達も帰るか」

「お母さんを起こしてからですよ」

マナが不機嫌そうに俺を見ている。

ミシエルを起こすのか。正直、気が進まない。ただ、マナと仲が悪くなる事だけは避けたい。

俺はミシエルへ近付く。そして、ミシエルの両肩を掴み、激しく揺さぶり始める。

「兄さん、可哀想ですよ……」

可哀想だと。この忌々しい面のせいで、何度酷い目に遭わされた事か。

あの性格なのに、参観日に来たがる。バカなのに、先生という無縁な職業になってしまった。お陰で俺は、悪い意味で注目の的に。ただ、ここまではまだ許せる。

図々しくもタダ飯を欲しがる。気に入らなければ喚き散らす。追い出そうとすればマナに無視される。遊園地では、殺されかけた事もあった。

本当にあのミハエルより強いのであれば、マナとカオルを助けてみると言いたい。

俺は更に揺さぶりを強くする。すると、俺は背後からマナに捕獲されてしまう。

「兄さん、それ以上は許しませんよ」

マナの脅しと同時に、腕に力が入っていく。流石に、病み上がりにも再びベッドという結末は困る。そこで、俺は仕方なくマナに謝る事にした。

「マナ、すまない。ミシエルはもう苛めない」

「お母さんですよ」

マナの力が更に強まる。ミシエルと呼ぶのが気に入らないらしい。
「解った。母さん、な」

俺の言葉に満足したのか、マナの腕の力が緩んでいく。すると、俺の膝は震えながら崩れ落ちる。

「勝ちました」

マナが満足そうな笑みで俺を見下ろしている。マナの柔らかな手で、俺は頭を撫でられる。正直、悔しい。

「負けた……」

自分を嘲るように、ゆっくりと呟く。やはり、マナの笑顔は反則だ。だからこそ、護ろうと頑張つて良かったと思う。

「とりあえず、こいつを起こさなければ話は始まらない」

そう言つと、俺はマナに腹を踏みつけられる。学校指定のロープアー。その踵で思い切り踏まれれば、流石の俺も痛みを感じる。

何が気に入らないというのか。

「こいつ、じゃないですよね？」

マナが笑顔で脅してくる。同時に、マナの不満をようやく理解する。当然、足はそのままだ。時間が経過する度に、マナは体重を掛けてくる。幾らマナが軽いといつても、踵に体重を掛けてくれば痛い。

「解った、母さんな」

俺がそう言つと、マナが腹から足を退けてくれる。踏んでる奴がマナやカオルじゃなければ、とつくに切り刻んでいる。

「頼むから、俺を苛めないでくれ」

「兄さんの努力次第です」

また笑顔か。やはり、今のままではマナに勝てない。いつか、マナをしつけないといけないと思う。

けど、その度に俺はマナに屈するに決まっている。マナにとって、一体俺は何なのだろうと考える時がある。

「キョウヤ、マナおはよう……」

考えていると、ミシエルの方が勝手に起きてくれた。焦点の合っ

ていない間抜け面で、俺とマナを交互に見ている。

「おはようございます、お母さん」

マナが明るい声で挨拶をする。すると、ミシエルがマナに飛び付く。その姿は、飼い主を求める仔犬の様だ。マナの方は、ミシエルのスキンシップを悪くは思っていないらしい。

「お母さん聞いてください。兄さんが、またお母さんの事をミシエルって——」

「良いよマナ。もう諦めてるもん」

マナの言葉に対し、ミシエルが拗ねた様に呟く。すると、マナが俺を睨み付ける。

頼むから睨まないでくれ。そう言いたいが、マナの不満を爆発させそう。だからこそ、これ以上言うのは止めておこう。

「兄さん——」

マナが何か言う前に、何かが俺に直撃する。まさかの不意打ち。

俺は体勢を立て直す間もなく、激しく床に叩き付けられる。

「よう、元気か？」

吠える様な声が頭上から響く。痛みを堪え、俺は寝返りながら声の主を見つめる。同時に、俺が何故倒れたかも理解する。

「どうやら、お前はドアの開け方も知らない様だな」

俺は声の主に向かい皮肉を呟く。

アイツ——ヴォルフは、ドアを吹き飛ばし俺の病室へと侵入してきたらしい。蝶番が外れ、吹き飛ばされたドアが俺に直撃。ノックするという、最小限のマナーすら守る気はないらしい。

「ああ、居たのか。テメエ、そんな所で寝てると風邪引くぞ」

奴は悪びれる様子もなく、俺に語りかける。

「誰のせいだと思っている？」

「不意打ちすら避けられない。そんなお前が間抜けなだけだろ」

どうやら、こいつには良識や常識といった言葉がない様だ。ここまで頭のネジが外れていると、モラルについて説くのは難しい。諦めるしかない様だ。

「き、君は……」

そう考えていると、ミシエルが震えながら声を絞り出す。まるで、亡霊を見ているかの様に、ヴォルフを見つめている。

「今はヴォルフだ。お前の想像している誰かさんは、とつくの昔に死んだ。それでいいな？」

ヴォルフが自嘲する様に語ると、ミシエルが俺の後ろへと隠れていく。ミシエルに腕を掴まれるが、ミシエルから感じるのは恐怖だけ。

「キョウヤ、今すぐ彼から離れて」

「オイオイ……ここまで嫌われているとは。まあ、当然の結果か」
ヴォルフを毛嫌いしているミシエルに対し、ヴォルフが悲しそうに呟く。

いつもバカみたいに動き回るミシエルが、ここまで警戒する存在。ヴォルフと名乗る前は、別の名前を持つ存在だった。推理すれば、俺でも解る事だ。

ミハエルから最強のXと称される程のX。そんなミシエルが恐怖する。ヴォルフとは、何者なのだろうか。

「単刀直入に聞く。お前は上位使徒か？」

俺が問うと、ヴォルフは満足そうな表情で口笛を吹く。だが、次の瞬間怪訝そうな表情へと切り替わる。

「正解だ。だが、誰からその単語を聞いた？」

「ミハエルからだ」

俺の問いに、ヴォルフが肯定する。

だが、ヴォルフの方は納得がいかない様な表情をしている。自分の指を一本ずつ折り曲げ、何かを数えている様だ。

「おかしいな……上位使徒を知っている奴は、使徒やその使い魔。後は忌々しい神くらいだ。そんな名の奴、俺の知ってるXにはいなかったハズ……」

「ミシエルの兄と名乗っていたが」

俺がそう言うと、ヴォルフは何かに納得がいった表情をする。

「ああ、ラファエルの事か。俺を疫病神扱いするくせに、テメエは妹と同じ天使の名かよ。甥もシスコンならば、叔父も同じって事か」
どうやら、使徒とは嘘で塗り固める生き物らしい。何処かの誰かさんと同じだ。ミシエルの方がよほどマシに思える程に。

まさか、ミハエル自体が偽名だとは思わなかった。何故、妹と同じ天使・ミカエルに由来する名を名乗ったのか。それは俺には解らない。

「俺とアイツが初めて会った思い出の地。それをラファエル等が荒らすのは、実に不愉快だ。だからこそ、テメエに協力しているんだぜ」

ヴォルフからたまに語られる“アイツ”。誰かとの思い出だけに全てを捧げる。ヴォルフにとって、俺はただの道具に過ぎないという事か。

そう考えると、俺は自分の滑稽さに思わず吹き出してしまう。

「ギブアンドテイクか。ますます気に入った」

俺はヴォルフに右手を差し出す。すると、奴は少々戸惑った様子だが、悪人の笑顔のまま俺を見つめる。

「悪魔に手を貸すってか？ 背徳行為——」

「勘違いするな」

俺はヴォルフの言葉を冷たく遮る。凍ったガラスの様に、冷たく鋭い響きで切り捨てる。

「俺には祈る手などない。人とX、一人を斬ろうと二人を斬ろうと最早同じ。信じる神や悪魔がいらないだけだ」

そう、神代の人間だった俺には、人を斬る事に躊躇いなどない。神代の家業は、“ある条件を満たした人間”を文字通り消す事。そこには一切の感情など存在しない。

だからこそ、俺は退魔業みたいな人殺しと無縁の世界に憧れたのかも知れない。ただ、人殺しとまるで変わらない事に気付いたのは、神代家を出てすぐの事だったが。

「おっかねえな、オイ……。だが、お前やアイツみたいな奴が、俺

を消してくれるのかもな」

ヴォルフが俺の右手を握り締める。微妙だが、共闘関係が成立した。そう捉えておこう。

上位使徒を利用する。俺に勝機が見えてきた。来るならば来い。俺が護りたい全てを護ってやるさ。

利用（後書き）

この話で、一章の三分の一まで描き終わりました。

しばらくの間は、本文の推敲やNightmare完結のため、執筆を中止します。

一章の中盤は、日常と非日常をより描いていく予定です。

太郎（前書き）

一章中盤開始です

太郎

鳥のさえずりに心地好さを感じつつ、俺はベッド眼が覚める。

だが、筋肉が弛緩しているのか。或いは、まだ布団の暖かさを感じていたいのか。身体は俺に、まだ起きたくないと訴え掛ける。

春眠暁を覚えず……とは良く言ったモノだ。五月中旬とはいえ、春という名の魔力は人々に安らぎを与えてくれる。

そういった想いに耽っていると、外から遠慮がちにノックが聞こえてくる。俺は静かに入室を許可すると、未だに眠気が残る身体を無理矢理起こし始める。

「おはようきょうや」

挨拶をしたのは、夕日に良く似た髪少女だった。何処と無く照れ臭そうな表情だ。

「おはようイヴ」

俺は少女の名を呼ぶ。すると、イヴがゆっくりとはにかむ。

「どうした、こんな朝早くから。まだ五時だと思うが」

俺はそう言いつつ、机に置かれた時計に目をやる。やはり、俺の体内時計は正しい。世間では、まだ寝ている人もいる時間帯だ。

それなのに、わざわざ俺を起こしに来るとは。何かあったのだろうか。

「あのね、まながきょうやを呼んで欲しいって」

マナがわざわざ俺を。理由が解らない。そう考えていると、部屋の外からマナの悲鳴が響き渡る。

まさか、家の中にXが現れたというのか。外ならばともかく、家の中に入るとは正気とは思えない。

この家には、九条院長とカオルによって、トラップが多数設置されている。俺達が認めていない、招かれざる客を迎撃するための物。アポストル級ですら、掛かれば激しく消耗する代物だ。

「イヴ、そのXの特徴を——」

「Xじゃないわよ」

イヴから情報を聞こうとするが遮られる。Xではない。マナが俺に助けを呼ぶ程の存在。ああ、アレか。そうか、今日はマナが朝食の当番だった。だからこそ、アレに出くわしたのか。

俺は思わず溜め息をつき、おもむろにクローゼットへと向かう。クローゼットを開けて漁ると、目的の物を引き抜く。

細長い缶の頂点に、長いノズルを付けた物。俺は西部劇に登場するガンマンの如く構えると、マナが居るであろうリビングと歩を進めていく。

リビングの前に着くと、開かれた扉——どうせ、イヴが閉めなかったからだろう——を何の躊躇いもなく潜り抜ける。

中は予想通りの光景だ。椅子の殆どが引っくり返され、テーブルの上でマナが蹲っている。その様は、まるで大きな子猫だ。

俺は静かにマナの名を呼ぶ。すると、マナは俺に気付きテーブルから跳び移る。俺はマナをキャッチすると、ゆっくりと床へ下ろす。

「兄さん……兄さん！」

俺の姿を見て安堵したのか、マナが大粒の涙を溢す。まるで、今まで溜めてきた恐怖を追い出すかの様。俺はそんな彼女の頭を優しく撫でつつ、諭す様に語り掛ける。

「よしよし、怖かっただろう。俺が退治してやるから安心しろ」

俺の言葉に安心したのか、マナが泣くのを止める。同時に、俺から離れてイヴの後ろへと隠れていく。

全く、アレが嫌いなのは昔から変わらないのか。Xに怯える事なく説得を試みる。食べ物や人間の好き嫌いが無いくせに、アレだけは嫌い。

そういった部分も含め、やはり女の子というべきか。俺の様に、闇の世界で生きていくには向いていない。

俺は早速、奴を探し始める。基本的に、奴等は暗い所を好む。そういう習性はXと同じ。Xと違う点は、情報を集める行為がバカらしいと感じる事。奴等の習性が単純だからだ。

ただ、奴を討伐する時に、気を付けなければいけない事がある。それは、間違つてもマナの聴覚が届く範囲で、奴の正式名を言つてはいけないという事。探す時は、ジョニーさんや太郎等といった隠語を使わなければいけない。

俺はイヴの後ろに隠れたマナを一瞥すると、隙間の闇へと目を向けていく。本来の目的である太郎討伐に向けて――

太古より、太郎は存在していた。

だが、ある日を境に人は、少しずつ太郎を克服していく。駆除として、様々な道具を用いたのだ。

今でも害虫だが、人類は持ち前の知恵を駆使し、遂には自分達で太郎を仕留めるまでに進歩していく。

幸か不幸か。殺虫剤を道具にする動物は地球上に居なかった。そのため人類は、持ち前の知恵を使い、太郎を次々と駆除し始めた。それでも、太郎の生殖活動は、留まる事を知らない。太郎の生態は徐々に狂い、進化へと加速していく。

太郎は食料豊富な屋内へと進出し、数々の物が食い散らかされていく。同種も例外では無い。無差別に有機物を貪りつつ、ピロリ菌を家にばら蒔く太郎。

同時に、人々は負の感情に包まれ、自分が正義だと考えるのが当然。そんな社会へと変貌を遂げていく。

そして、太郎は徐々に生活範囲を広げ、未来永劫消えない被害や恐怖を生み出していく事となる。害虫として、未来へと受け継がれながら。

太古から備わる本能により、餌をひたすら追い求める貪欲な性質。それが、太郎の本質と言っても良いだろう。

だが、人類の手に入れた駆除方法は殺虫剤だけではない。ある会社が開発した、太郎ホイホイによる効率的な——それ以前は、プラスチックの容器に餌を入れる物で、生きたゴキブリを殺すという手間があつたらしい——駆除。ホイホイを手に入れた人類は知恵を駆使し、駆除アイテムの恩恵を徐々に発展させていく。

そして、今日の技術が構築される。

後に、人類は駆除以外で、新たな可能性——生態等の研究を始める様になった。今もなお、技術は発展し続けていく。

ただ、人は駆除方法の確立と同時に、ある副産物を手に入れてしまふ。人が集まる場所や殺虫剤を使い続けた箇所。そこに必ず生まれる綻びを。

人が集まれば争いや強い意思が生まれる様に、強い殺虫剤で殺せば強い耐性が生まれる物だ。切つても切り離せない関係だという事は、数々の歴史が証明している。

人や食料が集まる場所でおかつ、殺虫剤で駆除する度に生まれ落ちる闇の住人。

かつて、日本ではゴキブリと呼ばれたグロテスクな存在。更に、生物学上の分類では、シロアリも仲間に含まれる。

時と共に闇の住人は、今の日本人から、侮蔑と恐怖を込めてこう呼ばれる様になっていく。

ゴキブ——いや、マナのいる前では止そう。さっさと駆除すれば、何も問題はない。

「見付けた」

俺は思わずニヤリと笑う。

冷蔵庫近くの壁。そこに黒光りする生物が張り付いている。U字に曲がつた二本の長い触覚。間違い様がない、奴だ。

「ゴキブ——」

俺は奴の——太郎の正式名を思わず口走ろうとする。しまったと

思い、俺は慌てて口を両手で押さえるが、既に遅かったらしい。マナが背後で噁り泣いている。

名前を聞くだけでも嫌。そういったマナも可愛らしいが、少々気の毒だ。やはり、太郎にはお亡くなりになって貰おうか。

俺は無言のまま殺虫剤のトリガーを引く。すると、太郎は壁から剥がれ落ち、床へと叩き付けられる。

だが、俺は容赦しない。引き金を離すどころか、ノズルをもがき苦しむ太郎に近付ける。すると、太郎は俺に気を利かせたのか、狂った様にタップダンスを躍り続ける。

しかし、奇妙なショータイムは呆気なく終わってしまう。太郎がバランスを崩し転倒したからだ。しばらくの間、忙しそうに脚で空を切り続けるが、最後は俺の前で硬直する。それが、太郎の呆気ない最期だった。

正直、Xに比べると歯応えが無さすぎだ。

「ミッシェンコンプリート」

俺はそう呟きつつ、愛する妹のもとへ向かう。すると、マナが俺の胸へと飛び付き、顔を埋めてわんわん泣き叫ぶ。

そんなマナを可哀想だと思いつつ、俺は太郎に怯えるマナに呆れていた。

実家を出たとはいえ、俺とマナは神代宗家の人間。分家やそこら辺の異能者と訳が違う。

今でこそ退魔士を名乗っているが、神代本来の家業は滅殺士。Xを生み出す可能性を持つ——強い負の感情を持つ人間の殺害がメインだ。

正義——俺の一番嫌いな言葉でもあるが——のためとはいえ、やっている事は人殺し。今まで俺は、人やXを何の躊躇いもなく殺す事が出来た。そういった生き方を何度も頭に叩き込まれたからこそ、今でも恐怖はそこまで感じない。

だが、対するマナはどうか。滅殺士には当然向いていないが、退魔士としても向いていないと俺は考えている。

太郎に怯える、Xに説得を試みる、過去に二回Xと契約している……数えただけでもキリがない。正直、今ここで退魔士の資格を剥奪してやりたい気分だ。

だが、小言はまた今度におこつ。マナの小さな平和を護る事が出来た。これで良しにしよう。

そうする事で、俺の平和も護られていくのだから――

擦遣

俺は太郎の討伐後、太郎も含めたりビングの片付けをしていた。マナの目に届かない様に捨てる。正直、難しい作業だ。ならば、堂々と捨てるしかない。

俺は冷蔵庫の裏にあるハエ叩きを掴むと、先端で太郎を器用に掬い上げる。そして、ゴミ箱のレバーを踏み、燃えるゴミへと捨てた。これで完璧だ。そう思いマナの方へと向く。すると、マナが脱力して座り込む。

「太郎くらい一人で退治出来るだろう」

「だって、太郎は怖いです……。速くて飛ぶんですよ？」

腰が引けた状態で鼻を嚙っている。今のマナを見て、誰が神代の人間だと思うだろうか。戦闘のセンスはあるのに、まだまだひよっこだ。

さて、面白かったから、少し遊んでみるか。

「Xよりは遅いさ」

「それはそうかも知れませんが、六本の脚に触覚ですよ？ それに変に光ってるので私は苦手です」

他の昆虫は触れるくせに、何故太郎はダメなのか。衛生的な部分もあるのだろうが、生理的に受け付け難い何かがあるのだろう。

ただ、種類によってはペットショップにも太郎は売られている。昆虫が展示されている施設でも、太郎のブースが存在する場所もある。それに、南米にはグリーンバナナローチという、エメラルドグリーンの太郎が生息している……。らしい。全て、カオルからの受け売りだが。

ただ、マナにそういった話をしても、聞く耳など持たないだろう。誰かを差別しないだけ、まだマシだとは考えているが……。どうしたものか。

「そんなに怯えていると、いつか太郎のXが誕生するぞ」

「誕生しませんよ！」

俺が軽くからかうと、マナが耳を塞ぎながら叫ぶ。

だが、話の内容がどうであれ、マナの意見は異能者として間違いだ。

Xなんて、一定以上感情が集まれば誕生する。それこそ、感情や対象となる存在の種類を問わず。

学校の怪談が良い例だ。恐怖心や好奇心という感情があるからこそ、テケテケやエリーゼ、花子さん等が誕生する。

それに、学校には人が集まりやすい。噂さえ広まれば、Xなど爆発的に増殖する。噂を核として、感情が集まり誕生する。

イヴの場合も、基となったネコを核に愛情と恨みでXとなった。ならば、太郎のXも間違いではないハズだ。

だからこそ、マナは退魔士に向いていない。それに、太郎に怯える程度では、いつか自身でXを生み出しかねない。

ただでさえ、世界単位で考えると異能者は人手不足だ。それこそ、一般人を異能者にするという、道徳的にも違法な研究が陰で成立する程に。俺はそういった施設を何度も見てきた。

だが、結果は子供達が無駄に命を散らすか、俺達神代が異能者の出来損ないを始末する。未来はこの二択のみ。

だからこそ、そんな世の中で異能者自身がXを生むとどうなるか。答えは簡単、いちごっこだ。そして、最終的には俺達神代がXを親となった奴ごと始末する。

正直、笑えない話だが事実だ。

実際、神代家では道を外れた身内の殺害も、過去に何度かある。

俺も実際に経験した。

俺がマナに手を掛ける。あまり考えたくはないが、今のマナを見る限りではそうなりかねない。

今の俺が、マナにしてやれる事は三つだけだ。一つは、退魔士と

して再教育してやる事。二つ目は、退魔士としての道を諦めてもらう事。三つ目は、手遅れとなる前にマナを始末する事だ。

正直、三つ目は出来れば使いたくない。二つ目も、マナの性格を考えれば不可能に近い。見た目に反して、かなりの頑固者だ。

だが、マナには傷付いてほしくない。ならば――

「なあマナ」

俺は急に改まり、マナに語り掛ける。

「何ですか、急に改ま――」

「退魔士以外にも別の道はある。考え直してはくれないか？ 正直、太郎程度で怯えるお前に、退魔士は向いてないと考えている」

マナの言葉を遮りつつ、俺は率直な感想を述べる。可愛い妹を想った上での結論だ。傷付いてほしくない。戦ってほしくない。出来るならば、別の道を歩んでほしい。それが、兄としての想いだ。

「兄さんは……兄さんは、私が足手まといだと考えているのですか？」

マナが静かに震える。撫でてやりたい。抱き締めてやりたい。俺はそう思っている。

だが、今のマナではいずれ退魔士としての重みに耐えきれなくなる。俺の言葉に傷付く程度ならば、この先マナはやっていけない。

マナや俺にとって、今は良い機会だと考えている。

「それは違う。マナは確かに強い。だが、それだけではダメだ。強いだけでは、願うだけでは何も護れない」

「兄さん、何で……何でそんな悲しい事を言うのですか？」

マナが静かに呟く。だが、俺は話を止めるつもりなどない。マナが悲しむのはもう沢山だ。だから――

「お前は俺が護ってやるから、俺に全てを任せれば良いんだ」

これが俺の気持ちだ。嘘偽りはない。

けど、何かマナの様子が変だ。悔しさか恐怖。或いは怒り。何の感情か知らないが、静かに震えている。

床に何かが落ちる音がする。俺はそれがマナの涙だと気付く。流

石にやり過ぎたと思い、俺は必死に宥めようとする。だが、マナの行動の方が早かった。

マナが俺の目の前を横切り素早く走り去っていく。俺はしまったと思い、マナを追い掛ける。追い掛ける動作と、玄関の扉が強く閉められる音はほぼ同時だった。

「マナ、待ってくれ！俺が悪かった！」

声が届かない事は解っている。けど、今の俺はただ謝りたかった。またマナを傷付けてしまった。その罪悪感が、俺を黒く塗り潰していく――

外出

またマナを泣かせてしまった。またマナを傷つけてしまった。後悔はしているが、間違った事は何一つ言っていないつもりだ。

だが、このままではいけない事だけは解っている。関係性的な意味で。

マナを捜そう。そして、じっくり話し合おう。今後の戦いで、マナが傷付かない様に。

俺は身支度を整えるべく、部屋へと戻ろうとする。だが、イヴが俺の腕を抱き締める。

「どうした？」

俺が尋ねると、イヴが悲しそうな表情をする。

「ねえ、まなは帰ってこないの？」

この言葉は、今の俺には痛かった。だが、俺は笑顔のまま抱かれない方の腕でイヴを撫でる。

「そんな訳ないだろ。俺が迎えに行くんだから」

俺は表面上だけ明るく言うと、身支度を整えに部屋へ戻り始めた。

俺の部屋に辿り着くと、俺はドアを開けて中へと入る。

部屋の中は布団がやや乱れている事以外、普段と何も変わらない。いつもならば、畳むか外で干している。

だが、マナの太郎事件が原因で、何も準備が出来ていなかった。だからこそ、今の俺は寝間着のままだ。俺はクローゼットを開け、外出用の黒一色へと身を包んだ。

着替え終わると、俺は部屋を後にする。階段をゆっくりと降り、後はすぐ近くにある玄関へ向かうハズだった。

だが、階段の中央まで辿り着いた時、玄関に先客がいる事に気付く。夕日の様な橙色の魔力——イヴだ。俺は表情が見えるまで近づく。

イヴの表情を見るが、どうやら見送りにきた訳ではないらしい。心配そうな顔。今すぐマナを捜したい。そんなイヴの気持ちだが、俺でも良く解る。

「きょうや、アタシも行っちゃ……ダメ？」

イヴが上目遣いで頼んでくる。

全く、戦っていた時のお前は何処へ行つたのやら。正直、強気なお前の方が気に入っているんだが。俺達の家族になった瞬間、悪い意味で卑屈になってしまった。

だが、イヴの気持ちは解る気がする。イヴはマナの使い魔だ。一度、魔力と記憶を共有したからこそ、他人事とは思えないのだろう。どうせ、ダメと言っても付いてくる。ならば――

「仕方無い。二人で迎えに行こうか」

俺の言葉を聞き、イヴの表情が明るくなる。こういう所は、人間の女の子らしい。もっとも、マナの方が遥かに可愛いが。

「但し、俺からはぐれるな。俺みたいに土地勘がある奴じゃないと、この街では絶対に迷う」

「解ったわ」

嬉しそうに頷く表情を見る限り、本当に解つたのかは疑わしい。だが、仲直りするために役立つかも知れない。そう考えつつ、俺はイヴと共に朝の神ヶ丘へと踏み出した。

光明

神ヶ丘の住宅地。団地の様な建物密集区——団地に見えるが、全て神代家の土地だ——をバックに、様々な家が並んでいる。通路には暖色のタイルが敷き詰められており、ランプを模したお洒落なライトが立っている。晴れの日には散歩が楽しめる場所だ。

太陽光と風力を中心としたエコな発電が基本。街全体で、電柱が一つも存在しない。

故に、空は何物にも邪魔されない。沿岸部からの影響さえなければ、全てが美しく見える場所。それが、神ヶ丘の良い所だと考えている。

住宅地で、俺はイヴと共に歩いていた。当然、マナを連れ戻すために。

広大な神ヶ丘でマナを見付ける。言うだけならば簡単だが、しらみ潰しでは難しい。あくまでも、“普通に” 探すならばの話だが。

俺はポケットから携帯を取り出すと、高速でテンキーをタイプする。電話帳にすら載せていない、“あいつ” の番号へと。番号を押せば、後は電話をかけるだけ。そう思い、プッシュするが——

「あいつ、まさかワンコールで切るとは……」

掛からなかったため、俺は忌々しそうに呟く。確かに一度は通じた。

だが、仮にもあいつは同じ生徒会メンバーだ。ならば、副会長である俺が電話を掛ければ、手助けをするのが義務ではないのか。

そう考えていると、携帯が短いバイブを発する。ディスプレイを確認すると、見覚えの無いアドレス。このタイミングは間違いない、あいつ——ジョン・スミスからだ。

あいつは秘密主義故に、電話番号やアドレスを能力によって、それぞれを一定周期で改竄している。まあ、あの用心深さは過去に由

来するから仕方無いが。

俺が異能を悪用する科学組織——確か、アメリカにあった気がする——を潰した時、俺は捕らえられていたあいつを含めた異能者を保護した。確か、あの任務は四年前だったか。

異能者の中でも、あいつは特に異質な存在だった。能力自体も希少だったが、あいつの恐るべき部分はずば抜けて優秀な頭脳。保護した当時幼児だったあいつは、様々な大学の論文を読み解いている。今の歳を考えれば、本来は初等部に居るべきだ。だが、頭脳や能力に神ヶ丘の研究員が目を付け、特例で生徒会入りをしている。

本人も神ヶ丘を気に入っているらしく、神ヶ丘発展に生き甲斐を感じていると言っていた。神ヶ丘に存在する殆どのシステムはあいつ製だ。あいつが居なければ、神ヶ丘はここまで発展しなかったと考えている。そういう意味では、あいつを助けた俺は間違っていないかったらしい。

そんなあいつだからこそ、俺はマナの場所を聞こうと思い連絡を取った。監視カメラやナビ、個人情報すらも掌握しているジョンならば、一発で解るハズだと。

それなのに、何だこの扱いは。電話を掛けても一方的切られる。しかも、メールの内容も気の利いたコミュニケーションの欠片すらない。一度、コミュニケーションの大切さについて、再教育しなければいけないらしい。

だが、お陰でマナの場所——恐らく能力で携帯を介し、俺の脳を探ったのだろう——が判明した。いつもながら仕事が早い。俺はイヴの手を引き、マナの居る場所へと向かった。

住宅地から少し離れ、俺達は街の中心部に近い場所。煉瓦造りのストリートへと辿り着く。様々な店が並び、外にいる俺達にも香ばしい匂いが届いている。

だが、雰囲気には騙されてはいけない。近道とはいえ、正直俺はさ

つさこの場所を出たかった。何故ならば、この場所は――

「あれ、響夜じゃん」

俺は思わず舌打ちする。声がした方向に向くと、そこには複数の若い男女。様々なパンクファッションに身を包んでいるのが特徴だ。だが、問題はこのストリートだ。

通称デュエル・ストリート。神ヶ丘で唯一、異能者によるストリートファイトが“許可されている”場所。但し、戦いは必ず一対一で、同じ相手は一日一回と決められているが。死者を出したり後遺症を残さなければ、何をしても良いと言われている。

「マジ、大物じゃん！」

「倒せば生徒会の仲間入りかも！」

「ちよつと、響夜様を傷物にしないでよ」

全員が勝手な事を言っている。しかも、こいつ等は毎日戦っているから、戦闘慣れしている。だからこそ、余計に夕チが悪い。

ここは生徒会の一人であるコウキの管轄。住宅地を管轄している俺にとって、あまり有り難くない場所だ。雑魚共を相手しても疲れるだけ。

正直、ここを通ったであろうマナが無傷かどうか心配だ。

俺はおいと一言だけ呟く。すると、リーダー格の男が反応する。

「マナを知らないか」

俺がそう質問すると、リーダー格がああと言いつつ頷く。白いソフト帽が特徴的な男だ。

「まさか――」

「安心しな。泣いている奴を苛める奴なんて、このストリートにはいねえ。それに、か弱い女子供には手を出さねえさ」

男がハードボイルドを気取っているかの様に呟く。よくそんなクサイ台詞が言える。俺はそう感心している。

まあ、イヴは放っておいても無事みたいだから、俺は心置きなく戦える。

「だが、マナは泣いていた。泣かせたのはあんたじゃないのか、神代響夜」

ハードボイルドが痛い所を突いてくる。

そう、奴の言う通り、マナを泣かせたのは俺だ。その事実をよりによって他人に突き付けられたため、俺は思わず動揺してしまう。そんな俺の心情を察したのか、ハードボイルドが悲しい顔で俺を見つめてくる。

「なああんた。男が決してやってはいけない事を知ってるか？」

「是非知りたいな」

俺は本心からこの言葉を発する。すると、奴は拳を握りしめ、表情が静かかつ激しい“何か”へと変化していく。

「それはな……愛する女を泣かせる事だ」

奴が急に拳を振ってくる。だが、顔にストレートとは芸がない。この程度の攻撃など止めてやるさ。

俺は右手を開き、奴の拳を包み込む様に受け止める。だが、奴の表情はさつきと何も変わっていない。俺を憐れんでいるつもりか。正直、気に食わない。

「なあ、あんたは何を恐れているんだ？」

「俺が恐れているだと。知った様な事を……」

俺に恐怖など存在しない。俺は退魔士であり滅殺士でもある。母親はXで父親は殺し屋と殆ど同じ。そんな二人から生まれ、闇の住人として生きる事を決めた俺は闇その物だ。

故に、恐怖など存在しない。俺にそんな人並みの感情などあつてはならないんだ。だからこそ、俺に光など似合わない。

「いや、あんたは恐れている。恐らく、誰かが傷付く事を」

奴の拳に魔力の光が灯る。黒み掛かった紫が奴の拳を包んだ瞬間、俺は掴んでいた手を弾かれる。しまったと思った瞬間、奴の拳が顔面にクリーンヒットし、俺は地面へと叩き付けられる。

「立てよ神代響夜。マナの感じた痛みはその程度じゃないだろ」

奴が静かに言い放つ。屈辱的だ。こんな奴に、俺が地面に手をつ

けるられるとは。

プライドを傷付けられた瞬間、俺の中で何かが弾ける。静かなる怒りに反応した魔力が、徐々にだが俺の狂気を促進させる。俺の中にある二つの魔力が渦を巻き、俺を包み込んでいく。二つの魔力が混ざり合う――

「ダメ、きょうや!」

――寸前に、イヴの叫びが俺の良心を刺激する。狂気が鞘に収まり、俺は人間的な思考を取り戻していく。

俺は、今何をしようとしていた。そう思いつつ、自身の両手を見つめる。手が静かに震えている。これが――これが俺の恐怖だというのか。

「それがあんたの恐怖か。なるほど、マナを泣かせた原因が大体解った」

「何……だと?」

俺に解らない事が、赤の他人である奴には解するというのか。あり得ない、認めたくない。

「あんたには解らないさ。彼女を妹としか見てない今のあんたにはな」

そう言つて奴が去ろうとする。続けて、集まっていたストレートの住人達も移動を開始する。

殴られ損か……情けを掛けたつもりなのか。ふざけるな。怒りに震えつつ、俺は両手の拳を強く握りしめる。

「まだ終わってないさ」

俺の静かな言葉に、奴が立ち止まりながら振り向く。

「いや、終わった」

奴が少し口元を吊り上げながら呟く。だが、俺は奴の言葉を否定してやる。否定してみせるさ、絶対に。

「俺はマナを奴等から護ると誓った。だからこそ、こんな所で躓く訳にはいかない」

「それは、全力で戦ってくれるという意味か?」

俺の言葉に対し、奴は望むところだと言わんばかりに笑顔を湛える。

だが、俺は本気を出す気など最初からない。何故なら、本気を出せばこのストリートのルールに反するからだ。不殺で後遺症も残さず倒す。何だ、簡単な話じゃないか。

能力の対象とするのは、奴が向かってくるであろうルート。後は、自滅を待つだけだ。

俺は最小限能力に必要な魔力を練り上げる。そして、地面に両手を付け、奴の進行方向に存在する重力へと働き掛ける。

頭を上げると、奴が俺の頭を蹴ろうと軸足を下げる瞬間だった。だが、ここまで接近されれば関係無い。トラップを発動するだけだ。奴の軸足が完全に停止した瞬間、俺はバックステップしながら能力を発動させる。

すると、奴がバナナの皮を踏んだかの如く派手に転ぶ。俺の目の前で、滑稽な姿を晒すという図式だ。奴が起き上がり、再び構えようとしても結果は同じ。まるで、外国で撮られた面白い映像を見ているかの様だ。

車は急に止まれないという言葉がある。ならば、動くと解っている物に、無理矢理急ブレーキを掛ければどうなるか。

答えは簡単だ。しばらくの間は完全に止まれず、惰性のまま動き続ける。つまり、勢いがあればあるほど自滅しやすくなる。パワーバ力を懲らしめるには最適な技だ。

「勝負あつたな」

俺は見下す形で奴を見つめる。すると、奴が困った様に苦笑する。

「卑怯だよあんた」

「戦いに卑怯などないさ」

こんなやり取りが続き、いつの間にか俺の怒りが消えている事に気が付く。正直、マナに対して悩んでいたのがどうでも良くなってきた。

そうか、俺はマナが心配だから悩んでいたのか。だからこそ、俺

はマナの選びたい道を反対し続けた。それに今気付くなんて実に滑稽だ。

確かに、夢を否定されれば怒るかも知れない。マナが家を出た理由が何となく解ってきた。俺は思わず、声に出して笑ってしまう。ならば、話は簡単だ。マナと二人で将来を考えれば良い。俺にとつてではなく、マナにとつてより良い物。これを前提に考えれば、仲直り出来るかも知れない。

そう改め、俺はマナとの対話を決意した。

応用

最小限の力だったが、余裕で勝つ事が出来た。ただ強い力を使えば良いという訳じゃない。どうやって効率良く勝つか。そこがメインだと俺は考えている。

だが、俺の能力には致命的な欠点が一つある。異能者やX問わず、その事に気付き突いてしまえば、俺は間違いなく苦戦してしまう。だからこそ俺は、どんな方法を使うにしても短期戦と決めている。今回も、これから。

だが、マナのところへ行くには、数十人の異能者を相手しつつ進まなければならぬ。マナが動かないとも限らないからな。さて、どうした物か。

「デュエルストリートのルールは絶対なのか？」

俺はリーダー格に、諦めが入り雑じった声で問い掛ける。するとリーダー格が滑稽だと言わんばかりに笑い出す。

「当然だ。挑まれたら戦う。それがこのルールだぜ」

やはり……か。面倒だ、格下相手に連戦とは。

大技を使えば、一気に薙ぎ払えるかも知れない。だが、大技を使えば大量の魔力を放出してしまう。燃費が悪い上に、弱点をさらけ出すような物だ。

さて、どう相手をしてやろうか――

「きょうや、アタシが戦ってみても良い？」

考えていると、イヴが遠慮がちに聞いてくる。イヴが奴等を――そこまで頭に浮かべると、急にある事を閃いてしまう。

イヴならば、現状を打破出来るかも知れない。いや、或いはそれ以上だ。場合によれば、俺は不戦勝のまま進む事が出来る。

さあ、作戦は整った。後は――

「タイムだ」

俺は右手を掲げながら呟く。すると、周りの奴等がざわめき始める。

よし、ここまでは予定通りだ。

「イヴ、こっちに来るんだ」

俺が手招きすると、イヴが首を傾げながら俺を見つめる。俺はイヴを引き寄せ、これからして貰う事を耳打ちしていく――

「――という作戦だ」

「本当に、そんな事が出来るの？」

「ああ、お前の能力ならば出来るさ」

作戦会議の終了と同時に、俺はイヴの肩を軽く叩いてやる。誰にも見られない様、陰で口元を吊り上げながら。

俺の作戦を実行出来れば、イヴは間違いなく強くなれる。あの複製能力さえ使いこなせば、イヴは――

「まさか、あの嬢ちゃんが相手をするのか？」

リーダー格が、ハードボイルドを気取りつつ慌て始める。だが、俺はイヴを止める気など更々ない。

さあイヴ。お前の真の力を見せ付けてやれ。

「ああ、そのまさかだ」

「無茶だ。あんな細腕で――」

「あれでも、アポストル級のXだが」

俺は奴の言葉を鼻で笑う。同時に、ギャラリー共が騒ぎ始める。

これで、イヴ自身を背水の陣にしてやった。さあ、双方がどう出るのか楽しみだ。

「じゃあ俺が行くぜ」

ハードボイルドの次は、スケボー少年か。オレンジの柄付の白いバンダナが特徴的だ。

正直、奴程度ではイヴの足元にも及ばないと考えている。ただ、イヴにとっては良い経験値となるだろう。

「先に言っておいてやる。見た目に騙されるな」

手加減なんて言い訳出来ない様、先に忠告してやるさ。奴は、イヴに傷一つ付ける事なく敗北する。俺にはそういう未来しか見えない。

それに、今のイヴはただのXじゃない。使い魔だ。クローンネコを核にした、かつてのアイツとは別物と考えても良いだろう。

カオルの言葉を借りるならば、使い魔はその気になれば主の能力が使える。その上、主の魔力が枯渇しない限り、何度でも復活出来る……らしい。俺なりに噛み砕いて解釈するならば、マナがいる限りイヴは絶対に倒せないということか。

実際のところ、俺自身に魔導師や使い魔等といった、専門的な知識はあまりない。むしろ、カオルの方が専門だ。

能力に比べ非効率で時代遅れ。加えて、個人の資質のみが問われる。呪文か特定の思考を介さなければ使えない。現代科学と比較しても、そこまで画期的とは言えない異能。これが、俺の知りうる限りの知識だ。

マナやミシエル、カオル……後はヨーロッパ出身以外で、進んで魔術を使う。そんな物好きがいるならば、是非この目で見てみたい。もっとも、俺のアイン・ソフ・アウルも、自由度が高いだけで万能とは言えない。その点では魔術と同じだが。

万能ではないからこそ、俺達能力者は能力の欠けた箇所を知恵で補おうとする。故に、能力の進化は半永久的。九条院長から最初に教わった事だが、今ならば納得が出来る。

さて、かつての俺その物だったイヴが、何処まで能力を使いこなせるか。それが楽しみだ。

「アンタなんか、アタシが倒せるのかしら？」

イヴがスケボー少年を挑発する。すると、少年がニヤリと笑いながらイヴに近付いていく。

「それは——こっちのセリフだ！」

スケボー少年が、スケボーを普通に漕ぎながらイヴへと接近する。別に何の強化もない。あの程度の速度ならば、運動音痴のカオルで

もスキップしながら避けられる。

俺はそう考えていた――

「今だ、超加速！」

スケボー少年がそう叫んだ瞬間、声と共に姿が消える。同時に、不快な摩擦音が周囲に響き渡る。

対するイヴの方は、何かを感じていたらしく横へと飛び退いている。同時に、少し離れた場所でスケボー少年が出現し、遅れて突風が押し寄せてくる。

恐らく、奴の能力は風による加速。それこそ、通った箇所が真空になる程の速さ。だが、モーメントには程遠い上に、今のイヴに勝てない。

「イヴ、本気の三割ならば出しても良い」
「了解」

俺の言葉に微笑みつつ、イヴが魔力を練り上げる。夕陽を連想させる色を身に纏い、徐々に体内へと集束させていく。

「コピーキャット・アクセルモード」

今度はイヴが消える。だが、スケボー少年の時とは訳が違う。イヴが奴の前には出現する。それと同時に、スケボー少年が軽々と吹っ飛んでいく。スケボー少年の方は何をされたのか解っていないらしく、ただ首を傾げている。

よし、計画通りだ。

「アンタ、あの娘に何を吹き込んだ？ Xの高速移動にしては、若干時間が長い気もするが」

ハードボイルドが俺に尋ねてくる。成る程、こいつは戦闘経験と本能から違和感を感じた訳か。骨の無さそうな他の奴等とは違い、多少は見所があるみたいだ。

「正解だ。アレは高速移動――モーメントじゃない。イヴの能力による物だ」

そう、あの移動はモーメントによる物じゃない。イヴのコピーキャットだ。

俺は初めてイヴの能力を目の当たりにした時から、コピーキャットの正体が“自身を複製するだけ”の能力ではない事を知っていた。いや、正確には“気付いてしまった”というべきか。イヴの言葉をそのまま使っても、服と魔力という自分とは別の物。それらを複製した事の説明が付かないからだ。

俺の仮説はこうだ。コピーキャットとは、“自身が触れた対象を複製する”能力。服や魔力が複製可能ならば、威力や速度その物も複製が可能。そういった応用が可能だと確信していた。

結果を見る限りでは、俺の予想は“大体”合っていたみたいだが。むしろ、イヴという存在自体が、俺の予想を遥かに超えている。

九条院長が言っていた。魔力とは、地球の生命エネルギーだと。その時点で気付くべきだった。増えた時、イヴが何処から魔力を引き出していたのか。分身全てが何故、アポストル級の魔力を持っていたのかを。

恐らく、イヴは超越者寄りのXだ。本来の魔力制御は、俺すらも遥かに凌いでいる。俺はそんなイヴの潜在能力を後押ししただけ。そんなイヴに、人間程度が敵うハズがない。

俺は一旦思考を止め、再びイヴとスケボー少年を見ると、既に戦いが終わっていた。イヴが無傷のまま圧勝。まあ、当然の結果だ。今のイヴに、天使化した俺ですら勝てるか解らない。

もともと、魔力を完全制御した時に極夜から変化したスサノオならば、イヴに余裕で勝てそうな気もするが。

イヴの実力を目の当たりにした奴等が、急にざわめき始める。無理もない。勝てる相手じゃないから。

これで、奴等の心を叩き折った。不戦勝のままマナに会える。そう思っていたが、俺の期待は一気に砕け散った――

兄妹

「兄さん」

デュエルストリートで、一番聞きたくない声が静かに響き渡る。しかも、よりによって前方からだ。

パーカーにスパッツ、黒のニーソックスか。何とも動きやすそうな服だ。ただ、戦う割には露出が多い気もするが。

「……マナ」

俺は諦めも含めた溜め息を吐く。

デュエルストリートのルールは、挑まれたら必ず戦う事。正確には、『たとえ目下の者や身内に挑まれても、嫌な顔をせず喜んで受けよう』だ。俺は正確なルールを無視するかのように、肩をガツクリと落としていく。

「兄さん、解ってますよね？」

マナが笑顔で尋ねつつ近付いてくる。だが、目元から喜びがまるで感じられない。見ている俺の方が凍り付きそうだ。

マナが俺の前に登場した時点で、何をしなければいけないかほぼ確定している。いや、まだ確定していない。

俺は無駄な戦いを避けるべく、ある行動を始める事にした。俺は右手で自身の胸部を掴み、苦しみの表情を浮かべながら地面に倒れていく。

この方法は、少なくともクマには絶対にやってはいけない。トドメを刺されるか、追い討ちを受ける可能性があるからだ。さて、今回のマナは小動物か。それとも——と考えているうちに、俺の背中に物凄い衝撃が走る。同時に、俺は真横に転がりながら吹き飛ばされていく。どうやら、マナに蹴飛ばされたらしい。

「蹴った相手が九条家か神代宗家の人間でなければ、既に切り刻んでいる頃だ」

俺はそう言いつつ、右手をブレーキにして回転を止める。

あんな可愛い顔で蹴られても、大した事はない。無数の槍で串刺しにされたり、無数のXに追い掛けられるよりはまだマシに思える。だが、まさか実の兄を蹴飛ばすとは思わなかった。どうやら、一番やりたくなかった“教育”について、少し考えなければいけないらしい。

「変な所で寝ている兄さんがいけないですよ」

マナがクスリと笑いながらしゃがみ込む。いや、見下されている。やはり、太郎でからかいすぎたのが原因だろうか。確かに、俺が悪かった。お前にならば謝ってやろうと考えている。

だが、この仕打ちはあまりにも酷すぎる。謝りに来てやった兄に対する態度か。

「出来ればお前と戦いたくない。俺が悪かった。ならば、お前の勝ちで良いじゃないか」

俺は可愛い妹に勝ちを譲ろうとする。だが、マナは俺に対し、物凄く不機嫌そうな表情を見せる。

「良くないですよ兄さん。勝利は譲られる物じゃありません。相手から奪い取る物です」

成る程、言う様になったじゃないか。言葉遣いはともかく、確かにマナの言葉は正しい。全く、誰に似たのか。良くも悪くも、賢しい知恵を身に付けたらしいな。

上等だ。そこまで言うならば、今日だけは本気で戦ってやるさ。

生徒会や神代の肩書き以前に、実の兄としてお前を叩き潰してやる。「行くぞマナ」

俺は立ち上がりつつ両手を真横に翳し、魔力を練り上げる。すると、魔力が徐々に二本の黒い剣を形成していく。極夜の二刀流。対人戦に向いている力だ。

「ようやくやる気になった様ですね兄さん」

マナも負けじと回転式拳銃型の神器・ブルーローズを出現させる。真っ青の銃身が特徴的だ。

マナの神器は、拳銃の形をした杖や魔導書。“頭に思い浮かべた

存在”を“魔力が尽きるまで”魔法として発射出来る。そこに能力・エクサメロンを加える事で、圧倒的な戦闘力を発揮する。

マナのエクサメロンは、神代家の能力の中でもかなり厄介でタチの悪い能力だ。おばあちゃんのザンテツケンの次にだが、出来れば相手をしたくない。

内容は、能力の対象となった存在の“絶対”維持。能力となった魔力が分解されるまで、その存在は“何があっても”留まり続ける。具体的には、座標を維持したまま止まり、力学すらも無視してしまう。加えて、破壊が不可能ときている。正に、飛び道具と相性が良い能力だ。

更に言えば、同じ速度や威力の技でも、マナが能力を使えば時間差攻撃となる。維持による停止と解除で、相手の回避するタイミングを徐々に狂わせていく。

力学すら無視した即席トラップを作る事が可能。だからこそ、俺はマナと戦いたくなかった。家族という迷いを振り払ったとしてもだ。

「仕方ない……九条院長に、ベッドを二人分用意してもらおうか」俺は溜め息を吐き出すかの様に呟く。相手はマナだ。最初から、無傷で勝てるとは思っていないさ。ある程度の怪我は、想定しておく必要がある。

「今回は私が勝たせていただきますよ。アイソレーション！」
「何だと？」

マナがアイソレーションだと。そう考える前に、マナが軽く指を弾く。すると、マナの身体から青い光が溢れ出し、俺を包み込んでいく。俺はその眩しさに耐えきれず、思わず瞼を閉じてしまう。

青い光が徐々に収まっていく。目を開けると、マナが嬉しそうに立っている。ただ、俺が驚いたのは、周囲の景色が変わっている事だった。

一言で表すならば緑と青。天をも覆い尽くす生け垣擬きに、無数

の真つ青な色をした花——自然界ではあり得ない色だ——が咲いている。緑と青の隙間から、木漏れ日にしてはやけに明るい光が射し込んでいる。

「お前、いつの間にその技を」

「お母さんと契約した時にです」

確か、ミハエルから超越者とその血族ならば、アイソレーションが使えると聞いた。だが、俺の場合は一度しか——魔力のコーティングのみだが——まともに使えていない。

何だか、マナに一步越されて嬉しい反面、兄としての悔しさを感じている。

「アイソレーションの使い方は、これだけじゃありませんよ」

マナが微笑むと背中から青い翼が生え、螺旋を描く様に自身を包み込んでいく。それだけじゃない。マナに魔力が集まっている。集束された魔力が渦を巻き、柱となりながら激しく発光する。

だが、所詮はこの程度か。ヴォルフやミハエルに比べればまだまだだ。ならば、どんな力が来ようと、俺が全力で叩き潰してやるさ。俺は極夜を握り直し、勝利という名の方程式を描き始めた。愛する妹を可能な限り傷付けず、確実に勝つために——

敗北

光が収束すると同時に、マナを包んでいた翼が無数の光の玉へと変化する。その中心には、顔以外が青く輝くマナがいた。髪と瞳が青へと染まり、全身が激しく発光している。

変化したマナが両腕を広げる。すると、光の玉がマナ胸元へと集まっていく。光の玉が一つとなり、マナがその光を強く抱き締める。まるで、我が子を抱擁する母親の様に。

光と一つになると、マナが指を鳴らす。すると、一瞬で服が純白のワンピースとロングブーツ、長手袋へと変化する。それぞれ、青のリボンとフリルが付いているのが特徴だ。当然、俺は瞬きすらしていない。

「誕生、ベラカ・プラヒム」

変身完了後、マナがそう呟く。当然、俺にはマナが何故そう呟いたのか解らない。あの変身が何なのか。俺には正体を知る事すら出来ない。

輝かしいとしか、そういった気の利いた言葉すら出てこなかった。驚きましたか？」

俺のそういった思考を悟ったのか、マナが微笑みながら尋ねてくる。当の俺は、ただ静かに相槌を打つしか出来ない。

「兄さんは超越者を知っていますよね？」

「あ、ああ……知ってるさ。その中でもミハエルが四回。ヴォルフとは一回戦った」

俺は動揺しながら、マナの言葉に答える。

前者が胎児からの突然変異。後者が元々は人間だったが、世界に対する恨みから変化した者だとミハエルから聞いた。

だが、今のマナが超越者と何の関係があるのか。それが俺には解らない。

「Xはバースからネクスト。ネクストからアポストルという進化が

基本です」

異能者の中では常識だ。生まれたばかりの存在がバース。そこから更に、感情や魔力を基により人へと近付いていき、最終的にはアポストルへと変化していく。イヴが良い例だ。

アポストル級の中には、“真のアポストル級”と呼ばれている奴もいる。翼だけでなく、天使の輪のモデルとなった光の輪を自由自在に出現させる奴。生徒会でも、無傷で勝つ事は難しい。

ただ、超越者だけは例外だ。Xの中でも解っていない部分は多いが、“人から進化した”存在だという事だけは解っている。元から人の形をしているからこそ、バースやネクスト、アポストルによる区別が出来ない。

それ以前に、ミハエルの話を聞く限りでは、本当にXのカテゴリで分類して良いのか怪しい物だ。

最初から生きている上に、神器まで使う事が出来る。しかも、肉体が死んでいないため、人と交わる事が可能。そういう点では、他のXと明らかに違う。

俺とマナは、ミシエルから生まれている。そういう点では、俺達はXにより近い存在だ。

「ただ、超越者の場合は他のXと違います。超越者は、人の姿と自身の本質とも呼べるXの姿を併せ持っているのです」

つまり、マナの言葉を要約すると、超越者はXとしての更なる姿を持っている。今のマナは、Xの力と姿を解放しているという事がベラカ・プラヒム。確か、それぞれへブライ語でベラカが祝福。プラヒムが花という意味だった気がする。祝福の花……何か意味があるのだろうか、俺にはマナのネーミングセンスが解らない。

ただ、一つ気になる事がある。マナの話聞く限り、ヴォルフとミハエルは最初から本気を出していないらしい。そう考えると、何だか屈辱的だ。

けど、マナを見る限り、大した魔力の向上は見られない。精々、

食品における当社比程度の差だ。全員を覆うオーラ状の魔力しかない。見かけ倒しでなければ良いが。

「アイソレーションとは、自身の心象を現実世界に具現化させる技。それを空間ではなく自身に使うという事は、自身の本質——いわば、眠っている可能性を引き出す事と同じです」

可能性を引き出す。ならば、戦闘力は魔力じゃなく——使っている事には変わりはないだろうが——潜在能力で決まるのか。全く、厄介な技を使ってくれる。人の潜在能力がどれ程恐ろしいものか、俺は九条院長のアストラルで嫌と言うほど見ているからな。

もし、マナの状態が九条院長と同じ。或いは、それ以上——有り得ないと思うが——だとしたらどうだ。流石の俺でも、勝てるかどうか解らない。

最悪の場合、暴走覚悟でスサノオを使う事も考えなければなら無い。

「とりあえず、聞くよりも体感した方が早いです」

「そうだな。ならば、お前の実力とやらを見せてみる」

俺は極夜構えつつ、マナをしつかりと見据える。だが、見せてみるという俺の言葉が、間違いだったという事にすぐ気付いてしまう。気付く寸前に、俺は後頭部から激しく地面に叩き付けられる。意識は一瞬飛ぶが、後の激痛で一気に覚醒する。瞬きはしてない。ただ、反応が出来なかった。今まで、何度もXのモーメントからの攻撃をくらってきた。そんな俺でも、一瞬ですら攻撃された事に気付けないとは。

これが——これが、マナの真の力か。予想以上に厄介だ。だが、早いだけでは俺に勝つ事など出来ないさ。

俺は極夜を構え、高速でマナへ接近する。右手で極夜を振るいつつ、軸足から回転を掛けて左手でも薙ぐ。

だが、マナも負けていない。瞬時に銃・ブルーローズを構え、極夜の軌道へ目掛けて蒼い光を発射する。蒼い光が球状になって停止し、俺の手から二本の極夜を弾き飛ばす。

「絶対維持……エクサメロンか」

「甘いですよ兄さん」

マナが微笑みつつ、俺の腹に横蹴りを御見舞いする。俺は苦痛に顔を歪めながら踏ん張り、何とか体勢を保つ。

エクサメロン、予想以上に厄介な能力だ。何があっても保ち続けるその性質。トラップだけでなく、タイミングを見計らった絶対防御も可能という事か。

だが、読み通りの攻撃には強い反面、性質上変則的な動きに弱い。それが、エクサメロンに唯一存在する弱点だ。

ただ、それはマナやカオルも同じ。俺達はそれぞれ能力の弱点を知っている。カオルの場合は、言葉を発しない限り技が使えない。

特に俺の場合、俺達三人の中でも最悪な弱点を持っている。退魔士どころか、異能者としても致命的なソレ。出来れば、短期戦に持ち込みたいモノだ。極夜が手元にないならば、今はモーメントしかない。

俺は魔力を纏い、周囲の全てをかき混ぜ加速させていく。風の音が光となり、音と光が徐々に消えてゆく。総ての時間が停止し、俺を支配者へと変化させる。

俺は駆け、マナへと向かう——ハズだった。ところが、いるハズのマナが視界から消え、代わりに俺が何度も吹き飛ばされる。一分も経たない状態で周囲の音が蘇り、俺の身体に何度も強い衝撃が走る。同時に、俺の口から生暖かい血が溢れ出る。

「チエツクメイトですよ兄さん」

俺が前へ倒れていく時、マナが俺の視界へと出現する。

「負けた……久々に負けた」

流石に、もう戦えない。これ以上やると天使化も使わなければいけないから、今度は殺し合いに発展してしまう。それに、俺にとって今の戦いはやるべき戦いじゃない。引き際が肝心だ。

「だ……大丈夫ですか兄さん！」

マナが心配そうに駆け寄ってくれる。優しい子だ。やはり、お前

に戦いは向いていないと改めて思う。

「当たり前だ。俺を誰だと思っている」

口でそうは言っても、実際は痛みを堪え無理をしている状況だ。既に肋が数本折れている。だからこそ、マナとは戦いたくなかったんだ。

「待つてて下さいね。今すぐ治しますから」

マナが変身を解きながら、俺に魔力を注ぎ込む。だが、俺はマナを右手で制する。

「こんなの唾を付けとけば治るさ」

俺は痛みを我慢しつつ微笑む。だが、マナは俺の頭を膝に乗せながら睨み付けてくる。

「兄さん、体内にどうやって唾を付けるつもりですか？」

そう言つと、マナは微笑みながら俺の治療を再開する。

俺は肌触りが良い枕に鼻を伸ばしつつ、しばらくの間至福の時間を味わった――

天照

俺は柔らかな草原の中、膝枕をされながらマナの治療を受けている。

最初は激痛を感じていたが、それが徐々に痒みへと変化し治まっていくな。痒みになったという事は、治り始めている事の証拠だ。

俺は右手を宙へと掲げつつ考える。

マナの圧倒的な強さ。もし、あの力が俺にもあるとしたら。もしも、かつての俺に、マナやミシエルも含めて全てを恨んだ“あの日”を変える力があつたとすれば――いや、止そう。どう足掻いても三年前の俺は何も出来なかつた。そう、アイツ等を救う事が出来なかつたんだ。俺の存在のせいで。

だが、今でも本当に“何も”出来なかつたのだろうかと考える事がある。本来の滅殺士としてではなく、神代響夜としての俺に出来た事。最期に笑いかけた、もう一人の親友に出来た事が。

俺はただ力が欲しかつた。大切な者を護る力。何者も溢さない力。二度と後悔しない力。何処までも届き、進化し続ける力を。

なあ、俺が求めている力は間違っていたのか。そんなハズはない。俺はあの場所で、あの敗北から誓つたんだ。大切な者を傷付ける奴には二度と負けないと。

シオン、俺はお前に誓つたんだ――

「兄さん？」

マナが俺をじっと見つめている。何処か心配そうな顔。どうやら、俺はまた長く考えていたらしい。

「大丈夫。ただ、昔の事を思い出していただけさ」

そう、昔の事を。だからこそ俺は――強くなりたい。

「見付けたぞ、神代響夜」

誰かの声で、俺はマナを軽く押しつつ声の方へと起き上がる。すると、そこには俺の倒すべき相手がいた。

何故か赤髪に変わっている——恐らく染めたのだろうが、前回を考えると金髪や青髪と変わりすぎだ——リーゼントの男。白い特攻服に身を包んでいる。

「カティ・ドウ」

「俺はテメエに名乗った覚えはねえんだがな」

俺が名を呟くと、奴は機嫌が悪そうに言葉を吐き捨てる。いつも不機嫌そうにしているのだろうか。

ただ、マナとカオルを傷付けたのは事実だ。だからこそ、俺は奴を倒さなければいけない。

「早速だが、テメエはここで死んでくれねえかな？」

「奇遇だな。俺も同じ事を考えていた」

奴の“笑える冗談”に対し、俺もほぼ同じ言葉を返す。ただ、奴の冗談とは根本的な意味はまるで違うが。

そう考えていると、奴が急に発狂したかの様に笑い出す。見ていだけで気味が悪く、関わりたくない雰囲気だ。出来れば、友達にはなりたくないタイプだ。

「俺が……お前に？ バツカじゃねえの？ テメエと同列の存在を二人倒したんだぜ？」

奴の言葉に違和感を感じたが、すぐその正体に気付く。

「何故、俺達が同列だと知っている？ まるで、初めから知っているみたいじゃないか」

俺達異能者は、強くなればなるほど——おばあちゃんや九条親子、佐賀美奏は別だが——魔力を制御出来る様になっていく。九条院長やカオルの場合、その気になれば魔力をゼロに見せる事だって出来る。ただ、九条院長は本当に、魔力ゼロで能力を発動しているみたいだが。

俺やマナの場合は、天使化——マナが使えるかは知らないが、兄妹だから恐らく使えるだろう——という切り札がある。魔力を一気に高めるドーピングだ。

だからこそ、奴の言葉に引つ掛かった。俺達の強さとは外見では

なく中身だ。見ただけで解るわけがない。

「そいつは簡単だ。何故なら——」

そこまで言うと、奴が右足を下げて身構える。どうやら、もう待ってはくれないみたいだ。

「俺達の王、サタンの情報が絶対だからだ！」

言い終えると、奴が急に姿を消す。モーメントか。いや、違う。モーメントならば、既に俺はやられている。

俺は右手を前に掲げ、魔力を一気に具現化させる。そこから、極夜を完全に具現化させる前に右腕を振るう。同時に発生する、金属同士が衝突する様な音。その先には、極夜を素手で受け止める奴の姿がある。

「良い動きだ。反応も良い。だが——」

「ダメ！ 兄さん逃げて！」

マナが叫ぶがもう手遅れだった。俺の手から、音すらも聞こえない速さで極夜が弾き飛ばされる。同時に右手に激痛が走り、指があらぬ方向へと曲がる。どうやら、手の骨が折れるか砕けたらしい。

「成る程、それがドライブリミッターという能力か」

カオルから聞いてはいたが、予想以上に厄介な能力だ。力を何倍にも返される。まさか、剣を振っただけで折れるとは思わなかった。どうやら、神器を使う奴にとって天敵らしい。

だが、神器を使わなければ勝てる。そう確信し、俺は折れた手も含めた両手に光を集める。光が徐々に、重々しい大剣へと変化していく。変化し終わると、俺は手の前に浮いた重量のない剣を振るう。これならば、吹き飛ばされる事などない。そう思っていたが——

「そういう発想があめえんだよ！」

奴が剣を殴りつける。すると、俺の目の前で剣が膨らんだかと思うと、激しい熱と閃光を放ちながら爆発する。俺は爆風で地面に叩き付けられる。一瞬意識を失いかけるが、激しく咳き込む事で瞬時に覚醒する。

最早、今感じているのは痛みなんてレベルじゃない。呼吸すらも

苦しく感じる程だ。

「弱い！ 弱すぎる！ テメエも二人のゴミと同じだったか！」

奴の言葉によって、俺の中で何かが弾ける。燃え上がる激しい怒り。敗北感や恐怖感すらも燃料へと変えていき、俺の理性を麻痺させていく。

「マナとカオルを——バカにするな！」

怒りを核に、俺の中で眠っていた力が暴れだす。それは翼へと変化し、俺の全てを蒼に染めていく。

「そうだ！ それで良い！ もつと俺を楽しませろ！」

不愉快な笑いを湛えながら、奴が俺へと襲いかかる。俺も拳を振るうが——

「待ちやがれ、シスコン野郎」

——急に現れたアイツの言葉に、思わず俺の理性が蘇ってしまった。

まるで、ついさつき生えてきたかの様にアイツが出現し、俺とカティの拳を片手で受け止める。瞳とお揃いの金髪野郎が、イジメっ子の様な笑みを浮かべている。それだけで不愉快だ。

「何のつもりだヴォルフ」

「何って、邪魔しに来た」

どうやら、悪気はある様だ。カティの前に切り捨ててやりたい気分だ。だが、俺の拳は金縛りにあったかの如くピクリとも動かない。「何故邪魔したのかと聞いている」

俺は苛々しながら奴を軽く非難する。すると、奴から意外な言葉が返ってくる。

「マナのために決まってるだろ」

「マナのため……だと？」

ヴォルフの言葉に動揺しながらも、俺はマナの方へと向く。すると、視線の先には大粒の涙を流すマナがいた。何かに怯えている表情で、ずっともう止めてと呟いている。

「解ったか。これがお前の行動の結果だ」

ヴォルフが悲しそうに呟く。俺が——マナを泣かせた。マナを護るどころか、俺がマナを泣かせてしまったのか。俺は——俺はただ、マナを護りたかっただけなのに。

「俺を無視して何をゴチャゴチャと！」

奴が怒りの咆哮を發しながら、握られてない方の腕をヴォルフに振るう。だが——

「テメエはしばらくそここで寝てろ」

逆にヴォルフが、右足で踏みつける様に奴を蹴り跳ばす。奴は激しく地面に叩き付けられながら転がっていく。

「テメエはマナを何だと思つてやがる？ 人形か？」

「家族に……決まってるだろ」

そう言つと、俺は奴に脚払いを掛けられ転倒する。俺は起き上がるうとするが——

「何が——何が家族だ！」

ヴォルフの拳が、俺をの頭を抉る様に振るわれる。俺は激痛と共に、頭を地面に叩き付けられる。

「テメエ……マナを家族だと思つてるなら、何故無謀な戦いをした！」

怒りに満ち溢れている表情。それだけで、生物を殺してしまいそうな感情が、俺に叩き付けられている。

「無謀……だと？」

「無謀に決まつてるだろ！ マナとカオルが勝てなかった敵に、お前一人で勝てると思つていたのか！」

確かに、言われてみればそうだ。マナとカオルが勝てなければ、冷静に考えると俺も勝てない事になる。俺は——俺は、最初から勝てない戦いをしていたというのか。

「テメエが勝手に死ぬのは自由だ。だがな——」

奴が俺の胸ぐらを掴むと、眼が届く高さへと掲げていく。その表情は——何処か悲しそうだった。

「残された奴が……残された奴が可哀想じゃねえか！ 死んだ奴は、

二度と帰って来ねえんだぞ！」

俺はヴォルフの言葉にハツとする。俺は——俺は間違っていたのか。あと少して、マナに俺と同じ想いを。それなのにおれは——

「本当に大切ならば、無理矢理でも居場所を作ってやれ！ 先に逝くなんてもつての他だ！ だから——だから、どんなに汚れようとも、大切な奴のために生きる響夜！」

九条院長以外に認められたのは、久しぶりな気がする。俺は、肝心な所から目を背けていたのかもしれない。だからこそ、自分の命すらも軽く感じていたんだ。

「マナ、今更赦されるとは思っていないが——すまなかった。どうやら、俺はお前の気持ちを考えていなかった」

俺はいつもマナを泣かせてばかりだ。護るつもりが護られ、その度にマナを悲しませる。俺は、弱い存在だ。

「良いんです。兄さんが——兄さんとカオルさんが無事に帰ってくれば、私はそれだけで十分ですから」

マナが腕で涙を拭い、何処かぎこちない笑みを浮かべる。俺は、またマナに救われてしまった。

「ヴォルフ、ありがとう。俺は、あと少して取り返しの付かない事をしてしまう所だった」

「大切な物、二度と見失うなよ」

そう言うと、ヴォルフがニツと笑みを浮かべる。和解したのも束の間——

「デメエ等、もう許さねえ！」

ヴォルフに倒されたハズの力ティが起き上がる。だが、ヴォルフのいう通り、今の俺に奴を倒す力はない。直に天使化が解け、俺は全ての魔力を失う。俺は思わず諦め掛けるが——

「響夜、力が欲しくないか？」

ヴォルフという悪魔の囁きが俺に響く。俺は、思わず反応してしまふ。

「俺は、奴を倒せるのか？」

「当たり前だ。そこに転がっている神器は、誰と誰が創ったと思つてやる？」

極夜は朔夜の神器だとミシェルから聞いている。だが、創った奴がもう一人いるならば、それは口振りからしてヴォルフだろう。

神代家の開祖と上位使徒が生み出した神器。もし、それが本当だとしたら、極夜の秘められてる力は俺の想像を遥かに超えていることになる。

「だが、俺は極夜の力とやらが使えない」

そう、そこが問題だ。そもそも、知っている以上の極夜の力なんて見た事がない。

「だろうな。だが――」

ヴォルフがそう言うのと、右手で一度握り拳を作り開く。すると、何もなかったハズの手には、真つ黒な指輪とやや分厚いカードがあった。

「俺が掴み取ったこれ等の鍵さえ有れば、テメエでも力が手に入るとて事だ」

そう言いつつ、奴は“鍵”を持ってない方の手で、ホルスターから銃を抜き俺の右手に発砲する。一瞬痛みを感じたが、嫌な音と共に右手が治っていく。

「そいつを右手に填めてカードを極夜に翳せ。力が手に入るぜ」

俺はヴォルフから“鍵”を奪い取る。指輪を右手の人差し指に填め、近くで転がっている極夜を拾う。極夜を構え直しカードを翳すすると、極夜の柄が銃の様に折れ、丁度カードが挿せる穴が出現する。

「まずはテメエだ！ 神代響夜！」

「急いだ方が良いぞ」

「解ってるさ」

俺はカードを極夜に挿し込み、柄を元の位置に戻す。同時に、指輪が一瞬光ったかと思うと、極夜から真つ黒な魔力が吹き出していく。

「次は！？」

「地面に突き刺して、アイソレーション・アマテラスと叫ぶだけだ！」

俺は極夜を逆手に持ち換え、言われた通り地面に突き刺す。すると、極夜は地面へと吸い込まれ、俺の目の前から消えてしまう。

まさか、武器が無くなるとは思わなかったが、ここはヴォルフを信じてやる。

「アイソレーション・アマテラス！」

自滅

「アイソレーション・アマテラス！」

俺は奴を死へと導くであろう呪いの言葉を呟く。このまま何も起こらなければ、俺は間違いなく死を迎える。天使化による魔力の枯渇が先か。奴が俺に止めを刺すのが先か。なかなか面白いシチュエーションじゃないか。

奴が俺に辿り着くまで、三、二――

「くたばりやがれ、神代響夜！」

頭の中で一を唱えるのと同時に天使化が強制解除され、奴の拳が俺の頭を狙う。確実に俺を死へと誘う鉄槌。守りは何もない。そう思った時だった――

「何！？」

当たるか当たらないかの距離で、奴の拳が急に止まり震え始める。まるで、見えない壁に阻まれているかの様に。

次の瞬間、俺の周囲は爆発し、奴が急に吹き飛んでいく。

いや、爆発というのは不適切な表現だ。正確には、俺の周りから急に現れた火柱による物。それが強烈な風を発生させ奴を吹き飛ばす。俺を護るように現れた火柱が、徐々に俺の右手へと収束する。収束した炎が形を成し、徐々に長く伸びながら疑似物質へと構成されていく。

変化はそれだけでない。右手の黒い指輪が発光したかと思うと、朱色の炎を模した魔力が右手と地面から出現し、俺へと収束していく。俺の身体に力が――魔力が満ち溢れてくる。

余剰ともいえる魔力に身体が反応したのか、俺の口を野獣の様な咆哮が突き破っていく。俺の凍っていた本能が――魔力が一気に爆発した瞬間だった。同時に、マナが構成した空間に亀裂が走り、細かい破片が降り注いでいく。

「バカ！ やり過ぎだ！」

ヴォルフが俺を非難するが、制御できない以上仕方無い。俺は本能の赴くままに、右腕の炎を振るう。すると、炎が爆発し朱色の槍へと変化する。

飛翔する鳳凰の嘴と翼を模した三又の刃。本来、眼や鉤爪があるハズの場所に、何かを填める様な窪みがあるのが特徴だ。外見ではなく、槍その物から力強さを感じる。

「それが、極夜の五形態の一つ。日輪槍・アマテラスだ」

ヴォルフが武器の名を教えてくれる。青い極夜がスサノオならば、この朱色の槍はアマテラスか。ならば、ツクヨミという武器もあるのだろうか。

ただ、ミシエルの奴は間違いなく“四形態”と言っていたが、製作者らしき奴曰くミシエルすら知らない形態があるらしい。

「こけおどしが！」

カテイの奴が、とうとう痺れを切らして襲い掛かってくる。

「鳥にある窪みのどれか一つに、極夜の刃を差し込め！ 地球から魔力を与えられ続けている今なら、刃だけでも生成出来るハズだ！」
成る程、そうやって使うのか。ヴォルフのお陰で大体理解した。

それに、このみなぎってくる力の正体は、地球から送られてくる魔力による物らしい。ならば、極夜を使っている間は、超越者と同等の立場にいるという事が。

俺はヴォルフの言う通り、極夜の刃“だけ”の生成を試みる。すると、アマテラスを構えていない左手から極夜の刃が出現したかと、それは黒から朱へ染まっていく。俺は意思を込めて刃を操作し、鳳凰の爪として刃を差し込む。

差し込むと同時に、アマテラスには目に見える変化が現れる。炎に似た朱の魔力が刃を覆い、槍その物が小刻みにエンジン音を発生させる。俺は左手を軽く添えながら、右手でしっかりとアマテラスを握る。

「まずは払いだ！」

ヴォルフの指示と共に、俺は一度アマテラスを右へと強く振る。

そこから左に弧を描くと、朱色の斬撃が鳳凰となって奴へ飛んでいく。

「こんな物、弾き返してや——」

「止めといた方が良いぞ。魔力を使えば使うほど、そいつは燃えるからな」

カティの言葉を遮りながら、ヴォルフが嘲る様に忠告する。当然、奴が忠告を無視して能力を行使するが、ヴォルフの言葉通りになる。ガソリンが気化する様に奴の魔力が細くなり、一瞬で炎へと変化したからだ。炎が奴を包み込み、奴の全てを食い付くさんばかりに燃えていく。

「あーあ、だからいわんこっちゃない。そもそも極夜自体、超越者を倒す事前前提の神器だから、アポストル程度で何とかなる訳がないだろ」

成る程、確かにこれならば超越者を倒せると聞いて頷ける。相手の魔力を炎へと変換する——魔力を燃やし尽くす槍。魔力を使う異能者やXにとつて、これほど天敵と呼べる力はない。

これならば——マナを護る事が出来る。

そう考えていると、槍に挿していた極夜の刃が、窪みから発生する煙と共に抜け落ちていく。同時に、極夜の刃が粉々に砕けてしまった。

そうか、エネルギー切れになれば極夜の刃を排出するのか。まるで薬莢の様に。ならば、何度も差し替えれば連射が可能なハズだ。

「くそ……人間め。許さん！」

カティの奴が意気込んでいるものの、アマテラスの力が鎮火する様子などない。奴の魔力——生命力を燃料に変え、全てを灰にするべく更に成長していく。

奴の怒号が悲鳴へと変化し、死期を迎える虫の羽音の様に弱々しくなっていく。

憐れ——と、言いたい所だ。だが、奴は俺に対しやってはいけな
い事を二度もしてしまった。だからこそ、イヴと違い同情する気に

はなれなかった。九条院長がいなければ、もし手遅れだったら二人共死んでいただろう。

ならば——こいつは俺が討つ。俺の居場所を奪われないよう。マナとカオルの居場所を壊されないために。

「遺言は聞いてやらないさ。だから安心して逝くと良い」

「や——やめ……！」

言葉を遮る様に、俺は出せる限りの刃を具現化させる。刃を窪みに挿す度に、槍から不死鳥を発射していく。不死鳥が群がるその様は、死骸に群がるカラス共によく似ている。鳥共が肉を玩具にした後、自らが生きるための糧として命を喰い漁っていく。

まだだ——まだ足りない。アマテラスよ。俺にもっと、更なる力を——力をよこせ。

「兄さん！」

「大丈夫だ。テメエの兄貴はもう戦えないぜ」

マナの言葉で正気に戻る。俺は——俺は一体何を。確か、過剰な力を求めようと——

考えると同時に、俺の身体が重心を失っていく。身体が重力に従い、頭が地面に叩きつけられる。しかし、“全く痛みを感じない”。それどころか、今まで感じていたハズの体温すらも。

「やっぱり、シオートしやがったか」

ヴォルフの口から不吉な言葉が発せられる。その表情は憐れむ目付き。俺に対する同情だ。

「シオート……だと……！？」

「そうだ。アマテラスはドーピングの神器。使用者に本来もてる以上の力を与える代わりに、使用者の身体を酷使する。間違っても、連射して良い代物なんかじゃない。それに——」

ヴォルフが言葉を一度区切ると、急に意地の悪そうな嘲笑へと変わる。

「一つを挿せと言ったのに、俺の忠告を無視したお前が悪い。お前、ハッキリ言ってミシエルより悪いな」

確かに、どれでも良いから一つ挿せと聞いた。だが、忠告とは一度も聞いてないうえに、ミシェルと比べられるなんて屈辱的だ。こいつ、最初からこうなる様にはめやがったな。ヴォルフ——やはり最悪な性格だ。

「じゃあ、次起きたら九条総合病院な」

この言葉を最後に、俺の意識が徐々に遠退いていく。何をされたのかすら解らない。俺は意識を手放し、闇へと沈んでいった――

月読

微かな日差しが瞼を攪り俺は目を覚ます。どうやら、ベッドで寝ていたらしい。

辺りを見回すと、ここがよく知っている部屋だという事に気付いた。清潔さを表している純白の壁。暖かな木の机には、数冊の本が小さな棚に置かれている。

ここは——俺の部屋か。確か、マナと戦った後、マナの作り出した空間に侵入したXを。そうだ、俺はあの後気絶したんだ。

全てを思い出し、俺は外に出るべくベッドから起きる。服は気絶する前と同じ黒い服。ただ、皺や埃が殆ど存在しない。それどころか、ベッドの中でかいたであろう汗すらもない。俺はその事に違和感を感じ素早く外へ出る。

廊下を駆け、マナやイヴの名を何度も呼ぶ。家中のありとあらゆる所を全て。だが、返事が返ってこない。まるで、最初からこの家には誰もいなかったかの様に。

おかしい。物音が俺の足音しかないなんて。それに、疲労や喉の渇きすらないだ。まさか、ここは現実ではない——俺の夢だというのか。

夢かどうか証明するために、俺は右手で頬をつねってみる。痛みはない。どうやら、これはただの夢——

「本当に、これがただの夢だと思うのか？」

何処かで聞いた事のある声が頭に響き渡る。俺は声の主を知っている。こいつは——

「極夜か。これがただの夢ではないと言うのか？」

俺は極夜に対して問い掛ける。ただ、以前に比べると、極夜の言葉に感情がこもっている気がするが。

「その通り。これは俺達の心が生み出した世界。言うなれば、俺達のアイソレーションだ」

極夜が俺の問いに答える。俺達——やはり、より人間的な思考になっっているらしい。以前、融合すると聞いたが、何故か一つの人格として確立している様だ。

ここが俺達の心の形か。何とも平和な光景だ。俺自身がこうありたいと望んでいるのか。それとも——

「答える響夜。何故レヴィアタンを——ヴォルフを殺さなかった」
極夜が静かに問い掛ける。

ヴォルフがレヴィアタンという事に驚きはしない。かつて、ミシエルがXだという事に驚いたから。殺さなかった理由は、レヴィアタンだという事を知らなかった事や、超越者はある程度は攻撃しても無駄だからという事もある。ただ、本当の理由は——

「あいつがマナを救おうとしたからだ」

何故かは知らないが、間違はなくあいつはマナを優先している。

神器を渡しただけでなく、マナの気持ちを最優先している。少なくとも、マナに危害を加えない事だけは間違いない。

「今更、罪滅ぼしでも考えているのかあいつは。助けられる力を持つていながら、朔夜を見殺しにした拳句、朔夜を殺した人間を国ごと滅ぼしたくせに」

朔夜を見殺しにした後、国を滅ぼした。それだけを聞けば、災厄の使徒と呼ばれてもおかしくはない。ただ、本当にそれだけかは疑問に残るが。

「そんな事はどうでも良いが、どうすればこの空間から出られる？」
起きないとマナが心配するだろうから、そろそろ会話を止めて出たいと思う。だが、俺の言葉が可笑しかったのか、極夜が急に笑い始める。

「その必要はない。もう、お前を帰す気など無いからな」
帰す気など無い。まさか、自我を獲得した極夜が俺に歯向かうとは思わなかった。

ならば、お前さえ倒せば出られる。簡単な話だ。相手になってやる。

そう考えていると、俺の全身から無数のアマテラスが生えてくる。だが、全く痛みを感じないし流血すらない。何だ、ただのこけおどしか。

「な……何故だ！？ 脳も心臓も刺したハズなのに、何故倒れない！」

極夜から焦りを感じる。どうやら、本気で潰しにかかったらしい。だが、俺は何ともない。本来ならば致命傷となりうる攻撃すらも効いてない。

あまりにも退屈だから、俺はアマテラスを一本ずつ素手で抜き始める。槍が音を立てて床に落ちていく。

「どつという仕組みかは知らないが、俺はお前を殺せないらしい」

「今更殺す気になった理由を知りたいな」

「簡単だ。今のお前ではどの使徒にも勝てないと悟った。それだけの話さ」

何て身勝手な奴だ。勝てなければさっさと始末する。何が超越者を倒す事が前提の神器だ。身勝手に自己中。挙げ句の果てに上から目線な態度。性格面では最悪な神器じゃないか。

「ならば、ソリューションを自分に使い、俺ごとお前を消してやるだけの話だ」

流石に腹が立ったので、生意気な神器を脅してみる事にする。自分の魔力は毎日見てるから、確実に魔力を分解する事が可能だ。

それに、ここから出す気が無いのなら、最早マナを護る理由もなければ生きる理由もない。ただ、死ぬ理由など幾らでもある。俺の手は、既に血みどろだから。

——と言いたい所だが、今主導権を握っているのは極夜。ならば、極夜から主導権を奪い取りさえすれば、脱出するヒントが見付かるハズだ。ならば——

「俺を脅す気か。そんなハッター——」

「十、九、八、七——」俺はゆっくりとカウントしつつ、俺の魔力とは正反対の性質を持つ魔力を生み出していく。

「待て！ 待つんだ！ 考え直——」

「三、二、一！」

一をわざと大きく叫び、魔力を一気に解放していく。すると――

「解った！ 俺が悪かった！ 頼むから止めてくれ！」

「もう遅い！」

躊躇いもなくやったんだ。最早、俺の意思ではどうにもならない。このまま、燃え尽きるのを待つだけだ。そう、俺の意思ではな。さあ、俺を助けてみせる。

「このまま一緒にくたばってたまるか。おい、右腕を挙げながらアイソレーション・ツクヨミと叫べ！ 本当に消えるぞ！」

極夜が遂に折れる。やはり、明確な主従関係を教えてやらなければ、主人に楯突くらいしい。出してくれると解れば、最早死ぬ理由はない。

「アイソレーション・ツクヨミ！」

俺は微笑みながら、極夜に教えられた言葉を呟く。すると、身体中の魔力が右手へと集まり、徐々に渦巻いていく。その色は、氷よりも冷たく輝く美しき純白。総てを浄化^{ひよっはく}していく、無垢なる心を現しているかの様だ。

右手に集中する魔力の流れが、更に激しくなっていく。俺の総てを喰らい尽くそうとしているのが解る。魔力を発生させるアマテラスとは真逆の性質。解っているのは、際限なく魔力を喰らう“これは、今まで感覚がなかった俺を確実に死へと誘うという事だ。”

「お前なんか――喰われてたまるか！」

俺はそう叫ぶと、白き混沌を正面へと振るう。すると、光が一気に集束し一丁の拳銃へと変化する。その姿は、さっきの魔力と同じ純白。ヴォルフの持つ回転式とは異なり、カートリッジによる装填速度に特化した自動式だ。^{オートマチック}

数百年前の人物である朔夜――恐らく、ヴォルフもその中にいる――の神器に、何故拳銃があるかはとりあえず置いておく。だが、この銃からは強大さという物が存在しない。まるで、右手には何も

無いかの様に。

「何処に向けても良いからさっさと引き金を引け！ その神器の武器は生命エネルギーを中心とした万物だ。俺達共々喰われるぞ！」

極夜の言葉にハツとする。そうか、この形態は極夜の意思ですら制御不可能なのか。それほど、この銃は危険な存在らしい。全く、これを作ったであろうヴォルフを恨みたくなる。

ただ、ここはアイソレーション。アマテラスやスサノオで壊せた物が壊せるハズがない。

引き金を一回。それだけで、弾丸と呼ぶにはあまりにも強力な光線が銃から発せられる。全てを消し去らんとする純白が、周囲の物を粉々に砕きつつ跡形もなく消し去っていく。

だが、破壊は物だけでは飽きたらず、周囲の空間まで勢力を拡大していく。何かが削れていく音が、砕ける音へと変化する。光を中心に空間がひび割れ、遂には大きな穴になっていく。俺は銃を振るい、更に穴を大きくしていく。総てを破壊し尽くす。ただそれだけのために――

「お前の様な奴はもう沢山だ。さっさと出ていけ！」

この言葉と共に、俺は穴へと引きずり込まれていく。足の重力が無くなる様な感覚――ああ、浮いているのか。夢にいる時によく似ている。俺は――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5536j/>

Eternal-永遠の終焉-

2011年11月15日11時34分発行